
オオヤシマ記 イワレヒコ伝

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オオヤシマ記 イワレヒコ伝

【Nコード】

N5181I

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

どこにあるのかわからないオオヤシマ。そこで戦乱が起こった。

ヤマトとヒノモトの国の争いの真っ只中に放り込まれた現代日本の高校生、磐神武彦はどうなってしまうのか？ 完結済み。

登場人物紹介

主な登場人物

磐神 武彦

現代日本の高校生。勝ち気な姉と、陽気な母との三人暮らし。ある日別世界オオヤシマに入ってしまう。

磐神 美鈴

武彦の姉。武彦が可愛くて仕方ないのだが、どうしても虐めてしまう。女子大生。

磐神 珠世

武彦の母。陽気で元気。夫を亡くして長いが、決して暗くならない肝っ玉母さん。

都坂 亜希

武彦の幼馴染。高校のクラスメートでもある。武彦の事が好きらしい。

イワレヒコ

ヤマトの国の王子にして国1番の剣士。残虐な男であったが、武彦と入れ替る。

ウガヤ

イワレヒコの父。ヤマトの国の王。ヒノモト憎しで凝り固まってしまう。

タマヨリ

イワレヒコの母。ウガヤの妃。いつも憂いをたたえた顔をしている。珠世と瓜二つ。

イツセ

イワレヒコの兄でウガヤの嫡男。戦闘で負傷してしまう。イワレヒコを気遣う良き兄である。

イスズ

イワレヒコの姉であり許嫁でもある。癒しの効果を持つ琴の名手。もの静かでまさに大和撫子。美鈴と瓜二つ。

ツクヨミ

ヤマトの国の言霊師。一切の防御ができない言霊で相手を攻撃する。

タジカラ

ヤマトの国の將軍。ウガヤの側近。怪力無双の戦士。

ウズメ

ヤマトの国の舞踏師。八百万の神を召喚し、攻撃する。タジカラの奥方。

オモイ

ヤマトの国の軍師。戦術の天才。

ホアカリ

ヒノモトの国の王。イワレヒコの叔父。ウガヤの兄。

トミヤ

ホアカリの妃。ナガスネの妹。強硬な兄と穏健な夫との間で苦し

む。

ナガスネ

ヒノモトの国の將軍。ヤマトの国攻撃の総司令官。

スサノ

ヒノモトの国の魔劍士。炎の劍を使う。

クシナダ

スサノの奥方。魔導士。水術を得意とする。

ウカシ

ヒノモトの国の戦士。謀略家。

ウマシ

ホアカリの王子。アキツに恋心を抱いている。

オオヒルメ

ヤマトの国とヒノモトの国の分裂前のワの国の女王。強大な呪力を有している。

アキツ

オオヒルメの後継者の姫。強大な呪力を有する。都坂亜希にそっくりである。

イザ

オオヤシマの地下深く存在するヨモツという闇の国の女王。ヤマトとヒノモトの潰し合いを画策しオオヤシマを手に入れようとしている。

シコメ

ヨモツ国の魔物。先兵的存在。

オオマガツ

イザの生み出した魔物。黄泉の黒火を操る。

ヤソマガツ

イザの生み出した魔物。雷撃を使う。

始まりの章 二人のイワレヒコ

磐神武彦、十七歳。高校二年生。母と姉との三人暮らし。いわがみたけこ

父親は三歳の時、交通事故で他界。彼は元気な母と凶暴な姉に可愛がられ、とても真っ直ぐに育った。

「武君、遅刻するよ。早く支度しないと」

幼馴染みで同級生の都坂亜希が、毎日武彦の家に来る。みやざかあき

「毎日悪いわね、亜希ちゃん」

母である珠世はパートに行く時間だ。家の中で誰よりも早く起き、誰よりも遅く寝る生活を十五年近く続けている。でも元気一杯である。たまよ

「いえ、近所ですから。大丈夫です」

亜希は、本当に何でもない事のように答える。

「亜希ちゃんがウチの子だったら良かったのにね」

珠世母さんのトンデモ発言にニッコリ微笑んで応じる亜希も、すっかり磐神家の一員である。

「母さん、行ってらっしゃい」

と言いながらも、武彦はまだ半分寝ている。目が死人ゾンビのようだ。亜希は武彦を引き摺るようにして玄関に急ぐ。

「こら、武彦！ いい加減目を覚ませ！」

運送業のアルバイトをこなしながら、大学の夜間部に通学している二十歳の姉、美鈴が怒鳴る。

「うーい」

武彦はそれでも寝ぼけている。

「おらっ！」

美鈴のハイキックが武彦の顔面に決まる。

「フギッ！」

気を失ってしまい、逆効果になるのではないかというくらい鮮やかな一撃だ。でも、そんな暴力にも慣れてしまった武彦は、気を失

いはしない。

「おお、目が覚めた。姉ちゃん、行って来るよ」

「あいよ」

美鈴はもう一発武彦の頭に拳骨を食らわせ、送り出した。

「ねえ、武君、もう高校二年なんだから、朝くらい起きられるようになろうよ」

亜希が呆れ顔で言った。武彦はようやく頭が活動し始めたらしく、「ごめん、委員長。明日はちゃんと起きるから」

「……」

亜希はムスツとして先に行ってしまふ。

「知らない！」

「ああ、何だよ、委員長。僕、何か怒らせるような事言った？」

「別にイ」

亜希は武彦の問いに振り返らずに答え、走り出した。ある女優を真似たような言い方。でも委員長の方がずっと可愛いと思う武彦だった。

「ホント、遅刻だよ、武君」

陸上部のエースプリンターでもある亜希は速い。

「わああ、ヤバイ！ 今日遅刻したら、停学だよー」

武彦は亜希を追うようにして走り出した。

だらしのない弟を送り出し、姉の美鈴はほんの一時ひとときの安らぎを満喫する。

出勤前の熱いお茶が彼女のエネルギー源だ。

「さてと。私も出かけるか」

自分に気合を入れ、美鈴は立ち上がる。その名に恥じない美貌とスタイルで、おまけに頭脳明晰、社交性抜群。弟の分まで取ってしまったのでは、というくらいできた姉だ。

「にしても、心配だな、あのバカ」

携帯の待ち受けは小さい頃武彦と一緒に写した写真。でも弟には内緒。彼氏もいるのに、弟が心配で仕方がない、ある意味「弟萌え」な「姉ちゃん」だ。本人はそれを言われると烈火の如く怒るが。

「戸締り、よーし！」

美鈴は指差し確認をして、家を出た。

どこにあるのか、いつの時代なのかもわからない。

しかし、その島も国も、確かに存在している。

オオヤシマ。その島にあったのは「ワの国」という国であったが、後継者争いが激化し、先代の王であるオオヒルメ女王が王位を放り出し、オオヤシマの果てにあるアマノイワトに籠ってしまった。

収拾のつかなくなったワの国は、兄ホアカリと弟ウガヤによって二分され、兄の国はヒノモト、弟の国はヤマトと名乗った。

正統な後継者はオオヒルメの近親者であるアキツであったが、ヒノモトとヤマトはそれを認めなかった。争い事が嫌いなアキツはオオヒルメの元に身を隠し、ワの国は完全にその系統を途絶えさせてしまった。

そもその争いの発端は、ホアカリの妃の兄であるナガスネの野心である。彼はワの国の王位を奪取するため、ホアカリを焚き付けた。

「アキツ姫は確かにオオヒルメ様に一番近い方ですが、お優し過ぎます。あれでは遠き海の果ての大国が攻め入りし時、勝てませぬ」ナガスネの愚かな思いがホアカリの判断を誤らせ、ワの国は分裂へと向かった。

もちろん、ヤマト側にも原因がなかった訳ではない。ウガヤは兄に必要な以上の敵対心があり、機会があれば兄を潰そうと考えていた。ナガスネが軍を動かした事を知るや否や、ウガヤもすぐに反応し、二国は両勢力を隔てるアマノヤス川を挟んで睨み合いを続けた。

両国が実質的な戦闘状態に突入したのは、それから三日後の事だ

った。

ナガスネの率いる精鋭部隊が、勇み足で弓矢を放ってしまったのだ。それが運悪くウガヤの嫡男であるイツセの右肩を射抜いた。憤激したヤマト軍の先鋒がアマノヤス川を越え、合戦が始まった。

こうなると両軍の王にも戦は止められなくなった。ヒノモトとヤマトは、ズルズルと国全体を巻き込む戦いに雪崩れ込んでしまった。「何をしている!? こちらは皇太子を狙われたのだぞ! 何としても、ホアカリの首を獲るのだ!」

兵に檄を飛ばしているのは、ウガヤの三男であるイワレヒコだ。実は彼こそヤマト一の剣士であり、勇猛果敢な男である。彼はヒノモトの国を滅ぼし、オオヤシマを平定する事を悲願としていた。

「腑抜け共が! このイワレヒコが、うぬ等の代わりにヒノモトの兵共を退治してくれるわ!」

イワレヒコは一人馬を駆り、敵陣に突っ込んで行った。

「イワレヒコが一人で突っ込んで来るだど?」

ヒノモトの本陣のナガスネは呆れ返っていた。

「どこまでも戯けな男よ、イワレヒコ。返り討ちにしてやる!」

ナガスネは騎馬隊を投じ、イワレヒコの首級を獲りに行かせた。しかしイワレヒコは動じなかった。彼は高笑いをし、

「笑止! このイワレヒコを止めたくば、千の兵を差し向けよ、ナガスネ!」
と怒鳴った。

オオヤシマの外れにあるアマノイウト。ワの国最後の王であるオオヒルメが籠り、オオヤシマの安寧を祈念していた。

「大叔母様」

オオヒルメの後継者だったアキツが跪き、声をかけた。オオヒルメは振り向かずに、

「アキツ、彼の者達は如何しておる?」

「とうとう戦になりました」

アキツは頭を下げて話した。オオヒルメは天を仰いだ。

「やはり滅ぶのか、この国は。そして沈むか、このオオヤシマは」
オオヒルメの言葉にアキツは、

「いえ、そうならぬように私が必ず……」

「何をするつもりか、アキツ？」

オオヒルメは鋭い眼でアキツを見た。アキツはオオヒルメを見た
ままで、

「必ず戦を止めます。この命に代えても」

「それは私かなす。お前は命を粗末にするな、アキツ」

オオヒルメはワの国の女王であると同時に最高の呪術者であった。
彼女はその力で争いを止めようとした。しかし、止まらなかったの
だ。

「恐れながら、大叔母様はすでにお力を失われています。今は私が
代わりに」

「ならぬ。それはならぬ。お前は戦が終わりし時、今一度ワの国を
治める女王となるべき身。命を捨ててはならぬ」

オオヒルメはアキツの身を案じ、断固としてアキツの行動を止め
るつもりでいた。

「このままではこの国は滅びます。それでは女王も何もございませ
ぬ。私に、今動かずしていつ動けとおっしゃるのですか、大叔母様
！？」

アキツは普段は決して出さないような大きな声でオオヒルメに反
論した。

「アキツ……」

オオヒルメはアキツに何か考えがある事に気づいた。

「何に気づいたのだ、アキツ？」

アキツはオオヒルメにスツと近づき、

「私の呼びかけに答えた者がおります」

「呼びかけに答えた者？」

オオヒルメは眉をひそめた。

「はい。その者がこの国に来てくれれば、オオヤシマは救われ、ワの国は元の平和な国に戻ります」

「その者はどこにおるのだ？」

オオヒルメは俄にその話を信じられない。

「わかりませぬ。しかし、確かにおります。私にはわかります」

アキツの眼は自信に満ち溢れていた。オオヒルメはニツコリして、「わかった。そなたに任せよう。その者を必ずこの国に連れて来るのだ」

「はい」

アキツは再び深々と頭を下げた。

武彦は英語の授業中だった。しかし、彼は全く授業に集中していなかった。

（誰だ？ さっきから声が聞こえる）

武彦は何日前から、不思議な夢を見ていた。どこの誰なのかわからない女性の声が、

「助けて。私の声が聞こえる方。私の呼びかけに答えて下さい」

と言っている。そんな夢を何日も続けて見ていた。そのため、普段以上に朝起きられなくなっていた。

そして今日になって、とうとう起きている時までその声が聞こえるようになった。

（僕、ヤバいのかな？）

武彦は何かの病気なのかと思っていた。

（病院に行った方がいいかな？）

彼は本気でそう思っていた。

二人のイワレヒコが、少しずつ近づいていた。国の行く末を憂う一人の女性によって。

二の章 武彦の悩み、アキツの思い

連日のように夢で謎の女性の声に悩まされている磐神武彦。いわがみたけひこ

そのせいで毎日高校に遅刻しそうになっている。高校は歩いて十分程度なのである。

「病気なのかな？」

武彦はある日の夜、思い切って母の珠世に相談した。

「母さん、僕、毎日同じ夢を見るんだ」

「そうなの」

忙しい珠世母さんは、残念な事に更にここ数日仕事が忙しく、可愛い我が子の相談に乗れるほど精神的に余裕がなかった。

「ごめん、またにする」

武彦は小さい頃から母親の忙しい姿を見て育ったせいとか、珠世の声のトーンでそれを感じ取れるようになっていた。学校の成績は振るわないが、生活能力は高いのが武彦の取り柄だった。

「姉ちゃん、時間ある？」

武彦はバイトから帰ってこれから夜間の講義を受けに行く美鈴に声をかけてみた。

「何？」

この時間帯の姉は特に機嫌が悪いのだが、弟が病気かも知れないのだから、話くらい聞いてくれるだろうと考え、思い切って言ってみたのだ。

「僕さ、毎日女の人の声が聞こえる夢を見るんだ」

「下らない事で私を呼び止めないでよ！」

ポカンと頭を一つ殴られる。武彦が何も言い返す間もなく、美鈴は玄関を飛び出して行った。

「ああ」

武彦は仕方なく、自分もコンビニのバイトに出かける用意をした。「店長に相談する訳にも行かないしな……」

武彦は結局、クラスメートの都坂亜希みやこぎかあきに相談してみる事にした。

翌日。

性懲りもなく起きられない武彦を亜希が起こしに来る。

「武君、今日は起きるって約束だったでしょ！」

昨日一人で起きると言ったばかりなのに、相変わらずの寝坊。さすがに亜希もムツとしている。

「ごめん、その事なんだけどさ……」

「話は後で！ 早くして！」

今日も亜希に引き摺られるようにして玄関を出る武彦。

「起きろ、武彦！」

美鈴の蹴りで完全に目を覚まし、

「遅刻はできないよオ」

と叫びながら走り出す。

そして休み時間。本当は眠りたいのだが、どうしても亜希に相談したい事があったので、

「委員長、話があるんだけど」

「何？」

おかしな事に、相談したい武彦より、話があると言われた亜希の方がアタフタしている。

「こ、ここで大丈夫な話？」

亜希は呼吸を整えて尋ねた。武彦は一瞬だけ考えて、

「あ、そうだな。ベランダで話そうか」

「う、うん」

そこもあまり人目を避けられないよ武君、と言いたい亜希だったが、それは言えない。

「あのさ」

武彦が切り出すと、亜希はますます緊張した顔になって、
「な、何？」

ガラス越しに見ているクラスの連中がいる。亜希はそれも気になるのだが、武彦は全然気にならないらしい。

「僕、何かの病気かも知れないんだ」

「えっ？」

予想していたのと全然違うコースにボールが飛んで来たので、亜希は危うくベランダから落ちそうになった。

「毎日さ、夢で、知らない女の人の声が話しかけて来るんだ。助けてって」

「……」

亜希は呆然としていた。

「それでさ、昨日はどうとう授業中にも聞こえてさ。何の病気なんだろう？」

武彦は至って真面目な顔で尋ねたのだが、亜希は呆れ返ったのを通過し、怒りを感じ始めていた。

「それはきつと、恋の病よ」

「えっ？ 鯉？ 鯉の病気が移ったの？」

「そんな事、私知らないわ」

亜希はプイッと顔を背けて、教室に戻ってしまった。

「ああ、委員長……」

武彦は話し方が悪かったのかと思った。

「僕、話をうまくできないから……。伝わらなかったのかな？」

そして、どこにあるのか、いつの時代なのかわからないオオヤシマ。

元はワの国という一つの国家だったが、後継者争いが激しくなり、野心を持った者が現れ、国が二つに分裂した。「ヒノモトの国」と「ヤマトの国」。兄と弟が骨肉相争う事になってしまったのだ。

「お前の呼びかけに答えし者は、どうした？ 何か返答があったか？」

オオヤシマの端にあるアマノイワトで、ワの国の先代女王のオオヒルメが、後継女王になるはずだったアキツに尋ねた。

「いえ。でも、以前よりその人の心が近づいた気が致します。近いうちに、こちらに呼び込めるのではないかと」

アキツは額ずいたままで答えた。

「そうか。心が近づいているのがお前にわかるのなら、その者はこちらに来るであろう。否、来てもらわねば困る」

オオヒルメは深刻な顔で言った。アキツは顔を上げて、

「はい。もはや時は迫っております。ヒノモトもヤマトも、悪しき気が満ちておりまして、戦^{いくさ}が大きくなるのは避けられませぬ」

「そうか」

オオヒルメの顔は悲しみに暗くなった。

「私が早く二人の心の内を見抜いておれば、このような事にはならなかった……」

オオヒルメの嘆きに、アキツは、

「そうではありませぬ、大叔母様。起こりは、ナガスネの悪しき心でございます。あの者が、ホアカリ殿を唆^{そそのか}さねば、戦は起こりませんでした」

「ありがとうございます」

オオヒルメはアキツの心遣いが嬉しかった。アキツは深々と頭を下げてから、

「大叔母様、ご相談がございます」

と切り出した。オオヒルメは居ずまいを正して、

「何か？」

「私の呼びかけに答えし者を何としてもこちらに呼び込むため、お力をお貸し下さい」

「私の力をか？」

「はい」

アキツは力強い眼差しでオオヒルメを見ている。オオヒルメは、
「何を考えておるのだ、お前は？」

「その昔、遠き場所から呼ばれた者がおり、その者の力でオオヤシマは鎮まったと聞いた事がございます。それをまた、為してみたいのです」

オオヒルメの顔つきが変わった。

「アキツ、それは禁呪ぞ。ワの国では、禁じられた術。ならぬ」

「ですが大叔母様」

「オオヤシマの一大事と言っても、ならぬ」

オオヒルメは立ち上がり、奥の間に入ってしまった。

「大叔母様……」

反対される事は承知していた。だから、アキツも諦めるつもりはなかった。

ヤマトの国。オオヤシマの東半分にある、弟ウガヤが治める国である。

その国の軍の中に一人、特殊な力を持つ者がいた。その者の名は、ツクヨミ。言霊師ことだましと呼ばれる一族の最後の生き残りだ。簡単に言うてしまうと、言葉に呪いを乗せて放てば、その言葉を聞いた者は呪われ、言葉に火の力を込めて放てば、その言葉を聞いてしまった者は焼かれてしまうのだ。そして、彼の使う言霊は、一切の防御ができない。但し、その言霊の届く範囲は狭く、せいぜい二人か一人にしか攻撃できない。だからこそ、彼の出陣は稀で、決戦の時以外はウガヤ王の三男であるイワレヒコの許嫁であるイスズのそばに仕えている。イスズはイワレヒコの許嫁であるが、姉でもある。オオヤシマでは近親婚は禁じられておらず、かなりの頻度で行われていた。わきましかし、イスズはイワレヒコが嫌いである。乱暴で礼儀を弁えず、兄であるイツセを全く敬っていない。そのくせ、周囲の目を気にしている。公にはイツセを立てている腹黒さも嫌だった。

あに「兄様が可哀想」

そう言って悲しそうな顔で窓の外の月を眺めるイスズを、ツクヨミはとても気の毒に思っていた。

そのツクヨミは、この数日、アキツの呼びかけの声を聞いていた。「アキツ様は、大変お嘆きなのだ」

彼は、自分の祖先達が、その昔はワの国王からも崇拝されていた一族でありながら、戦争の道具としての価値を見出した歴代の王によって絶滅寸前にまで追い込まれた事から、王族を快く思っていなかった。だからこそ、アキツの無念を理解できるのだ。

「このオオヤシマを救ってくれる者が早く現れてくれるといいが……」

ツクヨミはアキツに心惹かれていた。しかし、身分の差があるため、決して叶わぬ思いである。それは彼もよく承知していた。

「どうしました、ツクヨミ？」

——イワレヒコの連戦で、イスズはここ何日か明るい。彼がいると必要以上に用を言いつけられるため、気持ちが悪まらない。戦が終わってからという父王の命があるため、婚儀はしていないのだが、イワレヒコは毎夜イスズを求めた。イスズは弟との婚儀を心の底で嫌がっていたが、父が決めた事であるので、逆らう事ができないのだ。

「婚儀が終わってからにして下さい」

イスズにはその程度の抵抗しかできなかった。——

「いえ、別に。戦が早く終われば良いと思うておりました」

ツクヨミはそう言ってしまうから、自分の失言に気がついた。

「そうですか」

イスズの悲しそうな顔を見て、ツクヨミは慌てた。

「申し訳ございませぬ。イスズ様のお気持ちも考えずに……」

「構いませぬ。この国の誰もが、戦が早う終わるのを待ち望んでいるのですから」

イスズは声を震わせてそう言った。イスズ様はイワレヒコ様を嫌っているどころか、恐れているのではないか？ ツクヨミはそんな風にさえ思ってしまった。

武彦は結局誰にも相談できないまま、家に帰った。

「委員長はあの後ずっと機嫌悪いしなア。どうしよう？」

その時、再び彼の耳に声が聞こえて来た。

『助けて。私の声が聞こえる方、私の声にお答え下さい』

まただ。武彦は怖くなっていた。

「僕、どうしちゃったんだろう？」

姉もまだ帰って来ていない。母が帰るのはもっと後。今日のバイトは遅番なので、仮眠をとってから出かける事になっている。

「寝たら、もっと聞こえるのかな？」

武彦は怖くて眠れそうになかった。

「進めーっ！」

返り血を浴び、赤黒く染まった顔で、イワレヒコは叫んだ。

「ヒノモトの兵など、一人残らず殺してしまえ！ ヤマトこそがこのオオヤシマに相応しい国なのだ」

イワレヒコの顔は、物の怪のように兇悪だった。

三の章 アキツの願い、ツクヨミの決意

どこにあるのか、いつの時代なのかもわからない。しかし、その島も国も、確かに存在している。オオヤシマという島の「ワの国」という国であったが、後継者争いが激化し、先代の王であるオオヒルメ女王がそれを嘆いて王位を去り、オオヤシマの果てにあるアマノイワトに籠ってしまった。

收拾のつかなくなったワの国は、オオヒルメの遠戚である二人の兄弟ホアカリとウガヤによって二分され、兄ホアカリの国はヒノモト、弟ウガヤの国はヤマトと名乗った。

正統な後継者はオオヒルメの近親者であるアキツであったが、ヒノモトとヤマトはそれを認めず、争い事が嫌いなアキツはオオヒルメの元に身を隠した。そして、ワの国は完全にその系統を途絶えさせてしまったのである。

そもその争いの発端は、ホアカリの義理の兄であるナガスネの野心である。彼はワの国の王位を奪取するため、ホアカリを焚き付けた。

「アキツ姫は確かにオオヒルメ様に一番近い方ですが、お優し過ぎます。あれでは遠き海の果ての大国が攻め入りし時、勝てませぬ」
ナガスネの愚かな思いがホアカリの判断を誤らせ、ワの国は分裂へと向かった。ヤマトとヒノモトは刃を交え、多くの血が流された。ナガスネは退かず、ウガヤは怯まなかった。

戦はやがて膠着状態に陥り、互いに一進一退を繰り返し、兵は疲弊し、民は痩せさらばえて行った。

そして、それから数日後の事である。

ワの国の後継女王であったアキツは、ヤマトの国の言霊師ことだましであるツクヨミが、自分の呼びかけに気づいている事を悟り、ヤマトの国に赴いた。

「アキツ、禁呪はならぬぞ……」

アマノイワトから出て行くアキツの姿を、先代女王であるオオヒルメは心配そうに見ていた。

「ツクヨミ殿なら、力を貸して下さるはず」

アキツは、ヤマトの国にいるツクヨミがかつてこのオオヤシマの最高位であった言霊師ことだましの最後の生き残りである事を知っていた。そして、言霊師の一族のみが有する秘術も知っていたのである。

ツクヨミも、アキツが自分のところに向かっている事を感じていた。

「アキツ様……」

アキツは彼にとってまさに憧れの存在である。アキツが望めば、ツクヨミは喜んで自分の命を差し出すだろう。

「ツクヨミ、どうしたのですか？」

ツクヨミが仕えているウガヤ王の姫であるイスズが訝しそうな顔で尋ねた。

「失礼致しました。考え事をしておりましたので……」

ツクヨミはすぐに平伏し、イスズに詫びた。イスズは相変わらず悲しそうな顔で、

「今日、イワレヒコ様が戻られるそうです。お出迎えせねばなりません」

「そうでありましたか」

ツクヨミは急なイワレヒコの帰還を意外に思っていた。

「私は嫌です。イワレヒコ様は、私の弟。それなのに、私は……」

「イスズ様、それは口にしてはなりません」

ツクヨミはイスズの発言を遮った。彼はイワレヒコの密偵が潜んでいる事を知っている。だから、迂闊な事を言わせたくないのだ。もちろん、いくらイワレヒコが乱暴者でも、姉であり、許嫁であるイスズに危害を加える事はないであろう。しかし、乱暴ではなく、他の方法で彼女を苦しめる可能性があるのだ。例えば「マグワイ」

等によって。

オオヤシマの多くの民は、近親婚を忌み事とは思っていない。しかし、極僅かであるが、近親婚を嫌う者もいる。イスズはその類いの人間ではなく、只単にイワレヒコが嫌いなだけであるが。

「ツクヨミ？」

元々明るくて元気だったイスズが、塞ぎ込む事が多くなり、ツクヨミはそれを悲しんで、ウガヤ王に申し出、イスズのそばに着いているようになったのだ。おおらかに育ったイスズは謀略とは無縁だ。ツクヨミが何故自分の言葉を遮ったのかわからない。

「イスズ様、アキツ様がお出でのようです。こちらにお招きして、お話されては如何でしょうか？」

ツクヨミはそう言ってイスズの疑問をはぐらかしてしまった。

「アキツ様が？」

イスズにとってもアキツは尊敬の対象であり、高貴な女性として憧れを抱いていた。

「はい。アキツ様なら、イワレヒコ様にご意見して下さいましょうし、ヒノモトの国との取りなしもして下さいましょう」

「そうですね」

ツクヨミの進言に、イスズは顔を綻ばせた。

そして。

磐神家。^{いわがみ}仮眠を取ってアルバイトに出かけた磐神武彦が帰宅した。夜中の十二時である。本当は、武彦がそこまで働かなくても、磐神家の家計は支障がない。武彦がアルバイトをしているのは、自立のためなのだ。姉美鈴の命令なのである。

「男が自立してなくてどうするんだ、バカ武！ 自分の小遣いくらい、自分で稼げ」

高校入学と同時に姉にそう言われた武彦は、コンビニのバイトを始めた。彼は、尊敬する姉が昼間フルタイムで肉体労働をして、そ

のまま夜間の大学に通学している姿を見ていたから、別に何の抵抗もなく素直に姉の言葉に従った。

「お帰り、武彦。身体は大丈夫？」

ちようど風呂上がりの珠世母さんが出迎えてくれた。

「うん」

武彦はニツコリして応じた。珠世母さんは、

「よし、それじゃ、サッサとお風呂入ってね。出たら、栓抜いて。

姉ちゃんは先に入ったから」

「うん」

武彦はそのまま風呂場に行き、服を脱ぎ始めた。

『私の声が聞こえる方。答えて下さい』

また幻聴が聞こえる。武彦は頭を振って、幻聴を振り払おうとした。

「ああ、もうやだ」

武彦は泣きそうだった。

「誰なんだよ？ どうしてなんだよ？」

彼はどこから聞こえて来るのかもわからない声に向かって文句を言った。

「本当に誰かが呼びかけているのなら、名前くらい言えよ。このまじじゃ、気が変になりそうだよ」

いや、本当に精神崩壊一歩手前なのかも知れない。

アキツは貴賓の間で、ウガヤ王と対面していた。

「アキツ様には、ご機嫌麗しく……」

腹の底では全く敬っていないのに、言葉だけは丁寧なので、アキツはウガヤが嫌いだった。彼は兄ホアカリがお人好しで、妻の兄であるナガスネに利用されている事を憂えているようだが、決して兄の事を心配しているのではない。呑気な性格の兄のせいで、ナガスネが力を身に着け、いつかこの国全体を乗っ取ってしまうのではな

いかと心配しているのだ。

「挨拶はその辺で」

アキツは用意された椅子に腰を下ろし、ウガヤを見た。椅子もウガヤの方が大きいもので、アキツに出されたものより良質の木材で作られている。どう見ても、アキツの方が身分の低い者の扱いである。

「戦は止められませぬか、ウガヤ殿？　このような事、決してオオヤシマの民のためにはなりません」

「これは異な事を仰せですな、アキツ様。戦は兄ホアカリが仕掛け申した。我らに非はありません。そのようなお話は、ホアカリになさって下され」

ウガヤの言葉にアキツは怒りを覚えたが、それを胸の奥にしまい、「ホアカリ殿のところには、後に伺うつもりです。今は貴方様に問うております。お答え下され」

「無論、我が方は戦を好んでおる訳ではありません。ホアカリが詫びを入れれば、すぐにでも兵を引き上げます」

「……」

アキツは呆れていた。ウガヤは、大義は我にあり、と思っているのだ。

「わかりました。ところで、ツクヨミ殿はおられますか？」

「はい。イスズの元におります。こちらに呼びましょう」

ウガヤが兵に命じようと手を動かしたのを見て、アキツは立ち上がり、

「それには及びませぬ。私がイスズ様のところに参ります」

「そうですか」

ウガヤはニヤリとして立ち上がった。

「アキツ様、くれぐれも道中お氣をつけ下され。ヒノモトの者共は、我らと違って無礼な輩がおります故」

「お心遣い、感謝致します」

アキツは白々しいウガヤの言葉を聞き終わらないうちに、貴賓の

間を出ていた。

（今、私の声に応えてくれた人が、私に返してくれた……）

アキツには、武彦の声が聞こえていた。

「確かに名は名乗るべきですね」

彼女は相手の指摘に苦笑いした。

「それには、どうしてもツクヨミ殿の力がなければ……」

アキツはイスズの部屋の前に来て、呼吸を整えた。彼女はツクヨミの力を必要としていたが、ツクヨミ自身には畏怖の念を抱いているのだ。言霊師の最後の生き残りであるツクヨミが、果たして一族の怨敵であるワの国の王族の一人に力を貸してくれるのか？ ツクヨミが何故ヤマトの国にいて、イスズに仕えているのか、その真意も測りかねているのだ。

「失礼致します」

アキツは扉を押し開き、中に入った。

「アキツ様！」

ツクヨミとイスズは、まさかアキツの方から部屋まで来るとは思っていなかったたので、非常に驚いていた。

「わざわざのお運び、恐悦でございます」

ツクヨミとイスズは床に平伏して言った。アキツは微笑んで、

「そう堅苦しき挨拶はおやめください。私は今日はツクヨミ殿に頼みがあって参ったのですから」

「私にですか？」

ツクヨミはアキツにそのような事を言われて酷く胸が高鳴った。

「言霊師としての貴方の力をお借りしたいのです」

アキツに真っ直ぐ見つめられて、ツクヨミは頬を赤らめる。イスズはその様子に気づき、クスツと笑った。

「言霊師としての？ それは如何なる事でございましょうか？」

アキツはツクヨミに顔を近づけ、声を低くして、

「こことは違う世界の者を、オオヤシマに呼び込みたいのです。そのため、お力を貸して頂きたい」

「は……」

ツクヨミは、話の重大性より、体温がわかるくらい近い距離にあるアキツの顔の方が気になってしまった。

「私と一緒にアマノイワトにいらして下さい。大叔母様と話をして、何としても異世界の者をオオヤシマに迎えたいのです」

「はい」

ツクヨミには断わる理由など何もないので、二つ返事だった。

「ありがとうございます。私は断わられてしまうのではないかと考えておりました」

アキツの嬉しそうな顔に、ツクヨミは思わず頭を下げて、

「滅相もございませぬ。アキツ様のお言葉とあらば、私はどこへも行きまする」

アキツはイスズと思わず顔を見合わせてしまった。

四の章 オオヒルメの憂い、アキツの心

ワの国の聖なる祠はいつであるアマノイワトに王族以外の者が足を踏み入れる事はなかった。その歴史に、遂に終止符が打たれたのである。

「オオヒルメ様には、ご機嫌麗しく存じます」

ツクヨミは、まさに震えながら、挨拶をしていた。彼の目の前には、女王となるべきであったアキツだけでなく、先代の女王であり、ワの国最高の呪術者であるオオヒルメがいるのだ。震えるなどという方が無理であろう。

「其方そなたの一族に対する非礼の数々、王祖に成り代わり、お詫びする」
ツクヨミが顔を上げると、オオヒルメはそう返して来た。ツクヨミは心底驚いてしまった。

「オオヒルメ様、勿体ないお言葉にございます。我が一族の辿りし道は、我が一族に非あればこそ。私には、全く怨みはございません。況まししてや、オオヒルメ様にお詫び頂くなど、滅相もない事にございます」

ツクヨミは再び平伏して言った。オオヒルメはツクヨミの言葉に微笑み、

「その言葉で、私は救われました。言霊師一族には、詫びても詫び切れぬ程の災いを与えてしもうたので、其方がここへ参ると聞いて、私は何としても詫びねばならぬと思っていたのです」

「ありがとうございます。我が祖も、オオヒルメ様のお言葉で救われましょう」

「ツクヨミ、其方は誠に優しき男よの」

オオヒルメは一段高いところに正座していたが、そこから降りてツクヨミの肩に手をかけた。

「恐れ多い事です、オオヒルメ様」

ツクヨミは上げかけた頭をまた地面に擦り付けた。

「ご挨拶はその辺りで。お話に入らせて頂きたいのですが」

アキツが堪りかねて口を挟んだ。オオヒルメとツクヨミはハツとしてアキツを見た。

「事は一刻を争うのです。お急ぎ頂きとう存じます」

「わかった、アキツ」

オオヒルメは苦笑いをして座に戻った。ツクヨミはアキツに、

「私にどうせよと？」

「言霊師の秘術を使い、異世界の者の魂をこちらに呼んで頂きたいのです。大叔母様のお力と貴方のお力ならば、禁呪である秘術を使わずとも、為せるはずだと思います」

ツクヨミとオオヒルメは、思ってもいなかった提案に顔を見合わせてしまった。

「アキツ、それでも禁呪は禁呪ぞ。私は力を貸す訳にはいかぬ」

オオヒルメは厳しい表情になって言った。

「大叔母様、先程も申し上げましたが、時は待つてはくれませぬ。急がねばならぬのです」

「ならぬものはならぬ」

オオヒルメは遠き昔の秘術の結果を知っているので、どうしても賛同しかねた。

「何故です？ このままでは、オオヤシマは血に染まって行くだけです」

「……」

オオヒルメは、それでも禁呪を使いたくなかった。

「それでもならぬ。禁呪を為せば、今以上の災いと呼び込む事になるからじゃ」

「ええ？」

アキツは驚愕した。ツクヨミも、オオヒルメの真剣な表情から、何故禁呪とされたのか、その理由を知りたくなった。

「昔、一体何があったのですか、大叔母様？」

アキツの問いにオオヒルメは俯いていたが、やがて、

「秘術を使うと、ヨモツが蠢く^{うごめ}のじゃ。ヨモツが動けば、オオヤシ

マは今以上に血塗らるる事になろうぞ」

オオヒルメの搾り出すような声に、アキツはギョツとした。ツクヨミも息を呑んだ。

ヨモツとは、オオヤシマの地下にあると言われている闇の国の事である。

（オオヒルメ様が躊躇われる理由^{わけ}がわかった。ヨモツか。それは難題だ）

「では、その昔、異世界の者がオオヤシマを救ったというのは偽りでございますか？」

アキツは震えながら尋ねた。オオヒルメはゆっくりと首を横に振り、

「それは真^{まこと}の話。じゃが、その時もヨモツは動いてしまった。ワの国は滅びるかと思われる程、ヨモツの兵はワを攻めた」

「……」

アキツはツクヨミと顔を見合わせた。

「ですが、ワの国は滅びておりませぬ。ヨモツも今は動いていない様子。どうしてワは滅ぼされなかったのです？」

アキツは再びオオヒルメに尋ねた。オオヒルメは悲哀に満ちた顔で、

「ワの王が、身を捨ててヨモツの兵を封じたのじゃ。アマノイワトの更に奥にあるヒラサカでな」

「！」

アキツは自分が何をしようとしているのか、気づいた。

「そのような事があったのですか。申し訳ありませぬ、大叔母様」
彼女は平伏^{ひれふ}して詫^わびた。オオヒルメは微笑み、

「もう良い、アキツ。其方^{そなた}のオオヤシマを憂^{うれ}う心、ようわかった。顔を上げなさい」

「私は、自分の事ばかりで、大叔母様のお苦しみを考えずに……」
アキツは涙を流していた。ツクヨミはその美しさに顔が火照るのを感じた。

「いや、私も同じぞ。禁呪を使えば、自分が命を捨てねばならぬ事を知っていたのだ。私は自分の命が惜しくて、オオヤシマを救おうとするお前を諦めさせようとした。詫びねばならぬは私の方じゃ」
オオヒルメは涙こそ流していないが、目を潤ませていた。するとアキツは、

「もしヨモツが動きし時は、私が封じます。本来であれば、私が王であつたはずなのですから」

「アキツ……」

オオヒルメは目を見開いた。ツクヨミも驚いてアキツを見た。

「その覚悟なくして、ワの女王などと名乗れませぬ」

アキツの決意の固さに、ツクヨミは自分が身代わりになればと思つた。

そして、磐神家。

武彦は、久しぶりに夢の中の女性の声に悩まされる事なく、朝もすっきり目覚め、幼馴染で同級生の都坂^{みやざか}亜希を驚かせた。

「ビックリした。てっきりまだ寝てると思つてたから」

亜希はいつになく上機嫌で言つた。武彦の姉である美鈴も、

「私も驚いたのよ。今日は雪が降りそうね」

「そうですね」

女性陣に酷い事を言われている武彦だが、そんな事よりグッスリ眠れた事の方が嬉しいのか、

「さ、行こうか、委員長」

「うん」

二人は玄関を出た。美鈴は溜息を着き、

「全く、朝起きられただけで感動させるなんて、あいつも本当に困つた奴」

と呟くと、出かける準備をするために部屋に戻つた。

「あのさ」

登校中、武彦は言った。ご機嫌な亜希は、

「何？」

とニコニコして聞き返す。武彦は、

「委員長ってさ、機嫌いい時と悪い時が激しく変わるんだけど、僕が何を言うと気分が悪いの？」

いつもの亜希なら、「委員長」の一言が気に障るのだが、今日は本当に機嫌が良かったので、

「そう？ そんな事ないと思うけどなあ」

と惚^{とほ}けてしまった。武彦はキョトンとして、

「そ、そうなの」

「ほら、早く行こうよ、武君」

亜希が武彦の手を握る。武彦はビクツとして、

「あ、ちょ、委員長！」

とアタフタしながらも、亜希の手を振り解く勇氣もなく、されるがままに走り出した。

武彦の住む世界は、平和だった。しかし、少しずつ、それは変化しつつあった。

五の章 ツクヨミの策、ホアカリの動揺

どこにあるのかわからない島、オオヤシマ。そしてそこにある二つの国、ヒノモトとヤマト。兄と弟が相争うという、悲劇が起きていた。

アキツはオオヒルメを何とか説得しようとしていた。

「大叔母様、このまま二つの国が争いを続ける事こそ、ヨモツを動かす起りとなりましょう」

しかし、オオヒルメは頑として譲らない。

「何をどう言い繕うと、ならぬ。禁呪は許さぬ。例え、お前が命を賭けてヨモツを封じようとも、為すべき事ではない」

「大叔母様……」

オオヒルメとアキツの双方の憂いが、ツクヨミにはよくわかった。彼は堪りかねて、遂に口を開いた。

「恐れながら申し上げます」

オオヒルメとアキツはツクヨミを見た。ツクヨミは頭を下げたまま、

「言霊師一族に伝わる秘法がございます。その秘法であれば、ヨモツは動かぬかと」

「それは真か、ツクヨミ？」

オオヒルメは身を乗り出して尋ねた。アキツもツクヨミをジッと見ている。

「はい。但し、術具が要ります」

「何じゃ？」

オオヒルメはアキツと顔を見合わせてから尋ねた。ツクヨミは顔を上げて、

「アメノムラクモでございます」

「何と！」

ツクヨミの言葉に、オオヒルメとアキツは驚愕した。アメノムラクモとは、ワの国に代々伝わる秘剣である。正統後継者のみが持つ事を許される物なのだ。

「その剣は、今はここにはない。ヒノモトのホアカリが持っておる」

オオヒルメは悲しそうに呟いた。ツクヨミは、

「存じ上げております。その剣、取り戻しに行こうと思っております」

「お前がか？」

オオヒルメは再びアキツと顔を見合わせ、尋ねた。ツクヨミは頭を下げ、

「はい。私が、ヒノモトより取り戻してご覧に入れます」

「それは……」

アキツが口籠った。ホアカリが持っていると言うのは建前で、本当にアメノムラクモを持っているのは、ホアカリの妃トミヤの兄であるナガスネなのだ。ホアカリならば、話も聞いてくれようが、ナガスネではその話すらできない。ヤマトではイワレヒコが乱暴者のように言われるが、ナガスネの狼藉に比べれば、イワレヒコなど子供が悪戯程度であろう。

「ホアカリは我が血に連なる者なれど、ナガスネは違う。ツクヨミ、命を落とすかも知れぬぞ」

オオヒルメの忠告にツクヨミは微笑んで、

「お氣遣い痛み入ります。しかし、私は言霊師でございます。その昔、オオヤシマで並ぶ者なき一族と言われた者の末裔です。策がございます」

「策、とな？」

オオヒルメは眉をひそめた。

ヒノモトの国。オオヤシマの西半分を治める、ホアカリを王と戴く国である。

ホアカリは、弟ウガヤと違い、凡庸だ。義理の兄に当たるナガス

ネに唆そされ、戦を起こしたものの、それを後悔しているのだ。しかし、狡猾なナガスネが怖くて、何も言い出せない。秘剣アメノムラクモも、ナガスネが勝手にワの国の城から持ち出してしまったのだ。それが自分の屋敷にあるのが、どうにも恐ろしくて仕方がない。

「ナガスネはおるのか？」

王の座に着いていながら、ホアカリはビクビクしていた。ナガスネは実質的なヒノモトの支配者なのだ。ホアカリを王位に就けているのは、方便に過ぎない。それはいくら凡庸なホアカリにもわかっている。彼が曲がりなりにも粛清されないのは、ひとえに妃であるトミヤのおかげだ。傍若無人なナガスネも、トミヤにだけは気を遣う。彼が何より恐れるのは、トミヤが悲しむ事なのだ。そのトミヤが愛しているホアカリは、ヤマトとの争いに勝つまでは非常に大事な存在であるが、ヤマトを滅ぼしてオオヤシマを支配できれば、どうでもいい存在になってしまう。

「ホアカリ様はお隠れになりました」

いつそのような目に遭わされるかわからないのだ。

「ナガスネ様は、戦場でございます」

家臣達も心得たもので、ホアカリが何を聞きたいのかわかっている。

「そうか」

ホアカリはナガスネがいないと知ると、妃トミヤのいる部屋へといそいそと出かける。

「陛下」

「トミヤ」

二人は好き合って添った。だから、本当に仲睦まじい。トミヤも兄ナガスネの野望を悲しく思っている。誰か二人の間に立ち、取りなしてくれる人がいないかと日々思っているほどだ。オオヒルメやアキツがその第一候補であるが、ワの国を全く畏敬の対象としていないナガスネには、二人の威厳は通用しない。

「戦はいつ終わるのですか？」

トミヤは悲しみに溢れた瞳で夫を見た。ホアカリは、トミヤの心
がわかるので、その目を直視できない。自分の不甲斐なさも感じて
いるので、何も言う事ができない。

「申し訳ございませぬ。お忘れ下さい」

トミヤは夫が苦しんでいるのを知り、頭を下げた。しかしホアカ
リは、

「構わぬ。私とて、戦を何とかせねばならぬと思うておる。不甲斐
ないのだ、己が」

「陛下」

トミヤはそんなホアカリの純真さが好きだ。悲しいまでに真っ直
ぐな心の持ち主。

「兄上が陛下を苦しめておるのです。私がお話し致します」

堪りかねたトミヤが進言する。しかしホアカリは首を横に振った。

「それはならぬ。ナガスネはこの国の事を思うておるのだ。あの者
には、野心はあれど私欲はない。だからこそ、私も戦に賛同した。
しかし、今となってはその戦そのものが間違^{まちが}うておる気がする。如
何にすれば良いのか、思案しているのだ」

「陛下」

二人は抱き合い、互いの温もりを感じ合った。

磐神家。武彦が帰宅し、バイトに出かける支度をしている。

「只今」

そこへ姉美鈴が帰って来た。

「お帰り、姉ちゃん」

「おう、今からバイトか？」

「うん」

「頑張れよ」

「姉ちゃんは？」

「今日は休講。久しぶりに休めるんだよん」

美鈴は嬉しそうだ。多分飲み明かすつもりだろう。

「飲み過ぎないようにね」

「私はいつでも適量しか飲まない！」

その適量が普通じゃないんだよな。と武彦は思った。

「あ」

その時、また声が聞こえた。

『私の声が聞こえる方、答えて下さい』

また始まってしまった。武彦は憂鬱な顔になった。美鈴がそれに気づいた。

「どうした、武？ 顔色が悪いぞ」

「あ、うん。また変な声が聞こえてさ……」

「変な声？」

この前もこいつ、そんな事言ってたな。美鈴はふと数日前の事を思い出した。

「病院に行った方がいいぞ、武。手遅れにならないうちにさ」

「そうかな……」

武彦はフーツと溜息を吐いた。美鈴はあまりにも武彦が深刻な顔をしているので、

「休んだ方がいいぞ、バイト。姉ちゃんが付き添ってあげるから、病院行くか？」

「だ、大丈夫だよ」

姉ちゃんと一緒に病院に行く方が憂鬱だと思う武彦。

「行って来ます」

武彦は玄関を出た。美鈴は、

「本当に大丈夫なのかな、あのバカ……」
と呟いた。

ツクヨミはアマノイワトを出て、ヒノモトに向かっていた。アキツも同行している。

「アキツ様、やはり私一人で行きます。お戻り下さい」

ヤマトとヒノモトの国境付近^{くにみか}まで来て、ツクヨミはもう一度言うてみた。

「いえ。私も行きます。行かねばなりません。この国の災いを取り除くのが、我が務めなのです」

「はい……」

アキツは決して退くつもりはない。ツクヨミはそれを感じて、遂に彼女を説得するのを諦めた。

「ここより先は、両軍が対峙する所です。とても危うき場です。お気をつけ下さい」

「はい」

アキツがスツとツクヨミに貼り付くように歩く。ツクヨミには、軍隊よりアキツの方が脅威であった。彼女の身を案じているので、同行しないで欲しいというのも本音だが、それ以上にアキツがそばにいと、術をうまく使えないかも知れないと思うのだ。

「ツクヨミ殿……」

アキツはツクヨミが緊張しているのを感じ取り、声をかけた。

「は、はい」

ツクヨミはアキツを見た。アキツは顔を近づけて、

「心安らかに。そうすれば、うまくいきます」

「はい」

心が安らかにならないのは、貴女がこれほど近くにいらっしやるからです。ツクヨミはそう言いたかった。

その頃、ヤマトの国にはイワレヒコが戻っていた。

「姉上、お久しゅうございます」

イワレヒコは皮肉混じりにイスズに挨拶した。イスズは震えながら、

「ご無事で何よりでございます」

と返した。イワレヒコはニツと笑い、

「さて。戦場での疲れを癒して頂きたい」

と言うと、ドスンと部屋の中央に胡座をかいた。

「はい」

イスズは琴を取り出し、弾いた。彼女は楽師と呼ばれる。楽器を奏でる事により、様々な効果を生じさせるのだ。とりわけ、イスズの琴は癒しの効果が大きく、軽い怪我ならその音で治癒してしまう。

「相変わらず姉上は琴の名人。聞き惚れる」

イワレヒコはそう言いながら、琴を奏でるイスズに近づいた。

「はっ」

イスズは一瞬のうちに組み伏せられた。イワレヒコはイスズに馬乗りになり、彼女の服の裾を捲り上げた。

「このイワレヒコ、いつ戦場で命を落とすかも知れませぬ。そうなる前に、姉上に我が子種を宿したい」

「……」

虚を突かれ、イスズは何も言い返せない。身体も硬直して、反抗できない。もはやこれまでかと思われた時、

「イワレヒコ、おるか？」

ウガヤの声がした。イワレヒコは舌打ちして起き上がり、

「只今参ります」

と部屋を出た。イスズはようやく硬直が解け、起き上がった。

「ツクヨミとアキツが？」

イワレヒコの大声が聞こえて来た。イスズはハッとして戸口に駆け寄り、聞き耳を立てた。

「ツクヨミとアキツが、ヒノモトに赴いたらしい。国境の伝令くにぎかりからの報告じゃ」

ウガヤの声が聞こえた。イスズはハッとした。

（ツクヨミとアキツ様がヒノモトに？）

「何をするつもりか、あの二人」

イワレヒコの苦々しそうな声が聞こえた。

六の章 ナガスネの警戒、アキツの信頼

オオヤシマの二つの国、ヒノモトとヤマトの国境に、ヤマトの言霊師であるツクヨミと、ヒノモトとヤマトの元であつたワの国の女王後継者であるアキツがいた。二人の動きはヒノモトとヤマトの中枢に知らされていた。ヤマトのウガヤ王と王子イワレヒコは二人の行動に色めき立った。もしやヒノモトに着くつもりなのかと考えたのである。ヒノモトはヒノモトで、アキツとツクヨミが行動を共にしている事を危惧していた。ヤマトがワの国の元女王を抱き込んだと考えたのだ。二人の行動は、二人が思っている以上に周囲に影響を与えていた。

「ツクヨミめ、寝返るつもりか!？」

ウガヤは激高し、兵を送ろうとした。すると嫡男であるイツセが、「父上、お待ち下さい。もし、ツクヨミが何かの策があつてヒノモトに赴いたのであれば、すぐに敵対と断ずるは宜しくないでしょう。仮にもあの者は言霊師です。扱いを誤れば、立ち所にヤマトは滅ぼされましょう」

と諫めた。しかしイワレヒコは、

「いや、何かの策であれば、我らに何も告げずに出立するはずがありません、兄上。しかもアキツ様が同道されているとなれば、尚の事。あの者は、ワの国に怨みありし者です。何かの企みがあると考える事も必要です。あまりに信を置く事こそ、宜しからざる事と存じます」

と反論した。ウガヤは腕組みをして、

「倅等の申す事、ようわかった。まずは斥候を送り、様子見をする事にしよう」

「はは」

イワレヒコはニヤリとして頭を下げた。イツセは先の戦で負った肩の傷を摩りながら、イワレヒコを横目で見た。

（イワレヒコ、お前は一体何を考えておるのだ？）

イツセはあまりに激し過ぎる弟の気性を憂えていた。

ツクヨミとアキツは、ヒノモトの軍の陣に到着し、ホアカリとの会談を申し入れた。いくらワの国の威光が以前ほどではないにしても、女王となるべき血筋のアキツが現れたので、ヒノモトの陣はすっかり萎縮していた。

「お取り次ぎ願えますか？」

アキツは部隊の長に尋ねた。長は深々と頭を下げ、

「直ちに將軍に伝えます。しばしお待ちを」

「ありがとう」

アキツは微笑んで応じた。彼女の威光もさることながら、その類い稀なる美貌も一役買っていた。兵達はアキツを一目見ようと、用もないのに陣の奥にある仮の館を覗きに來ていた。

「さすがでございます、アキツ様。私一人では、こうはなりませんでした」

とツクヨミが言うと、アキツは恥ずかしそうに俯いて、

「それ程の事ではありません。私にできる事と言ったら、ワの国の大叔母様のご威光をお借りする事くらいですから」

「そのような事はありません。これは、アキツ様のお力です」

「ありがとう、ツクヨミ殿」

こうして間近でアキツの笑顔を拝める事が、ツクヨミの何よりの幸せだった。

アキツとツクヨミの申し入れは、すぐに早馬でナガスネの元に伝えられた。

「ツクヨミか。あの魔物が、どうやってアキツを抱き込んだのか、知りたいものだな」

ナガスネは万事が謀略と言う発想の男なので、ツクヨミがアキツを騙していると考えていた。

「彼奴は所詮言霊師あやつという物の怪。何を企んでいるのかわからぬ。陛下に会わせる事はできぬ故、アキツだけをヒノモトに來させよ。もし、ツクヨミが抵抗するなら、アキツの命と引き換えになる旨、しかと申し伝えよ」

「はは」

伝令兵はそのまますぐにアキツ達のいる陣に戻った。

その頃、イスズはツクヨミの事を心配していた。

「ツクヨミ……」

只一人、このヤマトで彼女の気持ちを理解しているツクヨミが、ヒノモトにアキツと向かっている。イスズの気持ちは複雑であった。彼女はツクヨミに心を開いている。そして、男としての魅力も感じている。但し、彼女は王家の者故、ツクヨミと添い遂げたいなどという事は考えていない。それでも、アキツとツクヨミが二人でというのが、イスズには気にかかった。

（やはり、ツクヨミはアキツ様の事を……）

叶わぬ恋なのは、ツクヨミが一番良くわかっている。そしてイスズも、ツクヨミがそれ程愚かな者とは思っていない。

「私は……」

自分の気持ちを測りかねるイスズだった。

「姉上」

その思いを破るようにイワレヒコが入って來た。

「はい」

イスズは怯えた目でイワレヒコを見上げた。イワレヒコはニヤリとして、

「また出立です。貴女と次に会うのは、ツクヨミの首級を挙げた時やも知れませぬな」

「えっ？」

イスズはギクツとした。その時のイワレヒコの目は、嫉妬する男の目だったのだ。

（もしや、イワレヒコ様は私とツクヨミの仲をお疑いなのか？）
しかし、イワレヒコはそれ以上は何も言わず、部屋を出て行ってしまった。

「ツクヨミが討たれてしまう？」

イスズはイワレヒコの言葉の真の意味が読めず、不安だった。

いわがみたけひこ
磐神武彦は、無事バイトを終え、帰宅した。

「お前、本当に大丈夫か？」

湯上がりスツピンの姉美鈴が尋ねた。武彦は作り笑いをして、

「大丈夫だよ。声はあの後聞こえなかったから」

「本当にさ、今度姉ちゃんと一緒に病院に行こう。検査だけでも受けた方がいいよ」

「うん」

姉があまりに心配そうな顔をしているので、その気もないのに武彦は返事をした。

「必ずだからな。約束だぞ」

「わかったよ」

姉ちゃんのある顔、いつ以来だろう？ 僕が小さい頃、高熱で何日も学校を休んで以来かな？ そんな事を思いながら、武彦は部屋に行った。

「武彦、どうなの？」

聞きつけた母珠世が尋ねた。美鈴は肩を竦めて、

「聞いているんだか、聞いていないんだか、わからないわよ、あのバカ。こっちの気も知らないで」

「とにかく、病院には必ず連れて行ってね、美鈴」

「わかってるわよ、母さん」

二人もそれぞれの部屋に戻った。

武彦は本当は声が聞こえ続けていた。姉が心配するので言わなかったのだ。

「でも前と違う事言ってたな。このままでは国が滅びてしまうって。どこの国の人なのだろう？」

武彦は、この地球の別の国の人の声だと思っていた。それにしては、声は日本語だったと疑問には思っていたが。

「どうすればいいのか、教えて下さいよ、声の主さん」

武彦は祈るように呟いた。

「はっ」

アキツはピクンとした。ツクヨミはハッとして、

「如何なさいましたか、アキツ様？」

「声が返って来ました。どうすれば良いのか教えて欲しいと」

「そうですか」

アキツは微かに微笑んで、

「僅かではありますが、答えし方が私に近づいてくれたようです」

「はい。私も探っておりますが、何かが感じられました。あれがそうだったのですね」

「ええ」

アキツは、また決意を新たにした。するとそこへ部隊の長が戻って来た。

「アキツ様、ここより先はお一人で願います」

その言葉にアキツは仰天した。そして、ツクヨミを見た。しかし、ツクヨミは全く慌てた様子がない。彼は只頷いた。何か考えがあるようだ。アキツはそれを読み取り、

「わかりました。ここから先は、私のみで参りましょう」と応じた。

（アメノムラクモさえ手に入れば良いのですから、心配ないでしょう。そしてあのツクヨミが策があると言っていたのですから、そちらも心配無用ですね）

アキツはツクヨミに全幅の信頼を置いていた。

（こうなる事はわかっていた。だからこそ、私の策が生きるのだ）
ツクヨミは秘策を以てアメノムラクモを手に入れるつもりだった。

七の章 アキツの声、武彦の心

ヒノモトの国。

ワの女王となるべき立場にあったアキツは、生まれて初めて訪れた。オオヤシマの西半分を領土とするヒノモトは、東のヤマトに比較し、気候は温暖、農作物も豊富に収穫される。長期戦になれば、兵糧の蓄えが少ないヤマトは自滅する。ナガスネはそれを見込んで、意図的に総力戦を避けるようにし始めた。

「緑豊かですね」

彼女は一緒に馬車に乗っている長に声おさをかけた。彼はアキツを監視するために同行していたが、彼女の美しさに顔を合わせることはできない。特に馬車は狭いため、アキツの顔は長のすぐ目の前だ。余計に見ることができない。そんな長の緊張をアキツは嫌悪と勘違いし、

「すみませぬ」

と詫びると、窓の外に目を向けた。長はホッとすると同時に、この高貴な方を怒らせてしまったのではないかと更に緊張してしまった。

一方、アキツが一人でホアカリの元に向かっている事を伝令兵から伝えられたナガスネは、

「あのツクヨミが同行しないとは、何か企んでおるのか」と勘繰り、

「ツクヨミから目を離すなど伝えよ。彼奴あやつは必ず動くはず」「はは」

ナガスネはその後、ホアカリの城に出向いた。

「陛下にはご機嫌麗しく」

形ばかりの敬いの言葉を述べ、ナガスネは話を始めた。

「アキツがこちらに向かっております。如何様な思惑があるのかわ

かりません故、まずは私が会うことに致します」

ホアカリは隣に座る妃トミヤを見た。トミヤは兄ナガスネを心配そうな顔で見ている。

「わかった。しかし、ナガスネ、アキツ様を呼び捨てとは、無礼であるぞ」

ホアカリの精一杯の返しである。ナガスネは苦笑いをして、

「これは申し訳ありません。しかし、もはやあの方は、王族でも王でもございませぬぞ」

「そうではあるが、我らの上に立つべきお方だ。蔑ろにするでない」
ホアカリは、ナガスネが反論しないので、もう一步踏み込んだ。
た。

「畏まりました」

ナガスネは頭を垂れ、ニヤリとした。

「失礼致します」

彼はスツと立ち上がり、退室した。

「陛下」

兄が退室すると、トミヤは小声で夫に言った。

「アメノムラクモ、アキツ様にお返しする機会です。兄に命じてお返し下さいませ」

「そうだな。あの剣は、私が持っているべきではない」

ホアカリは力なく微笑み、答えた。トミヤは、

「況してや、我が兄が隠し持つ等、許されざる事です」

と語気を強めて言った。

しかし、その当人であるナガスネは、アキツの目的がアメノムラクモであると予測しており、どうやって誤魔化すか思案していた。
(トミヤがホアカリを後押しして、アキツに剣を返そうとするのは承知。しかし、あの剣は返さぬ。アキツはもはや飾りにもならぬ。そのような女子が、アメノムラクモを持っても仕方あるまい)
「聞かぬ時は、あるいは……」

いくらナガスネが狡猾と言えども、アキツを手にかけるのはさす

がに躊躇われた。

「そこまではしたくはない」

ナガスネはフツと笑い、自室に入った。

一人国境の陣に残ったツクヨミは、アキツの身を案じながら、ヤマトに引き上げるふりをして出立した。

（アキツ様、ホアカリ王はともかく、ナガスネ將軍にはお氣をつけ下さい）

ツクヨミは遙か彼方にあるヒノモトの城の方向を眺め、アキツの無事を祈った。

「さて、私も動くか」

彼はそう呟き、再び歩き出した。

ウガヤは、国境に放った斥候からの報告を受けていた。

「そうか。ツクヨミは足止めされ、アキツだけがヒノモトに行ったか」

「はい。ツクヨミは然したる抗いもなく、素直に引き下がった様子。そろそろこちらに戻りましょう」

「わかった。ご苦労であった」

斥候が下がると、ウガヤはイワレヒコとイツセを見た。

「どう思うか、お前達は？」

すると、イツセが、

「アキツ様はアメノムラクモをお取り戻しに行かれたのではないでしようか？ ナガスネが戦の混乱に乗じて、盗んだと聞いております」

「そうだな。アキツが自らヒノモトに赴くは、それくらいの理由^{わけ}がなければならぬ。アメノムラクモはそもそも王族の剣。ナガスネ如き下賤の者が手にして良い物ではない」

ウガヤはそう言いながらも、もしアキツがアメノムラクモを取り戻したら、彼女諸共ヤマトに奪い取るつもりでいた。凡庸な兄ホア

カリが、成り上がりのナガスネの思うがままにされているのは、ウガヤにとって非常に不愉快なのだ。オオヤシマを我がものにするのも目的であるが、それ以前にナガスネの息の根を止めるのもウガヤの悲願であった。そして、そんなナガスネに利用されているホアカリさえも、始末しようと考えているのだ。

「私が出立して、アキツの首とツクヨミの首、更にはアメノムラクモをとって参りましょうか、父上？」

イワレヒコが狡猾な笑みを浮かべて進言した。イツセはギョツとしたが、ウガヤはニヤリとした。

「そこまでする事もあるまい。動かずとも、アキツは来る。ツクヨミと共に」

「そうでありますかな」

イワレヒコは父を尊敬しているが、何もかも人にやらせるところは好きになれない。彼は残虐ではあるが、卑怯ではないのだ。

「それに、アキツはすでに王族ではないとしても、まだまだ民の心を惹きつけている。あの女を殺せば、ヤマトの国はまとまらぬ。アキツを手にかけてようなど、この後一切口に致すな、イワレヒコ」

ウガヤは何時になく鋭い口調で言い放った。イワレヒコはそれに気圧されるように、

「ははっ」

と頷ぎいた。イツセはウガヤがアキツまで手にかけるつもりではない事を知り、ホッとしていた。

いわがみたけひこ

磐神武彦は、バイトを休んで近くの大学病院に行った。もちろん、姉美鈴も同行している。武彦は嫌だったのだが、今までに見た事がないほど心配そうな顔の母珠世と姉を見て、仕方なく同意したのだ。

「同じ夢を何度も見るのですか」

「はい」

武彦は心療内科で問診を受けていた。医師は若い男だ。何故か美

鈴も一緒に診察室にいる。

「何日もそういう事が続いているらしいんです。始めは只の疲れだと思っていたのですが、最近は起きていても幻聴が聞こえるらしくて」

武彦の代わりに、美鈴が答えた。医師は美鈴を見て、

「お姉さん、心配なのはわかりますが、診察の妨げになりますので、一度退室して頂けますか？」

「えっ？」

意外な事を言われて、美鈴はキョトンとした。医師は続けた。

「心的な病気は、身近な人の影響によるものが多いのです。お姉さんがそばにいますと、武彦君の心の内が覗けない恐れがあります。退室して下さい」

「は、はい」

美鈴は納得できなかったが、医師がそう言うのでは従うしかないと思い、診察室を出た。

「さてと。武彦君、もう何も心配する事はないよ。全部話してくれたまえ」

医師は微笑んで促した。武彦は呆然としていたが、

「は、はい」

と応じ、見た夢と聞こえた声の内容を話した。

「最近、テレビや新聞でどこかの国の戦争の話を見聞きたりしましたか？」

「いいえ」

医師は腕組みして、

「では、高校の授業で、そのような話を聞きましたか？」
「いいえ」

武彦は、医師が自分の話をまるで信じていない事に気づき、ガツカリしていた。

（これじゃ、相談できないよ。僕が嘘を吐いているみたいな扱いじゃないか）

その時だった。

『助けて下さい。私はワの国のアキツ。オオヤシマが戦で……』
また聞こえた。武彦は空を見つめるようにその声を反復した。

（オオヤシマ？ アキツ？ ワの国？ どの国？）

歴史が苦手な武彦には、「ワの国」が昔の日本の国名だという事に考えが及ばなかった。

「どうしたのかね、武彦君？」

医師が訝しそうな顔で武彦を見ている。

「あ、いえ、何でもありません」

「もしかして、また聞こえたのかな、声が？」

医師の言葉に、正直な武彦はギクツとしてしまった。

「い、いえ、違います。すいません、ボンヤリしてました」

武彦は咄嗟に誤摩化した。

結局、武彦の病名は判明せず、薬も処方されなかった。但し、もう一度診察を受けに来るようには言われた。

「何だよ、ヤブ医者め。知り合いの紹介だったから、文句言えなかったけど」

病院を出るなり、美鈴は毒づいた。

「今度は違う病院に行こう、武彦」

「う、うん」

武彦が元気がないので、

「元気出せ、武彦。姉ちゃんがついてるから」

と美鈴は武彦を抱きしめた。柔道を習っている姉は、武彦よりずっと頑丈な身体をしている。

「く、苦しいよ、姉ちゃん」

「うるさい。姉ちゃんと母さんが、どんなに心配しているのか、お前全然わかってない！ 何でも一人で悩むなよ」

武彦が美鈴を見ると、彼女は涙ぐんでいた。

「もっといろいろ相談してくれていいんだぞ。そのために、姉ちゃんはいるんだからな」

「う、うん」

「よし」

美鈴は涙を拭い、歩き出した。武彦はクスツと笑って、

（姉ちゃん、ありがとう）

と心の中で感謝した。

（でも、ワの国にとってどこだろう？ 委員長に聞けば知ってるかな？）

言われたそばから、姉に相談するつもりがない武彦だった。

八の章 アキツの怒り、ツクヨミの力

どこにあるのかわからないオオヤシマ。そしてそこにあるヤマトの国とヒノモトの国。元は一つの国であったが、兄弟の諍いから分裂し、互いに覇権を賭けて争うようになってしまった。

オオヤシマの元の国であるワの国の女王であるべき立場のアキツは、ワの国門外不出の剣であるアメノムラクモを取り戻すため、ヒノモトを訪れていた。それはヤマトの国の言霊師であるツクヨミの秘術を完成させるために必要なもの。ツクヨミの秘術で、オオヤシマを救える異界の者を呼び寄せる手はずなのだ。

ヒノモトの国の將軍であるナガスネは、自分の妹であるトミヤの夫ホアカリの脆弱さを憂えていた。戦^{いくさ}にもし仮に負ける事があるとするれば、それはホアカリの求心力の弱さだと彼は考えていた。そのためにも、ワの国が混乱する中で掠め盗って来たアメノムラクモをアキツに易々と返す事はできない。アメノムラクモは王位の継承者が持つべきものだ。それをアキツに返すと言う事は、ホアカリ自らが、自分は王位継承者ではないと宣言するのと同じ事である。ナガスネは野心家ではあるが、自分が王位を強奪しようと思うほど傲慢ではない。あくまで妹の夫君であるホアカリを立て、その背後で全てを掌握するつもりだ。

「今はまだその支度の最中だ。アキツにアメノムラクモを返す事など断じてできぬ」

ナガスネは強い決意を持っていた。ホアカリに対しては殺意を抱いた事はない。しかし、アキツを手にかける事をよしとしないと頭の中では思うのだが、片隅に最悪の場合も思い描いていた。すなわち、アキツは絶対に殺さないとは決めていないのである。

そんなナガスネの思惑とは別に、ホアカリとトミヤの二人は、どうやってナガスネを説得するべきか思案中であった。

「兄は強く出れば強く返して参ります。宥めすかし、こちらの思いを伝え、最後は陛下のお力で従わせて下さいませ」

トミヤはホアカリに強い調子で進言した。ホアカリは妃の迫力に少々戸惑っていたが、

「わかった。何とかナガスネを説き伏せよう。そうでなければ、私はアキツ様に顔が立たぬ」

「はい」

そこへ近衛兵がやって来た。

「アキツ様、お着きにございます」

「うむ」

ホアカリはトミヤに目配せし、アキツの待つ玉座の間に向かった。

ヤマトの国では、イワレヒコが出立の準備に追われていた。ツクヨミが戻らないのだ。

「ツクヨミめ、何を企む？ いや、何を企んでいようと、今回の事は許し難き行い。成敗してくれる」

イワレヒコは、許嫁である姉イスズとツクヨミの仲を疑っていた。何かあるとまでは思っていないが、イスズが自分に心を開かないのは、ツクヨミの讒言があり、彼が男としてイスズに接しているからだと決めつけていた。だからこそ、かたくな国元にいる時は、毎夜のようにイスズを求めた。それを頑に拒否するイスズも、イワレヒコにとって疑惑の対象だった。イワレヒコは、自分に問題があるとは全く考えていないのだ。

「大義は我にあり。言霊師が如何様な物の怪であろうとも、負けぬ」
イワレヒコも、言霊師一族の力をよく知っている。ワの国が分裂する以前、他国の侵略を防げたのは、ツクヨミの力があったからこそなのだ。ウガヤがツクヨミを自由にさせているのも、彼を信頼しているからではなく、恐れているからだ。しかしイワレヒコは嫉妬心から、ツクヨミを亡き者にする事しか考えていなかった。

いわがみたけひこ
磐神武彦は、珍しく遅刻せず、同級生でクラスの委員長でもある
みやこさかあき
都坂亜希と登校途中だった。

「ねえ、委員長」

「何？」

委員長と呼ばないで、と言えはすむ事なのだが、亜希は何故かそうしない。そしていつもその一言で不機嫌になる。その上、武彦は亜希が不機嫌になる原因を知らないのです、いつまで経っても彼女の事を委員長と呼んでしまう。

「あ、あのさ、ワの国ってどこの国？」

武彦は少々怯えながら尋ねた。亜希はその質問に啞然としたが、
「何よ、急に。日本史は選択しないんでしょ、武君は？」

「えっ？　ワの国って日本なの？」

「そんな事も知らないの？　貴方、まさか、邪馬台国やまたいこくも知らない？」

「山田国？　それ、どこ？」

亜希は完全に呆れてしまい、

「話にならないわ」

と言い放つと、武彦を無視して歩き出した。

「ああ、待ってよ、委員長」

「知らない！」

亜希はますます剥れて走り出した。こうなると、鈍足の武彦は追いつけない。

「お、置いて行かないでよ、委員長」

完全に火に油を注いでいる事に気づいていない武彦だった。

「あっ！」

その時、また謎の声が聞こえた。

『私はワの国のアキツ。私の声が聞こえる方、どうぞ私達を助けて下さい。私達はオオヤシマにいます。どうか助けて』

武彦はその女性の名前を知った。

「あきつ？　あきつって苗字かな？」

それすらもわからなかった。

(そうだ、こっちからも呼びかけてみよう)

武彦は以前テレビで見た「テレパシー」の要領で、念じてみた。

『僕は磐神武彦です。あきつさん、僕はどうすればいいんですか？
教えて下さい』

相手に届くかどうかわからなかったが、武彦は必死に念じた。

アキツは玉座の間に通され、普段はホアカリが座っている椅子を
勧められた。彼女は、

「ヒノモトの国の方が、礼儀を弁^{わきま}えているのかしら？」

と思いながら、腰をかけた。

その時、彼女の耳に異界の者の声が聞こえた。

『僕は磐神武彦です。あきつさん、僕はどうすればいいんですか？
教えて下さい』

アキツはその名を聞いて震えた。

(何という巡り合わせなのかしら？ 異界の方は、イワレヒコ殿と
名が似ておられる)

アキツはその偶然が何かを暗示していると感じた。

(ならば、ツクヨミ殿にお話して……)

彼女はある策を思いついていた。

「国王陛下お越しにございます」

案内役の兵が伝えた。アキツは居ずまいを正し、ホアカリを迎え
た。

「アキツ様にはご機嫌麗しく。ご無沙汰致しており、誠に申し訳あ
りませぬ」

ホアカリはトミヤと共に入室すると、アキツの前で跪き、深々と
頭を下げた。

「ホアカリ殿、畏^{かしこ}まった挨拶は抜きにしましょう。私は貴方にお願
いがあったて参りました」

「はい」

ホアカリはトミヤと同時に顔を上げ、アキツを見た。

「こちらにワの国の秘剣、アメノムラクモがあると聞いております。その剣をお返し願いたいのです」

「承知致しました」

ホアカリの間髪入れない返答に、アキツはキョトンとしてしまった。

（こうもあっさりと承諾されてしまうと、肩透かしをされたようですね）

アキツは苦笑いをして、

「ありがとうございます。では、アメノムラクモをここへお持ち下さい」

「はは」

ホアカリは兵に命じ、アメノムラクモを取りに行かせた。

しかし、アメノムラクモはナガスネの屋敷にある。ナガスネはアキツの来訪に合わせて自分の屋敷に戻り、アメノムラクモを持って待ち構えていた。

「申し上げます」

ホアカリの命を受けた兵がナガスネの元に来た。

「何事だ？」

ナガスネはすまして尋ねた。兵は跪いて、

「アキツ様が、アメノムラクモをご所望でございます。陛下の命により、お預かりに参りました」

「そうか。ならば、私が自分でお持ちする。お二人にはそう伝えよ」

「はは」

兵はナガスネの言葉を微塵も疑わず、そのまま引き返した。

「アキツめ、やはりそうか。だが、この剣は返さぬ」

ナガスネはアメノムラクモを帯剣し、屋敷を出た。

「どうしても言うなら、斬り捨てるまで」

ナガスネは目を血走らせ、ホアカリの城に向かった。

ヤマトの国とヒノモトの国の国境^{くにびかい}。ヒノモトの国の側には、ホアカリの嫡男であるウマシがいた。彼は密かにアキツに思いを寄せており、本日城にアキツが来訪する事を聞き知っていた。しかし、父王からは帰還命令はない。彼は悶々としていた。

「国境にお越しの際は、私が城にいた時。城にいらした時は、国境とは。父上は私をアキツ様に引き合わせたくないという事なのか？」
恋に狂う者は大抵の場合、被害妄想に陥るものだ。ウマシの場合、それが顕著だった。

「私がアキツ様を娶れば、ヒノモトが正統な王位継承国となる。それが何故父上にはおわかりにならないのだ？」

アキツの心など全く考えにない独りよがりなところは、ホアカリよりも伯父のナガスネに似ていた。

ナガスネは玉座の間に到着し、アキツに拝謁していた。

「アキツ様にはご機嫌麗しく」

「ナガスネ殿、戦は止められませぬか？」

アキツはナガスネを咎めるような口調で尋ねた。ナガスネは作り笑いをして顔を上げ、

「それはヤマトのイワレヒコ殿にお話し頂きとう存じます。あの方が、どれ程の数の兵を殺したか、アキツ様はご存じですか？」

「知りませぬ」

アキツは毅然とした顔で返した。ホアカリはオロオロするばかりで、自分の臣下の暴言を叱責する事もできない。トミヤは悲しそうな顔で、兄と夫を見比べていた。

「ナガスネ殿、それよりもアメノムラクモはお持ちですか？」

アキツはナガスネがアメノムラクモを帯刀している事を知っているが、敢えて尋ねた。王位にある者のみが帯刀を許される秘剣であるにも関わらず、それを知りながら意図的に帯刀して姿を見せたナガスネの挑発行為に、アキツは怒りを覚えていた。

「ここにございます」

ナガスネは全く動ずる事なく、アメノムラクモを抜き、アキツに見せた。ホアカリは息を呑み、

「ナガスネ、何という事を！　すぐに剣を戻すのだ。無礼であるぞ」と叫んだ。ナガスネはニツと笑って、

「失礼致しました」

「……」

トミヤも啞然としていた。アキツは怒りを抑え切れなくなったのか、

「ナガスネ！　無礼の数々、許し難し！　ワの国の王家を、そしてその秘剣アメノムラクモを何と心得ておるのか！？　天罰を加える」と叫んだ。さすがのナガスネも、オオヤシマーいちと言われた呪術者であるアキツが怒りを露にしたので、驚愕していた。

「お、お許し下さい、アキツ様！　この者の無礼、何とぞ私に免じて……」

慌てたホアカリが間に入り、額ずいた。トミヤもすぐに夫の隣で平伏した。ナガスネは驚きのあまり、何もできず、固まってしまったかのように動かない。

「剣は主あるじの元へ」

アキツがそう言うと、ナガスネの手からアメノムラクモが離れ、宙を舞ってアキツの前にコトリと落ちた。

「ひーっ！」

ナガスネはその現象をアキツの呪術と思い、腰を抜かしてしまった。

「確かにお返し頂きました。ホアカリ殿、これにて失礼致します」
アキツはアメノムラクモを拾い上げ、ナガスネが震えながら差し出した鞘を受け取ると、玉座の間を出て行ってしまった。

「……」

ホアカリとトミヤも惚ぼうけたように座り込んでいた。
アキツは笑いを堪えながら、ホアカリの城を出た。そして、しば

らく進んだ森の中でツクヨミと落ち合った。

「恐るべき術ですね、ツクヨミ殿。ナガスネの驚いた顔と言ったら……」

アキツはとうとう堪え切れずに笑い出した。ツクヨミは頭を下げて、

「言霊師は自分にも言霊を飛ばせます故。誰にも見えぬと唱えれば、私は姿を消せるのです」

アキツの術ではなかったのだ。ツクヨミが言霊で自分の姿を消し、城に侵入して、ナガスネから剣を取り上げたのだ。これがツクヨミの策であった。

「貴方が良い方で良かった。これほどの術を使われれば、オオヤシマは……」

アキツはそう言いかけて、ツクヨミが悲しそうな顔をしたのに気づいた。

「申し訳ありません。貴方のお気持ちも考えずに、一人で喜んでしまつて……」

アキツに謝られて、ツクヨミは恐縮した。

「いえ、滅相もない事です。確かに我が力は恐るべきものです。自分でも怖い事がございます」

「ありがとうございます、ツクヨミ殿」

アキツ様が笑うのが自分の一番の幸せ。ツクヨミはそう思った。

（この方のためにも、何としても秘術を為さねばならぬ）

ツクヨミは決意を新たにした。

九の章 武彦の思い、ツクヨミの奇策

アキツはツクヨミと共に国境を目指していた。

「このままヤマトに戻っても、貴方は大丈夫なのですか、ツクヨミ殿？」

アキツが歩きながら尋ねる。ツクヨミは前を見据えたままで、

「恐らく、私は咎人とがびとでしょう。特にイワレヒコ様には大変疎まれておりますので」

「そうですか」

アキツは先程異界の者から聞いた話をツクヨミにした。

「それは、まさしく定めとも言うべき巡り合わせですね」

ツクヨミもその偶然に驚いたようだ。アキツは歩を進めながら、

「ですから、私はイワレヒコ殿に異界の方を降ろしてしまおうと考えているのです」

「ほう」

ツクヨミにはアキツの思惑がもう一つ理解しかねたが、イワレヒコがこの戦を左右する力を持っているのは否めない事実である。

「わかりました。さすれば、どうあってもイワレヒコ様と会わねばなりません」

「はい。でも気に病む必要はないようです」

アキツの謎めいた言葉にツクヨミは辺りの気配を探った。

「これは……？」

言霊師は、自分の言葉を武器にできるだけでなく、他者の言葉を遠く離れていても捉える力がある。もちろん、面識のない者の言葉は捉える事はできないのであるが。

「イワレヒコ様ですね。兵を率いて、こちらに向かわれている様子です」

「さすがですね、ツクヨミ殿。私はイワレヒコ殿の気は感じられませんが、そこまではわかりませぬ」

アキツは立ち止まった。ツクヨミも歩を止めた。

「馬ですね。かなりの軍勢のようだ。しかし、ヒノモトを攻むるおつもりではない」

「ええ」

アキツは、イワレヒコが発するオオヤシマを覆い尽くしそうな悪意を感じていた。

「イワレヒコ殿は、貴方を探しているようですね」

「ええ。私を殺すと仰っています。あの方は、イスズ様と私の事をお疑いなのです」

「まあ」

アキツは、その事に関してはイワレヒコを責められないと思った。ツクヨミには全くその気はないようだが、イスズは明らかにツクヨミを男として見ている節があったのだ。

「だからと申して、イワレヒコ殿が貴方を殺めて良いということはありませぬ」

「はい。そして私は、今ここで命を落とす訳には参りませぬ」
ツクヨミはアキツを見て、力強く言った。

一方、ホアカリの嫡男であるウマシは、イワレヒコの軍勢がアキツとツクヨミに近づいていると知り、色めき立っていた。

「イワレヒコめ、アキツ様を襲うつもりか。そのような事、断じてさせぬ！」

ウマシは騎乗した。そして、

「逆賊イワレヒコを屠^{ほふ}るのだ！ 勝利は我らにあり！」

と叫んだ。しかし、周囲の兵は、ウマシの実力をよく知っている。イワレヒコが相手では、負け戦^{いっさ}が見えているのだ。

「王子、ご冷静になって下さい。相手は一騎当千のイワレヒコ殿です。ここはご自重を！」

参謀役の老兵がウマシを諫めた。ウマシは老兵を馬上から睨みつけ、

「うぬはこのウマシが、イワレヒコ如きに劣ると言うか!？」

「いえ、決してそのような事は……。イワレヒコ殿は怪力無双です。馬ごと斬られた兵が何人もおります故、策を立てねば危ういという事です」

老兵はウマシの怒声に怯む事なく言葉を続けた。

「おのれエエッ！」

ウマシはやり場のない怒りを込めて叫んだ。

（私は兵に見くびられているのか!？）

ウマシのそのような考え方が、兵に疎まれる理由だという事を彼は気づかない。

イワレヒコの軍勢は、確実にアキツ達に近づいていた。

「よいか、ツクヨミだけだ。間違ってもアキツには手を出すなよ。

アキツを殺めれば、民の心は離れ、戦に敗れる」

「はは！」

イワレヒコはニヤリとして、

「姉上への手土産は、ツクヨミの首だ」

と呟いた。

「アキツ様はアマノヤス川までおいでです」

せっこう
斥候が報告した。

「よし。川を渡るぞ。物の怪の血で、ヤマトの土を汚したくない」

イワレヒコの命に兵は驚いた。

「し、しかし、川の間こうはヒノモトです。軍勢もおります」

「腑抜けのウマシの軍なぞ、気にする事はない。動きはせぬ」

イワレヒコは、ウマシが動こうとしても、周囲がそれを止めに入る事を見抜いていた。

アキツとツクヨミは、アマノヤス川が見えるところまで来ていた。

「イワレヒコ殿の軍勢が、川を渡り始めましたね」

アキツが言った。ツクヨミは頷いて、

「はい。ヒノモト側の軍勢はホアカリ様のご嫡男のウマシ様の軍です。イワレヒコ様は、ウマシ様を軽んじておられます。動かぬとお思いなのでしょう」

「そうですか」

アキツはウマシの容姿を思い出していた。一度だけ、ワの国の宮殿で見かけた事がある。どう見ても勇猛果敢とは言えない、ひ弱そうな男だった。

「イワレヒコ様は、私の首をイスズ様への土産にするおつもりですよです」

ツクヨミは苦笑いをして言った。アキツはキツとして進撃するイワレヒコ軍を見て、

「そのような事、決してさせませぬ！」

と声を荒げた。ツクヨミはその言葉に感激していた。

いわがみたけひこ
磐神武彦は、放課後、あまり行かなかった図書室で調べ物をしていた。

「ワの国、ワの国……」

彼は「ワの国」が昔の日本だとその時初めて知った。

「そうだったのか……。じゃあ、あの人は、昔の人なのかな？」

どんな女の人なのだろう？ そんな事を考えていると、

「あ、こんなところにいた！」

みやこざかあき
と都坂亜希がやって来た。

「あ、委員長。どうしたの？」

委員長という呼び方に一瞬ムツとした亜希だったが、

「補習サボって何してるのよ、武君？」

「あ、そうだった！」

武彦は慌てて本を書棚に戻し、鞆を掴むと、

「ありがとう、教えてくれて！」

と走り去った。亜希は、

「全く、何なのよ、あのチャランポランな性格……」

でもそんな武彦が好きなのは事実だ。

「私って、変わってるのかな？」

自分に苦笑する亜希だった。

そしてもう一人の「変わってる」人である磐神美鈴^{いわがみ みすず}は、別の病院をネット喫茶のパソコンで検索していた。

「同じ夢を見る……」

検索を開始する。しかし、最初にヒットしたのは、先日「ヤブ医者」呼ばわりした大学病院だ。

「ここしかないの？」

美鈴はぼやきながらもその下の病院のサイトを開いてみる。

「心療内科は、この前の病院が一番有名みたいだなあ……」

彼女はブラウザを閉じ、電源を落とした。

「もう、あのバカのせいで、どうして私がこんなに気を揉まないと
ならないのよ！」

しかし、誰かに頼まれた訳ではない。

「武彦……」

それでも心配なのは変わらない。美鈴は携帯の待ち受けにしている幼い頃の二人の画像を見て呟いた。

アキツとツクヨミは、イワレヒコの軍に囲まれていた。

「これはこれは、アキツ様。馬上よりの挨拶、お許し下さい」

イワレヒコは勝ち誇った顔で言った。アキツはイワレヒコを見上げて、

「どこまでも礼儀を知らない方ですね、イワレヒコ殿。馬を降りなさい」

「はい」

イワレヒコは苦笑いをして馬から降りた。そしてツクヨミを睨み、

「私は貴女には用はございませぬ。この物の怪に用があるのです」

「物の怪とは、無礼でありましょう！」

アキツの言葉はイワレヒコに届いていない。

「言葉を操り、人の命をも奪える者が、物の怪でなくて何でありましょうか、アキツ様。ささ、お離れ下さい。私がそやつを退治致します故」

「……」

アキツは救いを求めるようにツクヨミを見た。するとツクヨミは、「わかり申した。ならばイワレヒコ様、一騎打ちを致しましょう」ツクヨミの言葉に、一瞬呆然としたイワレヒコだったが、やがて大笑いをして、

「何を言い出すのだ、ツクヨミ？ うぬ如きが、このイワレヒコと一騎打ちだと？ 戯言ざれごとを申すな！」

「私との一騎打ちが怖いのですか、イワレヒコ様？」

ツクヨミの挑発にアキツは驚いていた。

（何を考えているのです、ツクヨミ殿？）

「戯たわけた事を申すな！ 何故このイワレヒコが、うぬを恐れる事がある！？ 承知、受けて立つ！」

イワレヒコは剣を抜いた。ツクヨミは、

「私は剣を持っておりませぬ。お借りしたいのですが？」

イワレヒコは、アキツが秘剣アメノムラクモを持っている事に気づいていたが、

（王族の証であるアメノムラクモは使えぬか。どこまでもつまらぬ男よ）

と腹の中でツクヨミを笑った。

「誰か、剣を！」

イワレヒコは兵が差し出した剣をツクヨミの方へ投げた。

「ありがとうございます」

ツクヨミはその剣を拾おうと前に出た。

「ツクヨミ殿！」

アキツが叫ぶ。ツクヨミ目掛けて、イワレヒコが突進していたのだ。

「死ぬるがいい、ツクヨミ！」

イワレヒコの剣が、ツクヨミに振り下ろされた。

「く！」

アキツは思わず目を伏せた。

「ぬうう！」

イワレヒコは齒軋りしていた。不意を突いたつもりが、ツクヨミに剣をかわされてしまったのだ。

「卑怯でございますよ、イワレヒコ様」

ツクヨミの構えた剣は、イワレヒコの喉元すれすれにあった。

「くっ……」

イワレヒコは身動きがとれない。

「我が言霊師一族は、あらゆる事に秀でた一族です。剣術もまた然り」

「おのれ……」

イワレヒコは形勢逆転をしたいのだが、それは万に一つもない状況だ。

「お眠り下さい」

ツクヨミの言霊がイワレヒコに放たれ、彼はドスンと倒れ伏した。

「ひいひい！」

イワレヒコ軍の兵は、イワレヒコがあっさり倒されたのを見て、我先にと逃げ出した。

「情けない兵共だ」

ツクヨミは剣を投げ捨て、まだ目を伏せたままにいるアキツに近づいた。

「アキツ様、終わりました」

「え？」

アキツは恐る恐る目を開けた。そしてイワレヒコが倒れているのを見た。

「こ、これは？」

「お眠りいただきました。私が声をかけぬ限り、イワレヒコ様は目覚めませぬ」

ツクヨミの力は、アキツが思っていた以上だった。

「ただ、この巨体を運ぶ手立てがございませんね」

「それならば、大叔母様の牛車を呼びましょう。あれならば、運ぶ事ができましょう」

アキツは微笑んで言った。

十の章 武彦の気持ち、アキツの誓い

オオヤシマは大きく動こうとしていた。

嫉妬に狂ったヤマトの国の剣士イワレヒコは、言霊師^{ことだまし}であるツクヨミを襲撃した。

しかし、ツクヨミは言霊師一族の能力で完全にイワレヒコを翻弄^{ひんりやう}し、言霊によって彼を眠らせた。

「牛車^{ぎっしゃ}が参ります」

アマノイワトにいるオオヒルメと交信していたアキツが告げた。

「やはり、ワの国の王族の皆様は、我ら一族より遥かに神に近いですね。アキツ様のお力、実に恐れ多いものです」

ツクヨミがイワレヒコを縄で縛り上げながら言った。

「私達は、王家の者同士で心と心で話ができるだけです。ツクヨミ殿は、そうではありませんでしょうか？」

アキツは微笑んで応じた。ツクヨミは苦笑いをして、

「はい。その時によっては、心を閉じねば気が変になってしまう事もあります。言葉は、遠き近きに関わりなく、聞こえます故」

「そうなのですか」

アキツもツクヨミの心中を察したのか、顔を曇らせた。

「イワレヒコ様の兵達が、この事をウガヤ様に伝える前に、何とかアマノイワトまで戻れば良いのですが」

ツクヨミはヤマトの国の方を見て呟いた。

「案ずる事はありません。あの兵共の言葉を、ウガヤ殿が信ずると思えませぬ。イワレヒコ殿がツクヨミ殿に負けるなど、思いもしないでしょうから」

「そうですね。兵共の作り話と思い、彼等に罰を与えるかも知れませぬ」

ツクヨミは笑って言った。アキツもツクヨミが笑ってくれたので、

ホッとしたようだ。

「少しでも早く、異界の方をこちらに呼び寄せたい。そればかりを考えておりましたが、異界の方にもその方の暮らしがあります。それを思うと、私達の為そうとしている事は、あまりにも……」

アキツはふと気になっている事を口にした。するとツクヨミは、
「それならば私に良い案があります。お任せ下さい、アキツ様」
「そうなのですか。それは心強い」

アキツはニツコリして言った。

ウガヤは、謁見の間で、イワレヒコに付き従った兵達が揃いも揃っておめおめと逃げ帰って来た事に激怒していた。

「一体何が起こったのだ？ イワレヒコほどの剣の使い手が、ツクヨミ如きにしてやられるとは考えられぬ」

ウガヤは椅子から立ち上がり、怒鳴り散らした。

「陛下」

そばに控えていたヤマトの国の將軍であるタジカラが声をかけた。彼は巨漢で、まさに一騎当千の強者であるが、イワレヒコとは違い、殺生を好まぬ温厚な男だ。

「言霊師は秘術を使います。イワレヒコ様は、ツクヨミの術に嵌められたのではないでしょうか？」

「なるほど。イワレヒコは確かに強いが、考えなしに突っ込むところが悪しきところ。それはあり得るな」

ウガヤはすっかり怯えている兵達を見渡した。

「うぬらは兵舎に戻り、出陣の支度をせよ。再び、ツクヨミを攻めるのだ」

「はっ！」

兵達は転がるようにその場から走り去った。

「うぬが隊を率いよ、タジカラ」

「はっ！」

タジカラは深々と一礼し、退室した。

「陛下」

ウガヤの妃であるタマヨリが言った。

「何だ？」

ウガヤはこの何もできない妃を疎んじている。タマヨリにもそれはわかっていた。ウガヤの心は、アキツに向けられている。彼女はそう考えていた。

元より、この戦はナガスネが唆^{そそのか}してホアカリに始めさせたものだが、それに乗った形のウガヤにも、野心がある。タマヨリを追放し、アキツを新たな妃として迎える。そんな話を人伝^{ひとつて}に聞いたのだ。根も葉もない噂である。ウガヤには野望しかない。アキツの事も人心掌握のために必要と思っている程度だ。決して妃になど考えた事はない。

「アキツ様には、手荒な真似はなさいませぬように」

「わかっておる。ツクヨミを弑^{しい}するためだ。アキツ様には何もせぬ」
ウガヤは、つまらぬ事に口を挟むタマヨリが鬱陶^{うとう}しかった。

他方、ヒノモトの国にも、イワレヒコがツクヨミに倒されたという情報が入っていた。アキツの力に腰が抜けていたナガスネは、更に驚愕した。

「イワレヒコがツクヨミにだと!？」

もはや人ではない。ナガスネは改めて言霊師という一族を恐怖した。

「ナガスネよ、考え直せ。アキツ様とツクヨミは、我らとは違うのだ。敵う相手ではない」

ホアカリが、ナガスネの動揺を見かねて言った。

「しかし、イワレヒコは、気が緩んでいたのやも知れませぬ。こちらが気を引き締めておれば、ツクヨミに負ける事はありません、陛下」

本当は、膝の震えが止まらないほど怖じ気づいているのに、ナガスネは尚も強がりと言った。

「兄上、お控えなさいませ。陛下のお言葉ですぞ」

王妃トミヤが口を挟む。忌ま忌ましいと思うが、妹の言葉の方が正当である。ナガスネは、

「失礼致します」

と言うと、玉座の間を出て行った。

「愚かな兄で申し訳ありません、陛下」

トミヤは悲しみに満ちた目でホアカリを見た。

「お前が悲しい顔をするな、トミヤよ。私には其方そなたのその顔が一番辛い」

「はい」

トミヤはホアカリの言葉に涙を拭って頷いた。

「それよりも、ウマシが気になる。彼奴あやつは、アキツ様に心惹かれていると聞く。まさかとは思うが、ツクヨミを追うかも知れぬのだ。

そちらの方が気になる」

「はい。あの子は、己おのれの力をわかっておりませぬ故、誠に気がかりにございます」

トミヤも同意した。

いわがみたけひこ
磐神武彦は、補習を終え、校舎を出た。

「あっ……」

また声が聞こえた。

『たけひこ様、私達に力を貸して下さい。オオヤシマをお救い下さい』

「また聞こえた……」

武彦は立ち止まった。

（貴方は、日本人なのですか？　ワの国って、昔の日本なのではない？）

そんな事を訊かれても、昔の人に「昔の国」という言い方は通じない。そして何より、アキツ達がいるのは、昔の日本ではない。全

くの別世界である。

『貴方がお眠りになった時、お会いしましょう。その時に全てお話し致します』

声の主であるアキツが答えた。

「はあ……」

武彦が溜息を吐いた時、

「武君！」

みやじまかあきと都坂亜希が、校門の前から彼を呼んだ。

「あ、委員長」

武彦は我に返って亜希を見た。

「そう言えば、あの声、委員長の声に似ているかな？」

「どうしたのよ、独り言を言って。また変な夢を見ているの？」

亜希が近づいて来て尋ねる。武彦は苦笑いをして、

「いや、夢は見ないんだけど、声が聞こえるんだ」

その方が危ないんじゃないの、と亜希は思った。

「でさ、その声が、何となくなんだけど、委員長の声に似ている気がする……」

武彦の思わぬ言葉に、亜希は何故か真っ赤になった。

「な、何よ、変なこと言わないでよ！」

「えっ？」

武彦の方は、亜希の動揺が理解できない。

「いつも、委員長に怒られてるから、委員長の声に聞こえちゃうのかな？」

「し、失礼ね！ 私は武君の事、怒ってばかりいないわよ！」

亜希はプイッと背を向け、去ってしまった。

「ああ」

またやってしまったと思う武彦だった。

そしてその夜。

武彦はあの女性の声が言っていた事を思い出した。

「眠った時に会いましょうって、ここへ来るのかな？」

武彦は、その人が来た時、姉や母が部屋に入って来たら何と言え
ばいいか考えた。

「困るよなア。何て言い訳すればいいんだろう？」

心配しなくてもそんな事は起こらないから、とアキツが知れば教
えていただろう。

「その時はその時か」

あまり深く考えないのが、武彦の短所であり、長所でもある。

「寝よう」

彼は布団に入り、目を瞑った。そして、しばらくして眠りに落ち
た。

そう、眠ったはずだった。しかし、武彦は、何故か起きていた。

「どこだ、ここ？」

周囲を見回すと、霧がかかっていて、ほとんど視界ゼロである。

「異界の方、お呼び立てして申し訳ありませぬ」

例の女性の声だ。

「あ、いつもの方ですか？」

武彦はビックリしてキョロキョロした。

「はい。私の名は、アキツ。ワの国の者です」

その声と共に、霧の向こうから女性が現れた。その姿は、武彦が
図書室で調べた古代日本の女性と同じだった。服装も髪型も、武彦
が「山田国」だと思っていた「邪馬台国」^{やまたいこく}の想像図に出て来た人物
と同じだったのだ。しかも顔は、

「あれ、委員長？」

と訊いてしまうくらい、亜希にそっくり、いや、亜希そのものだっ
た。

「私はアキツです。『いいんちよう』という名ではありませぬ」

「名前も似てる。ホントに委員長じゃないの？」

「はい。私はワの国の王家の者です」

「OK？」

武彦はそんな天然ボケを連発していた。

「これから、私の住むオオヤシマにお出でいただきます」

アキツの言葉に、武彦はギョツとした。

「あ、でも、僕、学校行かないとだし、勝手に出かけたりしたら、姉ちゃんと母さんに怒られちゃうし……」

「それは案ずる事はございませぬ」

「えっ、そうなの？」

「はい。私を信じて下さい、たけひこ様」

アキツは亜希にそっくりだが、亜希と違って怖くないので、そんなアキツに「たけひこ様」などと呼ばれて、武彦は照れてしまった。

「では、参りましょう」

「は、はい」

遂に武彦はオオヤシマに行く事になる。本当の戦いが始まろうとしていた。

十一の章 アキツの導き、武彦の戸惑い

磐神武彦いわがみたけひこは、ワの国のアキツに伴われ、霧の中を進んでいた。

「あの……」

武彦は、どうしてもアキツが同級生の都坂亜希みやこざかあきに思えてしまい、緊張しながら声をかけた。

「はい、如何なさいましたか、たけひこ様？」

アキツは笑顔で武彦を見た。武彦はそんなアキツの顔を恥ずかしくて直視できず、

「随分歩きましたけど、まだ着かないんですか？」

「もうすぐにごさいます。あちらに扉が見えましょう」

アキツはそう言いながら、霧の向こうに見える、光り輝く扉を指差した。

「ああ、ホントだ。もうすぐなんですネ」

「はい、たけひこ様」

「たけひこ様」と呼ばれる度にお尻がムズムズするなあ、と武彦は思った。彼自身、亜希の事が好きなのだが、自覚していないのだ。普段は亜希の「怖さ」が先立ち、愛とか恋とかを考える余裕がないのである。そのため、武彦は、アキツに感じる思いがどういいうものなのか、理解しかねていた。

「さあ、こちらへ」

アキツが先に立ち、扉を開いた。するとその向こうから、眩いばかりの光が溢れ出し、武彦は思わず目を閉じてしまった。

その頃、ヤマトの国の將軍タジカラ率いる騎兵隊は、アマノヤス川を目指して進軍していた。

「お館様やかたさま、この進軍はあまりにも危うき事が起こる気配がします」

將軍の乗る馬車の中で、タジカラの妻であるウズメが言った。巨漢のタジカラには似合わぬ小柄な美女である。彼女は舞踏師ぶとうしと呼ば

れる一族の出身で、八百万の神を召喚し、戦う特殊能力の持ち主である。

「何故なにゆえそう思うか、ウズメ？」

タジカラはわかっていながらそう訊いた。ウズメは窓から外を見て、

「相手はツクヨミ殿です。国王陛下も、ツクヨミ殿の恐ろしさをご存知のはず。だからこそ、あの方を縛らず、命じず、解き放っておられたのです」

「それは私もわかっておる。国王陛下は、イワレヒコ様をお助けするのは、私の他にはいないとお思いなのだ。他の者がお救いしては、イワレヒコ様の沽券こけんに関わる」

「お館様は、知っていて、火中の栗を拾われると？」

ウズメは目を見開いて尋ねる。タジカラはニヤリとして、

「私はイワレヒコ様を好かぬ。命を命と思わぬご気性、どうにも許せぬのだ」

「まさか……」

ウズメはますます驚いて夫を見た。タジカラは妻を見下ろし、

「案ずるな。何もイワレヒコ様を亡き者にしようと考えておる訳ではない。只、貸しを作っておきたいだけだ」

「貸し？」

ウズメは訝しそうな顔で鸚鵡返しに尋ねた。

「そうだ。イワレヒコ様は、我が策を悉く撥ね付けられ、その上手柄を立てられている。私の立つ瀬がない」

タジカラは、イワレヒコの強さを認めてはいるが、その浅はかな戦い方は嫌いなのだ。

「ここでお助けすれば、この後のち私もやり易いというものだ」

「はい……」

ウズメは、男同士の駆け引きはよくわからぬ、と思った。

「はっ！」

武彦はバツと跳ね起きた。

「あれ？」

しかし、そこは自分の部屋ではない。どうやら、洞窟の中のような。明かりは蝋燭のようなものだけで、蛍光灯や電球の光はない。

「気づかれましたね」

アキツの声がした。

「えっ？」

武彦は声がした方を見た。アキツがいた。でも、やけに下に見える。最初に会った時は、自分の身長と変わらなかったはずなのに。

「まずはご自分のお姿をご覧なさいませ、たけひこ様」

「は、はい」

武彦は立ち上がった。

「あれれ？」

いつもより、地面が遠くに見える。しかも、足下を見た時に気づいたのだが、着ている服が変わっている。裸足だったのに、変わった形の靴も履いている。

（さっきまで、スウェットを着ていたはずなのに……。何だ、この服は？）

「さあ、こちらにございます」

アキツが武彦の手を取って案内してくれた。その手は、亜希の手の感触に似ている気がした。

「あっ！」

目の前にある姿見に写る自分と思われる男の姿を見て、武彦はギョツとした。それは、ヤマトの国の剣士イワレヒコの姿だったのだ。勿論、武彦にはその正体はわかっていない。

「ぼ、僕じゃない！ ど、どういう事なんですか？」

武彦はアキツに尋ねた。アキツは真剣な表情で、

「その事はそちらの部屋でお話し致します。ご一緒に」

「はい……」

やっぱり、委員長達のドッキリなんじゃないか、と武彦は思い始

めていた。

一方、ナガスネは自分の屋敷で怒りを露にして物に当たり散らしていた。

「忌ま忌ましい！」

彼は壺を投げつけ、食器を粉々にした。

「陛下はお人が良過ぎる。それに加えて、我が妹の……」

トミヤは愛する妹であるが、時々出しゃばり過ぎるのが気に入らない。

「申し上げます」

そこへ斥候せっこうがやって来た。

「何用だ？」

ナガスネは斥候を睨みつけた。しかし彼はナガスネの事をよく知っているので、全く気にせずに、

「ヤマトの將軍タジカラ殿が、兵を率いて出立しました」

「何、タジカラが？」

「恐らく、イワレヒコ様をお救いに行くとされます」

斥候は跪いて続けた。ナガスネは顎に手を当てて思案し、

「その事は陛下にお伝えしたか？」

「いえ、これからでございます」

ナガスネはその答えを聞くとニヤリとし、

「わかった。陛下には伝えなくて良い。ご苦勞であった」

「はは」

斥候は退室した。

「タジカラか。となると、今ヤマトにいるは、腑抜けのイツセと、益体もない輩のみだな」

ナガスネの顔が狡猾さを増した。

武彦は、オオヒルメとツクヨミに紹介され、普段はオオヒルメが座る上座に座らされ、アキツから全ての経緯を説明された。

「はあ」

アキツの話は余りに途方もなく、また「ドッキリ説」が頭に浮かんで来る武彦である。

「このオオヤシマをお救い下さい、たけひこ様」

アキツは地面に正座し、武彦に頭を下げた。その隣にいるオオヒルメは、アキツほどではないが、頭を下げている。先程聞いた話では、先代の女王という事だ。そんな偉い人までが、自分に頭を下げている。武彦は混乱し始めていた。

「まだいろいろとおわかり頂けていないご様子ですね。お急ぎになる事はございませぬ。ごゆるりとお考え下さい」

やや後ろに跪いているツクヨミが言った。

「は、はい」

武彦はその言葉にホツとし、笑顔を見せた。

「僕は何をすればいいんですか？」

武彦は少しだけ気持ちが落ち着いたので、思い切って訊いてみた。「まずはお国にお戻りになり、ウガヤ王をご説得下さい。そして、その上でホアカリ王を説き伏せ、この度の戦の大本であるナガスネをお召し捕り下さい」

オオヒルメが答える。武彦は、オオヒルメが英語の先生に似ているような気がして怖い。

「うがやさんて、今の僕のこの身体の持ち主のいわれひこさんのお父さんなんですよね？」

「そうです」

アキツが笑顔で答える。武彦は照れ笑いをして、

「それで、何て言えればいいんですか？」

「兵を引き、戦をやめ、ヒノモトと共にオオヤシマを守護するように申し伝えて下さい」

アキツが続けて話した。オオヒルメは、武彦が自分の事を怖がっているのを感じたのか、アキツに任せるつもりだ。彼女はアキツに目配せした。

「そんな事を言ったら、怒られないですか？ いわれひこさんのお父さんなんでしょ？」

父親をほとんど知らない武彦には、「父と子」という関係がよくわからない。父親を説得するなど、無理のような気がした。

「それは何とも……。イワレヒコ殿は、ヤマトの国一番の剣士でございます。そのイワレヒコ殿が戦をやめるとお話されれば、兵達は従いましょう。但し、ウガヤ王は何とおっしゃるか、私にもわかりませぬ」

アキツは救いを求めるようにツクヨミを見た。ツクヨミはアキツに頷いてみせてから、

「たけひこ様、ご案じ召されますな。策はこのツクヨミにお任せ下さい。貴方様には一切害なきよう、取り計らいまする」

「そ、そうですか」

ツクヨミの言葉は、他の誰の言葉よりも安心感がある。それは武彦にもわかったが、何故そう感じてるのは正直言って不思議であった。

アキツとツクヨミは、イワレヒコが戦争に反対し、ヤマトの国の軍を引き上げさせれば、ヒノモトも引き上げざるを得なくなり、戦いは終わると考えていた。しかし、事はそう簡単にはすまない。すでにナガスネが、オオヤシマの端まで軍を進め、海伝いにヤマトに攻め込む準備を進めていたのだ。

そして何よりも、この戦の始まりを招いたのは、ナガスネではなかった。オオヤシマの地下深く存在する闇の国、「ヨモツ」。イザという女王が治める、邪悪に満ちた国である。そのイザが、ナガスネを傀儡くぐつとして、オオヤシマの全てを手に入れようと動いていたのだ。オオヒルメが危惧していた事は、すでに起こっていた。しかし、彼女達はそれにまだ気づいていない。

「では、お休み下さい、たけひこ様。また後程」

アキツがそう言うと、武彦は急に眠くなり、その場にコテンと倒れ伏してしまった。

「あれ？」

目を覚ますと、そこは見慣れた自分の部屋である。

「何だ？」

机の上の鏡を覗くと、いつもの自分の顔があった。

「夢？」

夢にしてはあまりにはっきりと覚えているし、アキツの手の感触がはっきり残っている。

「夢じゃないのか……」

武彦は手の平を見つめて呟いた。

「ドッキリのような気がするけど、そうじゃないよなあ」
それでも武彦は、学校で亜希に尋ねてみようと思った。

「こらアツ、武！ 早く起きろ！」

いつものように怖い姉が起こしに来た。

「おはよう、姉ちゃん」

笑顔で応じた武彦を見て、一瞬面食らった美鈴だったが、

「何だよ、起きてるなら、さっさと降りて来いよ。遅刻するぞ」
「うん」

美鈴は首を傾げてから部屋を出て行った。

「姉ちゃん、驚いてたな」

武彦はクスッと笑い、ベッドから出た。

十二の章 オモイの策、タジカラの怒り

アキツは、武彦の魂を元の世界に返し、ゴロンと横になったイワレヒコを見下ろしていた。

「それにしても、ツクヨミ殿の力、本当に驚きました」

ツクヨミはアキツの感嘆の声に少々赤面していたが、

「いえ、それ程のものでは……。イワレヒコ様とあのたけひこ様の相性が良かったのです。事がうまく運び、安堵しております」

オオヒルメも嬉しそうに、

「我が一族の禁呪を使わず、見事異界の者を呼び込めた事、感謝するぞ、ツクヨミ」

「ありがたきお言葉にございます、オオヒルメ様」

ツクヨミは跪いて言った。そして、

「これから、如何にしてたけひこ様の暮らしに障りなく、こちらにいらして頂けるか、考えよう存じます」

「どうするのですか？」

興味津々の目で、アキツが尋ねる。ツクヨミはアキツを見て、

「たけひこ様をお呼び立て致す時に、たけひこ様のお休みの時をお借りする事ができるよう、我が一族の秘術を組み合わせようと思っております」

「そうですか。あの方がお疲れになる事がなきよう、取り計らって下さい」

アキツは微笑んで言った。ツクヨミは頭を下げ、

「はい。あの方が、このオオヤシマをお救い下さりますのは、紛れもない事にございますので、仰せのままに致します」

「頼みましたよ、ツクヨミ殿」

アキツは自分でも抑え切れないくらい、ツクヨミに感謝していた。はしたない事はあるが、ツクヨミを抱きしめたいと思った程だ。しかし、それは立場上できない事なのは承知している。

「それよりも」

ツクヨミはアマノイワトの外の方に目を向け、

「何やら、悪しき心が近づいて来ております」

と言った。アキツとオオヒルメにも、それは感じられていたようだ。

「ヤマトの軍であろう。イワレヒコがここに連れて来られたのを知り、ここに攻め入るつもりやも知れぬ」

オオヒルメは眉を吊り上げて、強い口調で言った。アキツも頷いて、

「ヤマトばかりではありません。ナガスネの軍が、動いております。ナガスネは、手薄になったヤマトを攻むるようです」

「そのようです」

ツクヨミは立ち上がって歩き出した。それにアキツが続く。

「イワレヒコ様がここにいて、それを連れ戻しに出立されたのが、タジカラ様。今、ヤマトには、イツセ様しか守り手がいらっしやいませぬ。ナガスネ様なら、その隙を突く事を思いつかれるはず」

「ヤマトはそれを感じていない様子。危ういです」

アキツはイスズ達の事を心配していた。そして、ヤマトの王族で只一人信頼のおけるイツセの事も気がかりだった。

「イワレヒコ殿とタジカラの二人が不在の今、イツセ殿が出陣される事になります。勝ち負けはすでに決しております」

アキツは悲しそうな顔で言う。ツクヨミもアキツの心がよくわかるので、気が重い。

「ナガスネ殿は、オオヤシマの向こう側に回り込み、ヤマトを背後から突く心積もりのようです。我らが動くにしても、間に合いません」

「そうです」

アキツは無念そうに呟いた。

「そちらの事も気がかりですが、まずはタジカラ様の方を何とかせねばなりません」

ツクヨミはアキツに進言した。

（しかし、どうした事だ？ ヤマトのウガヤ王は、心穏やかだ。よもやそのような事が……）

ツクヨミは、ヤマトの国の軍師の事を思い出していた。

（オモイと申す軍師がいた。あの者、我が一族とは違うが、何やら面妖な気を持っていた）

オモイは、異国の地から来たと言っていた。確かに髪の色も違うし、目の色や鼻の形もオオヤシマの人間とは違っていた。

「どうしましたか、ツクヨミ殿？」

アキツが声をかける。ツクヨミはアキツを見て、

「ヤマトには、異国から来た軍師がおるのを思い出しました。普段は城の書室で書き物ばかりしておりますが、異国との戦^{いくさ}や、斥候^{せつこう}の差配^{さくはい}などを司^{つかさど}っておるようです」

「軍師ですか……。しかも、異国の」

アキツには、ウガヤの考えが理解できない。

「もし、その軍師が策に長けし者ならば、ナガスネが返り討ちに遭うかも知れませぬな」

アキツの言葉に、ツクヨミはゆっくりと頷き、

「はい。再び、たけひこ様をお呼びするのが宜しいかも知れませぬ」

「そうですね」

二人はオオヒルメの下に戻った。

その頃、ヤマトの国の玉座の間には、ウガヤとイツセ、そして噂の軍師であるオモイがいた。

「そうか。ナガスネがな」

ウガヤは、オモイが予告した通り、ナガスネが海を目指している事を知り、ニヤリとした。

「今やヒノモトは手薄にございます」

そう言って頭を下げたオモイは、確かにオオヤシマの人間とは違っていた。髪は金色、目は青、鼻はウガヤやイツセに比べて高い。

「ナガスネの愚か者が、裏をかいだつもりであろうが、己^{おのれ}がヒノモ

トを攻め易くしているとは、夢にも思うまい」

ウガヤは得意満面で言った。イツセはそんな父王の手放しの喜びを憂えて、

「しかし、もし仮にヒノモトが手薄としても、今から軍を率いて出立しても、ナガスネに気取られて引き返されれば、ナガスネの軍とウマシの軍に挟み撃ちにされよう」

とオモイに反論した。するとオモイは顔を上げてイツセを見、

「ご心配には及びませぬ。早馬をタジカラ様に向かわせてあります」「何と!？」

イツセは驚愕した。オモイは、二手三手先を読んでいたのだ。

「タジカラ様には、始めよりヒノモトにお向かい頂く手筈でございます」

「タジカラは、存じておるのか？」

イツセはムツとして尋ねた。オモイはフツと笑い、

「いえ。お伝えしておりますませぬ。タジカラ様は、そのような策を好まれませぬ故、ご存知でない方が、宜しいかと」

と再び頭を下げた。

「……」

イツセは、オモイの策謀に背筋が寒くなる思いがした。

武彦は、すっかりと目が覚めていたので、生まれて初めて、都坂みやこざか亜希あきを迎えに行った。

「た、武君？」

玄関を出て来た亜希は、珍しい生き物でも見るかのように、武彦をマジマジと見た。

「おはよう、委員長」

「お、おはよう」

委員長と呼ばれた事にムツとするのを忘れるほど、亜希はビツクリしていた。

「行こうか」

「う、うん」

亜希は嬉しかった。ようやく武彦が一人で起きられるようになったと思ったのだ。まるで幼稚園児のような扱いだ。

「ね、委員長」

「何？」

あまりにご機嫌なので、「委員長」発言は気にならない。

「夕べさ、ウチに来てないよね？」

「え？」

また訳のわからない事を言い出した。亜希はがっかりした。

「何の事よ？」

途端にいつもの亜希に戻る。武彦は危険を察知したのか、

「あ、いいんだ。何でもない」

と言いつつ、前を向いた。

「何でもないじゃないわよ。気になるじゃない？ 言いなさいよ、最後まで！」

「う、うん……」

最後まで話した方が怒られそうだから、話すのをやめたのになあ、と思う武彦だった。

ツクヨミとアキツは、タジカラ軍が引き返して行くのを見て、啞然としていた。

「どういう事でしょう？」

アキツが呟く。ツクヨミも、

「わかりませぬ。何があったのか……」

と言うだけだった。

その当のタジカラは、憤激していた。

「陛下のご命令であるから従いもするが、誠に気に食わぬ」

タジカラは妻のウズメに怒鳴り散らしていた。

「イワレヒコ様をお救いするは後とし、ヒノモトを攻めよとは、陛下はどうなさったのでしょうか？」

ウズメは、タジカラの大声には慣れているので、何も言わずに疑問を返した。

「書状には、ナガスネがヒノモトを空けており、手薄だとの事だ。しかし……」

タジカラはこの行軍変更は、最初から仕組まれていたと見抜いていた。

「オモイが何か策を弄したのであろう。忌ま忌ましい異国者めが」

「お館様^{やかた}」

ウズメは、人の悪口を言う夫が嫌いである。タジカラは、

「私は、道化にされた。このままではすまさぬ」

と呟いた。

十三の章 イザの策略、武彦の力

都坂^{みやこざか}亜希は、激怒していた。

「どうして私が武君の家に夜忍び込まなきゃいけないのよ!？」

「いや、だからさ、その……」

だから話したくなかったのに、と泣きそうな顔で思う武彦だった。
「酷いわ。私がまるでストーカーみたいな事言って……」

怒っていたかと思うと、今度は泣いている。忙しいな、委員長は、と呑気な事を思う武彦。

「もう、知らない!」

陸上部のエースプリンターは、そう捨て台詞を吐くと、鈍足の武彦を置き去りにして、校庭を走って行ってしまった。

「委員長……」

置いてきぼりの武彦は、呆然としていた。

一方、オオヤシマでは、突然の進路変更をしたタジカラ軍が、猛烈な勢いでアマノヤス川を越え、国境^{くにぎわ}を侵犯して来た事を知り、ホアカリの嫡男であるウマシの軍は慌てふためいていた。

「斥候^{せっぽう}の話では、タジカラはアマノイワトに向かったはずではないか!」

ウマシは、馬に跨がりながら、老参謀に怒鳴った。

「そのはずでした。何が起こったのか、全くわかりませぬ」

「役に立たない連中だ!」

ウマシにそのような事を言われるのは、参謀にはとても心外だった。貴方こそ、ヒノモトにとって役に立たぬ存在です、と言いたいくらいだった。

「タジカラ軍は、我が方の数倍の兵力です。戦う事はできません。退却のご命令を」

「や、やむを得ぬな……」

イワレヒコに対しては、個人的な感情で戦いを挑もうとしたウマシであったが、タジカラには何も怨みがないため、無茶な戦いはするつもりがないらしい。

「全兵、退くのだ。城へ向かう」

ウマシの命令の下、軍は雪崩を打ったように退却を始めた。

タジカラは、ウマシの軍が全く戦う素振りも見せずに逃げ出すのを知り、

「何とも情けない嫡男だ。親が親なら、子も子という事か」と呟いた。

「どちらにしても、無駄な戦^{いくさ}をせずにすんで宜しゅうございました」
ウズメはホツとして言った。気が立っているタジカラと戦えば、敵軍は恐らく壊滅したのであろうから。

「今はほんの一時^{いつとき}とて惜しい。ナガスネに戻られる前に、ヒノモトを叩く」

タジカラはすでに戦意が高揚しており、敵は全て蹴散らすつもりでいた。

「否^{いな}、例えナガスネが戻って来ようと、まとめて退治^{たいち}してくれる」
ウズメは、夫の単純さに溜息を吐いた。

ナガスネの軍は、帆船の大群でオオヤシマの海岸伝いに移動中であった。当然、タジカラ軍の転進を知らない。

「海は穏やか。まさしく天は我らに味方しているぞ」

ナガスネは高笑いをし、自分達の勝利を確信していた。

「ナガスネ様、ヒノモトの勝利はもうすぐですな」

ナガスネに同行している魔剣の使い手であるスサノが言った。彼は元々はワの国の剣士であったが、その粗暴な振る舞いをオオヒルメに咎められ、追放されていた。それをナガスネが取り立て、自分の右腕にしたのである。ヤマトにタジカラあれば、ヒノモトにはス

サノあり、と並び称される程の剣士である。しかも、スサノの使う剣は、炎を纏う魔剣で、斬ったものの全てをその業火で焼き尽くすのだ。

「そうだ。我らの勝ち戦ぞ」

ナガスネは得意満面で言った。

「ナガスネ様、何やら水が騒がしくなっております」

スサノの脇に控えていた女が言った。彼女の名はクシナダ。スサノの奥方で、魔導士と呼ばれる術者である。水の術を得意とし、水による通信もできる。

「アマノヤス川を、ヤマトの軍が越えたようでございます」

「何？」

ナガスネはギョツとした。

「それはどういう事だ？」

「わかりませぬ。ですが、かなりの大軍です。数からして、タジカラ殿の軍ではないかと」

クシナダは跪いて言った。スサノが、

「もしや、我らの動きが気取られたのでは？」

「まさか……。そんなはずはない」

ナガスネはそう言いながらも、狼狽え始めていた。

「すぐに戻りましょう。今、ヒノモトは手薄にございます。タジカラ殿の兵が押し寄せれば、ひとたまりもありませぬ」

スサノも跪いて進言した。ナガスネは歯ぎしりして悔しがり、

「何という事だ！ 全軍、ヒノモトへ戻れ！」
と命令した。

「留守居役のウカシ宛てに狼煙をあげよ。城門を閉じ、我らが戻るまでタジカラを防げと！」

スサノは、そばにいた兵に言った。

ナガスネ軍がヒノモトに戻り始めた事は、斥候を通じてヤマトのウガヤにすでに伝わっていた。狼煙を使った通信術である。

「イツセよ、出陣の支度をしろ。ナガスネの軍を挟み撃ちにするのだ」

「はは」

イツセは父王の命令を受け、仕方なく玉座の間を出た。

「こんな事で良いのか？ 兄と弟は、このような定めで良いのか…？」

イツセはそう呟きながら、イワレヒコの事を思った。

（お前は今、どうしているのだ？）

ウガヤは得々として椅子に座り、

「流石だ、オモイ。うぬの読み、見事であった」

「ありがとうございます」

オモイは額ずいて答えた。二人のやりとりをウガヤの妃タマヨリは悲しそうに見ていた。

ウマシの軍は、ヒノモトの城に帰還していた。

「ウカシ、ウカシはおるか！？」

ウマシは、馬を下りるなり、ウカシを呼んだ。

「ここにおります」

ウカシがウマシの前に跪いて応えた。ウマシはウカシを見下ろし、
「何としても、ナガスネが戻るまで持ち堪えるのだ。父を守るのだ！」

「はは」

しかし、何故かウカシはニヤリとした。

（どちらの王も、滅びるが定め。哀れな事だ）

彼は内心そう思っていた。ウカシは実は闇の国「ヨモツ」に通じている男であった。

（このオオヤシマの主は、あるじイザ様をおいて他にない。ワの王家に連なりし者は、悉く滅びよ）

アキツとツクヨミは、アマノイワトで策謀と混乱の気を感じてい

た。

「何という事でしょう……。これは一体……」

あまりの乱れぶりに、アキツは啞然としてしまった。

「……」

黙って座っていたオオヒルメが立ち上がり、イワトの奥へと歩き出した。

「大叔母様？」

アキツが驚いて追いかけて、声をかけた。

「イザが動いておる」

オオヒルメは、振り返らずに言った。アキツとツクヨミは思わず顔を見合わせた。

「イザと言うと、ヨモツの女王のですか？」

ツクヨミが尋ねた。オオヒルメは歩を早めて、

「ヒラサカの封印が揺らいでおる。閉じ直さねば、恐ろしき事になる」

「……」

アキツは息を飲み、ツクヨミは拳を握り締めた。

武彦は、授業中、急な睡魔に襲われていた。

（何だ？ 早く起きたから、眠いのかな？）

彼はそう思ったのだが、本当はアキツが武彦を呼んでいるからなのだ。ツクヨミは、言霊師の力により、武彦が眠っている時のほんの一瞬を引き出し、オオヤシマに呼び込む術を編み出したのだ。

そうすれば、武彦に負担をかけずに呼び込む事ができるのである。（アキツさんの声が聞こえる……。委員長は今、先生に答えているところだから、やっぱりアキツさんは委員長じゃないんだ）

そんな呑気な事を思いながら、武彦は眠ってしまった。

「あれ？」

目を覚ますと、目の前にアキツとツクヨミがいた。

「たけひこ様、お呼び立てして申し訳ありませぬ」

アキツが悲しそうな顔で言った。武彦はその顔にドキツとして、

「ど、どうしたんですか？」

「また戦になりそうなのです。お力をお貸し下さい」

「えええ？」

力を貸してくれて言っても、僕には戦争なんてできないよ……。

武彦はそう言いたかったが、亜希にそっくりなアキツの悲痛そうな顔を見ると、とてもそんな事は言えなかった。

「今、タジカラと申す者が、ヒノモトを攻めんとして軍を進めております。それを止めて欲しいのです」

「止めるんですか？」

「はい」

武彦はツクヨミを見た。ツクヨミは頷いて、

「私にお任せ下さい、たけひこ様。策がございます」

「そ、そうですか……」

ツクヨミさんの言葉は本当に安心感がある、と武彦は思った。

十四の章 武彦の決意、ウガヤの焦り

オオヤシマの歴史は大きく動こうとしていた。

ヤマトの国の王子イツセは、父王ウガヤの命を受け、軍を率いて出立した。

「ここまで大戦を^{おおごくや}してしまつては、ヨモツが動かぬか気がかりだ」
イツセは不安を胸に城を出た。

「イツセ様はお優し過ぎます。やはり、陛下の^{いしろうぎし}お志を継がれるは、イワレヒコ様にございましょう」

ヤマトの国の軍師であるオモイは、イツセを見送るウガヤに囁いた。

「私もそう思っている。嫡男は長子になるべきものなれど、イツセにはその意気がなし。あの者には、オオヤシマを統べる器がない」

ウガヤは隣にいる妃のタマヨリに聞こえないように小声で言った。

「はい」

オモイは頭を下げ、ウガヤに同意した。

その二人が期待を寄せるイワレヒコは、今は武彦がその身体の主^{ぬし}となっている。

「タジカラ様は、イワレヒコ様を嫌われております。ですが、イワレヒコ様の強さはお認めです。そのイワレヒコ様が戦をやめよと仰れば、必ず従います」

ツクヨミの言葉で、武彦はほんの少し勇気が出た。

「このオオヤシマがこれ以上悪しき心に満たされれば、ヨモツが蠢^{うごめ}きます」

アキツが言い添える。

「今は私の大叔母であるオオヒルメが封を閉じ直す術を施しております故、しばしは留められましょうが、今以上に悪しき心が溢れる

事あれば、それも破られます」

「そしたら、どうなっちゃうんですか？」

武彦はビクビクして尋ねた。

「ヨモツがオオヤシマに溢れ、この世は闇に閉ざされます。人は死に、死人が統べる国になりましょう」

「……」

武彦はホラー映画が苦手だ。そんな恐ろしい国になるのはまずいと思った。

「行きましょう、ツクヨミさん」

武彦は立ち上がった。ツクヨミは頷いて、

「はい、たけひこ様」

と答えた。アキツも頷き、

「私は大叔母様のお手伝いに参ります。ツクヨミ殿、たけひこ様をお願いします」

「はい、アキツ様」

ツクヨミは深々と頭を下げた。

「参りましょう、たけひこ様」

「はい」

二人はアマノイワトを出た。

「ツクヨミさんは、アキツさんが好きなんですか？」

武彦はいきなり核心を突く質問をした。ツクヨミはビクツとして、
「そのような恐れ多き事を仰せにならないで下さい、たけひこ様。」

私は、アキツ様をお守りしたいだけにございます」

「そうなんですか。僕、アキツさんが僕の好きな子に似ているので、
どうしても助けてあげたいんです。だから、ツクヨミさんもそういう
気持ちなのかなって思ったんです。ごめんなさい、変な事訊いて」
「いえ」

ツクヨミは、武彦の純真さに心打たれていた。

（この方なら、間違いなくオオヤシマをお救い下さる）

「では、目をお瞑り下さい。今より、我が秘術にてタジカラ様のと

ころまで参ります」

「は、はい」

武彦は素直に目を閉じた。ツクヨミは武彦の前に立つと、

「風よりも速く、岩よりも硬くなりぬ！」

その言葉と同時に、二人の身体は宙を舞い、タジカラ軍目指して飛んだ。

「うわっ！」

武彦は目が回りそうだった。

タジカラ軍は、ヒノモトの国の奥まで進軍していた。ホアカリの城が見えて来ている。

「このように事が運ぶは、悪しき兆しかも知れませぬ、お館様」

妻のウズメが言う。タジカラも、そもそも事の起こりが氣に入らぬだけに、ウズメの言葉が氣にかかった。

「お前の申す通りだ。合点が行かぬ。道理が通らぬ」

タジカラは、何かが後ろで采配している氣がして、どうにも不愉快であった。

「むっ？」

ウズメが何かを感じた。

「馬を止めい！」

彼女は御者に怒鳴った。御者は慌てて手綱を引き、馬を止まらせた。

「何事だ、ウズメ？」

タジカラは妻を問い詰めるように言った。ウズメはタジカラを見上げ、

「妙な氣が、我らに近づいております」

「妙な氣？」

「あちらにございます」

ウズメは馬車の窓から天を指差した。タジカラがそちらに目を向けると、光が近づいているのが見えた。

「何じゃ、あの光は？」

「おお、面妖な……」

タジカラは馬車を飛び出し、剣を抜いて身構えた。ウズメも舞踏師として構えを取った。

「あれは……。お館様、お控え下さいませ」

ウズメは光の神々しさに気づき、跪いた。タジカラも妻の言葉に慌てて跪いた。

「タジカラ、大儀である」

声が聞こえる。タジカラとウズメは、地上に降り立った光に目を凝らした。

「おお、イワレヒコ様……」

ウズメが先に気づき、平伏した。ひれふタジカラは不満そうに平伏す。

「タジカラ、オオヤシマを滅ぼすつもりか？」

イワレヒコの言葉に、タジカラは顔を上げて、

「滅相もございませぬ。そのような事、このタジカラ、思ふた事はありません」

「ならば何故、このような兵を率いて、ヒノモトを進むのか？」

イワレヒコはタジカラの後ろに控えている大軍を指差した。

「これは異な事を仰せですな、イワレヒコ様。オオヤシマを救うには、ヒノモトを滅ぼすより他なしと仰ったは、イワレヒコ様ですぞ」

タジカラは、イワレヒコが以前と違う事を言っているの、偽者ではないかと疑っていた。

「愚か者め。この戦は、ヨモツの罠ぞ。これ以上、オオヤシマを悪しき心で満たさば、この世は闇に包まれようぞ」

「何と！」

タジカラはウズメを見た。ウズメは、

「この方は紛れもなくイワレヒコ様にございます」

と答えた。

「ヨモツの罠とは、如何様な意味でございましょうか？」

ウズメが代わりに尋ねた。イワレヒコはウズメを見て、

「ヨモツは、オオヤシマを悪しき心で満たすを企む。ヒノモト攻めは、まさにその助けとなるのだ」

「ならば私共は、如何にすれば宜しいのでしょうか？」
ウズメが重ねて尋ねた。

「兵を退き、戦をやめる事ぞ。それが何よりの策ぞ」
「兵を退く？」

タジカラがピクンと動いた。

「イワレヒコ様のお言葉とは思えませぬ」

「お館様！」

もし、今話しているイワレヒコが、タジカラの知っているイワレヒコであったなら、彼は間違いなく斬り捨てられていたろう。

「私は変わったのだ。オオヤシマを救うは、戦にあらず。人の心よ」
「人の心、でございますか？」

タジカラは斬り捨てられると思い、剣に手をかけていたが、その手を放した。

「一体、何があったのだ？ イワレヒコ様であるが、イワレヒコ様ではない……」

ホアカリ達は、目前まで進軍して来たタジカラ軍が止まったのを知り、不審がっていた。

「如何なる事か？」

ホアカリは、嫡男ウマシに尋ねた。しかしウマシにも何故タジカラが進軍を停止させたのかわからない。

「只今斥候を向かわせております。しばしお待ちを」

「うむ」

ホアカリは不安そうな顔で妃トミヤを見た。トミヤも悲しそうな顔でホアカリを見つめていた。

「ナガスネはまだ戻らぬのか？」

ホアカリは留守居役のウカシを見た。ウカシは跪いて、
「まだにございます。しかし、もうすぐご到着になります」

「そうか……」

ナガスネが間に合わない場合は、自らがタジカラとの交渉に臨むつもりだったホアカリは、ホツとすると同時に疑問が次々に沸き上がるのを禁じ得なかった。

タジカラ軍が進撃を停止した事は、斥候を通じてヤマトの国にも伝えられていた。

「何が起こっておるのだ？」

ウガヤは苛ついて言った。斥候は跪いて、

「イワレヒコ様がいらしたご様子です」

「イワレヒコが？ 戯けた事^{たわ}を申すな。イワレヒコは、アマノイワトに連れ去られたままぞ」

ウガヤは斥候を怒鳴りつけた。

「しかし、あれは紛れもなくイワレヒコ様にございました」

ウガヤは判断がつかず、オモイを見た。オモイは、

「何かありましたな。恐らく、アキツ様かツクヨミが、イワレヒコ様を操っていると思われます」

「そのような事ができるのか？」

ウガヤは信じられないという顔で尋ねる。オモイは、

「はい。アキツ様やツクヨミには、できまする」

ウガヤはその答えに怒りを発した。

「おのれ、どこまでも我がヤマトを愚弄しおって！」

ウガヤは立ち上がり、

「イツセに早馬を！ アマノイワトを攻め、ツクヨミとアキツを殺してしまえと伝えよ！」

と命じた。

「なりませぬ、陛下。それはなりませぬ！」

隣で聞いていたタマヨリが慌てて言った。しかし、ウガヤは、

「口出し致すな、タマヨリ！ これは戦ぞ。先んずれば人を制すのだ」

と言い放ち、全く聞く耳を持たなかった。

オオヤシマの悪しき心は、まだ増えようとしていた。

十五の章 ナガスネの悲願、オモイの策略

ヤマトの国の長子であるイツセは、早馬で届けられた父王ウガヤの命令書を読んで驚愕していた。

「何という事を……。ツクヨミはいざ知らず、アキツ様を討てとは、父上はご乱心されたのか？」

イツセは計り知れない衝撃を受けた。

「城に戻る。父上と話さねばならぬ」

イツセは軍を率いて、ヤマトの国へと戻り始めた。

タジカラは、イワレヒコの身体が武彦に変わっている事を知らなため、イワレヒコが豹変したのを信じられないでいた。

「私を偽者と思うか、タジカラ？」

イワレヒコが尋ねた。タジカラは自分の心が見透かされたようで、ギクツとした。

「いえ、そのような事は思っておりませぬ。あまりに思いもよらぬお言葉故、驚いただけにございます」

タジカラは頭を下げて弁明した。

「ならば、軍を退くが良い。私も同行しよう」

「はは」

タジカラは救いを求めるようにウズメを見た。ウズメは只頷き、

「イワレヒコ様のお言葉通りに」

と言っているかのような目でタジカラを見た。タジカラは考えるのをやめ、立ち上がった。

「全軍、城に戻るぞ。支度致せ！」

タジカラの大声が遙か後方の兵にまで届いた。タジカラはイワレヒコを馬車に乗せ、自分達も乗り込むと、先陣となり、ヤマトへと戻り始めた。

『ツクヨミさん』

イワレヒコの中の武彦は、心の中でツクヨミに話しかけた。実は、ツクヨミが姿を消して、武彦の代わりにイワレヒコの声を真似て喋っていたのである。武彦は只口を動かしていたのだ。

『はい、たけひこ様』

『大丈夫なんですか、このまままで？』

『大丈夫にございますよ』

『そ、そうですか』

ツクヨミの力強い言葉に、武彦はホッとした。ツクヨミは完全に姿を消していたが、何故かウズメが自分を見ているような気がしてならない。

（彼女も舞踏師と言う特別な存在。もしかすると、私の気を感じているのかも知れぬ）

しかし、見えてはいないとツクヨミは安心していた。

「全軍、支度整ったな」

タジカラが窓の外に気を取られている時、

「ツクヨミ殿ですね」

とウズメが小声で話しかけて来た。

「私が見えるのですか？」

ツクヨミは驚いて小声で尋ね返した。ウズメはクスツと笑い、

「見えはしませぬ。ですが、貴方の気は感じます」

「そうですか。実は……」

ツクヨミは慌てて説明しようとしたが、

「ご心配には及びませぬ。貴方の志は良くわかっております故。また後程」

ウズメはそう言うと、タジカラと話を始めた。

（やはりな……。ウズメ様なら、気づくとは思ったが……）

ホアカリは、斥候せっこうからの報告で、タジカラ軍が引き上げて行く事を知った。

「退いてくれたは良き事なれど、如何なる事が起こっておるのか、

全くわからぬ」

ホアカリは尚も不安になっていた。

「ナガスネ様、ご到着にございます」

兵が告げた。

「陛下！」

ナガスネはスサノ、クシナダを伴い、玉座の間に入って来た。

「大儀であった、ナガスネ。タジカラは退いたぞ」

ホアカリがようやくホツとして言った。するとナガスネは、

「すぐに追い討ちをかけまする」

と出て行こうとした。

「待て、ナガスネ。追う必要はない。タジカラは戦上手ぞ。追い討ちはいかん」

ホアカリは強い口調で言った。ナガスネは仕方なく跪き、

「はは」

と従った。そして、

「うぬらは、出陣の支度をしておけ。折りを見てヤマトに向かう」と小声でスサノに言った。

「はい」

スサノとクシナダは、ホアカリとトミヤに深々と頭を下げ、退室した。

「ナガスネ」

ホアカリが声をかける。ナガスネは顔を上げて、

「はい、陛下」

ホアカリはニッコリとして、

「良い機会じゃ。ヤマトと和議を結ぶ事はできぬか？」

「何と！」

ナガスネはホアカリの出し抜けの提案に仰天した。

「何を仰せです、陛下。そのような下手話^{したて}は、ヤマトから申す事。こちらからではありませぬ」

ナガスネの顔が陰しくなった。ホアカリは思わずトミヤに救いを

求めた。トミヤは夫に頷き、

「兄上、そのようなお考え、お捨て下さい。このまま戦を続けては、民が苦しむばかりです。どうか陛下のお言葉に従い、和議をお進め下さい」

しかし、ナガスネは聞く耳持たなかった。

「如何に陛下のお言葉と言えども、それは聞けませぬ。陛下は長兄なのですぞ。弟君のウガヤ様の方から、そのような話が出て然るべきなのです」

「しかし、ナガスネ……」

ホアカリが異を唱えようとしたが、

「いいえ、私は和議など致しませぬ。何としてもヤマトを平伏させて、ホアカリ様をオオヤシマの王にするが、我が願いにございます」
ナガスネは涙を浮かべて力説した。ホアカリは困り果て、トミヤを見た。トミヤも兄の頑固さに啞然としていた。

（噂では、兄上はヨモツに魅入られていると言う……。それは真であつたか？）

イツセの軍はヤマトの城に帰還して、玉座の間に向かった。

「何故戻って来たのか、イツセ!？」

ウガヤは激怒してイツセを問い質した。イツセは跪いて、

「父上、アキツ様を討つなど、天に背くと同じ大罪にございます。お考え直し下さい」

と諫言した。ウガヤはその言葉にますます怒り、

「戯けた事を申すな! アキツなど、もはや何者でもない! 我が行く手を阻む者は、全て死ぬるのだ!」

この人はかつて自分が尊敬した父ではないとイツセは落胆した。それは妃であるタマヨリも同じであつた。

「これは申すまいと思つておりましたが、このままでは、ヨモツが蠢きますぞ。オオヤシマは今、悪しき気が覆い尽くしております。危うき事です」

イツセは殺されるのを覚悟で、ウガヤに言った。するとウガヤは、「この腑抜けが！」

と剣を振りかざし、イツセに斬りかかった。イツセはそれをかわし、ウガヤから剣を取り上げて、右手をねじ上げた。

「血迷われましたか、父上！ 心をお鎮め下さいませ！」

イツセは涙を浮かべて訴えた。

「放せ、イツセ！ 国王に対して無礼であろう！」

ウガヤの怒りは、尋常ではなかった。イツセはウガヤを押えつけながら、オモイを睨んだ。

「オモイ、うぬは父上に何事かしたのか？」

「滅相もございませぬ」

オモイは平伏して答えた。^{ひれふ}しかしイツセに見えぬところで、ニヤリとした。

（オオヤシマが揺れている……）

イツセは恐ろしい未来を感じていた。

「イワレヒコ様、お着きにございます」

兵が伝えた。イツセはギョツとした。

「イワレヒコが？ どういう事だ？」

彼は兵に尋ねた。兵は跪き、

「タジカラ様とご一緒にお戻りです」

とだけ答えた。

「如何なさいましたか、兄上？」

イワレヒコがタジカラとウズメを従えて玉座の間に入って来た。

イツセはイワレヒコに斬られると思ったが、いつもの猛々しさがないイワレヒコに、少しだけ違和感を持った。

「父上がアキツ様を弑するとおっしゃったので、お諫めしていたのだ」

イツセはウガヤの右手を放し、イワレヒコに説明した。イワレヒコはよろけたウガヤを椅子に座らせて、

「父上、それはなりません。アキツ様を弑すれば、オオヤシマはま

さにヨモツのものとなりますぞ」

イワレヒコのその言葉に、イツセもウガヤも、そしてタマヨリまでもが驚いた。

「オオヤシマを覆う悪しき心が、ヨモツを蠢かせております。私は、アマノイワトでそれをはっきりと感じました」

「……」

ウガヤはイワレヒコのあまりの変わりように声もない。イツセも同じだ。オモイは、イワレヒコの変化にすっかり驚愕していた。

「イワレヒコ、ようやく其方そなたもわかってくれましたね」

タマヨリが涙を流して言った。すると、

「えっ、か、母さん？」

とイワレヒコの中の武彦が、つい声に出して言ってしまった。

「は？」

ほんの一言だったので、他の者は聞き取れなかったようだったが、タマヨリとオモイにははっきりと聞こえてしまった。

『どうされたのです、たけひこ様？』

ツクヨミが語りかける。武彦は、

『ごめんなさい、ツクヨミさん。あの女の人が、僕の母親にそっくりだったの』

『そうなのですか』

ツクヨミも、その偶然に驚いたが、

『今後はお気をつけ下さい』

『はい、すみません』

アキツは亜希にそっくり。タマヨリは珠世にそっくり。武彦は動揺していた。

「……」

そんな武彦の動揺をオモイは見逃さなかった。

（イワレヒコ様が妙だ。一体どうしたのだ？）

彼はジッとイワレヒコを見ていた。

十六の章 イスズの思い、ナガスネの決意

ヤマトの国では、玉座の間で王族の会議が開かれていた。イワレヒコの提案で、オモイは席を外させられ、退室した。

「どういうつもりか、イワレヒコ？ オモイはヤマトの軍師なるぞ」
ウガヤは憤然として尋ねた。イワレヒコは跪いて、

「オモイは悪しき心を持っております。あの者には、話を聞かれとうありません」

「オモイは、其方そなたの勧めで軍師として仕えさせたのだぞ。何を血迷うておるのだ？」

ウガヤが困惑するのは当然だ。オモイを採用し、大戦おおいぐやの折には、必ず作戦参謀として戦線に連れて行っていたイワレヒコの言葉とは思えないのである。

「私は、あの者を見ていて、ようやくわかったのです。オモイは、オオヤシマに災いを招こうとしております」

イワレヒコのその言葉に、ウガヤはまた憤激した。

「イワレヒコ、貴様、やはりアキツかツクヨミに操られておるな！
？ そこへ直れ、成敗してくれる！」

ウガヤは椅子を立ち上がり、イワレヒコに詰め寄った。イツセが、
「父上！」

と止めに入ったが、ウガヤは収まらない。

「お前までが、あの女の色香に迷うたのか、イワレヒコ！」

「父上、言葉が過ぎますぞ！」

イワレヒコは立ち上がって怒鳴った。ウガヤはその背丈の違いに
ビクツとし、後退あとずさりした。

「何故わからぬのですか、父上？ ヤマトとヒノモトが争えば、ヨモツが喜ぶばかりです！ 今は手を携え、ヨモツに対するべきなのです」

イワレヒコの言葉は、ツクヨミの言葉なので、その説得力は絶大

であつた。

「父上、古より伝わる話です。ヨモツは、オオヤシマの悪しき心を好物とする」と

イツセもウガヤに詰め寄つた。ウガヤは、二人の息子に言い返され、憤懣やるかたなかつたが、

「……」

と何も言い返さずに椅子に座つた。

「しかし、イワレヒコ、ヒノモトはどうするのだ？　ナガスネは退く事を知らぬ男だぞ」

イツセが尋ねた。イワレヒコはイツセを見て、
「そちらも私が参ります。ナガスネはともかく、ホアカリ様はわかつて下さいましょう」

「ホアカリは腑抜け故、ナガスネの言いなりぞ」

ウガヤは吐き捨てるように呟いた。

「陛下、仮にも兄上様にそのような……」

タマヨリが口を挟んだ。ウガヤは苛立たしそうに彼女を見て、

「お前は口出し致すな！」

と怒鳴つた。タマヨリは悲しそうにイワレヒコとイツセを見た。

「父上、ホアカリ様は、確かにお優し過ぎますが、それでも王家の方です。ナガスネもそこまで逆らう事はありません。私にお任せ下さい」

イワレヒコの言葉は、あくまで下手であつたが、ウガヤはその氣迫を感じ、恐れおののいた。もちろん、ツクヨミが言霊でウガヤをそう思わせているのもあるのだが。

「わかつた。好きに致せ」

ウガヤは顔を背けて言つた。イワレヒコは再び跪き、

「ありがとうございます」

と頭を下げた。イツセはそんなイワレヒコを嬉しそうに見ていた。

（アキツ様に会つて、変わったのだな、イワレヒコ）

ウズメは、夫タジカラと共に城の自室に戻っていた。彼女は、いろいろと考えた挙句、夫には真相を教えておこうと結論を出し、知っている事全てを話した。

「何と……」

タジカラは、ウズメから聞いたのでなければ、決して信じなかっただろう。それ程、妻の話は驚愕するものであった。

「ツクヨミ殿は、このヤマトを救って下さいます。私はそう信じております、お館様^{やかた}」

ウズメは決死の覚悟だった。もしかすると、夫に切り捨てられると思ったのだ。

「わかった。お前がそう申すのなら、それが真^{まこと}なのであろう」

タジカラはそう言うと、自分の椅子にドスンと腰を下ろした。ウズメはホッとして顔を綻ばせた。

会議は終わった。イワレヒコは、出立前にイスズに挨拶しておきたいと言い、彼女の部屋へ赴いた。

「お帰りなさいませ」

怯えたようにイスズが頭を下げ、出迎えた。イワレヒコが入口の戸を閉じると、ツクヨミが姿を現した。

「え？」

武彦はびっくりして思わず声を出してしまった。顔を上げたイスズも、ツクヨミがいきなり現れたので、仰天していた。

「イスズ様、私の話をお聞き下さい」

「は、はい」

イスズはツクヨミから、全てを聞いた。その時、武彦は、イスズが姉美鈴に瓜二つなのに気づき、ギョツとしていた。

（どういう事？ 委員長に、母さんに、姉ちゃんに……）

かなり混乱している武彦だった。

「たけひこ様、よろしくお願い致します」

姉にそっくりな顔のイスズが、ニッコリして武彦に言う。武彦は

何かむず痒かった。

「は、はい」

そう答えてから、ツクヨミに小声で言う。

「この人、僕の姉にそっくりです」

「そうですか」

ツクヨミは、ますます、

（この方こそ、本来のイワレヒコ様なのかも知れぬ）
という思いを強めていた。

「何やら、信じられぬお話ですが、ヤマトとヒノモトが争いをやめてくれるのであれば、私はどんな事も信じましょう」

イスズはツクヨミと武彦を見て言った。そして、

「ツクヨミ殿、たけひこ様とその、お話があります」

「あ、はい。わかりました。私はウガヤ王の様子を見て参ります」

ツクヨミはそう言うのと、再び姿を消し、部屋を出て行った。

「……」

武彦は、姉そっくりのイスズと二人きりにされて、緊張していた。
悲しき条件反射である。

「たけひこ様、どうぞ、ご無事で」

「あ、はい」

イスズは立ち上がり、武彦に近づいた。

「今までこのような心持ちになった事がございません」

「え？」

イスズは武彦にスッと抱きついて来た。

「うわわ」

髪からいい香りがする。イスズは武彦を見上げ、

「私をお抱き下さい。貴方様のお子を生みとうございます」

「ええええ？」

武彦は仰天した。抱く？抱くってどういう意味？

（姉ちゃんそっくりのイスズさんにそんな事言われても……）
ツクヨミからの事前の説明で、イワレヒコとイスズは姉弟きょうだいであり、

許婚いいなずけでもあると聞いていた。しかし、イスズはイワレヒコを恐れていると。

（話が違うよ、ツクヨミさーん！）

武彦は涙が出そうなくらい困っていた。彼はイスズを傷つけたくないと思ったが、

「ごめんなさい、イスズさん。僕、好きな人がいるんです！」

とイスズを押し返した。イスズはニコツとして、

「わかっております。申し訳ありません、戯たわむれにございます」

「そ、そうなんですか……」

武彦はホッとして胸を撫で下ろした。

「お優しいんですね、たけひこ様は」

「はは」

やはり、姉の顔でそんな事を言われるのは、非常に落ち着かないと思う武彦だった。しかし、イスズの本心は、違っていた。

（イワレヒコ様がお変わりになった。この方となら、私は契りかわせる）

イスズは、イワレヒコ（武彦）に恋をしてしまったのだ。子供の頃は仲が良かった二人である。イスズが嫌いなのは、戦をするようになってからのイワレヒコなのだ。だから、今のイワレヒコは、イスズの好きなイワレヒコである。

その頃ナガスネは、密かに呼んだスサノとクシナダと三人で、会議を開いていた。

「このままにしておけば、ヒノモトはヤマトに飲み込まれる。それだけは避けたい。力を貸してくれ」

「はは」

スサノとクシナダは、長年仕えて来たナガスネに最後まで従う事を決めていた。例えば、負け戦になろうとも。

「私も入れて下され、ナガスネ様」

ヒノモトの城の留守居役であるウカシが現れた。スサノとクシナ

ダは驚いてナガスネを見た。

「うむ。もちろんじゃ」

ナガスネはニヤリとして頷いた。

十七の章 ナガスネのこだわり、オモイの野望

武彦はイスズの部屋を出た。

「お待ちしておりました、たけひこ様」

姿を消した状態のツクヨミが声をかけた。武彦はホッとして、

「ツクヨミさん、驚きましたよ。イスズさんがいきなり抱きついて来たんです」

「ほう」

ツクヨミも、イスズがそんな行動に出るとは思っていなかった。

「元々、イスズ様とイワレヒコ様は、仲がよろしゅうございましたから」

「そ、そうなんですか？」

武彦は、今後もあんな事があると、どうにかなってしまうと思った。

（で、でも、僕、あの時、好きな人がいるんですって言っちゃったな……）

武彦はその時、自分が亜希の事を好きなのを思い知った。

（アキツさんを助けてあげたくなるのも、委員長に似ているからなんだよな）

それでも亜希の事は「委員長」であった。

アマノイワトでは、オオヒルメが休まずに祈り続けていた。アキツもその隣で祈っている。

（オオヤシマを覆う悪しき心が、多少は和らいだように思える。タジカラが退き、イワレヒコ殿がたけひこ様になられたからか）

アキツが安堵していると、イワトの奥が鳴動した。

「何じゃ？」

オオヒルメが祈りをやめて奥を見た。その先には、ヨモツとオオヤシマを隔てるヒラサカがある。そこを大昔、自分の命を投げ出し、

封じたワの国の王がいた。

「ヨモツが、蠢うごめいておる。まだ何やら起こる兆しが見えるぞ、アキツ」

「はい、そのようで」

アキツは立ち上がり、イワトの外へと向かった。

「ナガスネ、まだ諦めないのですか？」

彼女は拳を握りしめてそう呟いた。

「たけひこ様、ナガスネをお止め下さい」

彼女は武彦にその思いを送った。

ナガスネは、ホアカリには何も告げず、軍を集結させていた。

「海伝いに行くは確かに良い案であったが、隙を突かれる恐れもある。残された道は一つのみ」

「はい」

スサノとクシナダは、ナガスネを見つめている。

「どうなさるおつもりですか？」

もう一人の賛同者であるウカシは、ナガスネの無謀な策を恐れているかのように尋ねた。

「アマノヤス川を越え、ヤマトの国に攻め入る」

ナガスネの作戦は、玉碎覚悟のものだ。ウカシは呆れていた。

（やはり、潰れてもらうか、この能無し將軍には）

ヨモツに通じているウカシは、女王イザの命を受け、ヒノモトの国を内部から焚き付けるのが役目である。彼は別に血を好む人間ではない。ナガスネ達が勝手に戦い、自滅してくれるのが一番楽な方法である。

「ナガスネ様、それでは兵共が無駄に死にまする。ここは一つ、我ら二人にお任せ下され」

スサノが言った。ナガスネは、

「何やら策があるようじゃな、スサノ？」

「はい」

スサノはニヤリとし、クシナダと顔を見合わせた。

ツクヨミと武彦は、そのままイワレヒコの部屋に行った。

「このヤマトの城で心を許せるは、イツセ様とイスズ様とタマヨリ様のみにございます。決してそれ以外の方をこのお部屋にお入れなさいますな」

ツクヨミは姿を現して武彦に注意した。

「はい、ツクヨミさん」

言われるまでもなく、この部屋には誰も入れないようにしようと思った武彦だった。

「何やら、先程アキツ様の声が聞こえました」

「ええ。僕にも聞こえました。ナガスネをお止め下さいと言ってましたね」

武彦は椅子に腰掛けて言った。ツクヨミはその前に跪いて、

「ナガスネは諦めの悪い男でございます。まだヤマトを攻むるつもりかと」

「そうみたいです」

武彦は腕組みして思案した。

「どうしたらいいのでしょうか？」

「今日はひとまずお休み下さい。いくらナガスネでも、夜に攻め入っては来ますまい」

「そうですね」

武彦はツクヨミの言葉にホッとして、

「お休みなさい」

と言うと、そのまま椅子で眠ってしまった。

「やはり、限りがあるようだ。たけひこ様をこちらに長くお留めする事は難しい」

ツクヨミは、武彦が元の世界に戻ってしまうまでの時間を引き延ばせないかといういろいろ考えてみた。

「あっ！」

武彦は、急に声を上げて目を覚ました。

「どうした、磐神？」

黒板に向かっていた年配の教師が振り向いた。

「す、すみません、何でもないです」

武彦は慌ててそう言った。クラスの一同がクスクス笑う。亜希が振り返り、ムツとした顔で自分を見ている。

（うわ、委員長、怒ってる……）

亜希は答え終え、椅子に座った。

（あれ、委員長が答えていた。僕はそんなに眠っていなかったのか？）

ツクヨミが、武彦の時間のほんの一瞬を切り取って呼び込んだのだ。だから、武彦は本当に一瞬眠っただけだった。

（どういう事なんだろう？）

それを説明されていない武彦には、謎であった。

「武君」

授業が終わり、亜希が話しかけて来た。

「な、何、委員長？」

武彦はギクツとして、亜希を見た。

「何よ、そんなにビクついて……。そんなに私って怖いのか？」

亜希は口を尖らせて尋ねる。そんな仕草も可愛い、と武彦は思った。

「そ、そんな事ないよ、怖くないって」

「本当に？」

亜希はズンと顔を近づけた。思わず武彦は赤くなった。

「ほ、本当だよ」

「そう」

亜希はニコツとして教室を出て行く。

「やっぱり、アキツさんとは違うよな」

完全にドッキリ説はなくなったと思った武彦であった。

（ああ、委員長はともかく、姉ちゃんと顔を合わせるの、嫌だなア）
姉の美鈴そっくりのイスズに抱きつかれた事を思い出した武彦は、姉と会うのが憂鬱になっていた。

ヤマトの国では、ウガヤとオモイがウガヤの書斎で密談していた。

「やはりそうか」

ウガヤは、オモイから、イワレヒコをツクヨミが操っていると聞かされていた。

「して、ツクヨミはどこにおるのか？」

「それはわかりませぬ。恐らくは、アマノイワトではないかと」

オモイは跪いて答えた。ウガヤは立ち上がって、

「何としても、あの物の怪の策を破らねばならぬ。このままでは、ヒノモトに攻め込まれてしまうぞ」

「はは」

オモイは頭を下げながら、ニヤリとしていた。しかし、ツクヨミはその密談を姿を消して聞いていた。

（やはり油断ならぬはこのオモイだ。何を企んでおるのか？）

ツクヨミは静かに書斎を出た。

ツクヨミの読みは外れていた。ナガスネは、わずかな兵を伴い、スサノ、クシナダと共に出立していた。ヤマトの斥候に気取られぬために、明かりを灯さず、まるで這うような進軍である。

「いくらイワレヒコが強かろうとも、隙を突かれれば一たまりもなし。勝利は我らにあり」

ナガスネはそう呟いて、満足そうに笑った。

「我らは先に参ります、ナガスネ様」

スサノとクシナダが告げた。

「うむ、頼むぞ、スサノ、クシナダ」

「はは！」

スサノとクシナダは、夜目の利く馬に跨がり、先発した。
「すまん、クシナダ」

スサノが言う。

「何の事です、お館様^{やかたさま}？」

クシナダは慌^{とほ}けて尋ねる。

「このような、負け戦の道連れにしてしまった事だ」

「何を仰せです。まだ負けと決まった訳ではありませんぬ」

「相変わらず、気が強い事よ、お前は」

スサノは低く笑った。クシナダもフツと笑い、

「そうでなければ、お館様と夫婦^{めと}にはなれませぬ」

二人は暗がりで見え向き合い、笑った。

十八の章 スサノの決意、クシナダの思い

磐神武彦はごく普通の高校二年生だったが、ある事がきっかけで劇的な人生を歩む事になった。

オオヤシマ。どこにあるか、いつの時代なのかもわからない世界。だが、確実に存在している。

磐神武彦がオオヤシマに呼び込まれてから、流れが大きく変わった。一時は一触即発の場面があった程だったが、それは今ない。好戦的であったヤマトの国の王ウガヤの考えは、武彦の魂が宿った剣士イワレヒコの変化で押さえ込まれ、攻め込まれる寸前であったヒノモトの国も、ヤマトの国の將軍であるタジカラの奥方であるウズメが、オオヤシマの行く末を憂うツクヨミの考えに同調し、夫を説得して事なきを得た。

このままうまく収束するかに見えた二国のいがみ合いは、どうしても退く事ができないヒノモトの国の將軍ナガスネのこだわりにより、振り出しに戻ってしまう。

彼は腹心のスサノ・クシナダの二人と共に、夜陰に紛れてヤマトの国へと進軍していた。その中で、スサノとクシナダは先発し、夜目の利く馬で国境に迫った。

「む？」

クシナダは、アマノヤス川の水が騒がしいのに気づいた。

「お館様、お待ち下さい」

「どうした？」

スサノは手綱を引きながら尋ねた。クシナダは周囲を見渡し、

「川の向こうに、何者かが潜んでおります」

「何？ ヤマトの斥候ではないか？」

スサノも目を凝らして川の向こうを見た。しかし、何も見えない。

明かりが動いている様子もない。スサノとクシナダは、夜目が利く家系である。自分達と同じように動ける者がヤマトにいるとは思えない。

「違います。これは……」

クシナダは水に様子を探らせるため、アマノヤス川から支流へと探索の手を伸ばした。

「あ！」

突然、何かが水を襲い、探索は中断させられた。

「如何した？^{いかが}」

スサノが奥方の様子の変化に気づいて尋ねる。クシナダは苦笑いして、

「しくじりました。敵に我らの居場所を教えてしまったようです」

「何と？ それはどういう事か？」

「ウズメ殿です」

「ウズメか！？」

スサノは、ヤマトの国の舞踏師であるウズメを思い浮かべた。クシナダと違い、全体的に小柄な、それでいて周囲を圧倒する力を秘めた女。そんな印象である。

「ウズメ殿が、^{やおよろず}八百万の神を降ろして、^{たばか}国境を見張っていました。私はその気配にまさしく謀られたようです」

あまりに鮮やかな罠であったため、クシナダは悔しさを感じていなかった。

「ならば、このような策、もはや意味なし！」

スサノは屈めていた身を起こした。

「堂々と渡るのみよ！」

そして剣を抜いた。彼は魔剣士である。その剣は炎を発する。

「我が力、振るおうぞ！」

剣から大きな炎が噴き出し、辺りを赤々と照らし出した。

「お館様……」

クシナダは呆れていたが、やがて微笑み、

「では、参りましょう」

「おう！」

二人は炎の明かりで照らされた道を馬に鞭を入れて走り出した。

スサノとクシナダの先発は、ヤマトの城のウズメに知らされていた。

「お館様、スサノ殿とクシナダ殿が参ります」

ウズメの報告に、タジカラはニヤリとして、

「思った通りよ。夜陰に紛れて来る者があらば、それはあの二人をおいてなし。我らも出立致すぞ」

「陛下にはお知らせしないのですか？」

ウズメの言葉にタジカラは、

「これは私とスサノの因縁よ。陛下にはお伝えしない」

「……」

ウズメは、その昔、自分を賭けてタジカラとスサノが争った事があるのを思い出した。

「まだスサノ殿をお許しでないのですか、お館様？」

ウズメの目はタジカラを非難するかのようだった。タジカラは苦笑いして、

「そうではない。昔の諍いはすでに決している。彼奴もクシナダと添ったではないか」

「では何が因縁なのですか？」

ウズメはまだ少し怒っているタジカラは部屋を出て行きながら、

「スサノとは、剣の腕の優劣がまだついていない」

「……」

いずれにしても、下らない事だ、とウズメは思った。

武彦は、帰宅した。そして、姉美鈴がいないのを確認すると、素早く部屋に駆け込み、猛スピードで着替えをすませ、まだ時間があ

るのにバイトに行く準備をした。

（姉ちゃんに顔を合わせると、イスズさんの事を思い出して気ま
ずいから、サッサと出かけちゃおう）

武彦は靴を履き、玄関を出ようとした。すると携帯が鳴った。

「誰だ？」

着信を見ると、バイト先の店長からだ。

「お疲れ様です」

店長からの連絡は、店の電気系統が故障して、臨時休業になって
しまったので、今日は休んで欲しいというものだった。

「そ、そうですか。わかりました」

武彦は携帯を切り、溜息を吐いた。確か今日は美鈴も大学が休み
なのだ。

「家にいると、しばらく姉ちゃんと二人きりだしなア」

考えた挙げ句、武彦は亜希に電話した。

「どうしたの、武君？」

亜希は非常に驚いた声で訊いて来た。武彦は照れ笑いして、

「たまには夕ご飯、一緒に食べない？」

と誘ってみた。美鈴と二人きりになるくらいなら、亜希と一緒にい
た方がいいと思ったのだ。

「な、何よ、いきなり？ どうしたの？」

亜希の声は動揺していた。でも武彦は気づかない。

「都合悪い？」

「そんな事ないわよ。どこに行けばいい？」

「ああ、僕が迎えに行くから、待ってて」

「う、うん」

亜希の声は弾んでいた。

「よし」

何となく嬉しくなる武彦。自分でも亜希と一緒にいる事が楽しい
と感じていた。今までには決してなかった感情である。

「あっ！」

玄関のドアを開けると、その向こうに美鈴がいた。途端にイスズと姉がオーバーラップする。恥ずかしくなって、俯いてしまう。

「あ、武、今からバイト？」

「う、うん」

武彦は美鈴の顔を見られない。

「気をつけてね」

絶対変に思われるから、顔を見ないと、と思うが、見られない。

「うん」

咄嗟に嘘を吐いてしまった。姉はそのまま家の中に入って行った。武彦は何か後ろめたくなった。

「どうして嘘吐いちゃったのかな？」

姉に対して隠し事など一つもなかったのに、今日生まれて初めて隠し事をした。武彦は妙にソワソワした。

「武君」

亜希の家に行くと、彼女は門の外で待っていて、手を振った。

「バイトは？」

「臨時休業だって。電気系統が故障して……。店長、かなり焦ってたよ」

「そうなの」

亜希は嬉しそうだ。着ている服も凄く可愛い。と言うより、亜希は何を着ていても可愛い。武彦はそんな風に思い、ニヤニヤしてしまった。

「何よ、思い出し笑いなんかして。気持ち悪いな」

亜希が言った。武彦はハツとして、

「ご、ごめん。僕笑ってた？」

「ええ、とっても嫌らしい顔だね」

亜希がからかうように言った。すると武彦はビクリして、

「そ、そうなの？ でも、亜希ちゃんが凄く可愛いから、嬉しくな
って……」

「えっ？」

亜希は泣きそうになった。武君が何年かぶりに私を名前で呼んでくれた。

「今、武君、私の名前を呼んでくれた……」

亜希は涙ぐんで言った。武彦は亜希が泣きそうになっているのを知り、

「ご、ごめん、名前で呼んだのいけなかった？」

「そんな事ない。嬉しいよ、武君」

亜希は涙を拭いながら微笑んだ。

「そ、それなら良かった」

また怒られるのかと思い、一瞬焦った武彦だった。

オオヤシマは、武彦達の世界と違い、一気に緊迫していた。

「久しぶりだな、タジカラ」

スサノが、炎の剣を高く掲げて言った。

「おう、スサノ。今宵こそ、全てのケリを着けようぞ」

タジカラも剣を抜き、スサノを指し示した。その二人の戦士の後ろで、自分の夫を心配するウズメとクシナダがいた。

十九の章 ウカシの策謀、ホアカリの決断

オオヤシマは、また不穏な空気に包まれ始めていた。

ヤマトの国の將軍であるタジカラとヒノモトの魔劍士であるスサノが、一騎打ちを始めようとしている。

「始めるか？」

スサノが言った。タジカラはニヤリとし、

「良からう！」

二人は馬を走らせた。

「お館様！」
やかたさま

ウズメとクシナダが、同時に叫んだ。そして二人は互いを見た。

二人共、思いは一つ。かつては酒を酌み交わした仲であるのに、何故今は刃を交えねばならぬのか？

「ふおおお！」

「ぬああああ！」

タジカラとスサノの剣がぶつかり合い、火花が飛ぶ。スサノは炎を出したままで攻撃しているが、タジカラはそれをものともせず、凄まじい形相で戦っていた。

その頃、ナガスネは遙かスサノ達の後方で、合戦の報告を受けていた。

「スサノめ、全てを背負うつもりか……」

ナガスネが唯一信頼するスサノは、ナガスネの思いを知り、自分の命と引き換えに、ヤマトに譲歩を迫るつもりだ。その思いは、ナガスネに届いていた。しかし、ヒノモトの者全てが、それに賛同している訳ではなかった。

「スサノ一人で終わらせるものか。この戦、いくさそのような形で済ませるつもりはない」

ヒノモトの城の留守居役で、ナガスネの無謀な戦いを快く思わないウカシは、混乱を引き起こすつもりでいた。彼はホアカリのところに赴いた。

「何事か、ウカシ？」

謁見の間で、ホアカリの嫡男であるウマシが対応した。ウカシは煩わしい思いながらも、

「ナガスネ様がスサノ殿とクシナダ殿を伴い、ヤマトに攻め入るおつもりでございます」

「何と！」

ウカシは驚愕し、父に取り次いだ。ホアカリも驚き、トミヤと共に謁見の間に現れた。

「それは真か、ウカシ？」

ホアカリは椅子に座りながら尋ねた。

「はい。ナガスネ様は、戦の責めを負い、死ぬるお覚悟のようです」
ウカシは跪いて答えた。

「何という愚かな！ 死ぬるなら、一人で行けば良いものを……」
ウマシはそう言い放ち、ホアカリを見た。

「ウマシ、仮にも叔父上の事をそのように申すでない」
トミヤが悲しそうな目でウマシの失言を窘めた。

「ウカシ、ナガスネを追ひ、止めるのだ。もはや戦はならぬ。私がウガヤと話そう」

ホアカリは決断をした。彼も彼なりに、オオヤシマの異変を感じていたのだ。

「承知致しました」

ウカシは頭を下げ、ニヤリとした。

（戦はやめさせぬ。もっと激しいものにするのみ）

タジカラとスサノの戦いは、長く続き、両名共疲れが見え始めていた。

「く……」

タジカラは、スサノの剣の放つ炎で、腕と顔に火傷を負っていた。スサノも、タジカラの怪力のせいで、腕の筋肉が断裂しそうになっていた。

「お氣がすみましたか、お館様？」
やかたさま

ウズメが声をかける。

「ぬ……」

タジカラはまだ戦うつもりだったが、スサノの後ろに見えるクシナダの悲しそうな顔を見て気が緩んだ。

「お館様、もう宜しいでしょう？」

クシナダも、戦意を喪失しかかっている夫に声をかけた。

「……」

タジカラとスサノは、互いに相手を見た。そして、ゆっくりと剣を鞘に戻した。それを見て、ウズメとクシナダはホッと、顔を見合わせて微笑んだ。

「おいしかった」

近くのファミレスで食事をすませた武彦と亜希は、家路に着いていた。

「ねえ、武君」

不意に亜希が話しかける。

「何？」

「どうして急に私を誘ってくれたの？」

亜希のその言葉に、武彦はまたイスズ姫の事を思い出してしまった。

（まさか、姉ちゃんのそっくりさんに抱きつかれたので、姉ちゃんと顔を合わすのが気まずいなんて言えないしなあ）

仮に言ったとしても、亜希が信じる訳がない。信じたとしても、
「何よそれ、酷いわ！」

と怒り出すだろう。姉と顔を合わせるのが嫌だったので、亜希を呼

び出したのだから、確かに酷い話なのだ。

「亜希ちゃんのご飯食べたかったから」

恥ずかしかったので、武彦は俯いてそう答えた。嘘ではない。亜希と食事したかったのは本当だ。

「……」

亜希は何も言ってくれない。武彦はハッとして亜希を見た。怒ったと思ったのだ。

「嬉しい……」

亜希は泣いていた。涙をポロポロ零していた。

「わわ、泣かないで」

武彦は慌ててポケットからハンカチを出したが、汚れているのに気づき、すぐに引っ込めた。

「嬉しいよ、武君！」

亜希は泣きながら武彦に抱きついて来た。

「！」

気を失いそうなくらい驚いた。亜希の体温が伝わって来る。耳元で彼女の息遣いが聞こえる。

「嬉しいよ、武君。私、嬉しい……」

亜希はしばらくそう言い続け、武彦に抱きついたままでいた。

「そ、そんなに喜んでもらえて、僕も嬉しいよ」

「ホント？」

亜希が涙で濡れた顔を武彦に向ける。あまりに近くだったので、互いにポツと赤くなった。

「ホントだよ」

武彦は亜希を見たままで答えた。亜希はニッコリして、何故か目を閉じた。

「え？」

武彦は、どうして彼女が目を閉じたのかすぐにはわからなかった。
(も、もしかしてこれは……?)

心臓が飛び出しそうなくらいの勢いで動き出した。亜希の鼓動も

早くなっているらしく、頬が紅潮して来た。武彦は顔が火照り、息が苦しくなるのを感じた。

「……」

二人はそつと唇を触れ合った。互いに照れ臭そうに笑う。

「お休み、武君」

「お、お休み」

亜希はしばらく手を振ってから、駆け出した。武彦はつい唇を触ってしまった。

「……」

亜希の柔らかい唇がここに触れた……。武彦の鼓動はまた高まった。

その頃、母珠世が帰宅し、美鈴と二人で武彦の事を話していた。

「昨日は突然早く起きたから、びっくりした」

美鈴は焼酎のお湯割りを飲みながら言った。珠世はグラスに氷を入れながら、

「でもあの子、小さい時から、なかなか具合が悪いのを言わないから、それが心配よ」

「うん、そうなんだよね」

美鈴は酔いが回ったのか、目がトロンとして来た。珠世はグラスをあおると、

「もう一度、病院に連れて行ってよ。今日帰ったら話をして」

「うん」

珠世は立ち上がって、

「母さん、明日も早いから先に寝るね」

「うん。お休み」

「お休み」

美鈴は珠世が部屋に戻ると、またお湯割りを作り、武彦の帰りを待つことにした。

二十の章 オモイの企み、オオヒルメの意志

武彦は、バイトの終了時間まで近所の大型書店にいて、帰路に着いた。そのくらいの辻褃合わせをするくらいは、彼でも思いついた。「……」

しかし、気が重い。あの世界がどんなところなのかよくわからないが、言葉はほぼ通じる。但し、彼等の話す言葉は、武彦にはちょっと難しかった。だから武彦も自分が喋る時、こんな言い方で通じるのかと心配する時もあった。ツクヨミだけは、そのような不安を感じない。彼は言霊師だと言っていた。自分の発する言葉に力を与えて、相手を操る事もできるし、攻撃する事もできるのだと。考えてみれば、とんでもない存在だ。しかし、彼からは全く怖さを感じない。むしろ、自分と同じ、劣等感を感じるのだ。

（ツクヨミさんは、自分の力を恐れているんだな。だから、あんなに控え目なんだ）

良くない考えを持つ者が、ツクヨミのような能力を持ったりしたら、多分あの世界だけでなく、今武彦が暮らしているこの世界も滅ぼされてしまうだろう。そう思った。

（それに、あの人はアキツさんの事が好きなんだ。だから、僕はあの人に共感できる）

幼馴染みの都坂亜希みやこさかあきに瓜二つのアキツ。彼女の存在があったからこそ、武彦はオオヤシマに呼ばれた。そして、アキツが亜希にそっくりだったから、武彦は彼女の事が心配になり、彼女に協力しようと思ったのだ。そこまではいい。

（問題は、イスズさんだよなア……）

イスズはヤマトの国の王女。そして、イワレヒコの姉であり、許嫁なすけでもある。それは仕方ない。でも、そのイスズが、イワレヒコの身体に武彦が降ろされていると知っていながら、抱きついて来たのは、本当に面食らった。

（綺麗な人だし、普通なら悪い気はしないよ）

いくら女性にモテない武彦でも、そんな事があれば嬉しいとは思
う。しかし、イスズは姉美鈴にそっくりなのだ。

（ホント、困る。あんな事があると、姉ちゃんと顔を合わせられな
いよ）

現に今日は、亜希と食事に出かける時、つい美鈴に嘘を吐いてし
まった。そのため、余計気が重いのだ。

（おまけに、二人のお母さんのタマヨリさんは、母さんにそっくり
だし）

そう、ヤマトの国のウガヤ王の妃タマヨリは、武彦の母である珠
世に瓜二つなのだ。

「はア……」

武彦は溜息を吐いた。目の前に自分の家の玄関のドアがある。

「只今」

そつとドアを開け、申し訳程度の声で言う。美鈴は大学が休みの
日は酒を飲んでいるから、もう寝ているはず。そして、珠世は明日
も仕事が高いから、すでに寝入っているだろう。武彦はそう推理し、
静かに玄関で靴を脱ぐと、そのまま二階の自分の部屋へ行こうとし
た。

「お帰り、武彦」

美鈴がキッチンから現れた。完全に想定外だった武彦は、危うく
階段から転げ落ちそうになった。

「た、只今」

「ちょっといいか。武彦」

美鈴は酔いが回っているらしく、トロンとした眼で言った。武彦
は、嘘を吐いたのがバレたのかと思ってギクツとした。

「な、何、姉ちゃん？」

「いいから」

武彦は腕を掴まれ、そのままキッチンへと引っ張って行かれた。

（ど、どうしよう……？）

ビビりまくる武彦だった。

オオヤシマ。

スサノとタジカラは馬を降り、地面に寝転んでいた。

「仕方のないお館様やかたさまですね」

ウズメは苦笑いをし、クシナダと目配せをし合い、それぞれの夫のところに歩み寄った。

「相変わらず、強いな、タジカラ」

スサノが夜空を見上げたままと言う。タジカラはフツと笑い、「お前は弱いな」

「貴様！」

スサノは顔を上げてタジカラを見たが、その顔は笑っていた。

「この始末、どうつけるつもりだ？」

スサノが問うた。タジカラも顔を上げて、

「ありのままに申し上げる。この戦いくさはもはや何も生まぬ。喜ぶは、ヨモツのみよ」

「貴様もそう思うたか」

スサノは半身を起こした。タジカラも起き上がり、

「オオヤシマがこれほど悪しき心に包まれたは、何やら解せぬのでな。私は知恵は回らぬ方だが、勘は冴えておるのだ」

「なるほどな」

スサノはニヤリとした。

しかし、そんな二人の思いは叶わぬ方向へと動き出していた。ヒノモトの国の留守居役であるウカシが、大軍を率いてヤマトの国に進んでいたのだ。名目はナガスネを止めるため。逆らうようであれば、攻撃するという大義を得ていた。

（ホアカリは本当に間抜けな王よ。俺が言った事を全て真に受けた。

何とも愉快だ)

ウカシはその大軍でヤマトに攻め込むつもりだ。彼はナガスネが進軍したと思われる道を外れ、違う進路でヤマトを目指していた。

(イザ様は、血がお好きだが、俺は好かぬ。但し、人の命は俺も好きだ)

ウカシはヨモツの女王イザと通じている。そして、彼はヨモツに魂を売った人間である。

「全軍、ヤマトの国に攻め込むぞ。ヒノモトに勝利を！」

「おーっ！」

イワレヒコは残虐であったが、民を巻き込む戦はしなかった。しかし、ウカシは敢えて民を殺戮し、イザにその魂を土産として捧げるつもりなのだ。

「むっ？」

ツクヨミは、イワレヒコの部屋に戻って姿を現した時、そのウカシの悪しき心を感じた。

「何奴？」

ツクヨミは自分の言霊を飛ばし、ウカシの心を探った。彼はウカシとは会った事がないため、彼の心を捉えるのは難しかった。

そしてもう一人、ウカシの心を捉えていた者がいる。ヤマトの国の軍師、オモイである。彼は自分の寝所で、ウカシの悪意を感じていた。

「そうか。奴はそう出るのか。しかし、そうはいかぬ。お前に手柄の独り占めはさせぬぞ、ウカシ」

オモイはその青い瞳をギラつかせて、そう呟いた。

アマノイワト。先代の女王であるオオヒルメとその後継であるアキツが、長い時間をかけて、ヨモツを抑える祝詞を唱えていた。

「アキツ」

オオヒルメが不意に言った。アキツはオオヒルメを見て、

「はい、大叔母様」

「時が来たようだ。私は命を捨てねばならぬ」

「どういう事です？」

アキツはオオヒルメの言葉に仰天した。オオヒルメは穏やかな顔でアキツを見て、

「大声を出すな、アキツ。この定めは、私がワの国に生まれた時から決まっていたものじゃ。騒ぐ事ではない」

「ですが、大叔母様……」

アキツは動揺していた。そんな日が来るとは思っていたが、現実にはオオヒルメの口から告げられると、平常心ではいられない。

「もはや、この程度の祝詞で抑えられるようなものではない。ヒラサカが軋んでおる」

ヒラサカとは、オオヤシマとヨモツを隔てる場所である。

「それでもヨモツを止める事ができぬ時は、頼んだぞ」

「はい……」

アキツは泣いていた。オオヒルメはそんなアキツを一度優しく抱きしめてから、ヒラサカがあるイワトの奥へと歩き出した。

「大叔母様……」

アキツは小さな声で言った。そして、泣き伏してしまった。

二十一の章 ウカシの悪意、アキツの悲しみ

磐神武彦いわがみたけひこは、人生で最大の緊張をしていた。

キッチンテーブルに、姉美鈴と差し向かい。しかも姉はほろ酔いで、目が完全に座っている。下手な答えをすれば、いつも以上に怒られ、拳骨が飛んで来そうだ。姉は酔うほどに強くなる。酔拳の継承者なのかも知れない、と武彦は思った。

「武彦」

しかし、美鈴は悲しそうだった。その顔がヤマトのイスズ姫と重なる。

「な、何？」

武彦はボツと赤面し、その残像を振り払った。美鈴が尋ねる。

「その後、調子はどうなの？」

「え？」

何だ、嘘がばれたんじゃないのか……。ホツとしたが、でも姉の事だから、油断はならない。

「あまり一人で抱え込むなよ。母さんも、姉ちゃんも、お前の事が心配なんだから」

「う、うん……」

酔っているせいで目が潤んでいるのかと思ったが、違った。姉は涙ぐんでいるのだ。武彦は罪悪感で押し潰されそうだった。

「何ともないのなら、それでいい。ごめんな、疲れて帰ったところをさ……」

美鈴のその言葉は、武彦の気持ちをグラグラと揺らした。

（姉ちゃんにこんなに心配してもらってるのに、僕は嘘を吐いて垂希ちゃんと……）

本当の事を言おうかと思ったが、そんな事をしたら、弟が狂ってしまったと思われる。ジレンマだった。

「お、お休み」

武彦は姉の優しさが辛くて、キッチンを逃げるように出た。

「お休み」

姉の声が背中に突き刺さるようだ。

（どうしよう……？ このままじゃ、姉ちゃんに申し訳なくて……）
部屋に入り、ベッドに倒れこむ。

「あ……」

また睡魔が襲って来た。

（ツクヨミさんが呼んでるのか？ いや、アキツさんが泣いてるんだ……）

まもなく武彦は眠りに落ちた。

ふと目を開けると、ツクヨミがいた。

「たけひこ様」

ツクヨミは悲しそうな顔でこちらを見ていた。

「どうしたんですか？」

武彦は起き上がって尋ねた。ツクヨミは跪いて、

「アキツ様のお心が届いたのですね？」

「あ、ええ。アキツさんが悲しんでいるのがわかって……」

ツクヨミは武彦の言葉に頷き、

「オオヒルメ様が、お命を賭けてヨモツを封じるお覚悟のようなのです」

あの英語の先生に似ている人が？ アキツが「大叔母様」と呼んでいたから、高齢なのだろう。

「アキツ様は大変お嘆きのご様子です」

「そうですか」

同級生の都坂亜希にそっくりなアキツが悲しいでいると聞くと、
今まで以上に武彦の心は動揺した。亜希とキスをした時を思い出し、
つい、赤くなる。

「如何なさいましたか、たけひこ様？」

ツクヨミが武彦の心の揺れを見抜いたかのように尋ねた。

「僕に何かできる事はありますか？」

武彦はそんな妄想を振り切り、ツクヨミを見た。

「何やら、ヒノモトに不穏な動きがあります。それを収めぬ事には

……」

その時、ツクヨミの脳裏を強烈な悪意が駆け抜けた。

「どうしたんですか？」

武彦が言った。ツクヨミはハツとして、

「今、たくさんの民の叫び声が聞こえました。何かが起こっているようです」

「え？」

武彦はギクツとした。

「何事か!？」

ヒノモトの魔剣士であるスサノは、奥方のクシナダが何かを感じて水に探りを入れたので叫んだ。

「これは、ウカシ殿です。ヤマトに進軍しております」

「何!？」

ヤマトの將軍であるタジカラが立ち上がって叫んだ。その奥方であるウズメもクシナダを見た。

「如何なる事だ？　ウカシは城の留守居役。奴が進軍とは、解せぬぞ」

スサノはクシナダに近づいた。

「ウカシ殿は、こちらに向かっているのではないようです。ああ!　クシナダは目を見開いた。

「如何した？」

スサノが尋ねる。クシナダは、

「ウカシ殿が、くにむかい国境の村を襲い、民を殺しております」

「何だと!？」

スサノとタジカラが同時に叫んだ。

「これは危うき事です、お館様。やかたさま民が殺され、悪しき心が大きくなつております！」

ウズメが叫んだ。

その頃、早馬がヤマトの城に着いていた。

「申し上げます！ ヒノモトの軍が、我が国の村を襲い、民が殺されております！」

謁見の間で、伝令兵が息も絶え絶えに報告した。

「何と！？ 誰の仕業か！？」

ウガヤは激怒して言った。伝令兵は、

「ヒノモトの留守居役、ウカシ殿の軍でございます」

「ウカシだと！？」

ウガヤはそばに控えている軍師オモイを見た。

「何という恥知らずな……。すぐにどなたかに出陣のご命令をお出し下さい」

「うむ」

ウガヤは大きく頷き、

「タジカラはおるか？」

と尋ねた。オモイは、深々と頭を下げて、

「いえ、お出かけの様子で」

「何？ いずこへ出かけたのだ？」

ウガヤはますます憤激した。オモイはニヤリとし、

（ウカシめ、思い切った策に出たな。しかし、私もこのままにはしておかぬ）

「私が参りましょう、父上」

イワレヒコが現れた。当然の事だが、姿を消したツクヨミが、武彦の代わりに喋っている。

「よし、すぐ出立してくれ。敵は皆殺しじゃ！」

ウガヤは目を血走らせて怒鳴った。しかしイワレヒコは、

「いえ、父上。それではヨモツが蠢うごめきます。追い返すだけに留めま

す」

「手緩いぞ、そのような事では！ 皆、生かして返すな！」

それでもウガヤはそう息巻いた。するとイワレヒコは、

「そのような事は致しかねます！」

と大声で言い返した。ツクヨミが言霊を使つたのだ。ウガヤは大人しくなり、オモイはギョツとしてイワレヒコを見た。

（今のは何事だ？ イワレヒコの声が……）

オモイはしばらく考え込んだ。

「では、出立いたします」

イワレヒコはウガヤに頭を下げ、オモイを一瞥してから、謁見の間を出て行った。

タジカラとスサノは、それぞれの奥方を国に帰し、ウカシの軍に向かった。

「愚か者が！ あの者、一体何を企んでおるのだ？」

タジカラがそう言うのと、スサノが、

「彼奴は得^{あやつ}体が知れぬ男だ。クシナダは、ウカシを嫌っている」

「わしも好かぬ。戦に民を巻^{いぐさ}き込むなど、許しがたき行いぞ」

タジカラは顔を真っ赤にして怒った。

アキツもまた、ウカシの悪行を感じていた。

「何という事を……。これでは大叔母様のお気持ち^{おきもち}が汚されたよう
で……」

彼女は涙を流した。それと同時に、武彦とツクヨミの声を聞いた。

「オオヤシマをお救い下さい、たけひこ様」

アキツはそう強く願った。

二十二の章 トミヤの嘆き、ナガスネの戸惑い

ヒノモトの国の留守居役であるウカシは、大軍を率いて、ヤマトの国の村を襲撃した。

突然の事に村は大混乱に陥った。

「一人も生かしておくな！ 皆殺しにせよ！」

ウカシは、軍の後方に陣取り、命令していた。

（兵共にはヨモツの水を飲ませてある。皆、俺の思いのままに動く）
彼はスサノとタジカラが近づいている事も承知していた。二人が近づいたら、全軍をぶつけるつもりだ。そして、自分は退く。決して自らの手を汚さない、実に卑怯な男である。

「ナガスネ様は如何したか？」

伝令兵に尋ねる。兵は跪き、

「ナガスネ様は、ヒノモトに向かわれております」

「何？」

ウカシはその時、スサノの奥方であるクシナダの気配がしないのに気づいた。

「おのれ、二手に分かれたか」

彼は齒ぎしりし、

「このまま全軍、ヤマトへ攻め込め！ ヒノモトの勝利はもうすぐぞ」

と命じ、陣を抜けた。

（クシナダめ、ナガスネをヒノモトに戻し、俺を後ろから攻むるつもりか？）

ウカシはニヤリとした。

「そうはいかぬ。このウカシ、そのような手には乗らぬぞ」

そのナガスネの軍は、クシナダの進言でヒノモトに帰還中だった。
「如何なる事か、クシナダ？」

馬上でナガスネが尋ねる。

「留守居役のウカシ殿が謀反にむほんございます。陛下のご命令も無きまま、ヤマトを攻めております」

「何と！」

ナガスネは馬を止め、

「ならばウカシを討たねばならぬ！」

クシナダは馬を下り、跪いた。

「ですが、兵の数が違います。ここは一度城に戻るが得策にございます」

「うむ……」

確かに今引き連れているのは、あくまで奇襲のための小部隊。ウカシが大軍を率いているのであれば、死に行くようなものである。

「わかった。任せる」

ナガスネは再び馬を進めた。

「ありがとうございます」

クシナダは騎乗し、ナガスネに続いた。

しかし、ウカシはそれ以上に狡猾だった。

「ナガスネ様、謀反にございます！」

ウカシの先発させた伝令兵が、ヒノモトの城に到着し、謁見の間でホアカリに報告をしていた。

「まさか！ ナガスネが謀反とな！」

ホアカリは俄かに信じられなかったが、自分に何も告げずに軍を出している以上、ナガスネの行動は解せないのは確かだった。

「偽りを申すな！ 我が兄が謀反など！」

ホアカリの妃であり、ナガスネの妹であるトミヤには、尚の事信じがたい話だった。

「偽りではございませぬ。ナガスネ様は、陛下のご命令もなしに、ヤマトの村を攻めて、民を殺しております」

兵はウカシに操られている。吹き込まれた真実を語っているので、

その表情からは嘘とは思えない。

「そのような事……」

あまりの話に、トミヤは泣き伏してしまった。

「父上、如何なさいますか？」

嫡男ウマシが、ホアカリを追い詰めるように見ている。彼は元々ナガスネを好かない。これを口実に追い落とそうと考えているのだ。只、殺すつもりはなかった。

「ウカシに伝えよ。ナガスネを追い、事の真偽を正せと」

「ははっ！」

ホアカリは、最善の策と思い、命じた。しかし、それは最悪の選択だった。

ヤマトの国を出立したイワレヒコの軍は、途中でタジカラの奥方であるウズメに出会った。

「イワレヒコ様」

ウズメは馬を降り、跪いた。

「如何した、ウズメ？」

イワレヒコは騎乗のまま尋ねた。ウズメは、

「ヒノモトのウカシ殿の軍が、くにぎかい国境の村を攻め、民が殺されており
ます」

「それは聞いておる」

姿を消してイワレヒコの後ろにいるツクヨミは、ウズメがまた自分に気づいている事を知った。ウズメはチラチラとこちらを見ているのだ。

（ウカシという男、一体何を企む？）

ツクヨミ程の力を持つ者でも、ウカシがヨモツに通じているのを見破る事ができない。

「タジカラとスサノ殿が、ウカシ殿の軍に向かいました」

「そうか。わかった。我らもすぐに向かう。ウズメは城に戻り、この事を父上達に伝えよ」

「はは」

ウズメは馬に戻る前にそっとツクヨミがいる辺りに近づき、

「お気をつけなさいませ。ウカシは得体の知れぬ者です」と囁いた。

「かたじけない、ウズメ殿」

ツクヨミも小声で応じた。ウズメは微笑み、馬に戻った。

「行くぞ」

イワレヒコは馬に鞭を入れ、走り出した。それに大軍が続く。

（うはあ）

イワレヒコの中の武彦は驚嘆していた。

（どうしてこんな事ができるんだろう？）

武彦は不思議だった。馬に乗った事もないし、スポーツ全般がダメな武彦には、今起こっている事が信じられなかった。

『どうなさいましたか、たけひこ様？』

ツクヨミが話しかけて来た。

『どうして馬に乗れているのだろうって、凄く不思議なんです』

『今はイワレヒコ様のお身体だからです。貴方がなされぬ事でも、

イワレヒコ様がなされる事はおできになれます』

『そうなんですか』

武彦は納得した。

『イワレヒコさんの頭は眠っているけれど、身体は起きているんですね？』

『ほぼそのとおりでございます。ですから、戦いくさになれば、貴方は鬼神の如き強さになります』

『……』

想像がつかない武彦だった。

「むっ？」

闇の果てに、火の手が見えて来た。ウカシの軍が攻めている村のようだ。

「あれか……」

武彦はつい声に出して呟いてしまった。しかし、喧噪にかき消され、兵には聞こえていなかった。

「うおおお！」

タジカラとスサノは、たった二人であつたが、まさしく鬼神の如き勢いで戦っていた。戦力的には数十倍のはずであるが、ウカシが残して行つた兵達は、烏合の衆でしかなかった。すでに敗走が始まっていた。

「やめよ、スサノ。こやつら、操られておる」

タジカラが一人の兵を捕まえて叫んだ。

「そういう事か」

スサノは剣を鞘に納め、馬を止めた。

「クシナダがおれば、たちどころに救えるはず」

スサノは奥方を帰らせた事を悔やんだ。

「おお、我が軍の援軍じゃ」

タジカラがイワレヒコ軍に気づいた。スサノは振り返り、

「イワレヒコ殿？ 大事ないか？」

と心配した。彼はイワレヒコの残虐さを知っている。しかしタジカラは、

「大事ない。イワレヒコ様は、変わられた」

「そうか？」

それでも心配なスサノだった。

軍を離れたウカシは、ヒノモトの城から戻った伝令兵と合流していた。

「軍は散り散りになっている。もはや負け戦。それは良い。もう一手打たせてもらおう」

ウカシはまた狡猾な笑みを浮かべた。

ナガスネの部隊は、城までもう一息のところまで来ていた。

「ナガスネ様、お迎えに上がりました」

騎馬隊が現れた。ナガスネのよく知る武将の部隊である。

「うむ。大儀である」

ナガスネは彼等を労^{ねぎら}った。

「どうぞ」

その武将は、樽を運んでいた。

「馬も皆も喉が渴いておりましょう。水をお持ち致しました。お召し上がり下さい」

「うむ」

ナガスネは馬を降り、兵達を休ませた。

「ささ、ナガスネ様」

その武将が差し出した椀をナガスネは受け取った。

「やはり、水はヒノモトのものに限るな」

「そうでございましょう」

ナガスネが椀に口を付けようとした時、何かが椀を弾いた。

「む？」

ナガスネは飛ばされた椀を見てから、背後に目を向けた。そこには、険しい顔のクシナダがいた。

「何をする、クシナダ？ 血迷うたか？」

「ナガスネ様、その者は、悪しき水を持っております。口にしてはなりませぬ」

「何？」

ナガスネがもう一度武将の方を見ると、彼は歯ぎしりをしてこちらを睨んでいた。

「今一步のところで！」

ナガスネはその変貌に驚愕し、

「これは一体？」

「その者は、ウカシの手の者です。水は毒です」

クシナダの声に、ナガスネの部隊の兵達は驚いて椀を放り出した。
「退けっ！」

彼等は素早くその場から立ち去ろうとしたが、クシナダの水の方が早かった。

「グエエッ！」

ナガスネ暗殺部隊は、たちまちクシナダの水の攻撃で死んだ。

「もはや城に戻るも危うき事となりました」

クシナダが言った。ナガスネは眉間に皺を寄せて、

「そのようだな」

と呟いた。

クシナダの言う通りだった。ウカシはすでに城に帰還し、ホアカリに報告していた。

「ナガスネ様、謀反にございます。我らの問いかけを振り切り、ヤマトに攻め入りましてございます」

ウカシの報告を全く疑わないホアカリとウマシ。泣き崩れる妃トミヤ。

（勝った。これで、ヒノモトは滅ぶ）

ウカシはニヤリとした。

二十三の章 ウカシの罫、ナガスネの嘆き

ヤマトの国の將軍タジカラ、そしてヒノモトの国の劍士スサノと合流した武彦とツクヨミ。

ツクヨミは、周囲のヒノモトの兵達の妙な氣に気づいた。

（これは、黄泉の臭においだ。ならば！）

彼は言靈を使い、すぐそばにいる兵達の正氣を取り戻した。

「む？」

タジカラは、捕らえていた兵の顔つきが変わったのに気づいた。
そしてイワレヒコを見た。

（ツクヨミが何かしたのか？）

タジカラ自身は、ウズメからツクヨミの事を聞いてはいたが、彼の氣配を感じる事はできないので、ツクヨミがどこにいるのかはわからない。

「スサノ様！」

幾人かの兵が、スサノに気づき、跪いた。

「おお、正氣を取り戻したか。これは如何なる事だ？」

「ウカシ様の下さった水を頂いてから、何もわからなくなりました」
兵の言葉に、スサノはタジカラと顔を見合わせた。

「やはりそうか」

イワレヒコが馬を降りて言った。タジカラとスサノ、そして正氣を取り戻した兵達が跪く。

「ウカシめ、ヨモツに通じておるわ」

「何と！」

スサノとタジカラは異口同音に叫んだ。正氣を取り戻していない兵達は、逃亡を始めており、軍は崩壊した。

「追う必要はない。恐らく、やがて水の力が切れる。さすれば、元に戻るう」

イワレヒコが追いかけようとするタジカラを止めた。

「はは！」

タジカラはイワレヒコに向き直った。

「ウカシは城に戻ったようだ。ナガスネが危うき事になる」

「ナガスネ様が？」

スサノがギクツとしてイワレヒコを見た。

「ナガスネが討たれてしまえば、ウカシの企み通りとなり、再びヨモツの悪しき心がオオヤシマを覆う。それは何としても防がねばならぬ」

イワレヒコの言葉にスサノは、

「ならば一刻も早くナガスネ様の元へ。クシナダがおそばにありますが、ウカシの策に陛下が惑わされておられると、危うき事この上なし」

「イワレヒコ様」

タジカラとスサノは、イワレヒコの命^{めい}を待っている。

「ナガスネの元に参るぞ、タジカラ、スサノ」

「はは」

スサノは兵達には城を目指すように命じた。そしてイワレヒコ、タジカラ、スサノの、オオヤシマ最強の三人衆が結成され、ナガスネ救出に向かった。

ウカシはホアカリの勅命を受け、再び軍を率いてナガスネ討伐に出發した。

（ヒノモトはこれで終わる。後はヤマトだが……）

彼はヤマトの軍師であるオモイの動きが気になっていた。

（彼奴^{あやつ}もイザ様のご命令で動いているが、どうも好かぬ。この俺を出し抜こうとしているのが、ありありとわかる）

ウカシとオモイは、仲間でありながら、互いを信用していなかった。

ヒノモトの玉座の間では、妃トミヤが泣いていた。

「トミヤ……」

非情の決断をし、自分の義理の兄であるナガスネを討つ事をウカシに命じた国王ホアカリは、妻の泣いている姿を見て、何も言葉をかける事ができなかった。

「父上、私もウカシに同行し、伯父上を討ちとう存じます」

そのような時に、全く二人の心を考えない愚息のウマシが、トミヤの心を逆撫するような事を言い出す。

「勝手に致せ」

ホアカリは息子の愚かさを嘆き、そう言い捨てた。

「はは！」

それを真に受け、ウマシは得々として出陣した。

「何という事だ。ヒノモトは滅ぶるのか？」

ホアカリは天を仰いだ。

ナガスネに同行しているスサノの奥方であるクシナダは、水を使って辺りを探っていた。そして、ウカシの軍が近づいている事を知った。

「ナガスネ様、ウカシがまたこちらに向かっております」

「そうか。もはやこれまでのようだな」

さすがのナガスネも、自分の愚かさに気づき、宿命を感じていた。

「いえ、まだ終わりではありません。我が夫スサノと、ヤマトのタジカラ殿がこちらに向かっております。それと、イワレヒコ様も」

「何？」

スサノはともかく、タジカラとイワレヒコは敵ではないか？ ナ

ガスネはクシナダがおかしくなったのではないかと思った。

「スサノはタジカラと共にいるのか？」

「はい」

クシナダは微笑んでいる。ナガスネは眉をひそめ、

「それは如何なる事か？」

「タジカラ殿は我らの味方。そして、イワレヒコ様も我らの味方に

「ございます」

「何と！」

ナガスネはわけがわからなかった。

「ウカシはヨモツの力を借り、兵を操っております。ヤマトの村を攻めたるも、その力によるものでございます。敵はウカシ。ヤマトではありませんぬ」

ナガスネはようやく全貌が理解できた。

「そうか。あの者、ヨモツと……。おのれ、ウカシめ」

ナガスネはヒノモトの城の方角を睨んだ。

「どちらが早くここに来るのか？」

クシナダは水を放ってから、

「ウカシが早いかも知れませぬ」

「そうか……」

ナガスネは歯ざしりした。

「私は、陛下の御ためと思い、戦って来た。しかし、ウカシがヨモツに通じていたとなれば、それも怪しくなる。彼奴の進言で動いた事もあったのでな」

「もうそれは過ぎたる事です。今はこれからを考えるのが先でございます」

クシナダは頭を下げて言った。ナガスネは苦笑いをして、

「そうだな。して、どうする、クシナダ？ このままでは我らはウカシの軍に蹴散らされるぞ」

「戻りましょう。ヒノモトの城から離れるのが良いでしょう」

「それしかあるまい」

ナガスネは手綱を引き、

「一同、行く先はこちらじゃ。ついて参れ」

と方向転換した。クシナダがそれに続き、兵達が更に続く。

「少しでも足止めになれば」

クシナダは水を使って罫を仕掛けた。

『む？』

ツクヨミが、クシナダの水の動きを感じた。

『どうしたんですか、ツクヨミさん？』

武彦が尋ねる。ツクヨミは、

『ウカシがまた城を発ったようです。多勢です。ナガスネ様を討つつもりです』

『急がないといけませんよ』

武彦は焦った。しかしツクヨミは、

『ご安心を、たけひこ様。クシナダ殿が足止めをしてくれましょう』
『くしなださん？』

『スサノ殿の奥方です』

武彦はチラッとスサノを見て、

『その人、強いんですか？』

『ええ。この国の女性で三番目に強いと思います』

三番目？ 一番はあの英語の先生に似ているオオヒルメさんで、二番目はアキツさんだから、その次か。それは凄いな。武彦はそう思い、クシナダがどんな女性なのか会ってみたくなった。

「大叔母様」

アキツはヒラサカの前で祝詞を唱えているオオヒルメに声をかけた。

「ナガスネの命が危ういか」

オオヒルメは振り返らずに言った。アキツは跪き、

「はい。ツクヨミ殿とたけひこ様がナガスネの元に向かっておりますが、ウカシはヨモツに通じる者です。安心できませぬ」

「そうだな。イザの命を強く受けている気配がする。ウカシという男、誠に怪しき者じゃ」

オオヒルメは目を閉じ、そう言った。

二十四の章 ウガヤの決断、武彦の動揺

オオヤシマの大きな揺れ。それは確実に闇の国ヨモツを引き寄せていた。

ヤマトの国では、国王ウガヤが軍師オモイと軍議を開いていた。嫡男であるイツセは、その知らせすら受けていない。

「イワレヒコ様は、ツクヨミに操られております。手立てを講じませぬと、取り返しのかぬ事になるかも知れませぬ」

オモイはウガヤに進言した。ウガヤはイワレヒコとイツセに蔑ろないがしにされたという思い込みから、オモイだけを頼りにしていたため、「私が自ら出陣する。そして、イワレヒコを操るツクヨミを討つ」と宣言した。オモイは跪いて、

「ツクヨミはアマノイワトにおります。アマノイワトを攻め、ツクヨミを討ち取る事が何よりも先でございます」

「そうだな」

オモイはウガヤを操ってはいない。ウガヤ自身がオモイに全幅の信頼を寄せているため、今や彼はオモイの意のままに動く愚者と成り果てていた。

イワレヒコ達は、馬に鞭を入れ、夜の闇の中を疾走していた。

「間に合うか？」

スサノが呟く。

「間に合わせる！ そうでなければ、オオヤシマは滅びる」

イワレヒコが怒鳴った。それはツクヨミの叫びでもあった。

（このまま、ヨモツの思い通りにさせてなるものか！）

「見えて来たぞ、スサノ。あれはナガスネの軍の松明たいまつの火だ」

タジカラが言った。前方に、ユラユラと揺れる小さな火が見える。

「おお、間に合ったか」

スサノは奥方クシナダの無事を感じた。

「クシナダがウカシに罾を仕掛けたようだ。足止めをしたらしいぞ」
「そうか。さすが、クシナダ殿だ」

タジカラが感心して言った。

「先に行くぞ」

イワレヒコが言った。タジカラとスサノは、
「え？」

と彼を見た。イワレヒコは馬ごと宙を舞い、まるで羽が生えたかの如くそのまま飛翔した。

『つ、ツクヨミさん？』

これには武彦も慌てた。

『大丈夫なんですか？ 怖いんですけど』

『ご心配召されますな。何も大事ありません』

ツクヨミの言葉に武彦はホッとした。

『最初からこうすれば良かったですね』

武彦は思ったままを口にしたのだが、

『申し訳ありません。この術、そう長くは保ちませぬので』

『そうなんですか』

ツクヨミの言葉通り、やがて馬は地上に戻り、また普通に走り出した。しかし、相当距離を稼げたようで、ナガスネ軍はもう目の前に見えていた。

「よーし」

武彦は誰もいないので安心して声を出した。

「もう少しですね、ツクヨミさん」

「はい、武彦様」

ツクヨミはそう答えたが、ナガスネ討伐を命じられて城を出たウカシの軍の気配も感じていた。

「我らと変わらぬ時で、ウカシが追いつきます。激しい戦になるかも知れませぬ」

「ええ？」

武彦はギクツとした。

その頃、ヤマトの城を目指していたタジカラの奥方であるウズメは、周囲に召喚していた八百万やおよろずの神々の言葉を聞いた。

「陛下御自らご出陣？ 如何いかなる事か？」

そしてウズメはウガヤの目指す先を知り、驚愕した。

「何と！ アマノイワトを攻むる？ 何という事を！」

彼女は進行方向を変え、アマノイワトへの近道に入った。

（何としても、陛下より先にアマノイワトへ！）

ウガヤはイツセに何も言わず、オモイと共に出陣した。国王直轄軍の大半で編成した大部隊だ。そんな大軍がアマノイワトに押し寄せれば、イワトは一瞬で攻め滅ぼされてしまう。

「ツクヨミばかりではない。オオヒルメもアキツも同罪。皆滅ぼす」
ウガヤはもはや正気を失っているようだった。オモイはそんなウガヤを見て、

（ヤマトは滅ぶ。イザ様のお心のままに）

イツセは部屋に籠っていたが、何やら胸騒ぎがして外に出た。

「何？」

彼は厩うまやに馬が一頭もない事に気づき、馬番に尋ねた。

「馬がおらぬようだが、イワレヒコの他に誰か出立したか？」

「国王陛下御自らご出立でございます」

馬番は跪いて答えた。

「何と！」

イツセは仰天した。

「オモイはどうした？」

「オモイ殿も同行しております」

オモイが同行している事を知り、イツセは呆然とした。

（如何なる事か？ この私に何も仰らず、オモイをお連れになると

は……)

「私の馬を引け。出立する」

イツセがそう命じると、馬番は、

「イツセ様には、お留守居役をとの仰せにございます」と頭を下げた。

「何ィ!？」

さすがに温厚なイツセも、あまりにも自分が蚊帳の外に置かれている事を知り、激怒した。

「オモイめ、父上をどうするつもりか？」

イツセは歯ぎしりし、城に戻った。

アキツは、巨大な悪意がアマノイワトに近づいているのを感じ、外に出た。

「まさか……」

彼女はウガヤの出陣を感じた。

「ウガヤ殿が自らここに向かっているのか？」

そしてオモイの存在も感じた。

「あの者、何を企む？ 只の異国人ではない……」

アキツの額に汗が滲んだ。その一方で、ウズメの気配も感じた。

「ウズメか？ 何としても、先にこちらに……」

アキツはウズメの到着を祈った。

ナガスネ軍も、イワレヒコの接近を察知していた。

「イワレヒコ様が？」

ナガスネはクシナダの水の報告を受けて尋ねた。クシナダは頷き、「はい。刹那の差ではありますが、イワレヒコ様の方がお早いお着きでございます」

「そうか」

ナガスネは後方から迫るウカシ軍の明かりを見やった。

ウカシも、ナガスネ軍に迫るイワレヒコを感じていた。

（おのれ、イワレヒコめ。貴様らの思い通りにはさせぬぞ）
彼はオモイがアマノイワト攻めに出陣した事を知らない。

（オモイめ、おめおめとイワレヒコを出してしまっておつて。やはり
彼奴は俺とは組まぬつもりか？）

ウカシはオモイとの共闘を見限った。

ヤマトの王女であるイスズとその母タマヨリは、イスズの部屋で
身体を寄せ合って泣いていた。

「母上、オオヤシマは如何なる道を進むのでしょうか？」

イスズは涙に濡れる目をタマヨリに向けた。

「わかりませぬ。我らには如何様にもできぬ事なのです」
タマヨリも目を潤ませている。

（たけひこ様、オオヤシマをお救い下さい）

イスズは心の中で祈った。涙が彼女の頬を伝った。

『？』

ツクヨミの反応を武彦が感じ、

『どうしたんですか、ツクヨミさん？』

『ウガヤ王がアマノイワトに向かっています。イワトを攻むるおつ
もりのようです』

『ええっ！？』

アマノイワトには、幼馴染みである都坂亜希みやこぞかあきに生き写しのアキツ
がいる。武彦は動揺した。

『ウカシの軍を討ち、すぐにイワトに向かわねばなりません』

『はい』

武彦は、前方に見えて来ているウカシ軍の松明の明かりを睨んだ。

そしてこの戦いが、オオヤシマに大きなうねりを作り出す事を、
武彦だけでなくツクヨミすら気づいていなかった。

二十五の章 ウズメの決心、ツクヨミの閃き

ヤマトの国の王子イワレヒコはヒノモトの国の將軍ナガスネの部隊に合流した。

「間に合って何よりであった」

あまりに雰囲気の違うイワレヒコに、ナガスネは戸惑っていた。

（あの非道さが微塵も感じられぬ。如何なる事か？）

「話は後だ、ナガスネ。まずはウカシを蹴散らすぞ」

「はは」

つい頭を垂れる自分に驚くナガスネである。イワレヒコは、神々しさを漂わせていたのだ。

『ツクヨミさん、どうしよう？』

目の前に迫るウカシ軍を見て、武彦は怖くなっていた。

『ご案じ召されますな。我が言霊がお導き致します故』

ツクヨミの言霊がイワレヒコを包む。

『ああ！』

武彦は、自分がとても強くなったような気がした。

「ナガスネ、ついて参れ！」

イワレヒコは馬に鞭を入れ、ウカシ軍に突進する。ウカシ軍は、クシナダが仕掛けた罠で幾人かの兵を失ったが、その大半はまだ健在である。

「怯むな！ 我が軍は敵の数十倍ぞ！ 叩き伏せよ！」

ウカシは相変わらず陣の最後方から命令している。

「ウカシめ、己は大事なところで！ 許さぬ！」

スサノが凄まじい勢いでウカシのいる場所へと馬を駆った。

「お館様、危のうございます！」

クシナダが慌てて水の陣を張り、夫スサノを追った。

「私も遅れは取らぬ！」

タジカラも大声で叫び、イワレヒコを追う。

「うおおお！」

イワレヒコの強さは神懸っていた。イワレヒコ本来の強さに加え、ツクヨミの言霊が補助しているため、まさに天下無双の勢いである。その上、ヒノモト軍の兵達は、全員ヨモツの水を飲まされているので、ウカシの命令がないと、只の木偶の坊同然なのだ。

「おのれえ！」

ウカシは迫り来るスサノから逃げるため、馬に跨ると戦場から離れた。

「逃さぬ！」

スサノが鬼神の如き形相でこれを追った。

「お館様！」

クシナダの水の陣は、スサノの放つ気のせいで、ついて行けなくなっていた。

『？』

ツクヨミは逃げるウカシから、奇妙な気を感じていた。

『どうしたんですか、ツクヨミさん？』

武彦が話しかける。

『ウカシの気が妙です。ヨモツの気とは違う……。これは？』

ツクヨミは更に探ろうとしたが、できなかった。スサノがウカシに追いつき、その首を刎^はねたのだ。

「ウカシを討ち取ったぞ！」

スサノが叫んだ。その瞬間だった。

「何!？」

首を失って馬から転げ落ちたウカシの胴体から、黒い炎が噴き出したのだ。

「お館様！」

クシナダが水でスサノを防御し、黒い炎から守った。

「今のは？」

スサノは馬を反転させ、ウカシの胴体から離れた。

「何事か!？」

ナガスネも馬を止め、ウカシの異変に目を見張った。

「むむ？」

タジカラも眉をひそめ、ウカシを見ている。

「皆退くのだ！ それはヨモツの罠。その黒火に触れれば、死人^{しびと}になるぞ！」

イワレヒコが叫んだ。

（ウカシは、ヨモツの黒火を運ばされておったのか……。何と惨^{むご}い事を！）

ツクヨミは、ヨモツの戦略に怒りを感じた。

スサノとクシナダは、ナガスネを守るように黒火から離れた。タジカラもイワレヒコに付き従い、遠巻きに火を見ている。

「兵達を救う事はできぬのか？」

黒火に取り込まれるヒノモトの兵を見て、ナガスネが呟く。

「兵共はウカシがヨモツの水を飲ませておる。如何様にもならぬ」
イワレヒコが言った。

「あの火、ウズメさまでしたら、消せますものを……」

クシナダが悔しそうに言った。タジカラも頷き、

「まさに……。ウズメがおれば……」

ウズメなら神降ろしで黒火を浄化できる。しかしそのような事を思ってみても仕方のない事である。

そのウズメは、ヤマトのウガヤ王の軍とアマノイワトへの競争をしていた。

（何としても、オオヒルメ様とアキツ様だけはお守りせねば！）

彼女は、馬が潰れても良いと思いつながら、イワトを目指していた。

ヒノモトの王子であるウマシは、ウカシが死に、軍が壊滅し始めた事も知らず、自分の側近達を伴い、勝ち戦に参加すべく、ゆつくりと進軍していた。

「先にウカシの軍に戦わせ、一番の手柄はこちらで頂く」

どこまでも卑屈な男である。

「ウマシ様、ウカシ殿の軍勢が、敗走しております」
参謀が告げた。ウマシはまさに仰天した。

「何と！如何なる事か？」

「わかりませぬ。敵軍は、イワレヒコ様、そしてタジカラ殿としかわかっておりませぬ」

ウマシは自分の実力を把握していない男であるが、イワレヒコとタジカラが揃っているのを聞いては、負け戦になると考えた。

「引き揚げじゃ！ 城に戻るぞ」

ウマシは慌てて撤退を始めた。

「ヒノモトは滅ぶぞ」

あまりにも不甲斐ない跡継ぎを見て、参謀役の老兵はそう呟いた。

その参謀の放った伝令兵が、ヒノモトの城に到着していた。

「ウカシ様、討ち死ににございます」

その報告を聞き、ホアカリ王は妃トミヤを見た。

「陛下、もはやこれ以上の戦は意味がございませぬ。すぐにでも出立し、ウガヤ様とお会いなさいませ」

「そうだな」

ホアカリは決意し、出立の準備に取りかかった。

「これでようやくオオヤシマに安寧が訪れます……」

トミヤは涙ぐんで呟いた。

また、ウカシ軍の動きを探っていたウガヤ軍の斥候も、ウガヤに報告をしていた。

「ウカシが討ち死にな？」

ウガヤは軍師オモイを見た。オモイは頷き、

「ヒノモトは滅びの道を歩み始めたようです。ツクヨミを討ち取りし後は、ヒノモトを滅ぼしましょう」

「うむ」

ウガヤもニヤリとして応じる。

（ウカシめ、しくじりおったな。やはり、ツキはこの私にある）
オモイはウガヤに見えぬようにニツと笑った。

「アマノイワトの前に、ウズメ殿がおります」

先発の兵が告げた。ウガヤはキツとして、

「ウズメめ、一体どこにおったのか？」

と前方を睨み据えた。

「間に合って良うございました」

ウズメは、跪いてアキツに言った。アキツは微笑んで、

「ありがとう、ウズメ。貴女にとってウガヤ殿は主君。これは謀反であると言うのに」

「いえ、私の仕えしは、オオヒルメ様、そしてアキツ様にございます。ウガヤ様は、私の仕える方ではありません」

ウズメの言葉にアキツは涙を流した。

「先程、我が夫タジカラに使いを送りました。もうすぐ千万の味方よりも頼りになる方々が参りましょう」

「ええ」

アキツはツクヨミからの言霊で、イワレヒコとタジカラ、そしてスサノとクシナダが一緒なのを知らされていた。

イワレヒコ達は、ヨモツの黒火が大きくなって行くのを見ていた。
「このまま収まらぬとなれば、オオヤシマは如何なる事になるのか？」

タジカラは黒火を見上げて呟いた。

（タジカラ様の仰る通りだ。この火を抑えぬうちは、アマノイワトに向かう事もできぬ）

さすがのツクヨミにも、この黒火は手の施しようがなかった。

「む？」

そこへウズメの放った八百万やおよろずの神が到着した。タジカラがそれを

感じ、

「ウズメがアマノイワトにあります。どうやら、陛下がイワト攻めをされるご様子です」

イワレヒコはその言葉に反応して、

「それは承知。しかし、この火を始末せぬ限り、ここから離るる事はできぬ」

クシナダも水を使ってみるが、黒火は消せなかった。

「この火、水では消せぬ。如何致す、タジカラ？」

スサノが尋ねた。タジカラはそれには答えず、イワレヒコを見る。ナガスネもイワレヒコを見ている。

『ツクヨミさん、言霊で火を消せないんですか？』

武彦が尋ねた。ツクヨミは、

『できませぬ。この世ならざりしものは、言霊では如何様にもなりませぬ故』

『そうですか。どこかに飛ばせばいいのになあ』

武彦の何気ない一言が、ツクヨミに閃きを与えた。

『そうですね。それは良い考えでございます、たけひこ様』

『そうなんですか？』

武彦は面食らってしまった。

二十六の章 イザの悪意、ツクヨミの叫び

イワレヒコ一行の前で勢いを増して燃え広がる黒き炎。ヨモツの火である。普通の水では消せぬばかりか、勢いを増させてしまう。

「皆の者、離れよ。今から私が、この火を飛ばす」

イワレヒコが剣を構えた。

「如何なさるおつもりです、イワレヒコ様？」

タジカラが尋ねた。イワレヒコは炎を見据えたままで、

「この炎を、ウズメが元に飛ばす。ウズメに鎮めてもらうのだ」

「何と!？」

タジカラはイワレヒコの途方もない作戦に啞然とした。ナガスネやスサノ達も驚愕している。

「そのような事、おできになるのですか、イワレヒコ様？」

スサノが言った。イワレヒコはチラッとタジカラ達を見て、

「見ていよ」

と言い放つと、ブワンと剣を振り回した。

『たけひこ様、先ほどの手筈通りに参ります』

ツクヨミが声をかける。

『わかりました、ツクヨミさん』

「我ヨモツの焰ほむらを舞いに舞わせて届かせん！」

ツクヨミの言霊が、ヨモツの黒い炎にぶつかった。言霊は炎の周囲の空気を捕らえ、炎を宙に浮かばせた。

「いざ行かん！」

イワレヒコの声に合わせて、炎は遙か彼方へと飛び去った。

「おおお！」

ナガスネ、スサノ、タジカラが、異口同音に叫んだ。クシナダはすっかり驚き、天を仰いだままである。

（す、凄い……。何たるお力）

『そして、ウズメ様にお伝え致します』

ツクヨミは更に言伝の言霊をウズメに放った。

『やりましたね、ツクヨミさん』

武彦はホッとしたが、ツクヨミはまだ気を抜いていない。

『まだです。ウガヤ様が進軍、お止めせねばなりません』

『ああ、そうでした！』

イワレヒコは馬に跨った。

「さて、時が惜しい。行くぞ、皆の者！ 父上をお止めせねばならぬ！」

「はは！」

イワレヒコ、タジカラ、スサノに加えて、クシナダ、ナガスネと、オオヤシマの名立たる武将が一斉に馬を走らせ始めた。

闇。一切の光が入り込まない世界。そこがヨモツ。イザ女王の支配する国だ。もちろん、彼らはそんな闇の中でも眼は見える。だから何も不自由はない。

「イザ様」

ヨモツの国の兵であるシコメが跪いて報告する。シコメには性別はない。姿は半身が腐りかけた女性に見える。

「如何した？」

女王イザ。その姿は美しい巫女。しかし、着ている服は全て漆黒。頭を飾る王冠すら黒。彼女に瞳はなく、眼は只黒い。長い髪は足元にまで及ぶ。

「ウカシめがしくじりました。如何なさいますか？」

シコメの言葉に、イザはニヤリとし、

「大事なし。まだ我には駒あり」

「左様で」

シコメは額ずいて応じた。

その頃ウズメは、ツクヨミからの言伝の言霊を受け取っていた。

(何と、ヨモツの焰?)

彼女はすぐさま、八百万やおよろずの神の中から、海神わだつみを召喚し、黒火を待ち構えた。

「ウズメ、如何したのですか？」

ウガヤ軍の進撃を見ていたアキツが尋ねる。

「ツクヨミ殿が、ヨモツの？をこちらに……」

ウズメの言葉にアキツはハツとした。

「ウカシがヨモツの？を運んでいたのか？」

「そのようです」

ウズメは悲しそうに答えた。

「何という事を……。ヨモツ、誠に許し難し！」

アキツは声を荒げた。そして、

「ウガヤ殿もそこまで参っておる。ウズメ、巻き添えにしてすまぬ」

「恐れ多きお言葉にございます、アキツ様。私はオオヒルメ様とアキツ様の御ためならば、いつでもこの命、差し出す覚悟です」

ウズメの顔は真剣そのものである。アキツは目を潤ませ、

「ありがとう、ウズメ」

とウズメの手を握りしめた。

ウガヤの軍は、遂にアマノイワトの前に到着した。

「如何致す、オモイ？」

ウガヤは馬上から軍師オモイに尋ねた。オモイは跪き、

「イワトは大きな洞穴にございます。そしてその奥はヒラサカ、更にその奥はヨモツに通じております。焼き払うが宜しいかと存じます」

「そうか」

ウガヤはニヤリとした。彼にとって、オオヒルメもアキツも、もはやどうでも良い存在なのだ。ヒノモトも軍が崩壊し、返す刀で攻め入れば、たちどころに滅ぶ。すでにオオヤシマの支配者は自分。そう確信したウガヤは、その心に鬼が棲み始めていた。

「火を放て。オオヒルメ、アキツ諸共、ツクヨミを焼き殺してしま
うのだ！」

ウガヤがそう命じた時、空からヨモツの黒火が降って来た。

「何事ぞ!？」

ウガヤは狼狽えた。オモイも仰天していた。

(これはヨモツの? 何故それが天から?)

さすがの彼にも何が起こったのかわからなかった。

「おお！」

ヨモツの? が進軍するウガヤ軍とイワトの間に降り、その行く手
を阻んだのを見て、アキツとウズメは思わずそう叫んだ。

「お見事です、ツクヨミ殿は。ウガヤ様を止めました」

「ええ」

ウズメは感動している。アキツはツクヨミの力に驚嘆しながらも、
感謝していた。

「さて、ここより先は進ませぬ！」

ウズメが降臨させた海神が、ヨモツの黒火を浄化する。黒火は海
神を恐れるかのようにウガヤ軍の方へと広がり始めた。

「ええい、何じゃ、この火は!？ 早う何とかせぬか！」

ウガヤは黒火の恐ろしさを知らないため、兵達に消火命令を出し
た。

「陛下、これはヨモツの? にございます。人には消せませぬ」

オモイが慌てて進言した。

(冗談ではない。この私が、ヨモツの? に焼かれて死ぬるなど、ご
免被る)

「一度お退き下さいませ」

「ううう……」

ウガヤは悔しそうにイワトを睨んだが、

「全軍、退け！」

と命じた。ウガヤ軍はヨモツの火に追い立てられるように後退した。

「ウガヤ様の兵が、立ち往生しておりますな」

水に調べさせたクシナダが告げた。

「そうか。ヨモツの？が父上を止めたようだな」

イワレヒコが言った。タジカラはチラツとイワレヒコを見た。

（あれもまた、ツクヨミの力なのか？ 誠に恐るべき男よ）

「イワト攻めは何としても止めねばならぬ。イワトが攻められれば、ヨモツが雪崩を打ってオオヤシマを攻むる事となろう」

イワレヒコはそう言うのと、また馬を走らせた。タジカラ、ナガスネ、スサノ、クシナダの順でそれに続く。

ヨモツの女王イザは、ウガヤ軍とイワレヒコ達が接近している事を知った。

「時は満ちる。オオヤシマは闇に染まる」

彼女はニツと笑い、闇の中に消えた。

「ぬっ？」

ヒラサカで祈り続けていたオオヒルメが異変に気づいた。

「如何なる事か？ 闇がヒラサカの向こうだけではなく、イワトの外からも迫っておる……」

オオヒルメの額を汗が伝う。

「イザめ、何を企む……」

彼女は唇を噛み、身体を震わせた。

二十七の章 オオヒルメの思い、ツクヨミの焦り

アキツは、オオヒルメの心の揺れに気づき、イワトの奥を見た。

「大叔母様！」

オオヒルメの命が危うい。アキツは顔を引きつらせてオオヒルメの居場所へと向かう。

「ここを頼みます、ウズメ」

「は、はい」

ウズメはアキツの慌てように驚いていた。

（やはり、ワの国の王家の方々は、私達にはわからぬ心の通い合いがあらせられるのか……）

ウズメは退却して行くウガヤ軍を見ながら思った。

「陛下、イワレヒコ様の馬がこちらに向かっております」

伝令兵の報告に、ウガヤは蒼ざめた。

「イワレヒコだと！？」

彼奴あやつはこの父を弑しいするために参ったのか？ 兄であるホアカリを殺そうと考えているウガヤには、そのような発想しかない。

「イワレヒコ様はツクヨミに操られておいでです。どのようなお話も、ご承諾なさいますな」

オモイが提言した。

「無論じゃ」

ウガヤは不愉快そうに言った。

「父上の軍か？」

イワレヒコが呟いた。タジカラが頷き、

「そのようです。何やらこちらに向かっておるようですが……」
と訝しそうに言った。スサノが、

「もしや、我らをお討ちになるつもりでは？」

「まさか！」

クシナダが驚く。するとナガスネが、
「あり得る。ウガヤ様に同行しているのはオモイ。彼奴は何を考えているのかわからぬ男よ。どのような企みを持っているのか」

「いろいろと思いを巡らせてみても何もならぬ。父上にお会いし、この戦、止めねばならぬのだ」

イワレヒコは各自の推測を打ち消し、馬を進めた。タジカラとサノは顔を見合わせてそれにつき、クシナダはナガスネに目配せしてそれ続いた。

その頃、ヒノモトの王ホアカリは嫡男ウマシを引き連れ、城を出立していた。

「ウガヤよ、早まった事を為すでないぞ……」

兄はその激しき気性の弟を心配していた。

「オオヤシマはワの国の王家を戴いてこそ栄えるのだ。我らが頂きに立つ事はならぬのだ」

ホアカリは自分に言い聞かせるように呟いた。

（父上はお心が脆弱過ぎる。やはりここは私が……）

身の程を知らぬウマシは、ホアカリの心を理解する事はなかった。

オモイは、イワレヒコの一行にナガスネが同行している事に気づいた。

（そうか。なるほど。そういう事か……）

彼はニヤリとした。

（つまりは、ウカシは始めからイザ様の捨て駒であったという事よ。私こそが、イザ様の真の使い。このオオヤシマを闇に染めるための先駆け）

オモイは得意の絶頂であった。

「陛下、イワレヒコ様のそばにナガスネがおります。あの者こそ、此度の戦の元にございます」

オモイは囁くようにウガヤに言った。ウガヤは前方を睨みつけ、「そうであったな。ナガスネが怪しき事をせねば、我が兄ホアカリも戦を起こさなんだ。全てこれ、あの者に発するものである」

「はい」

オモイは応じながら、

（さて。いよいよ、このオオヤシマが闇に埋もれる時が来たぞ）
と思い、低い声で笑った。

イザはヨモツの兵を集結させていた。

「時は満ちたり。これより我らはヒラサカを越え、オオヤシマを統べるために進軍する。我らこそが、オオヤシマの主である事を示す時が来たのじゃ」

イザはその真っ黒な目を見開き、兵達を鼓舞した。闇の国ヨモツに凄まじい熱気が巻き起こっていた。

「おおーっ！」

兵達が雄叫びを上げる。皆、顔の半分が腐り落ちている。死人^{しにん}である。

「まずはうぬらが行くが良い、シコメよ」

イザは、歩兵軍団の指揮を執るシコメに命じた。

「はは！」

シコメはその腐りかけた身体で跪き、答えた。

オモイは、その視界にナガスネを捉えている。

（イザ様、扉を開きますぞ）

オモイはニヤリとし、妙な言葉を唱え始めた。いや、それが言葉であったのかもわからない。

「む？」

ウガヤは、オモイの馬が止まったのに気づき、オモイを見た。

「如何した、オモイ？」

しかしオモイは答えない。彼が何かを喋っているのは、ウガヤの

位置からもわかった。

「オモイ！」

返答をしないオモイに苛立ち、ウガヤは馬を近づけた。その時である。

「ぬお!？」

ウガヤにはオモイから何かが放たれたように見えた。いや、そう見えただけで、実際には何も放たれていない。オモイが放ったのは、ヨモツの世界で言う「鍵^{かぎ}」であった。

「陛下、もうしばしお待ちを」

オモイは意味ありげにそう言った。何の事かわからないウガヤは憤然とし、

「如何なる事か？」

と尋ねたが、オモイは笑っているだけで何も答えない。

『何!？』

ツクヨミは、前方から迫る妖氣に気づいた。

『オモイが何事か仕掛けたのか?』

ツクヨミは言霊でそれを防ごうとしたが、妖氣は言霊を弾き飛ばしてしまった。

『どうしたんですか、ツクヨミさん?』

武彦がツクヨミの動揺に気づいて尋ねた。

『ヤマトの軍師であるオモイが、妖氣を放ちました。防ごうとしましたが、弾かれました』

『え?』

次の瞬間、オモイの放った「鍵」がナガスネを襲う。

「ぐおお!？」

突然ナガスネが苦しみ出す。スサノとクシナダが慌てた。

『そういう事か』

ツクヨミはオモイの策に乗せられた事に気づき、齒軋りする。

「ふおおお!」

ナガスネの悶絶は更に酷くなり、彼は馬から転げ落ちた。

「ナガスネ様！」

スサノとクシナダが馬を降り、ナガスネに駆け寄る。

「ぬう？」

タジカラもナガスネの異変に驚愕し、馬を戻した。

「妖気か？」

彼はナガスネの悶絶の原因に気づき、

「ウズメーッ！」

と妻に救いを求めた。

そのウズメは、ヨモツの黒火を押し留める事で手一杯になっていた。
た。

（如何なる事か？ 先程より焰ほむらの勢いが増しておる……）

炎が大きくなって来ている。それは、ヨモツの接近を示していた。

「オオヒルメ様、アキツ様！」

ウズメは二人の安否が気になった。

ツクヨミは妖気をナガスネから追い出そうとしたが、言霊は弾かれてしまい、成す術がない。

「ナガスネ様！」

クシナダも水で浄化しようとするが、水がナガスネに近づけない。

「妖気が尋常ではありませぬ。このままでは……」

クシナダの目に涙が浮かんだ。

「泣くな、クシナダ！ 考えるのだ！」

そう言うスサノも、すでに泣いていた。二人共、ナガスネを助けられない事を悟っているのだ。

「ぐおおお！」

ナガスネは地面をのた打ち回っている。

『ツクヨミさん』

武彦が声をかけた。ツクヨミは、

『何もできません。私は無力です』

と悔しそうに答えた。

（何故だ？ 何故言霊を弾く？ まさか……）

ツクヨミは謎の答えに至った。もしそれが真実であれば、ナガスネから離れないとここにいる全員が死ぬ事になる。

「く！」

しかし、ツクヨミより早く、「鍵」が反応した。

「ぶおおお！」

ナガスネの全身から漆黒の妖気が噴き出し、彼は絶命した。そしてその妖気はそばにいたクシナダとスサノに襲いかかった。二人は水と炎でそれを防ぎ、難を逃れた。続いて妖気はイワレヒコとタジカラに襲いかかった。

「は！」

クシナダが水を使い、タジカラとイワレヒコを助けた。妖気はそれでもなお、二人を、いや、イワレヒコを襲った。

「うわ！」

イワレヒコは妖気を食らってしまい、倒れた。

「ああ！」

武彦は、その衝撃でイワレヒコの身体から弾き飛ばされてしまった。

「たけひこ様！」

ツクヨミはつい声に出して叫んでしまった。

「わあああ！」

武彦はそのまま、オオヤシマから消えた。

「ううううう！」

イワレヒコは、本来であれば武彦の魂が抜けてしまったのであるから、動かなくなるはずだった。

「何と！」

ツクヨミは、自分のかけた封印が解けてしまっている事に気づいた。

「ぐああああ！」

イワレヒコは叫び、走り出した。彼はヤマトの軍に突っ込むと、兵を次々に剣で斬り殺し、ウガヤに向かった。

「イワレヒコ！」

ウガヤは、自分の息子の狂気に仰天し、馬を反転させて逃げ出した。

「ヤマトもこれで滅ぶ……」

オモイはイワレヒコの殺戮を見て眩いた。

（何がどうなっておるのだ？）

ツクヨミには全くわからなかった。

「大叔母様！」

アキツがヒラサカに着くと、オオヒルメは、

「来てはならぬ！ お前はイワトを出よ」

「え？」

アキツにはオオヒルメの言葉の意味がわからない。

「行くのだ、アキツ！」

オオヒルメがそう叫んだ瞬間、ヒラサカが吹き飛び、岩のいくつが彼女を直撃した。

「うろう」

オオヒルメはその衝撃で跳ね飛ばされ、倒れた。身体からたくさん血が流れ出している。

「大叔母様！」

アキツが近づこうとすると、

「ならぬ……。行くのじゃ、アキツ……」

とオオヒルメが虫の息で言った。アキツはそれでも彼女に駆け寄った。

「え？」

ヒラサカの向こうから、不気味な声が聞こえる。

「アキツ、もはや私は助からぬ……。ヒラサカの封も破られた……」。

ここももう仕舞いじゃ。逃げよ」

「そのような事、できませぬ！」

アキツはオオヒルメを抱きかかえて歩き出す。

「ならぬ、アキツ……。このままでは、お前までヨモツの餌食となる。一人で行くのだ」

「大叔母様……」

アキツは涙で濡れる目をオオヒルメに向けた。オオヒルメも涙を流し、

「行くのだ、アキツ」

「はい」

オオヒルメの強い眼差しに諭され、アキツは断腸の思いで彼女をその場に残すと、走り出した。

「さあ、そう簡単にはここは通さぬぞ、ヨモツの魔物共。我が力、思い知るがいい！」

オオヒルメは最後の力を振り絞って、身体を起こした。

「ああ！」

武彦は自分の部屋のベッドの上で目を覚ました。

「ここ、僕の部屋か……」

ホッとすると同時に、ツクヨミ達の事が心配になった。あの無敵と思っていたツクヨミが苦戦していたのだ。

（大丈夫なのかな？）

自分ではどうする事もできない歯痒さに、武彦は両手を強く握りしめた。

二十八の章 武彦の迷い、イザの嘲笑

朝になつていた。

いわがみたけこ

磐神武彦は、アキツやツクヨミ達の事が気にかかつていたが、自分の世界に戻ってしまった以上、どうする事もできない。彼らが召喚してくれなければ、武彦にはなす術はないのだ。

そして、自分の世界に戻った事で、姉美鈴や、幼馴染の亜希の事を思い出した。

(姉ちゃんに嘔吐いたままだ)

その事が心に重くのしかかって来た。

「正直に話そう。おかしくなつたと思われても、それが一番いい」
武彦は決断し、部屋を出た。

「おはよう」

キッチンで母珠世と共に料理をしている美鈴に声をかける。

「おはよう。昨日うなされていたみたいだけど、大丈夫か、武彦？」
美鈴が尋ねた。武彦はギクツとしたが、

「だ、大丈夫だよ」

と答えてから、

「ちよつと話があるんだけど」

「何？」

武彦は美鈴をキッチンから連れ出し、廊下に出た。

「何よ、朝は忙しいんだから！」

ムツとする美鈴に武彦は、

「今夜全部話すよ。取り敢えず、ゴメン」

「は？」

いきなり謝られて呆然としてしまう美鈴。武彦はサッサとキッチンに戻ってしまう。

「何なんだ、あいつ？」

美鈴はどうとう弟がおかしくなってしまったのか、と心配になっ

た。

その頃、武彦がいなくなってしまったオオヤシマは、荒れ狂うイワレヒコにせいで、ヤマトの兵が一人残らず斬り殺されてしまった。「まさに鬼神が如き強さ……」

スサノもタジカラも、イワレヒコの迫力の前になす術がない。クシナダが水でイワレヒコを縛ろうとしたが、イワレヒコは剣で水を弾いてしまった。

「そんな……」

クシナダは啞然とした。

（妙な……。イワレヒコ様の封が解けたとしても、あのご様子は面妖だ）

ツクヨミはイワレヒコの変貌を怪しんだ。

（もしや、イザが何か仕掛けたのか？）

するとイワレヒコは、接近してくるヨモツの炎に突進し、

「うごおおお！」

と雄叫びを上げ、炎を吸い込み始めた。

「何と！」

これには、ツクヨミ達全員が驚愕した。

（やはりイワレヒコ様は、イザに……）

ツクヨミはこの危機を打開できるのは、アキツしかいないと考え、アマノイワトに向かった。

他方、アキツとウズメは、勢いを増すヨモツの炎を押し留めるために、力を尽くしていた。

「アキツ様……」

ウズメも限界に達していた。アキツも同様である。その時、炎の勢いが弱まって来た。

「？」

アキツとウズメは、顔を見合わせた。

「これは？」

二人共、何が起ったのかわからない。

やがて炎は完全に消滅し、その向こうにイワレヒコが姿を現した。

「イワレヒコ様！」

ウズメは一瞬歓喜の声を上げたが、イワレヒコから発している妖気に気づき、ギョツとした。

「アキツ様、イワレヒコ様が！」

「ヨモツに取り込まれたようですね」

アキツの顔色が悪い。

（たけひこ様の魂が感じられぬ。あちらの世界に戻されてしまったのか？）

「アキツ様」

そこにツクヨミが姿を現した。ウズメは知ってはいたが、こうも完全に姿を消せるツクヨミにビクツとした。

「ツクヨミ殿、これは如何なる事ですか？」

アキツが尋ねた。ツクヨミはイワレヒコを見たままで、

「ナガスネ様から噴き出した妖気が、イワレヒコ様のお身体から、たけひこ様の魂を追いついてしまいました」

「何と！」

アキツは事の重大さに驚いた。ツクヨミは齒軋りして、

「今、イワレヒコ様はイザが術中にあります」

アキツは改めてイワレヒコを見た。そして、その後ろで嘲笑うイザの姿も見た。

「イザ！」

アキツは怒りに震えた。

「ぐおおおお！」

イワレヒコが大声で叫び、アキツ達に向かって走り出した。ツクヨミが言霊を飛ばす。

「留まれ！」

しかし、イワレヒコは止まらない。ツクヨミは啞然とした。
(やはり、イザの力か……)

ヤマトのウガヤ王は、イワレヒコがアキツ達のいるイワトに向かったのを知り、ホツとして馬を止めた。

「イワレヒコめ、血迷うたか」

ウガヤは隣にいるオモイを見た。

「そのようで。ツクヨミの術で、お心が壊されたのやも知れませぬな」

オモイは頭を下げて答え、ニヤリとした。

(そして今、ヤマトには兵はおらぬ)

「退くぞ、オモイ。このままでは、我らも危うい」

「はは」

ウガヤは馬をヤマトに向けて走らせた。

ヒノモトの王ホアカリは、嫡男ウマシと共にアマノヤス川を越え、ヤマトの領内に入っていた。

「久方ぶりに、この地に足を踏み入れたな」

ホアカリは周囲を見渡し、感慨に耽った。

「父上、そのような事、後になさいませ。今はウガヤ叔父とお会いになるのが先にございます」

ウマシは苛立って言った。彼はどこまでも愚鈍な父親が疎ましいのだ。

「そうであったな」

ホアカリはそんなウマシの暴言にも怒らず、只苦笑いをして馬を進めた。

(ウガヤ、オオヒルメ様とアキツ様は、オオヤシマの宝。決して悪しき事を考えてはならぬぞ)

心配する兄の心は、弟に届いていない。

ツクヨミ達は、ジリジリと間合いを詰めて来るイワレヒコと対峙していた。

やおよろず
「八百万の神でも、イワレヒコ様はお止めできません」

ウズメも焦っていた。アキツが、

「この場は私が！」

と言うと、オオヤシマ中に響くようなかしわで柏手を四回打った。ツクヨミとウズメは、その荘厳な響きに驚愕した。

「悪しき心、祓いたまえ！」

アキツが叫ぶ。その声がイワレヒコに届いた瞬間、イワレヒコが苦しみ出した。

「ぐううおおおお！」

彼は膝を折り、剣を投げ出し、頭を抱えた。

「清めたまえ！」

アキツはもう一度柏手を四回打った。

「ふぐわあああ！」

イワレヒコは遂に地面に倒れ、のた打ち回った。

（何と……。やはり、オオヤシマ一と謳われたアキツ様だ）

ツクヨミは、彼女の力にすっかり魅了されていた。ウズメも同様である。

「!？」

イワレヒコの身体から、ボウツと黒い妖気が飛び出し、アキツの清らかな気で浄化された。

「うおおお……」

イワレヒコは動かなくなった。

「これでイワレヒコ殿は大事なはずです」

アキツはフウと息を吐いて言った。ツクヨミはイワレヒコに駆け寄り、

「お眠り下さい」

と言霊を飛ばした。言霊がイワレヒコに浸み込んだ。確かにイワレヒコは元に戻ったようだ。

「む？」

アキツ、ウズメ、ツクヨミの三人は、一斉にイワトの奥を見た。

「さすがアキツじゃ。じゃが、まだこれからよ」

そう言ってイワトの奥から現れたのは、たくさんの兵を従えたヨモツの女王イザであった。ウズメはその姿を見ただけで、震えが止まらなくなった。ツクヨミも声が出ない。それほどイザの妖気とその存在感は強烈であった。

「あああ！」

アキツが絶叫した。ツクヨミはイザが右手に持っている黒い塊に気づき、ギョツとした。

「!？」

それは、オオヒルメの首であった。イザがオオヒルメを殺したのだ。

「大叔母様！」

アキツは涙を流しながらもイザを睨み、

「おのれ、イザ！　よくも大叔母様を！」

イザは熱くなるアキツをせせら笑って、

「この我に齒向かう者は、何人なにびとであろうと殺す」

「ううう！」

アキツはまた柏手を打った。しかし、イザは動じない。

「そのような児戯にも等しい呪いまじなが、我に通じると思うのか、アキツ？」

イザの言葉に、アキツは何も言い返せない。

「わかっておるようだな。さもありなん」

イザはニヤリとした。

「我は、オオヒルメが大伯母であるのだからな」

ツクヨミは、イザの言葉の恐ろしさに思わず身震いしてしまった。

二十九の章 アキツの決意、ウマシの悪意

オオヤシマは破滅へと動き出してしまったのだろうか？

アキツ、ツクヨミ、ウズメの三人は、闇の国ヨモツの女王であるイザを前にして、動けなくなっていた。

（イザが、我が祖に連なりし者だということのか？）

イザが、

「我はオオヒルメの大伯母」

と言ったので、アキツは酷く動揺していた。自分と同じ祖先を持つイザ。これをどう受け止めればいいのか？ 彼女は混乱している。（イザが我らと同祖であるなら、私の如何なる術も通じぬ。やはり、我が命を賭して……）

ツクヨミは、アキツの思い詰めた顔に気づいた。

「アキツ様、まだそこまでお考えになるは、早うございます。我らは敗れた訳ではありませんせぬ」

「しかしツクヨミ殿……」

圧倒的な呪力と妖気を有するイザに対して、自分達はあまりに無力。アキツは絶望しかけていたのだ。

「そのようなアキツ様、私は好きではありませんせぬ」

ツクヨミの言葉に、アキツはビクツとした。ウズメもアキツを見て、

「私もツクヨミ殿と同じです。まだ我らは死んだ訳ではありませんせぬぞ、アキツ様」

ツクヨミ達の言葉が聞こえたのか、イザはニヤリとした。

「ほう。まだ我らに抗うか？ あらがどこまでも愚かな事よ。死ぬるだけぞ」

「お前に従いし時も、死ぬる事となるのであろう！？」

アキツはツクヨミとウズメの言葉に力を得て、イザの嘲りに反論

した。

「同じ死ぬるなら、抗う事を選ぶか？ さてもおかしきは己らの思いよ」

イザにはそこまでして逆らうアキツ達の心情が理解できないらしい。高笑いを始めた。

「我が出張る迄もなし。こやつ等で十分よ」

イザはそう言い捨てると、背を向けてイワトの奥へと消えてしまった。そこに残されたのは、数多くのヨモツの兵。シコメと呼ばれる半身が腐った魔物である。

「アキツ様！」

ウズメがアキツを庇うように退く。ツクヨミもイワレヒコを抱え、シコメ達から離れた。

「イザ様に逆らう者は全て滅する。かれ！」

シコメの中の隊長らしき者が、兵に命じた。兵達はその姿からは想像ができないほど素早く動き、アキツ達に襲いかかった。

「させぬ！」

ウズメが海神^{わたつみ}を召喚し、聖なる水で攻撃した。

「グギャギャーッ！」

アキツに襲いかかったシコメの一体がその水を浴び、溶けてしまった。他のシコメはそれを見て警戒し、後ずさった。

「こやつ等、封じます」

ウズメはシコメを取り囲むように水の結界を作り、行く手を阻んだ。

「おのれ！」

シコメの隊長はその半分腐った目でウズメを睨んだ。

「今です、アキツ様！」

ウズメはアキツを支えて駆け出す。ツクヨミは言霊でイワレヒコを浮遊させ、それに続いた。

「ウズメ殿、この術、長くは持ちませぬ。タジカラ様を！」

「承知しました」

ウズメは金色に輝く帆船である天の鳥船あまとりふねを召喚し、タジカラに向かつて飛ばした。

「お館様を！」

ウズメは鳥船に伝言を頼んだ。

タジカラ達は、イワレヒコが斬ったヤマトの兵の中に生きている者がいないか調べていた。

「皆死んでおるな。何という事か……」

スサノが呟いた。クシナダが、

「ウズメ殿が鳥船をこちらに飛ばされたようです」

「ウズメが？」

タジカラはクシナダの声に反応し、アマノイワトの方角を見た。すると金色に輝く帆船がこちらに飛行して来るのが見えた。

「おお！」

タジカラは鳥船が降下したところに近づいた。

「イザが現れただど！？」

タジカラの叫びに、スサノとクシナダはギョツとして顔を見合わせた。

「どうやら、イザはイワトの中に戻り、兵だけが残ったらしい。しかし……」

タジカラも、ヨモツの女王の力は、昔話で聞いている程度であるので、具体的にはわからない。しかし、ウズメが相当焦っているのはわかった。

「アキツ様はご無事。しかし、オオヒルメ様はイザに……」

タジカラはグツと言葉を飲み込んだ。目に涙が光る。オオヒルメは、タジカラやスサノにとって母にも等しい存在だったのだ。

「まさか！」

スサノもタジカラの言葉に驚く。クシナダも同様だ。

「おのれ、ヨモツめ！ 必ずこの私が成敗してくれる！」

タジカラは闘気を漲らせ、馬に跨った。

「行くぞ、スサノ、クシナダ！」

「おう」

「はい」

三人は馬を駆り、アキツの元へと急いだ。

「ククク……」

イザは右手に持ったオオヒルメの首を見た。

「この首ある限り、我は負けぬ」

彼女はそう呟き、ヒラサカのそばに倒れている首を失ったオオヒルメの胴体を踏みつけ、ヨモツへと帰って行った。

その頃、ヤマトの城に帰還したウガヤは、玉座の間に嫡男イツセを呼んだ。

「父上、これは一体如何なる事です!？」

自分だけが蚊帳の外に置かれていたイツセは、父王に食ってかかった。

「イワレヒコがツクヨミのせいでおかしくなってしまうた。私ももう少してイワレヒコに殺めらるるところであった」

「何と!」

イツセはウガヤの言葉に仰天した。そしてウガヤのそばに跪いている軍師オモイを見た。

「それは真か、オモイ？」

「はい。イワレヒコ様は、ツクヨミの術で操られております。危うき事にございます」

オモイは頭を下げて言い、ニヤリとした。

（イザ様がおいでだ。もはやこの国も終わりよ）

ヒノモトの王ホアカリとその嫡男ウマシは、ヤマトの国の中ほどまで進んでいた。

「おお」

東の空が明るくなって来ていた。夜明けである。

「これでもう少し早く進めるな」

ホアカリはにこやかな顔で言った。ウマシは、

「そうでございますな」

と答えたが、

（何と呑気な。ウガヤ叔父を追放し、オオヤシマを統べるべきお方が、このようでは困る）

ウマシには父に取って代わりたいた野心があったが、まだその時ではないと思っていた。

（だが、もうすぐだ。ウガヤ叔父を退け、イツセを追いつ落とせば、私が只一人の王位継承者となる）

彼はオオヤシマの混迷を全く感じていなかった。

タジカラ達は、アキツ達と合流していた。

「アキツ様、その、何と申し上げれば良いのか……」

タジカラもスサノもクシナダも、オオヒルメの死を悲しんでいた。

「ありがとう。でも今は、悲しんでいる時ではありませぬ。戦う時です」

アキツはそう言ってツクヨミを見た。タジカラは道すがらスサノとクシナダにツクヨミの事を説明していたので、何故ツクヨミがそこにいるのかは理解されていた。

「ヨモツの兵は、ウズメ殿が止めて下さいました。しかし、時が経てば、その結界も破れます」

ツクヨミが言った。その時、日の光が一同を照らした。

「おお」

皆がその眩い光に目を向けた。

「この天の光がある限り、ヨモツには負けませぬ。大叔母様の思い、私が必ず成し遂げます」

アキツは力強く語った。

「それには皆の力が要ります。私を助けて下さい」

「はい」

ツクヨミ、タジカラ、スサノ、ウズメ、クシナダが、揃ってアキツに跪いた。

（そしてたけひこ様をもう一度オオヤシマにお呼びする）
アキツは空を見上げ、武彦を思った。

武彦は授業中だった。

（あ！）

彼はアキツの声を聞いた。

（良かった。アキツさん、無事だった）

ホッとした。彼女の存在は、すでに幼馴染の都坂亜希みやこぞかあきと同列なのだ。

（呼んでる、アキツさんが……。行かなくちゃ）

武彦はまた眠りに落ちた。

三十の章 武彦の願い、イスズの思い

タジカラ、スサノ、ウズメ、クシナダの最強夫婦二組がヨモツの兵シコメ達を退け、一時的にはあったが、アマノイワトは解放された。

「清めます」

アキツの柏手^{かしわで}がイワトの中に鳴り響いた。柏手の力で、ヨモツの妖気に汚されたイワトが清らかな気で満ちて行く。

「おお、これぞワの女王陛下のお力だ」

タジカラ達は感激していた。

「ツクヨミ殿、ご一緒下され」

「はい」

アキツはヒラサカに向かった。そこにはオオヒルメの遺体がある。

「お辛かろう、アキツ様は……」

タジカラが呟いた。

「そうだな。我らがこれほど身に堪えているのだ、あの方のお心を思うと、それだけで……」

スサノはグツと涙を堪え、両の手を握り締める。ウズメとクシナダは互いを支え合うようにして泣いていた。

「ツクヨミ殿」

アキツは前を見たまままでツクヨミに話しかけた。

「はい」

「これより、大叔母様のお清めを致します」

「はい」

ツクヨミは身の引き締まる思いがした。ワの国の女王であったオオヒルメの葬儀に立ち会うのだ。

「……」

僅かな蠟燭の火に照らされているだけで、薄暗い洞窟の先に、首

のないオオヒルメの遺体があった。

「オオヒルメ様……」

ツクヨミの目から涙が溢れ出る。

（何たる事か……。オオヒルメ様がこのような……）

「始めます」

アキツは気丈にも涙を流していない。

「はっ」

ツクヨミは自分の脆さを思い知り、涙を拭った。

（誰よりもお辛いはずのアキツ様に先んじて泣くなど、恥知らずだ）
「祓いたまえ！」

アキツの柏手が四回打った。それは彼女の心の内を表すかのように悲しく鳴り響いた。そして穢れている空間が、たちどころに清らかになって行く。

「清めたまえ！ 祓いたまえ！ 清めたまえ！」

アキツは連続して柏手を打ち続けた。その異常な様子にツクヨミが気づき、

「アキツ様！」

と止めなければ、アキツは両手が碎けるまで柏手を打ち続けていたかも知れない。

「ツクヨミ殿……」

アキツは遂に涙を流し、崩れるようにしてツクヨミに抱きついた。

「ア、アキツ様……」

あまりの出来事にツクヨミは動揺したが、

（今はこの方を何としてもお支え申すのが我が務め）

と思い、アキツを受け止めた。

「ううう……。大叔母様……。大叔母様……。大叔母様アッ！」

アキツは絶叫した。それほど彼女は我慢していたのだ。

「アキツ様……」

自分にしがみついて泣くアキツを優しく抱きしめ、ツクヨミは思った。

（この方のためにこれからの私の命を捧げよう）

「すみませぬ、ツクヨミ殿。お恥ずかしいところをお見せしてしまいました」

アキツは我に返り、顔を赤らめてツクヨミから離れた。

「いえ、滅相もございませぬ」

ツクヨミはアキツの温もりが残る手を握り締めた。

「大叔母様を弔いの間にお運びしますので、お力をお貸し下さい」

「はい」

ツクヨミはオオヒルメの遺体を言霊で浮遊させ、アキツについて行った。

「おお」

思わず感嘆の声を漏らしてしまう。それほど、弔いの間は荘厳な雰囲気だった。蠟燭が灯されている訳ではないのに中は明るく、張り詰めたような気に満ちている。

「こちらに大叔母様を」

ツクヨミは部屋の中央の一段高くなっている祭壇のような場所にオオヒルメの遺体を下ろした。

「あ！」

途端にオオヒルメが輝き出した。

「これでようやく、大叔母様から穢れを祓い切れました」

アキツの言葉にツクヨミはハツとした。

（それほどまでにヨモツの穢れは深かったのか……。オオヒルメ様のお身体が輝きを増した）

「でもこれは仮の弔いです。大叔母様のお頭かしらをイザが持ち去ってしまったのですから」

「はい」

イザからオオヒルメの首を取り返さなければ、本当の弔いは完了しないのだ。

「戻りましょう、ツクヨミ殿。ここはもう、ヨモツには侵せませぬ」
「はい」

二人はタジカラ達のところへ向かった。

武彦は眠りに落ちながら、アキツ達の悲しみを感じていた。

（何があったのですか、アキツさん？）

彼は不安になりながらも、幼馴染の都坂亜希に瓜二つのアキツを心配した。

やがて、武彦は目を覚ました。すると、目の前にアキツがいる。どうやら、最初に呼ばれた場所のようだ。アマノイワトの広間のようなところである。

「あ、アキツさん」

武彦は何も考えずに喋ってしまい、そこにツクヨミ以外に人がいる事に気づき、慌てた。

「ご案じ召されますな、たけひこ様。ここにいらっしゃる方は皆、たけひこ様の事をご存知の方です」

ツクヨミが笑顔で教えてくれた。

「そ、そうなんですか」

そこにはウズメ、タジカラ、クシナダがいた。

「あれ、もう一人の人は？」

武彦はナガスネがない事に気づいた。

「ナガスネ様は、ヨモツの妖気で……」

スサノがそこまで言って涙を流した。その様子を見て、武彦はまずい事を訊いてしまったと悟り、

「ご、ごめんなさい。何も考えずに訊いてしまって……」

とスサノに歩み寄り、頭を下げた。スサノは武彦の行動に驚き、

「恐れ多き事です、たけひこ様。我らは皆、たけひこ様に仕えるべく集いし者です。そのようなお心遣いはもうなさいますな」

スサノは地面に頭を擦りつけて言った。武彦はそれに驚いてしま

ったが、

「わ、わかりました」

とだけ言った。

（僕が何かするたびに大袈裟な事になりそうだなあ）

そしてツクヨミがタジカラ達を正式に紹介してくれた。会話の中で誰が何という名なのか知ってはいたが、改めて紹介され、頭の中の整理がついた。

「これより先は、私もたけひこ様の影ではなく、先陣を切って戦う事に致します」

ツクヨミが言った。武彦はビックリして、

「ええ？　じゃあ、僕はどうすればいいんですか？」

「恐らく、たけひこ様のお手を煩わせる事はなきに等しいでしょう。我ら四人とツクヨミが戦えば、鬼神にも勝てましょう」

タジカラが豪快に笑って言った。するとウズメがそれを見て、

「お館様、お控えなさいませ。やかたさまここは兵の詰め所ではございませぬ」

「ウズメ、細かい事を申すな」

タジカラは苦笑いをした。するとアキツが、

「イザは退きましたが、一人気になる者がまだ残っております」

「オモイ、でございますね？」

ツクヨミが尋ねる。アキツはそれに頷き、

「オモイはウガヤ王とヤマトに戻ったようです。あの者もイザの使いと見ております」

「間違いありません。陛下に張り付きしは、何やら企みがあると思われます」

タジカラが同意した。

「イツセ様が心配です」

ウズメが口を挟んだ。タジカラも頷き、

「イツセ様は陛下をお諫めできる方のお一人。オモイの企みの邪魔となるはず」

「早うヤマトに出立致しましょう、アキツ様」

スサノが立ち上がった。しかしアキツは、

「私はここに残ります。ヒラサカを押さえねば、再びヨモツが現れましょう」

その言葉に危機感を抱いたウズメが、

「では私も残りまする」

「よし、頼んだぞ、ウズメ」

タジカラが言う。ウズメはタジカラを見上げ、

「はい、お館様」

部隊は二手に分かれた。アキツを守護するウズメ、そしてその後を固めるクシナダ。ヤマトに向かうタジカラ、スサノ、ツクヨミ、そしてイワレヒコの姿の武彦。

やがて武彦達はイワトを出発した。

「オモイめ。陛下に事あらば、只ではおかぬ」

タジカラはそう呟き、馬に鞭を入れた。

「私が先に参り、様子を探りまする」

ツクヨミが宙を舞い、ヤマトへと飛翔した。

「我らも急ぎましょう、たけひこ様」

タジカラに促され、武彦はハツとし、

「は、はい」

と手綱を握った。

ヤマトの城では、イツセがウガヤにツクヨミ討伐を命じられ、自分の部屋で出立の支度をしていた。

あにさま
「兄様」

そこへ悲しそうな顔のイスズ姫が現れた。

「イスズ」

場合によっては、イワレヒコも殺めなければならない立場のイツセは、イスズの目が見られない。

「ツクヨミをお討ちになるのですか？」

「あるいはな」

イツセは言葉を濁した。

「私は、オモイを怪しんでおる。あの者、何やら企んでおる気配なのだ」

「私もオモイは嫌いでございます」

いつになく強い調子でイスズが言ったので、イツセはギクツとした。

「イスズ、何か存じておるのか？」

「はい」

イスズはこの兄にだけは全てを話すべきと思い、武彦達の事を説明した。

「……」

イツセは啞然としてしまい、しばらく何も言わなかった。

「兄様？」

イスズが声をかけたので、イツセはハッと我に返った。

「俄かに信じ難き話だが、イワレヒコの変わりようは、それでわかった」

一部納得がいったイツセである。イスズはホツとして、

「ですから、イワレヒコ様はツクヨミに操られてなどおりませぬ」

「そのようだな」

イツセは妹の目^{イスズ}をやつと見る事ができた。

「父上にはお話なさいませぬよう。父上は、オモイの意のままになつておいでです」

イスズはすがるような眼差しでイツセに進言した。

「それもわかっておる。操られしは、父上の方よ」

イツセはキツとオモイがいる方角を睨んだ。

そして、ホアカリとウマシの父子一行は、着々とヤマトの城に近づいていた。

「この平原を越えれば、ウガヤ叔父の城が見えて参ります」
ウマシが説明する。ホアカリはそれを鬱陶しそうに聞きながら、

「ウマシよ、出過ぎた真似をするでないぞ。我らは話をしに行くのであるからな」

「はは、父上」

口ではそう言いながら、ウマシは、

（隙あらば、叔父を亡き者とし、ヤマトを滅してくれる）
と考えていた。

三十一の章 タジカラの悲しみ、アキツの決心

アキツはウズメを伴い、アマノイワトの別棟に当たる部屋へと赴いた。

「それは……」

ウズメは息を呑んだ。そこには、ナガスネが戦乱の折に持ち出したアメノムラクモが安置されていたのだ。それは荘厳な光を放ち、ウズメは無意識のうちに跪いていた。

「この剣はワの国の最後の力を秘めしもの。イザに対するには、この剣を解き放つ以外になし」

「解き放つ？」

ウズメは眉をひそめた。剣に何かが宿っているのかとも思ったが、何も気配を感じない。

「この剣は、使う者の力を奪います。使い方を誤れば、死ぬる事もある」

「……」

ウズメはギョツとしてアメノムラクモを見た。アキツはアメノムラクモに近づき、

「ですが、このままではこの剣も只の剣。ワの王家に伝わりし秘術で解き放ちてこそ、真の力を帯びる事になるのです」

ウズメは思わず後退りした。

「怖いですか、ウズメ？」

アキツがウズメを見る。ウズメは苦笑いをして、

「怖くないと申さば、偽りとなります」

「そうですか」

アキツはまた剣を見た。

「私も恐ろしい。大叔母様ですら、この剣を解き放ちし事がないのです」

「オオヒルメ様も……？」

ウズメの額を汗が伝わる。そこへクシナダが駆け込んで来た。

「アキツ様、また何やらヒラサカが騒がしゅうございます」

クシナダは跪いて報告した。アキツは二人を見て、

「少しだけ時を稼ぐ事はできますか？」

「はい。クシナダ殿の水と、私の海神わたつみの結界で、しばしの間、ヨモ

ツを抑える事はできましょう」

ウズメが答えた。隣でクシナダが頷く。

「ではお願い致します。私は、この剣を解き放ちます」

「はは！」

ウズメとクシナダは、闇の国ヨモツとの境であるヒラサカへと走った。

イザはヨモツの最深部にある玉座に座り、アキツの動きを探っていた。

「やはり、アメノムラクモを使うか、アキツ。じゃが、無駄ぞ」
彼女はニヤリとした。

「今の我には、そのような剣、何の役にも立たぬ」

イザはすでにアメノムラクモの力を凌駕したと思っていた。

武彦達一行の先発であるツクヨミは、姿を消してヤマトの城に入っていた。

（イツセ様が出陣？）

彼は城の中の言葉を拾い集めていた。

（ウガヤ王のいらっしゃるところがわからぬ。オモイめ、何をした？）

ツクヨミは城の奥へと進み、イスズの部屋を訪ねた。

「ツクヨミ！」

思わず歓喜の声を上げてしまったイスズに大声を出さぬように指示したツクヨミは、

「陛下はいずこに？」

「私にはわかりませぬ。母上もご存じないのです」

イスズは悲しそうな目でツクヨミを見た。

「タマヨリ様はお部屋ですか？」

「はい」

ツクヨミは一瞬躊躇ったが、

「では、こちらにお連れして下さい。私がお話を致します」

「わかりました」

イスズは部屋を出ようとして、

「兄様にはツクヨミの事、話しました」
あにさま

「はい。イツセ様ならご信頼できます故、大事ありませぬ」

ツクヨミは微笑んで答えた。イスズもニコツとして、部屋を出た。
(それにしても、何故ウガヤ王の居場所がわからぬのだ?)

ツクヨミは、その事が不安であった。

武彦達はヤマトの国の端に到達していた。

「如何した、スサノ？」

タジカラがスサノに尋ねた。スサノの炎の剣が別の方角に反応しているのだ。

「こちらの方角より、敵が迫っておる」

「敵？ 敵などおるはずがあるまい」

タジカラはスサノの剣が間違っていると思った。しかし、間違いではなかった。

「何事ぞ？」

朝日を背に、得体の知れぬ一団がゆっくりとではあるが武彦達に近づいて来る。

「まさか……」

タジカラは掲げられた旗に気づき、驚愕した。

「あれは紛れもなくヤマトの旗……。如何なる事だ!？」

彼はスサノを見た。スサノは、

「よもやとは思うが、彼奴ら、あやつ死人しびとではないか？」

「何!？」

その言葉に、武彦はギクツとした。

(死人? ゾンビ? そんなあ)

彼はホラー映画も怖い話も大の苦手だ。ましてや、本物のゾンビなんてとんでもない。

(ツクヨミさん、助けて下さい!)

武彦はツクヨミに呼びかけた。

そしてまた、ヤマトを目指すホアカリ一行にも、その死人の軍団が近づいていた。しかも、その先頭には、首を失ったヒノモトの戦士ウカシと、妖気で身体の大半が吹き飛んだナガスネがいた。

「ホアカリ様、お命頂戴仕ります」

顔が半分ないナガスネが呟く。ウカシの胴体は、首を小脇に抱えている。

「これでようやくオオヤシマは死人の王国となる。我らの世が来るのだ」

ウカシはニヤリとした。

「な、何じゃ、あの者達は? ヤマトの兵ではないか? 我らを襲うつもりか?」

戦の経験がほとんどない愚息ウマシが慌てふためくのをホアカリは嘆いた。

「お前はそれでもヒノモトの王子か、ウマシよ。父は情けないぞ」
「……」

父上には言われたくありませんと反論したいウマシであるが、そんな事を言っている場合ではない。敵は自分達の数倍の規模なのだ。

「陛下、お退き下さいますよう。我らに勝つ見込みはありません」
老参謀が進言した。ホアカリは遠くに見えるヤマトの城を見やり、
「残念じゃ。ウガヤは、あくまで我らと戦をするつもりらしいな」
ホアカリ達は、死人の軍団である事に気づいていなかった。

ツクヨミは、武彦の心の叫びを捉えた。

（死人？ まさか？）

イワレヒコに斬り殺されたヤマトの兵が、死人となって武彦達を追いかけてきたようだ。

（死人は昼夜別なく戦い続くと聞く）

ツクヨミはウガヤを探すのを諦め、イスズの部屋を出る事にして姿を消した。

「ツクヨミ？」

そこへイスズがタマヨリを伴って戻って来た。

「お帰りなさいませ、イスズ様。お久しゅうございます、タマヨリ様」

ツクヨミは姿を現し、跪いた。タマヨリは仰天しながら、

「久しいですね、ツクヨミ」

と応じた。イスズはツクヨミが慌てているのに気づき、

「如何した、ツクヨミ？」

「はい、イワレヒコ様ご一行が、死人に襲われております」

「何と！」

イスズはタマヨリと顔を見合わせた。ツクヨミは頭を下げ、

「しばし、こちらでお待ちを。すぐに戻ります故」

と言うと、再び姿を消し、城を出た。

（死人、か。どれほどの力なのか……？）

さすがのツクヨミも、死人とは戦った事がない。それは、タジカラもスサノも同じだ。

「急がねば」

ツクヨミは飛翔し、武彦達の元へと向かった。

「ここは？」

ウガヤは、ヤマトの城の中のオモイの部屋に連れて来られていた。見た事のない異国の文字で壁が埋め尽くされている。

「ここならば、大事ありませぬ、陛下。例えツクヨミでもこの部屋には入れませぬ」

「そうか」

ウガヤはホツとして椅子に腰を下ろした。オモイはその前に跪き、
「私はこれからイツセ様に同道し、ツクヨミを討ちます。そして、
逆賊タジカラも」

「うむ。じゃが、タジカラはできれば許せ。あれは私の一番の兵じや」

「はい」

しかし、オモイは誰も助けるつもりはない。

（タジカラもスサノも、皆イザ様の僕しもべとなるのだ）

「こやつら、頭かしらを潰さねば動きを止めぬ！ スサノ、頭を潰せ！」

タジカラは一騎当千の働きをしていた。

「わかっておる！」

スサノは、炎で死人を焼き払い、倒した。

「ぬうう！」

タジカラは泣きながら死人の頭を潰した。

（皆、我が兵。皆、我が友……）

知っている顔を斬るのは、自分の身を斬るように辛かった。

「タジカラ、私が代わろう！」

スサノが次々に炎で死人を焼く。タジカラは涙を拭い、

「要らぬ世話よ、スサノ！ こやつらに正しき道を与えるが、我が務め！」

タジカラはスサノを押し退け、死人の頭を潰した。

「今度こそ、天に行けよ、うぬら……」

タジカラはそう呟いた。

ツクヨミは飛翔しながら、死人の別働隊に気づいた。

（イワトを目指す死人もおるのか？）

タジカラとスサノの活躍で、武彦達は危機を脱したのを知り、ツクヨミはイワトに転進した。

タジカラとスサノは、死人の数が少ないのに気づいた。

「別の動きをしたる者共がおるのか？」

タジカラが辺りを見回す。その時武彦は、ツクヨミの声を聞いた。
（たけひこ様、ヒノモトの王であらせられるホアカリ様ご一行が、死人に追われております。そちらにお向かい下さい。イワトにも死人が向かっておりますが、こちらは私が）

武彦は仰天した。そして、

「タジカラさん、スサノさん、ホアカリさんがゾンビに、あいや、死人に追いかけてられます。そちらに向かいましょう」

「何と！」

タジカラとスサノは顔を見合わせた。

「こっちです！」

武彦はツクヨミの言霊で知らされた方向へ馬を駆った。

「続くぞ、スサノ！」

「おう！」

タジカラは武彦に追いつくと、

「たけひこ様、我らはどうぞ名のみで呼び下さい」

「そうです。呼び捨てで構いませぬ」

スサノが同調する。武彦は苦笑いして、

「でも、年上の人を呼び捨てにするなんてできませんよ」

「そうでございますか」

タジカラはスサノと顔を見合わせた。

三十二の章 オオヒルメの無念、ウガヤの苛立ち

アマノイワトの一角で、アキツは自分の気を最大にしていた。

（うまくいくのかわからぬが、イザに立ち向かうにはアメノムラクモを解き放つよりない）

怖さもある。言い伝えでは、アメノムラクモの解放に失敗した者は、命を吸われ、枯れ木のようになって死んだという。しかし、闇の国ヨモツの女王イザに対するには、何としてもアメノムラクモが必要なのだ。

（死を恐るるつもりはない。只、しくじるのは許されぬ）

アキツの額に汗が伝わる。

「大叔母様、私にお力をお貸し下さいませ！」

彼女は今は亡き大叔母、オオヒルメに祈った。そして気を凝縮して行き、指先に集中する。

「アメノムラクモよ、我に従い、我の力となれ」

アキツは指先から気を放ち、神剣アメノムラクモに宿した。

「は！」

アメノムラクモの輝きが増し、部屋全体を照らした。アキツもその光の強さに目を細め、手を翳^{かざ}した。

「？」

輝きは収まった。しかし、アメノムラクモに変化はない。

「しくじったのか？」

アキツは眉をひそめ、神剣を見た。

『足りぬのだ、アキツ』

声がした。アキツはハツとして振り返った。そこには、眩い光の中、オオヒルメの霊が立っていた。

「大叔母様！」

アキツは歓喜の涙を流し、オオヒルメに近づいた。

『アキツ、アメノムラクモは両刃^{もろび}の剣^{つるぎ}ぞ。御し方を誤らば、オオヤ

シマを滅ぼすやも知れぬ』

オオヒルメの真剣な表情とその厳しい言葉に、アキツは涙を拭い、「はい」と答えた。

『お前一人の気では、その剣は御し切れぬ。無理に使わば、お前の命ばかりでなく、皆の命を奪う事となろう』

アキツはオオヒルメの言葉にギクツとした。オオヒルメは慈愛に満ちた目でアキツを見、

『案ずるな、アキツ。私が力を貸そう』

「大叔母様！」

アキツは喜色に顔を輝かせた。

『私の魂をアメノムラクモに納めよ。さすれば、その剣を御する事ができよう』

オオヒルメの言った事にアキツは衝撃を受けた。それはオオヒルメの魂の消滅を意味するのだ。アキツが死んで、天に昇っても、オオヒルメには会えないのである。

「大叔母様、それでは大叔母様が……」

動揺するアキツにオオヒルメは優しく語りかける。

「これは我が定め。オオヤシマに災いを招き、それを収められなんだ我が罪への償いなのじゃ」

「……」

アキツは何も言えなかった。オオヒルメの決意の強さを感じたのである。

「さあ、早う。時は待ちてはくれぬ」

「はい……」

アキツは涙を拭い、オオヒルメの魂を神剣に収める儀式を始めようとした。

『ぐう！』

突然、オオヒルメが苦しみ出した。魂が苦しむとは一体何が起ったのかと、アキツは考えを巡らせた。

『おのれ、イザめ!』

オオヒルメの魂は、スーッと消えてしまった。

「まさか!？」

アキツは想像して恐ろしくなった。

(イザが大叔母様の魂を封じたのか?)

イザはオオヒルメの頭を奪った。それを取り戻さない限り、オオヒルメの魂はイザの手の内にあるという事なのだ。

「如何にすべきなのか……」

アキツはその場にしゃがみ込んでしまった。

一方、ウズメとクシナダは、ヒラサカから出て来ようとしているヨモツの兵であるシコメの大群を相手に苦戦していた。

「これほどの数とは……」

ウズメが海神わたつみで結界を張ろうとするが、それを掻い潜ってシコメが湧き出そうとする。

「通さぬ!」

クシナダの水の槍がシコメを討ち取る。

「ウズメ殿、このままでは我らが潰れまする」

クシナダが叫ぶ。ウズメは、

「お館様やかたさまに助けを求める事もできぬ故、何としても!」

と更に邪じやを封じる船戸神ふなどのかみを召喚し、封印を強めた。

「ここは我らが命に代えても守らねばなりません!」

ウズメは諦めるつもりはない。クシナダはそれを見て微笑み、

「承知致かたじけなしました。命尽きようとも守りましょう!」

「忝かたじけない、クシナダ殿」

ウズメは、クシナダに引け目がある。かつて夫であるタジカラと、クシナダの夫であるスサノは、ウズメを懸けて争った事があるのだ。そして、スサノが自分を諦めてクシナダを娶った。ウズメはその事を気にして、クシナダと距離を置いていたのだ。

「ウズメ殿、私は貴女の事、大切な友と思っておりますぞ」

クシナダの言葉に、ウズメはハツとした。

「我が夫スサノが命がけで惚れた方です。私も命がけで貴女について行きまする」

「ありがたい、クシナダ殿」

ウズメは術を使っている涙を拭う事ができないため、顔がクシヤクシヤになっていた。

そして武彦達は、ホアカリ一行を追い、馬を走らせていた。

「あれか？」

タジカラが死人しびとの軍勢に気づいた。

「まだ追いつかれてはおられぬ様子だな」

スサノはホアカリ達が無事なのを知り、ホツとした。

「手早く退治たいじるぞ、タジカラ！」

今度は私ごと、スサノが先発する。

「待て、スサノ！ 私が先じゃ！」

タジカラがそれを追いかける。武彦はそれを見て、

「いいなあ、親友って……」

と眩くらき、

「僕も！」

馬に鞭を入れ、二人を追った。

（イスズの言うた事が真まことならば、私は一体誰を討つために出陣したのだ？）

父王ウガヤと異国人の軍師オモイに疑念を抱きながら、ヤマトの国の嫡男であるイツセは、アマノイワトへと進軍していた。

「もしか？」

イツセは城の方を見た。

（まさかとは思うが、オモイめ、父上を……）

留守になる城が心配であるが、引き返す訳にもいかない。

（イスズや母上の事も気がかりだ。如何すれば良いのか？）

イツセの心は揺れた。

「ああ！」

ウズメとクシナダは、ようやくシコメ達を押しやり、封印を完成させ、アキツの元に戻る途中だったが、そこに突然死人が現れたのだ。

「これは、ヤマトの兵……」

タジカラ同様、ウズメにも見覚えのある兵達だ。

「ヨモツの力で操られておるのですか。何という事を！」

クシナダが怒り、水の槍で死人を貫く。しかし、胴体をいくら攻撃しても、死人は止まらない。

「これは……」

ウズメとクシナダは、ジワリジワリと追い詰められて行く。

「お二方、お伏せ下され！」

ツクヨミの声が響いた。ウズメとクシナダは、地面に突っ伏した。
「ぐあおおお！」

ツクヨミの言霊が一閃し、死人はたちまち消滅した。

「ツクヨミ殿！」

二人の美女が喜んでツクヨミに駆け寄った。ツクヨミは微笑んで、
「ご無事で何よりです」

「はい」

クシナダとウズメは、顔に着いた土を払い落しながら答えた。

ウズメが、

「あの者達は、ヤマトの……」

と言いかけると、ツクヨミは、

「存じております。皆、天に導きました。ご安心下され」

ウズメはクシナダと顔を見合わせ、微笑んだ。

「それで、アキツ様は？」

「まだお戻りになりませぬ」

クシナダは心配そうに言った。ツクヨミも、アキツの心が悲しみ

に満ちているのを感じていたので、
「参りましょう、アキツ様の元へ」
と言った。

オモイは、ウガヤを椅子に座らせ、その前に跪いた。

「イツセはツクヨミを討ち取れるものか？」

ウガヤが苛ついて尋ねる。オモイは深々と頭を下げ、

「陛下がお助けされるのが一番の策と存じます」

「そうか、やはりそうか」

元々合戦好きのウガヤは、こうして城に閉じ籠っているより、外に出たいのだ。

「よし、支度を致せ。出陣じゃ」

「はは」

オモイはニヤリとした。

その頃、スサノは死人の中にかつての將軍ナガスネと同胞ウカシがいるのに気づいていた。

「何ともお^{いたわ}勞しきお姿よ……」

スサノは涙を堪え、

「せめて我が手で天にお送り致す！」

と炎の剣を掲げた。

「スサノ……」

タジカラにはスサノの無念が痛いほどわかる。そして、

「私はウカシを！ お前はナガスネ殿を！」

「心得た！」

二人は死人の軍団に突っ込んで行った。

闇の国ヨモツ。その最深部にいるイザは、オオヤシマで起こっている全てを把握していた。

「アキツ、如何様にしようとも、お前如きでは我には勝てぬ。恐れ

戦^{おの}くが良い」

イザは冷たい笑みを浮かべ、呟いた。

三十三の章 イザの策略、ツクヨミの祈り

闇の国ヨモツが動き、オオヤシマは大きく揺れていた。

「ナガスネ様……」

スサノは、ヒノモトの国の將軍であり、ホアカリ王の妃トミヤの兄でもあったナガスネのおぞましい姿を見て涙が止まらなくなった。

「スサノ、私の僕^{しもべ}となるがいい。イザ様の国は素晴らしいぞ」

「ナガスネ様アッ！」

スサノはナガスネの言葉に震えた。

「ヨモツめ、我が国の偉大なるお方をここまで弄^{もてあそ}びおって！」

スサノの掲げる炎の剣の火の勢いが増した。

「ナガスネ様、これは天への送り火にございます！ お逝^いき下され！」

スサノは涙を流しながら剣を振るった。

「うおおおお！」

すでにその半身を失っているナガスネは、炎に包まれ、燃え尽きるかに見えた。

「効かぬぞ、スサノ。私はイザ様から力^{たまわ}を賜ったのだ。うぬ如きの剣でやられはせぬ」

「何と！」

スサノは、剣から放たれた業火の中で、ナガスネが燃えずに高笑いをしているのを見て驚愕した。

「これもまた、ヨモツのなせる業^{わざ}なのか？」

スサノの額を汗が伝わった。

「ははははは！」

脇に抱えられた首が大声で笑う。そんな不気味な姿のウカシに、タジカラも苦戦していた。

「私は雑兵共とは違うぞ、タジカラ！ この身体は、不死。死ぬる

事なき身体よ」

「うぬ……」

タジカラは剣をギュツと握り締めた。

(ウズメがおれば、このような魔物、たちどころに……)

二人の戦士は、ヨモツの力で甦った者達に苦戦していた。

「うわ！」

一方武彦も、その姿こそオオヤシマーと言われたイワレヒコであったが、彼自身が戦ができる訳ではないので、死人の攻撃をかわしながら、タジカラ達に近づいていた。

『ツクヨミさん、大変です！ タジカラさんもスサノさんも、苦戦してますよ！』

武彦はツクヨミに救いを求めた。

そのツクヨミは、アキツの元に到着していた。

「そうですか」

彼はアキツから、オオヒルメの霊がイザに封じられた事を知らされた。

「イザから大叔母様のお頭を取り戻さぬ限り、大叔母様の弔いはすみませぬ」

「はい、アキツ様」

アキツはツクヨミにすぎるような眼差しを向け、

「力を貸して下され、ツクヨミ殿」

「無論です」

ツクヨミは大きく頷いた。その時、彼に武彦の声が届いた。

「は！」

それはアキツとウズメにも聞こえた。

「お館様が危うき事になっております、クシナダ殿」

ウズメが叫んだ。クシナダは、

「先に水に行かせます。ウズメ様もお急ぎ下され」

「ええ」

二人はアキツに頭を下げ、部屋を出て行った。

「ツクヨミ殿？」

アキツはツクヨミが行かないのか確かめるように見た。

「ウズメ様とクシナダ様で大事なんでしょう。私はアキツ様のお手伝いを致します」

「ありがとうございます、ツクヨミ殿」

アキツは微笑んで言った。ツクヨミはアキツにすが縋りつかれて泣かれた事を思い出し、赤面した。

「いえ」

彼は顔が赤くなったのを感じ、頭を下げて誤魔化した。

「大叔母様は、私一人の気ではアメノムラクモを操る事はできぬとおっしゃいました。ですから、貴方の気を使っていたきたいのです」

アキツの言葉に、ツクヨミは改めてアメノムラクモを見た。

「そうでございますか……」

彼はアメノムラクモに宿るアキツの気を感じ取った。

（アキツ様の気でまかな賄えぬものが、私如きの気で足りるのだろうか？）
ツクヨミは不安だった。

「む？」

スサノは妻クシナダの水の気配を感じた。

「タジカラ、クシナダ達がこちらに向っておる」

「そうか」

二人共、それぞれの相手と睨み合ったままである。

「ぐお！」

ナガスネとウカシをクシナダの水が攻撃した。

「無駄よ。我らは不死。何をしても無駄」

ナガスネとウカシは、口を揃えて言い放った。

「ならばこれでは！」

ウズメの声がした。

「海神！」
わたつみ

聖なる水が、ナガスネとウカシを攻撃する。

「うぬ！」

さすがの二人も、これには堪えたらしい。

「おのれ！」

ナガスネとウカシは攻撃された箇所を溶かしながら、タジカラ達から離れた。

「タジカラさん、スサノさん！」

武彦の馬が駆け寄った。

「たけひこ様！」

タジカラとスサノは、武彦を守るように馬を寄せる。死人の残存兵達も、ナガスネとウカシを囲むように集まった。

「お館様！」

ウズメとクシナダは馬ごとクシナダの水に乗り、宙を滑るようにして現れた。

「おお、よう来てくれた」

タジカラとスサノは、それぞれの奥方をねざら勞った。奥方達はそれぞれの夫に微笑み、再会を喜んだ。

「さあ、クシナダ、我が主であったナガスネ様を天へとお送りするぞ」

「はい」

二人は同時にナガスネに迫った。

「ウズメ、我らも行くぞ！」

「はい、お館様！」

タジカラ達も馬を走らせる。

「我らは不死！ 負けぬーッ！」

ナガスネとウカシが叫ぶ。

「皆さん！」

武彦はツクヨミの姿が見えないので不安になったが、
「アキツさんが？」

ツクヨミからの知らせを受け、納得した。

（やっぱりツクヨミさんは、アキツさんが好きなんだな）

別にそういう事でツクヨミはアキツの元に残った訳ではないのだが、そう思われても仕方あるまい。

「我らは敗れぬ！ 出でよ、ヨモツの使いよ！」

ナガスネが叫んだ。すると突然彼の前に黒い炎が渦巻き始めた。

「何！？」

スサノとクシナダは馬を止めた。

「まさか、あれはヨモツの焰^{ほむろ}？」

二人は顔を見合わせた。

「違うぞ、スサノ。それはヨモツの使いだ。うぬらに勝てるか？」

ナガスネがニヤリとする。

炎はやがて人形^{ひとがた}となり、顔が現れた。それはイザに瓜二つの、ヨモツの魔物であった。

「我が名はオオマガツ。イザ様が僕^{えいめし}」

オオマガツと名乗った女の魔物は、ニヤリとした。

「これは……」

クシナダはオオマガツからイザと同じ気を感じた。

「お館様、お退き下され、こやつはイザと同じでございます！」

「何！？」

スサノはクシナダと共に馬を下がらせた。

「ぬ？」

そしてまたウカシの前にも、イザと瓜二つの雷^{いかずち}を纏った女の魔物が現れていた。

「我が名はヤソマガツ。イザ様が僕」

タジカラとウズメも、ヤソマガツから離れた。

「そやつらを仕留めよ。我らはホアカリ様をお迎えに行く」

「はは」

ナガスネとウカシは、死人の兵を伴い、ホアカリを追った。

「く！」

タジカラ達は、その強大な気を放つ二人の魔物に阻まれ、ナガスネ達を追えなくなってしまった。

『ツクヨミさん、大変です！』

武彦は慌ててツクヨミに呼びかけた。

ツクヨミは、自分の気を集中し、アメノムラクモに注ぎ込んでいた。

（これで足りねば、最早なす術なし！）

ツクヨミは身体中の気を送り込み、アメノムラクモに祈った。

（オオヤシマをお救い下され、御剣様！）

再び剣が強く輝き出した。

「おお！」

ツクヨミとアキツは、その輝きに目を細めた。

『その願い、お聞き致そう』

剣が答えたような気がした。ツクヨミはそれを確かめるようにアキツを見た。アキツは頷いた。空耳ではないのだ。確かに剣が答えたのである。

「は！」

ツクヨミは武彦の声を聞いた。

「ツクヨミ殿、たけひこ様が！」

アキツが叫ぶ。ツクヨミは頷き、

「御剣様、たけひこ様の元へ！」

『我を運べ、ツクヨミよ。我が力で、魔を退けよう』

剣が答える。ツクヨミは言霊を使い、アメノムラクモを武彦達のところへと飛ばした。

「間に合って下され」

そう呟き、ツクヨミは血を吐いて膝を折ってしまった。

「ツクヨミ殿！」

アキツが驚いてツクヨミを支えた。ツクヨミはアキツを見上げ、
「大事ありませぬ、アキツ様。少し休みます」

「ええ」

それでもアキツは心配だった。

（ツクヨミ殿は、身体の気を全て剣に注いだ。無理をしているのではないだろうか？）

ツクヨミはアキツの心がわかるので、それが辛かった。

（この方にここまでご心配させてしまうとは、情けなし）

それでも、身体が言う事を聞かない。アキツの肩を借り、壁にもたれた。

「たけひこ様、後はよろしくお願いします」
そしてツクヨミは気を失った。

三十四の章 ホアカリの後悔、アキツの愛

ことだまし
言霊師。

その昔、オオヤシマでは人々に崇められ、王族より上位に位置していた。

しかし、その特別な能力を利用する者、その特別な能力を使って自分の立場を良くしようと企てる者の存在により、一族は絶滅寸前まで追い込まれた。

そして現在のオオヤシマには、言霊師はツクヨミしかない。

「は！」

ツクヨミは悪夢にうなされて目を覚ました。すると、目の前にワの国の女王になるはずであったアキツの顔があった。彼女は今まで以上に美しく見えた。

「ア、アキツ様？」

ツクヨミは状況が理解できず、混乱した。

「すみませぬ。貴方を案じておりました。無礼をお許し下さい」

何の事かわからないツクヨミであったが、自分がアキツに膝枕をされている事に気づくと、仰天して飛び起きた。

「無礼は私の方でございます。何と大それた事を……」

ツクヨミは地面に額を擦りつけてアキツに詫びた。

「顔をお上げ下さい、ツクヨミ殿。私がした事です。そのように詫びられては困ります」

アキツは微笑んで言う。ツクヨミはゆっくりと顔を上げ、アキツを見た。

「大事なく、安心致しました。しかし、まだ無理はされませんように」

「は、はい」

ツクヨミは顔が火照るのを感じ、頭を下げた。

「アメノムラクモまで使ってしまった。それでもイザに勝てねば、我らは滅びてしまうでしょう」

アキツは祠の外を見やって呟いた。ツクヨミは再び顔を上げ、

「たけひこ様がお救い下さいます。ご案内しますな、アキツ様」
「そうですね」

アキツはツクヨミを見てニッコリした。

（如何なる事なのか？ アキツ様が、その……）

ツクヨミは、いけないと思っても、アキツの心が読めてしまう。

彼女はツクヨミに信頼ではなく、愛情を抱き始めている。

（言霊師は滅ぶべきなのだ。私は自分の血筋を残そうとは思っておらぬ）

アキツの気持ちは嬉しかったが、答える事はできない。

（私もアキツ様をお慕いしている。しかし、それはあくまで憧れ。

アキツ様と添いたいなどは……）

自分の気持ちを必死に押さえ込もうとするツクヨミであった。

一方武彦達は、イザの送り込んだオオマガツ、ヤソマガツの二体の魔物と睨み合ったままだった。

「このままでは、ホアカリ様が……」

水使いのクシナダが夫スサノを見上げる。スサノも焦るばかりで、打開策が浮かばない。

「こやつら、我らでは太刀打ちできぬ。如何にすれば……」

スサノは歯軋りした。

「おのれ！」

タジカラとウズメの夫婦も同様であった。

「あ！」

その時武彦は、ツクヨミの声を聞いた。

『たけひこ様、そちらに神剣アメノムラクモをお送りしました。それでヨモツの魔物をお斬り下さい』

「は、はい！」

武彦は空を見上げた。すっかり明るくなったオオヤシマの青空を、小さな光が進んで来るのが見えた。

「あれかな？」

それはタジカラ達にも見え、そして魔物達も気づいた。

「そうはさせぬ！」

ヨモツの黒火を身に纏ったオオマガツが飛翔した。

「待て、魔物め！」

クシナダが水を飛ばし、オオマガツを縛った。

「温ぬるいわ！」

オオマガツは、水の縛りを易々と吹き飛ばすと、そのまま高度を上げ、光に迫った。

「く！」

ウズメが海神わたつみを召喚し、オオマガツを聖なる水で攻撃した。

「無駄よ！」

オオマガツは聖なる水の攻撃も受け付けない。ウズメは啞然とした。

「行かせぬ！」

タジカラが馬を駆って追い始める。それにスサノが続く。

「待って、二人共！」

武彦も慌てて追いかける。ウズメとクシナダは目配せし合い、続こうとしたが、

「うぬらは我が相手じゃ」

と雷いかずちを身に纏ったヤソマガツが叫んだ。

「うぬ！」

ウズメとクシナダは、ヤソマガツを睨んだ。

「あれか？」

オオマガツは、光の近くまで飛んで来ていた。

「何！？」

その光はやがて巨大化し、オオマガツに襲いかかった。

「ぬおお！」

オオマガツは辛うじてそれをかわし、地上に降りた。光はそのままオオマガツを無視するように飛び去った。

「あれは何者ぞ？」

彼女はその見聞きした事を逐一女王イザに伝えている。

『オオマガツ、それはアメノムラクモじゃ。不用意に近づくでない』
イザの声が返って来た。

「アメノムラクモ？」

オオマガツはイザの分身であるが、イザの知識を全て与えられている訳ではない。彼女にはアメノムラクモの力が計れなかった。

「あ！」

武彦達は、アメノムラクモの光が近づいて来るのを見た。

『いわがみたけひこ磐神武彦よ、我を使うがいい。ヨモツの魔を退治るぞ』

「え？」

武彦はその声がどこから聞こえたのかわからなかった。しかもその声は彼の名を知っている。不思議だった。

「ああ！」

光はやがて剣の形となり、武彦の手に降りて来た。

「おお！」

武彦がアメノムラクモを手にした途端、輝きが更に増し、それを見たタジカラとスサノは感嘆の声をあげた。

「よおし！」

武彦は剣を構えた。そしてまず、オオマガツに向かう。

「何！？」

オオマガツは、前方から迫る武彦の姿を見て驚愕した。

「あれは、まるで……」

彼女は慌てて飛翔し、相棒のヤソマガツの元へと急いだ。

「逃げるのか？」

武彦は飛翔の術を知らない。

『戻るのじゃ、武彦。おなじ女子達が危うい！』

「はい！」

武彦はアメノムラクモを脇に差し、手綱を握り締めた。

ホアカリ達は、背後から迫る異様な風体の軍に気づき、逃走していた。

「何者か？」

馬を駆りながら、ホアカリの嫡男ウマシが、老参謀に尋ねる。

「死人しにびとの兵です。逃げるしかありません」

「し、死人？」

ウマシはその言葉に震えた。彼も武彦と同じで、その手の類いが苦手なのだ。

「ヨモツが現れたというのか？」

ホアカリは悲しそうな顔で呟いた。

「オオヤシマはやはり滅ぶのか……。我ら兄弟の罪は重いぞ、ウガヤ」

ホアカリはヤマトの国の方角を見やり、涙を流した。

そんな兄の憂いも知らず、弟ウガヤはアキツとツクヨミのいるアマノイワトを目指していた。先に出陣したイツセを途中で待機させ、合流する手筈である。

「私も嫌われたものです」

ウガヤの左斜め後ろで馬を駆るオモイが言った。ウガヤは手綱を引き締め、

「イツセの我が儘だ。お前を蔑ろないがしにするなど、許せる事ではない。戦のちの後、きつく罰する」

と怒りを露にした。イツセがオモイの同行を拒否した事を怒っているのだ。

「ツクヨミを討ち、アキツを捕らえれば、この国は治まる」

ウガヤはニヤリとした。

（どこまでも愚かな者だ。お前らの国はもうすぐ滅ぶのだ、ウガヤ

よ

オモイはその青い目をギラつかせ、フツと笑った。

三十五章 武彦の憂鬱、ツクヨミの戸惑い

遂に神劍アメノムラクモを手にした磐神武彦。いわがみたけひこ戦いはこれで動くのだろうか？

「ヤソよ、油断するな。あの者の持つ剣は、アメノムラクモぞ」
相棒である雷の魔物ヤソマガツの元に戻った黒い炎の魔物オオマガツが囁く。

「アメノムラクモ？ 聞いた事もない。恐るる程の物か？」
「身をもって知るしかあるまい」

自分の言葉を大袈裟と思うヤソマガツに、オオマガツはムツとした。ヤソマガツはすでにクシナダとウズメを追い詰めていたのだ。

「うう……」
クシナダもウズメも、ヤソマガツの放つ雷いかずちを掠められ、傷ついていた。

「ヨモツめ……」
ウズメは齒軋りしてヤソマガツを睨む。クシナダが、
「私の水は魔物には効きませぬが、ほんの一時、ひととき足止めができます。その隙を突いて、仕掛けて下され」

「承知しました」
ウズメは、クシナダが自分を犠牲にして彼女を先に行かせるつもりだとは思っていなかった。

タジカラとスサノは、武彦と共にウズメ達のところへと急いでいた。

「ウズメ、無事でいてくれ……」
タジカラは自分の迂闊さを恥じていた。

（ウズメとクシナダ殿を残して離るるなど、あるまじき事だ。何と愚かな！）

スサノも焦っていた。

(クシナダの水を弾き、ウズメ殿の海神わたつみすら受け付けぬとは、何という魔物なのだ)

「先に行きますよ!」

武彦の馬が先行する。しかも、タジカラ達が追いつけないほどの速さだ。

『武彦よ、我を抜くのだ。我の光を身に纏い、魔物を斬るのだ』
「はい!」

武彦は馬上で抜刀した。するとアメノムラクモが輝きを増し、武彦と馬をその光で包んだ。

「何じゃ?」

武彦の放つ光に気づいたオオマガツは、

「アメノムラクモを持つ男が来るぞ」

「イワレヒコであろう。彼奴あやつは愚か者よ。力にしか頼れぬ男だ」
ヤソマガツは、まだ相手を見くびっていた。

「えい!」

その隙を突き、クシナダが二体の魔物を水の縄で縛った。

「このような術、効かぬと言っておろう? わからぬのか、愚か者め!」

オオマガツが怒鳴り、水の縄を切ろうとする。

「させぬ!」

クシナダは続けざまに水を放ち、オオマガツとヤソマガツを縛り上げた。

「ウズメ殿、早うホアカリ様のところへ!」

クシナダは苦しそうな顔でウズメに叫んだ。

「ですが、クシナダ殿……」

ウズメはその時クシナダの考えに気づいた。

「早う! もうすぐお館やかた様が来ます。ここは大事ありませぬ」
「わかり申した!」

ウズメは馬を駆り、その場から駆け出した。

「行かせぬぞ、女あ！」

ヤソマガツは雷撃を放った。

「そのような事、許さぬ！」

クシナダの水が走り、雷撃を吸収する。

「ぐ……」

その衝撃はクシナダに伝わった。ガクツと膝を折る。

「死ぬるつもりか、お前は？」

ヤソマガツが不思議そうな顔でクシナダを見下ろした。

「クシナダアッ！」

スサノが雄叫びを上げ、炎の剣を振り回しながら駆けて来る。そしてその前を光に包まれた武彦が来る。

「オオよ、分が悪くなつたぞ」

ヤソマガツが呟いた。オオマガツは水の縄を断ち切り、

「もはや十分に時を稼いだ。我らの役目は終わった。行くぞ、ヤソ」

「うむ」

武彦の斬撃が届く寸前に、二体の魔物はフツと姿を消してしまった。

「ああ！」

空振りをし、武彦はグラツと揺れ、馬から落ちそうになった。

「逃げたのかな？」

『そのようだ。いや、逃げてくれたのだ。あのまま留まられれば、味方が幾人か死んでいた』

アメノムラクモの冷静な言葉が聞こえた。

「そう、なのかな……」

武彦は馬を下り、蹲うずくまっているクシナダに近づいた。

「大丈夫ですか、クシナダさん？」

クシナダはその声に反応して顔を上げ、

「ありがとうございます、たけひこ様。大事ありません」と答えたが、顔は辛そうだった。

『武彦よ、クシナダに手をかざせ。お前には、癒しの力がある』

「は、はい」

武彦はクシナダに右手をかざした。武彦の手の平から、緩やかに温かい光が放たれる。すると、雷撃で傷ついた彼女の美しい顔が元に戻った。更に雷撃の衝撃で弱っていた身体も、たちどころに回復した。

「？」

何が起こったのか理解できないクシナダは、武彦を見上げた。

「もう大丈夫ですよ、クシナダさん」

武彦はニッコリとした。クシナダは武彦の力で身体が回復した事に気づき、

「勿体のうございます」

と地面に平伏した。武彦はクシナダの行動に驚き、

「そんな、やめて下さい。僕達は共に戦う仲間じゃないですか。当たり前の事をしただけですよ」

「たけひこ様」

クシナダは武彦の優しい言葉に目を潤ませた。

「クシナダ」

スサノが馬を飛び降り、駆け寄った。

「お館様」

クシナダは目を潤ませたままで、

「たけひこ様が、お助け下さりました」

「おお」

スサノは跪き、

「かたじけのう存じます、たけひこ様」

と頭を垂れた。武彦は照れ臭くて頭を掻いた。

「クシナダ殿、ウズメはどうした？」

タジカラが追いつき、尋ねる。クシナダは立ち上がり、

「ホアカリ様のところへ向かいました」

「そうか。我らも急ぎましょう、たけひこ様」

タジカラがそう言った時、武彦は自分に異変が起こっているのを感じた。

「あ」

彼に限界が訪れたのだ。武彦は自分の世界へと戻ってしまった。

「おお！」

いきなり魂が抜けたように倒れ伏すイワレヒコを、スサノとタジカラが支えた。

「たけひこ様が異界にお戻りになったようだ」

タジカラが言った。スサノはクシナダを見て、

「イワレヒコ様のお身体をアマノイワトに運んでくれ」

「はい」

クシナダは微笑んで答えた。

「行くぞ、スサノ」

「おう」

タジカラとスサノは、ホアカリを目指す死人の軍団を追った。

「は」

武彦は目を覚ました。自分の世界に戻った事に気づくのに、時間がかかる。

（戻ったのか、僕）

途端にオオヤシマの事が心配になる。

（大丈夫だろうか？）

「こら、磐神、ぼんやりするな」

先生の声が聞こえた。

「す、すみません」

武彦は慌てて謝った。ふと見ると、心配そうな都坂亜希みやこぎあきの顔が見えた。

「どうしたの、武君？ 最近、また変だよ」

休み時間に亜希が声をかけて来た。

「そう？ そんな事ないんだけどなあ」

「呑気ね、全く」

亜希は心配しているのに何も感じていない武彦の事がもどかしいのだ。

「ごめん」

「別に謝らなくてもいいわよ」

そう言いながら剥れる亜希の唇を見ているうちに、武彦は亜希とのキスを思い出してしまった。

「どうしたの？」

亜希は急に赤くなった武彦に気づき、顔を覗き込んだ。

「き、昨日の事、思い出しちゃった……」

武彦の呟きに、亜希もボツと赤くなる。

「バ、バカ！」

彼女はクルッと背を向けて立ち去ってしまった。

「はあ」

そして、姉美鈴に真相を打ち明けようと決意した事を思い出す。

「ふう」

気が重くなる武彦だった。

三十六の章 武彦の本音、美鈴の不安

武彦は重い足取りで家に帰った。

「只今」

玄関の鍵がかかっていないという事は、姉美鈴が帰宅しているという事だ。今日はいつもとより早い。

「お帰り、武彦。待ってたよ」

姉は感情が見えないような表情で武彦を出迎えた。

「あ、うん」

そのまま、まるで容疑者が連行されるような雰囲気で、武彦は姉について行く。

「朝の話だけどさ、何？」

姉はキツチンの椅子に座るなり俯いたままの弟に切り出した。武彦はビクツとして、

「う、うん……」

と顔を上げ、姉を見た。そして、意を決した。

（頭がおかしくなったと思われてもいい。とにかく、全部話そう）
彼は隠し事をしている事の方が辛かったのだ。

武彦は、異世界の住人であるアキツに呼ばれて、「オオヤシマ」という国に行った事、そのアキツが幼馴染の都坂亜希みやこぞかあきに瓜二つな事、自分の魂が降ろされたイワレヒコの姉イスズが、美鈴にそっくりな事、二人の母タマヨリが、母珠世にそっくりな事を話した。

「それで？」

姉は全く信用していない顔をしていた。それは最初からわかっていたので、武彦はそれほど悲しくはなかった。

「それで、オオヤシマにヨモツって言う闇の国が侵攻して来て、アキツさん達が危ないんだ」

「危ないのはあんただよ、武！」

とうとう美鈴は怒り出して立ち上がった。武彦はここまで我慢してくれた姉に感謝したくらいだった。

「どうしちゃったの、あんた？ そんなバカげた話を姉ちゃんに聞かせて、どういうつもり？」

全く正当な疑問だ。武彦には何も言い返せない。

「やっぱり、もう一度病院に行こう、武。姉ちゃんがついて行っただげるから」

「僕は狂ってなんかいないよ、姉ちゃん！」

武彦は生涯で一番大きな声を出した。美鈴も弟の大声に驚いて椅子に座ってしまった。

「本当の話なんだよ。嘘でも妄想でもないんだ」

「……」

姉は言葉を失っているようだ。武彦は続けた。

「こんな話を信じろって言うのは無理かも知れないけど、本当に本当の話なんだよ。僕はおかしくなっていないよ、姉ちゃん」

姉はジッと弟を見た。その目は悲しみに満ちていた。涙が溢れそうになっている。

「わかった。今日はバイトを休め、武。母さんが帰ったら、もう一度その話をしろ」

「うん……」

姉は理解をしてくれたのではない。自分には手に負えないと判断し、母に委ねる事にしたのだ。

「姉ちゃんは出かけるけど、お前は家にいろよ」

「うん」

姉の言う通りにするしかない。

しばらくして、美鈴は大学に出かけた。武彦を見る目は、相変わらず悲しそうだったが、母の携帯にメールで事情を伝え、母に任せる旨を書くと、後ろ髪を惹かれるようにして玄関を出て行った。

武彦も、コンビニの店長に電話し、具合が悪いので休むと嘘を吐

いた。

（昨日もバイト行けなかったのになあ）

気が重くなる。母はどんな顔をするだろう？ 姉は母に何と伝えただろう？ 母も自分の事をおかしくなってしまったと思うのだろうか？ 不安だった。

「？」

携帯が鳴る。亜希からだ。武彦は何だろうと思い、出た。

「武君、大丈夫？」

亜希は部活の帰りにコンビニにより、武彦が病欠だと知って驚いたらしい。

「ごめん、ちょっといろいろあって、休んだんだ」

「脅かさないでよ」

亜希はそう言ってから、

「今一人？」

「うん、一人だよ」

「遊びに行っていない？」

亜希からそんな事を言われたのは、小学校以来だ。

「い、いいけど」

「じゃ、今から行くね」

何だろう？ 亜希が来るのはかまわないけど、その間に母が帰って来ると、話がややこしくなりそうだ。武彦は逃げ出したくなった。

「今晚は」

亜希が玄関から入って来る。

「上がって」

「うん」

いつになくドキドキする。今までは、亜希が怖くてドキドキしたのだが、今日は違う理由でドキドキしているのだ。

（可愛いよなあ、亜希ちゃんて）

改めて、靴を揃えている幼馴染をマジマジと見てしまう。

「な、何よ、武君？」

亜希は武彦の視線に気づき、振り返った。

「あ、ごめん。どうしたの、急に？」

「誰もいないって言うから、心配だったの。武君てさ、具合悪くても言わないタイプだから」

武彦の事を心配して来てくれたのだ。

「具合悪いっていうのは、嘘なんだよ。だから大丈夫だよ」

「どうして嘘吐いたの？」

当然の疑問だ。今日は返答に窮してばかりいる武彦である。

「いや、何となく……」

頭を掻いて、笑って誤魔化す。亜希はフウツと溜息を吐き、呆れた顔をした。

二人はキッチンに行き、向かい合って座った。さっきまで美鈴が座っていたところに亜希が座る。

（どうしよう？ 母さんが帰って来たら、亜希ちゃんには帰ってもらおうかな？）

でも、ある意味では「関係者」である亜希にも、真実を打ち明けた方がいいかも知れない、とも思う。

（でも、かあさんはともかく、亜希ちゃんには絶交されそうだしなあ）

「学校でも様子が変だったから、やっぱり具合が悪いんじゃないの？ さっきからボンヤリして……」

亜希の声にハツとする。

「ほ、ホントに何ともないんだよ。元気だよ」

そう言えば言うほど嘘に聞こえそうだ。

「そう？」

亜希はムツとした。武彦は胸が痛んだが、まだ迷っていた。

（母さんだけに話して、それから考えよう）

しかし、母の対応次第では、武彦は入院させられてしまうかも知れない。

（どうしたらいいんだろう？）

堂々巡りである。その時、

「只今」

と母の声がした。

「あれ、お婆さん、今日は早いね」

亜希が立ち上がる。武彦も慌てて立ち上がり、

「そ、そうだね」

と言うと、素早く玄関へと向かった。

「あ、武君！」

亜希もそれに続いた。

「あら、亜希ちゃん、いらっしやい」

「お邪魔してます」

母と亜希が笑顔で挨拶し合う中、武彦は気が気ではなかった。

「お婆さんが帰ったのなら、安心ね。じゃあね、武君」

「う、うん」

「あら、もう帰っちゃうの、亜希ちゃん？」

何故亜希が来ていたのか知らない珠世は、キョトンとした。

「はい。お邪魔しました」

亜希はニコツとして手を振り、玄関を出て行った。それを見届けてから、

「隅に置けないわね、武彦」

母がニヤツとして武彦を見る。

「そ、そんなんじゃないよ」

武彦は慌てて否定する。母はすぐに真顔になって、

「美鈴が妙なメールを送って来たから、母さん、今日はシフトを変えてもらったのよ」

「え？」

どんな大袈裟な事を書いたのだろう、姉は？ 武彦は頭が痛くなりそうだった。

「さ、話を聞かせて、武彦」

母はキッチンへと歩き出した。

そして武彦は、気が狂ったと思われるのを覚悟で、美鈴に話したのと同じ事を、珠世にも話した。珠世は呆れて怒り出すかと思っただが、反応が違った。

「そうか。ひいお祖父ちゃんのを一番強く引いていたのは、あんただったんだね」

「は？」

珠世の言葉に、今度は武彦が、

（母さん、ショックでおかしくなったのかな？）

とってしまった。

三十七の章 珠世の祈り、イツセの焦り

武彦は母の発言に驚いていた。

「ひいお祖父ちゃんて……？」

思わず素っ頓狂な声で訊いてしまう。珠世はフッフと笑い、

「母さんのお祖父ちゃんは、人間の未知なる力に興味があって、あんたが今話したような異界の事を研究していたの」

武彦にはその話は初耳だった。

「だから、親戚中から、変わり者呼ばわりされていて、私の父、要するにあんたのお祖父ちゃんは、凄く嫌っていたわ」

「ふーん」

どうやら、自分もその仲間だと判定されたようだ。武彦はガツカリした。母は姉とは違う反応をしてくれたと思ったのだ。

「でもね、母さんはそんなお祖父ちゃんが大好きだったのよ。とっても面白いお祖父ちゃんだったから」

「そ、そうなんだ……」

話が違う方向に動き始めた。武彦にはもう展開が読めなくなっていた。

「あんたのお父さんと出会えたのも、そのお祖父ちゃんのおかげなの。だから、あんたの話を聞いた時、お祖父ちゃんと父さんが、あんたを導いてくれたのになって、思ってしまったわ」

母珠世は涙ぐんでいた。滅多な事では泣かない母も、亡き父の事を話す時だけは涙脆くなるのはいつもの事だが、今回は悲しそうではない母の涙が不思議だった。

「何か、嬉しくなった。あんたが、ひいお祖父ちゃんと父さんに繋がっているのがわかって」

「そう言えば、父さんて、先生だったんだよね？」

武彦は僅かに残る父の面影を記憶の彼方からたぐり寄せながら、母を見た。

「そう。歴史の先生だった。でも、どちらかって言うと、妖怪の話や、昔話に熱中する変わり者先生だったの」

母は涙を拭いながら微笑んだ。

「これはきつと巡り会わせよ、武彦。その人達の力になってあげなさい。きつと、ひいお祖父ちゃんと父さんが助けてくれるから」

「う、うん」

意外な話の進行に、武彦は戸惑いながらも喜んでいた。

「良かった。姉ちゃんに怒鳴られたから、母さんにも怒られると思っただんだ」

「美鈴は現実主義者だからね。信じてくれないよ、自分の目で見ない限り」

母の言葉に、武彦は納得した。

「そうだね。デジカメで撮って来られるといいんだけどね」

「そのオオヤシマって言うところに行く時に、あんたが身に着けていれば、持って行けるかもよ」

母は突拍子もない事を言い出す。

「そ、そうかな？」

でも試してみる価値はある。武彦は早速実行に移す事にした。

「やってみるよ」

「そうそう。その方がいい」

母はあくまで前向きだ。武彦はふと思った。

「母さんは、僕がそんな所に行くのが心配じゃないの？」

武彦の大真面目な顔に、珠世はニッコリして、

「心配じゃないと言えば嘘になるけどね。でも、あんたはそのアキツさんを助けたいんじゃないよ？」

「うん。それだけじゃないよ。タマヨリさんも、イスズさんも、他人とは思えないんだ」

「そうね」

母はクスッと笑った。そして、

「大丈夫。必ずあんたは無事に戻るわ。ひいお祖父ちゃんと、父さ

んがついてる。それに、ツクヨミさんは凄く強いんでしょ？」

「うん」

武彦は、母の言葉で迷いを吹き飛ばした。

「仲間を信じなさい。そして、自分を信じなさい。きっと願いは叶うわよ」

「ありがとう、母さん」

武彦は涙ぐんでしまった。

「何泣いてるの、武彦？ 悲しい事じゃないでしょ？」

そう言いながらも、珠世も目を潤ませている。

「母さんこそ……」

武彦はそう言いながら涙を拭った。その時、アキツの声が聞こえた。

『たけひこ様』

緊迫した声だった。

「じゃあ、行くよ、母さん」

「ええ。気をつけてね」

「うん」

武彦は自分の部屋に戻り、小遣いを溜めて買ったデジカメを身に着けた。

「よし」

彼はベッドに仰向けになり、目を閉じた。

「アキツさん……」

そして武彦は眠りについた。

「武彦」

珠世は、口ではあんな事を言ってしまったのを後悔している。本当は心配で堪らない。止めたかった。行かせたくはなかった。しかし、それを言えなかった。

「あの子のあんな真剣な顔、初めて見たわ、貴方」

珠世は自分の部屋に行き、亡き夫の写真に語りかけていた。

「武彦を守ってね、貴方」

珠世は手を合わせ、夫に祈った。

次に武彦が目を開けると、そこはアマノイワトの中だった。武彦を囲んで、アキツ、ツクヨミ、クシナダがいた。

「おお、たけひこ様、お戻りなさいませ」

ツクヨミが嬉しそうに声をかけた。アキツがその隣で微笑んでいる。

「皆さん、ご無事で」

そして、タジカラとスサノがいない事に気づく。

「タジカラさんとスサノさんは？」

「二人は、ホアカリ殿を守るために、死人しにんの集団を追っています」
アキツが答える。

「そちらも気がかりですが、こちらも……」
ツクヨミの顔が曇る。

「どうしたんですか？」

「ウガヤ王が、イツセ様と共にこちらに向かっておられます」

ウガヤ王。ヤマトの国の王にして、イスズ姫の父であり、今その身体を借りているイワレヒコの父でもある。そしてイツセはその二人の兄。

「イツセ様はともかく、ウガヤ様はあの異国の者に操られておいでのご様子。如何にしたものか……」

クシナダが悔しそうに呟く。異国の者とは、ヤマトの国の軍師であるオモイの事である。

「オモイもイザに通じていると思われます。何としても、ウガヤ様から、オモイを引き離さねばなりません」

ツクヨミが力強く言った。

「敵はオモイ一人。そう考えれば、いくらかは気持ちが悪く着きましよう」

アキツが言った。一同はそれに頷く。

「行きましょう」

武彦が声をかけ、立ち上がった。ツクヨミがそれに応じる。

「アキツ様とクシナダ様は、ヒラサカを」

「はい」

二人の美女は、ツクヨミの言葉に大きく頷く。

「参りましょう、たけひこ様」

「はい」

武彦はツクヨミを伴い、イワトの外へと向かった。

「私達も行きましょう、クシナダ」

「はい、アキツ様」

アキツとクシナダも、イワトの奥にある闇の国ヨモツとの境界ヒラサカに向かう。

その頃、ウガヤはイツセと共にゆつくりとアマノイワトを目指していた。

（本当にこのままで良いのか？ オモイに誑たぶらかされているのは間違いないのだが）

嫡男でありながら、力のある弟イワレヒコに遅れを取っていたイツセは、ウガヤに対する危機感が強い。

（イワレヒコが変わったおかげで、ようやく私は父に向き合う事ができるようになった。今、それを躊躇ちゅうちうってしまうのは何故だ？）

イツセは、ウガヤ以上にオモイの事が気になっていた。

（父をオモイが操さくっているのであれば、私が何を言っても通じぬ。

如何にするべきなのか？）

イツセは悩んでいた。

「どうした、イツセ？」

黙り込んでいるイツセを不信に思い、ウガヤが声をかける。

「いえ」

イツセは短く応じた。ウガヤは訝あやしそうな顔をしたが、それ以上

は何も言わず、前を見た。

「アマノイワトはもうすぐぞ」

イツセはチラッとウガヤの後ろに着いているオモイを見た。彼は無表情で、何を考えているのかわからない。

（この者、何をするつもりなのだ？）

イツセの不安は増すばかりだった。

三十八の章 ウズメの嘆き、スサノの怒り

タジカラとスサノは、死人しびとの群れに追いついていた。

「陛下だけは、何としても……」

スサノのその呟きの中に、

「愚かな王子の命はどうでもよい」

という思いが込められている事をタジカラは知らない。

「お館様！」
やかたさま

先行していたタジカラの妻ウズメが二人に近づく。死人達は、ホアカリを追うのをやめ、彼等を先に始末する事にしようだ。

「スサノ、我が行く手阻むは許さぬぞ」

顔が半分しかないナガスネが言い、前に進み出た。その後ろに自分の首を脇に抱えたウカシがいる。どちらももはや、生きていないばかりか、死んでもいない魔物である。

「ナガスネ様……」

スサノは右手を握りしめた。タジカラが、

「スサノ、落ち着くのだ。この者共は、もはやお前の知る者ではない」

「わかっておる！」

スサノは苛ついて怒鳴った。それを心配そうにウズメが見守る。

「我が兵よ、こやつらを討て。イザ様の邪魔をする者は、全て敵だ」
ナガスネのその言葉に、スサノは意を決した。

「タジカラ、うぬの言う通りよ。こやつらは魔物。もはや、あの方ではない」

「スサノ」

タジカラはスサノが心の中で泣いているのを感じていた。

（もし私が同じ目に遭あうたなら、スサノのようにできるか？）

「せめて、この剣の炎にて天へとお送りするが、我らの務め」
「うむ」

タジカラは嘲笑うナガスネを睨みつけて頷く。

「ウズメ、兵共は任せたぞ」

「はい」

ウズメは海神わたつみを召喚し、その聖なる水で兵達を攻撃した。

「ぐおおおお！」

聖水を浴び、のたうち回りながらも浄化されて行く兵を見て、ウズメは泣いた。

「すまぬ、皆、すまぬ」

兵達は共にヤマトの国を守って来た者達である。ウズメは我が身を切られるような痛みを感じていた。

「スサノよ、我らはあのような水ではやられぬぞ。皆をイザ様の臣下にするまで、我らは倒れぬ」

ウカシがゲラゲラと笑いながら言い放つ。

「黙れ、裏切り者が！ 今送り火で天へと上がらせてやる！」

スサノは剣こゑを抜き、紅蓮の炎を吹き出させた。それは彼の怒りの強さと悲しみの深さを示しているようであった。

「ならば、我らも」

ナガスネは腰に下げている剣を抜いた。その剣は、闇のように黒い剣である。

「ぬ？」

スサノとタジカラは、その異様な雰囲気きふきの剣に眉をひそめた。

「我が剣は、イザ様のお力が宿りし剣。うぬら凡庸なる輩には太刀打ちできぬ業物わざものよ」

ナガスネは嬉しそうに剣を眺め、次いでタジカラとスサノを睨みつけた。

「覚悟致せ！」

タジカラは思わずスサノを見た。スサノもタジカラを見ている。

二人共、ナガスネが出した剣を見た事がないのだ。当然である。黒き剣は死人の剣である。二人が知ろうはずがない。

「お館様！」

兵達を浄化したウズメが戻り、ナガスネに海神で攻撃を仕掛けた。
「効かぬ！」

海神の聖水は、ナガスネにかかる事なく、消滅した。
「!？」

ウズメは息を呑んだ。

「我らはイザ様のお力を頂いているのだ。そのような見戯にも等しい術で、我らを倒せると思うたか？」

ナガスネがウズメを見た。ウズメはそのナガスネの異様な風体と、その目の恐ろしさにたじろいだ。

「消えよ！」

ナガスネが黒い剣を振るうと、海神はその剣の放つ妖気で溶けるように消えてしまった。

「……」

ウズメはあまりの出来事に動く事ができない。

「おのれ！」

タジカラは奥方の危機を救うべく、剣を振り上げてナガスネに向かった。

「させぬよ！」

ウカシの首が飛翔し、タジカラに襲いかかる。

「うおっ！」

タジカラはその首を剣で払おうとするが、ウカシの首はまるで鳥のように動き回り、タジカラを翻弄した。

「まずはうぬからだ、ウズメ。一度、目交^{まぐお}うてみたかったがな」

ナガスネが嫌らしい笑みを浮かべ、ウズメに近づく。ナガスネの言葉を聞きつけたタジカラは、ウカシの首を脇差しで叩き落とし、

「ナガスネーッ！」

と馬を駆った。スサノもナガスネの口から出たそのあまりにも下劣な言葉に仰天した。

「ナガスネ様……」

今度こそ、完全に断ち切れると思った。もうあれは同じ方ではな

いのだと。

「今の言葉、断じて許せぬーっ！」

タジカラはナガスネの後方から斬りかかった。しかしナガスネはまるでそれを予期していたかのようにかわし、その反動を利用して、黒い剣をタジカラに振り下ろす。

「お館様！」

ウズメの絶叫が響いた。

「くっ！」

もう少しでタジカラは首を刎^はねられていたところだったが、スサノの炎の剣がナガスネの腕を斬り飛ばしていた。

「ぬう！」

もはや痛みも感じないナガスネは、只悔しそうにスサノを睨む。その上、斬り落とされた腕は、剣を持ったままナガスネに戻り、くっついてしまった。

「何と！」

タジカラとスサノ、そしてウズメが思わず叫んだ。

「タジカラーッ！」

そこへウカシの首が突進して来た。

「ぬおおお！」

鬱陶しいとばかりに、タジカラはウカシの首を剣で両断し、スサノがそれを炎で焼き払った。

「うごあーっ！」

ウカシの首は業火に焼かれ、消失した。

「後は貴様だけだ」

タジカラとスサノが、ナガスネを睨んだ。

一方、ヤマトの国の連合軍が接近しているアマノイワトでは、武彦とツクヨミがそれを迎え撃つべく、イワトの入口で待っていた。「オモイさえ討てば、戦は収まります。さすれば、後はイザのみ」ツクヨミが前を見据えたままで言った。武彦は、

「はい」

と大きく頷く。

（もうすぐ終わる。もうすぐ終わるんだ）

武彦は高鳴る胸の鼓動を確かめるように手をかざした。

「あれ？」

「如何なさいましたか、たけひこ様？」

ツクヨミが尋ねた。武彦は、

「ああ、えーとですね。僕の世界から、物が持ち込めるかなと思っ
て、確かめてみたんです」

「左様ですか」

ツクヨミは興味深そうに武彦を見ている。

「そしたら、本当に、ほら」

武彦は懷からデジタルカメラを取り出した。

「おお。これは如何なる物にございますか？」

ツクヨミは恐る恐るデジタルカメラに顔を近づける。

「これは、写真が撮れるんです」

「じゃしん？」

ツクヨミにはそれからわからない。武彦は苦笑いして、

「つまりですね」

とツクヨミにカメラを向け、シャッターを押した。

「おお！」

ストロボが焚かれたままだったので、ツクヨミはその光に仰天し
た。

「ほら、ツクヨミさん、見て下さい」

武彦はツクヨミに撮れた画像を見せた。

「こ、これは？」

言霊師であるツクヨミでさえ、その箱は驚愕の存在である。

「わ、私がこの中に？」

「いえ、そうではなくてですね……」

武彦は拙い説明を繰り返し、ようやくツクヨミにデジカメの仕組

みを理解してもらった。

「たけひこ様の世界は、こちらより遙かに進んでいるようですね」

「さあ、それはどうかなあ」

武彦にしてみれば、ツクヨミがもし武彦の世界でその気になれば、どんな軍事大国も滅ぼせるのではないかと思えるので、自分達の世界の方が進んでいるのかどうかはわからなかった。

「たけひこ様」

ツクヨミがウガヤ軍に気づき、前を見た。武彦の目にも、その軍勢が確認できた。今までのどの軍より、兵の数が多い。そう思った。
(大丈夫かな?)

武彦は急に不安になった。

三十九の章 クシナダの戸惑い、ウズメの力

今や魔物と化してしまったヒノモトの將軍ナガスネと、タジカラ・スサノの睨み合いは続いていた。タジカラの奥方ウズメは、その後ろで不安そうに行方を見守っていた。

「私は、ウカシのような訳にはいかぬぞ、スサノ。私の剣の腕は、よく知っていますか？」

「……」

スサノはその言葉に苛立ちを覚えた。確かにナガスネの剣の腕は、スサノとほぼ互角であった。だが、今その事を引き合いに出されるのは、我慢がならない。すでにナガスネは、スサノの知っているナガスネではない。命を懸けて仕えようと思った名将ではないのだ。ナガスネは、その謀略的な思考が、国王であるホアカリに好まれていなかったが、彼がヒノモトの事を第一に考えていたのは、紛れもない事実である。但し、ヒノモト至上主義の度が過ぎてヤマトの国を滅ぼそうとしていたのは誤りだった、とスサノは思っていたが。

「委細承知！」

スサノは剣の炎をより大きくし、ナガスネに接近する。

「その焰で、私を焼くつもりか、スサノ？ 恩知らずな奴よ」

「恩知らず？ そのような事、魔物に言われたくはない！」

スサノの反撃の言葉に、タジカラとウズメは顔を見合わせた。

「スサノめ、もはや蟠りなし、か」

「そうですね」

ウズメはホツとして微笑んだ。彼女も、ヤマトの兵の死人を浄化する時に心が痛んだ。しかし、そんな事に囚われていたら、まさしくヨモツの女王であるイザの思う壺なのだ。イザが死人を使って戦を仕掛けるのは、心理作戦なのだから。

「ナガスネ様の御名をこれ以上、穢す事は許さぬ！」

スサノは一気にナガスネに近づいた。

「戯言を！」ざれごと

ナガスネが剣を振るう。スサノはそれを受け、跳ね飛ばす。

「ぬう！」

ナガスネの剣はしなり、反動でスサノにその剣先が襲いかかって来た。

「何!？」

スサノは辛うじてそれをかわし、一旦ナガスネから距離をとった。
(あの剣、面妖な……。やはり、ヨモツのなせる業なのか?)

彼の額に汗が伝った。

「まずいな」

タジカラが呟く。ウズメが、

「お館様？」やかたさま

と疑問の眼差しを向ける。タジカラはスサノとナガスネを見たまま
で、

「スサノは頭で割り切ってはおろうが、心が割り切れておらぬ。踏
み込みが甘く、ナガスネに剣が届いておらん」

「そんな……」

夫タジカラと自分を争ったスサノの危機は、ウズメにとって非常
に怖かった。

その頃、ヨモツとオオヤシマを隔てていたヒラサカの跡に到着し
たアキツとクシナダは、ヨモツの兵が再び通り抜けないように襦みそぎを
行う準備をしていた。ほとんどの穢れは、アキツが祓っていたが、
根深い物は再び戻り始めていたからだ。

「クシナダ、如何しましたか？」

顔を引きつらせているクシナダを見て、アキツが声をかけた。

「その、やはり、心が落ち着きませぬ。しばしお待ち下さい」

「わかりました」

アキツは微笑んで応じた。二人は、正式な祓いを行うため、服を
脱ぎ、薄い絹の巫女服に着替えていた。クシナダは、素肌が透けて

見える衣装を着た時、アキツの肌の美しさを目にし、自分が肌を晒すのが恥ずかしく思えたのだ。しかし、アキツは、常日頃からそういった服装に慣れていたので、クシナダの肌を気にしてはいない。

「クシナダ、恥ずかしいのですか？」

アキツが心を見透かすように尋ねる。クシナダはギクツとして、

「は、はい」

と正直に答えた。するとアキツはニコツとして、

「ここには私と貴女だけです。何も恥ずかしい事はありません。ましてや、我らはこれからここに残る穢れを祓うのです。そのような心では、穢れは祓えませんよ」

「も、申し訳ありません」

クシナダは跪いて頭を下げた。アキツは微笑んだままで、

「詫びなくても良い。心から、邪念を追い出さない。さすれば、この禊はうまくいきましよう」

「はい、アキツ様」

クシナダは目を閉じ、自分の心の整理整頓を始めた。

アマノイワトを目指すウガヤ王の軍は、遂にその視界にイワトの入口を捉えた。

「イワレヒコ様と、ツクヨミがおります」

先発していた偵察隊が報告する。

「おのれ、ツクヨミめ。未だイワレヒコをそのまやかしで縛っているのか!？」

目を血走らせ、ウガヤは憤激した。

「父上、私が先陣を賜りとう存じます」

イツセが後ろから声をかけた。ウガヤは軍師オモイを見る。オモイは微かに頷いた。

「許す。見事、ツクヨミを討て。さすれば、イワレヒコはまやかしより抜け出せるはず」

「はは！」

イツセは頭を下げ、自分の部隊に戻った。

（ツクヨミと話がしたい。どちらが正しいのか、何としても確かめねば）

イツセはこれを最後の機会と考えていた。

「イワレヒコ……」

イツセはたった一人の弟を思い、胸が痛んだ。数多くいた弟達は、戦で次々に命を落とした。勇猛果敢で鳴らしたイワレヒコが、今生きている最後の弟。その弟を失いたくない。イツセは強く心に念じた。

「来たようですね」

武彦が言った。ツクヨミは頷き、

「はい。私は姿を消し、オモイに近づきます。たけひこ様は、イワトに迫る兵を押し留めて下さい」

「はい。でも、大丈夫ですか、僕一人で？」

武彦が不安そうに言うと、

『案ずるな、武彦。お前には我がついておる』

神剣アメノムラクモが言った。武彦はその声にホツとし、

「そうですね」

と頷いた。

「では、参ります、たけひこ様」

「はい」

ツクヨミは言霊で姿を消し、ウガヤ軍に向かった。

スサノとナガスネの対決は、時折剣を交えるだけで、長期戦になって来ていた。

「どうした、スサノ？ この私が怖いのか？」

ナガスネがニヤリとしてスサノを挑発する。スサノはムツとして、
「黙れ！ そのような言葉で惑わされぬ！」

怒りが増幅し、スサノは冷静さを失って来ていた。

「これで仕舞いだ！」

スサノは炎の剣を振り上げ、ナガスネに突進した。

「愚かな……」

ナガスネは黒い剣を中段に構え、スサノを待ち受ける。

「む？」

ウズメはその時何かを感じた。八百万やおよろずの神を召喚する舞踏師の彼女ならではの、勘だった。

「スサノ様、右を！」

ウズメの声が辺りに響いた。

「うお！」

スサノはその声に反応し、自分の右を見た。すると、真っ黒な何かが、今まさに飛びかかろうとしていた。

「おのれ！」

スサノは馬を止め、その黒い襲撃者を炎の剣で一刀両断した。

「ぎゃあああ！」

それはヨモツの魔物だった。魔物は業火に焼かれ、消滅した。

「ウズメ殿、忝かたじけない」

スサノはチラッとウズメを見て礼を言った。

「いえ」

ウズメは微笑んで応じた。

「汚い手を使う。やはりお前はナガスネ様ではない。魔物よ」

スサノの怒りの眼差しに、ナガスネはニヤリとした。

「昔の思い人に助けられるとは、お前もつくづく情けない男よ」

「……」

ナガスネの挑発に、スサノは反応しなかった。ウズメはムツとしていたが。

「言いたい事はそれだけか、魔物？」

スサノはようやく全てを振り切った。タジカラにはそれがわかった。

四十の章 オモイの罌、ツクヨミの狼狽

ヤマトの国の嫡男であるイツセは、先発隊を率いて武彦達がいるアマノイワトに進軍していた。

「イワレヒコ……」

イツセは妹であるイスズから、武彦の事を聞いていたが、まだ完全に理解はしていなかった。

（イワレヒコがイワレヒコでないなどと、イスズの申す事がわからぬ）

それでも、血を分けた兄弟の中で一番信頼できるイスズの言葉は重い。

「あの話が真^{まこと}ならば、まだ望みはある」

彼は、武彦と共に父であるウガヤ王を説得^{いぐや}し、戦をやめさせ、軍師オモイを追放しようと考えた。

「しかし……」

ウガヤはオモイに操^{はかど}られているらしい。それが真実ならば、事はそう簡単には拗^{はかど}らない。

「何にしても、今はツクヨミと話さねばならぬ」

イツセはイワトを見据えた。

そのツクヨミは、姿を消して飛翔していた。

（イツセ様？）

彼は先発隊の先頭にいるイツセに気づいた。

（イスズ様はイツセ様には我らの事をお話されたと聞いた）

ツクヨミはイツセと話そうと思ったが、そのすぐ後ろをオモイ率いる別の部隊が追って来ているのにも気づいた。

（オモイ！）

ツクヨミは飛翔をやめ、地面に降り立った。

（彼奴^{あやつ}を仕留めれば、戦は終わる）

ツクヨミはオモイに向かって走り出した。

オモイは、イツセが反逆するのではないかと考え、ウガヤにはイツセを援護すると嘘を吐いて、彼の部隊を追っていた。

（む？）

何かが迫る気配がする。しかし、視界には何もいない。

（もしやこれは？）

ツクヨミの接近を感じたオモイは、ニヤリとした。

（無駄よ、ツクヨミ。お前にはこの私は殺せぬ）

スサノとナガスネの戦いは、最終局面を迎えようとしていた。

「そろそろ終わりにするか、スサノ？」

ナガスネは半分失われた顔でニヤリとした。スサノはフツと笑い、「ようやく、消える覚悟ができたか、魔物め」

「ほざくな！」

ナガスネはそう言い捨てると、剣を振り上げ、突進して来た。

「はあああ！」

スサノは炎の剣の業火を最大にし、

「消えよ、魔物！ それ以上、ナガスネ様を愚弄するな！」

と叫ぶ。ナガスネの黒い剣が振り下ろされ、しなる。グリーンと曲がった剣先が、スサノに襲い掛かる。

「笑止！」

スサノはそれを脇差で叩き落とし、炎の剣でナガスネを斬り裂いた。

「ぐおおおお！」

ナガスネの身体は、真っ二つになり、馬から転げ落ちる。それと同時に、馬が崩れるように消滅した。

「スサノ、礼を言う」

燃え尽きる寸前、ナガスネは己おのれを取り戻し、スサノに微笑んだ。

「ナガスネ様ーッ！」

燃え尽きて行くナガスネに、スサノは絶叫した。ウズメは涙を流

し、タジカラに寄り添った。

「スサノ、見事だった」

タジカラは涙を堪えて、友の決断を褒め称えた。

「よし、ホアカリ様に追いつかねばならぬ、スサノ」

「おう」

スサノは涙を拭い、タジカラを見た。

正式な巫女服で、イワトの奥のヒラサカの襖を完了したアキツとクシナダは、元の服に着替え、イワトの入口に来た。

「イツセさんが来るようです」

武彦は、ツクヨミからの連絡をアキツに話した。

「イツセ殿が？」

「はい。イツセさんは、ツクヨミさんの事も僕の事も知っているそうです。だから、話し合いに来るのではないかと、ツクヨミさんが言っていました」

武彦の言葉に、アキツはニッコリとし、

「そうでしょうね。戦がお嫌いなイツセ殿なら、そう考えるでしょう」

クシナダも安心したように、

「ならば、ここは攻められないのでしょうか？」

「いえ、その後ろにオモイが来ています」

アキツの言葉に、武彦とクシナダはギョツとした。

ツクヨミはオモイの乗る馬のすぐそばまで来ていた。

（このようなやり方は好まぬが、そうも言っておれぬ）

彼は意を決して、オモイを見上げた。

「露と消えよ、オモイ」

ことだま

言霊が放たれ、オモイに到達した。ツクヨミはそこまですぐ間違いなく確認した。しかし、オモイは何事もなかったかのように馬を進め、ツクヨミの脇を通り過ぎて行った。

（如何なる事だ？）

ツクヨミは、今見た事が信じられなかった。

「イツセ様から離れるな。私は別の用がある」

オモイは何故か、部隊から離れ、イワトとは別の方角へと馬を駆った。

（どこへ行くつもりだ？）

ツクヨミは不審に思い、彼を追った。

「ついて来ているか、ツクヨミ」

オモイが前を向いたままで言い放った。ツクヨミはギョツとした。
「姿を消しても、私にはわかる。隠れておらずに出て参れ」

オモイは部隊からしばらく離れたところで馬を止め、振り返った。

「お前は何者だ？」

ツクヨミは姿を現して尋ねた。オモイはニヤリとして、

「それは私にもわからぬ。生まれた時から、私は面妖な力を持っていた」

「何？」

ツクヨミは眉をひそめた。オモイはツクヨミの混乱ぶりを嘲り、

「私には、如何なる術も通じぬ。それが何故なのかは、誰も知らぬ。
ある者は、私を神と称えた。しかしある者は、私を物の怪と謗った」

ツクヨミは、自分と同じような境遇のオモイの話に呆然としていた。

「よって、お前得意の言霊も、私には通じぬ。如何致す、ツクヨミ？」

オモイは不敵な笑みを浮かべ、ツクヨミを見た。

アキツは、オモイとツクヨミが移動したのを感じた。

「二人で別のところに移りました。何があったのかはわかりませぬが」

「それは誠に気がりですが、イツセ様との事の方が先です」
クシナダが口を挟んだ。アキツは微笑んで、

「それはわかっております」

クシナダはアキツに近づき、

「アキツ様は、ツクヨミ殿を？」

「え？」

クシナダにいきなり凶星を突かれたアキツは、顔を赤らめた。クシナダは微笑んで、

「私は良い事だと思います」

「あ、ありがとう、クシナダ」

アキツは照れたように笑って、そう言った。

『来るぞ』

神剣アメノムラクモが、武彦に呼びかけた。

「はい！」

武彦は剣を抜く。

『イツセがどう考えておるかはわからぬが、油断はするな、武彦』

「わかりました」

武彦は剣を握る手に力を入れた。

ウガヤは、先発したイツセを追ったオモイが、姿を消したと知り、狼狽していた。

「オモイが討ち取られたのか？」

「いえ、そうではありませぬ。進軍から外れ、どこかへ行かれたようです」

斥候せっこうが跪いて告げる。ウガヤは苛立ちを隠さずに、

「何をしておるのだ、オモイは！？」

と叫んだ。

四十一の章 イツセの思い、オモイの焦り

ヤマトの国の軍師オモイは、もはやその仮面を脱ぎ捨てていた。

「私の願いは、オオヤシマをイザ様の国に加える事。当面はな」

含みを持たせた言いように、ツクヨミの眉が吊り上がる。

「それは如何なる事か？」

オモイはツクヨミを見てニヤリとし、

「オオヤシマの住人を悉く殺めし後は、我が故郷も攻むる」

「何と!？」

ツクヨミは驚愕した。

（イザは、この世界全てを統べるつもりか……。オオヤシマは、足がかりに過ぎぬと？）

「そのような事は、決してさせぬ！」

ツクヨミは大声で言った。オモイは高笑いをして、

「お前の力は、決してこの私には通じぬのだぞ。如何致す、ツクヨミ？」

「私の力は、言霊のみにあらず！」

ツクヨミは体術でオモイを攻撃した。

「温いわ！」

ツクヨミの突き、蹴り、掌底を、オモイはいとも簡単にかわす。

「私はお前に劣るところがないのだ、ツクヨミ。無駄よ」

「くっ！」

ツクヨミはそれをはっきりと悟ってしまった。

（この男、誠に面妖……。魔物ではない。言霊が通じぬのは、何故なのか？）

ツクヨミの額を、汗が流れ落ちた。

タジカラ達は、ようやくホアカリの軍に追いついた。

「陛下、ウマシ様、ご無事で何よりでございます」

スサノが馬から降りて跪く。それをタジカラとウズメは、離れたところから見ていた。

「あの小倅こせがれの疑い深さには、呆れたものよ」

タジカラは吐き捨てるように言った。ウズメは苦笑いして、
「仕方ありません。ヤマトとヒノモトは、戦いくさをしておるのです」

ヒノモトの国王ホアカリの王子であるウマシは、タジカラとウズメを近くに来させるのを拒否し、スサノだけ呼び寄せたのだ。ホアカリが異を唱えたが、タジカラとウズメは揉め事を避けるため、自らウマシの言葉に従い、馬を止めた。スサノも苦々しそうな顔をしたが、何も言わずに一人でホアカリのそばに行ったのだ。

「スサノ、途中、死人しびとに出会わなかったか？」

ホアカリが尋ねた。スサノは顔を上げて、

「はい。ナガスネ様と、ウカシがおりました」

「そうか……」

ホアカリは悲しそうな顔で頷く。スサノはギュッと拳を握り締め、
「ウカシとナガスネ様はこの私が、天へとお送り致しました。ご安心下さい」

その言葉にウマシは急ににこやかな顔になった。

「おお、さすがだ、スサノ。お前はこのオオヤシマ一の戦上手いくさじょうずぞ」

「ありがとうございます」

スサノは頭を下げながら、ウマシを小声で罵る。

「腰抜けが」

ホアカリはタジカラ達を見て、

「ウマシ、もう良かろう。タジカラもウズメも、共にスサノと戦いし者。こちらに呼ぶべきではないか？」

「はあ」

ウマシはまだ、タジカラとウズメを信用していない。その態度の煮え切らなさにスサノが動いた。

「タジカラ、ウズメ殿、陛下の許しが出たぞ。こちらへ参れ」

ウマシは慌てて異を唱えようとしたが、ホアカリがそれを遮る。

「タジカラ、ウズメ。大儀であった。話がしたい」

「はは」

タジカラはウズメにムスツとした顔を見せてから、馬を進めた。ホアカリ達を守るようにして立っていたヒノモトの兵達が、サツと両脇に退く。

「これより、如何致すつもりか、スサノ？」

ホアカリはウマシが意気消沈して後ろに下がったのを機会に、前に出た。

「はい。まずは城に戻り、戦の支度です。我らの敵はヨモツ。生半可な事では、太刀打ちできませんぬ」

「そうだな」

ホアカリとしては戦は避けたいのであるが、相手がヨモツでは否も応もない。戦うしか道がないのだ。

「お久しゅうございます、陛下」

タジカラとウズメが馬を降り、スサノと並ぶようにして跪く。

「タジカラ、大儀であった。礼を言うぞ」

「は！」

本来であれば、この方がワの国の王位継承者だとタジカラは考え、以降はホアカリに従う決意をしていた。

（ウガヤ王は気性が激し過ぎる。あれでは国は治まらぬ）

ホアカリの温厚な顔を間近で見て、尚の事そう思うタジカラであった。

オモイが戦列を離れたため、オモイの部隊は動きが止まってしまった。イツセから離れるなどとは言われたが、どうすれば良いのかは命じられていないからだ。それに気づいたイツセは、

「お前達はここで待て。命あるまで、動くでないぞ」
といい、オモイの部隊を封じた。

（オモイがどこに行ったのかはわからぬが、こやつらを足止めしておくことができたのはありがたい）

イツセは自分の部隊を二手に分け、一つをオモイの部隊の監視に残し、残りと共にアマノイワトに近づいた。

「イツセ殿」

その顔がはつきりと見える位置まで来たイツセを、アキツは懐かしそうな目で見ていた。

「アキツ様」

イツセは部隊の進行を止め、自分の馬だけを進めた。やがて彼は馬を止め、降りた。

「お懐かしゅうございます」

イツセはその場に跪いた。アキツは武彦とクシナダに目配せし、イツセに歩み寄った。

「こちらこそ、お久しゅうございます、兄様^{あにさま}」

幼い頃、アキツはイツセを慕い、よく遊んでもらったのだ。その頃の呼び名が、「兄様」である。

「まだそう呼んでいただけとは、このイツセ、誠に嬉しゅう存じます」

イツセは再び頭を下げた。

「貴方は全てご存じなのですね？」

アキツが尋ねる。イツセは立ち上がり、

「はい。そちらのイワレヒコが、異界の方の魂を宿している事は、存じております」

武彦は、その言葉を聞いてホッとした。

「大丈夫みたいです」

彼は神剣アメノムラクモに囁いた。

『うむ。我を鞘に納めよ、武彦』

「はい」

武彦はアメノムラクモを鞘に戻した。

「たけひこ様」

イツセが武彦を見る。

「は、はい」

ドキッとしてイツセを見る武彦。

「私と共に父に会っていただきたい。そして、父をお諫めし、戦を終わりにしましょう」

「はい」

良かった、戦うんじゃないくて。武彦は心の底から安心した。

「私達も行きます。ウガヤ王を説き伏せる事が叶えば、ヨモツと戦う事ができます」

アキツが提案する。武彦はまたギクツとした。

（ああ、そうか、一番の強敵が残っていたんだ……）

イツセはアキツを見て、

「ありがとうございます」

と頭を下げた。

「む？」

オモイは、イツセとアキツが会っている事に気づいた。

「おのれ、そうはさせるか！」

このまま、ヤマトとヒノモト、そして旧ワの国が連合してしまうと、自分の計略が水泡に帰すと感じたオモイは、馬に飛び乗った。

「行かせぬぞ、オモイ！」

ツクヨミがさかず馬に言霊を放ち、動けなくした。

「ぬう！ 邪魔立て致すな、ツクヨミィ！」

オモイは怒りの形相でツクヨミを睨み、馬から飛び降りた。

「お前はここで殺す！」

オモイの目がギラつき、ツクヨミを睨み据えた。

四十二の章 ホアカリの心、イザの企み

ヤマトの国の軍師オモイ。その正体はイザの配下。そしてその野望はこの世の全てをイザの物とする事。

「私にとって何よりの邪魔者がお前だ、ツクヨミ」

オモイは凄まじい形相でツクヨミを睨む。

「かつて、オオヤシマで王家にも崇められ、全ての民の崇拝の対象でもあった言霊師^{ことだまし}。それは私にとっては、一番の敵」

「……」

ツクヨミはオモイを睨み返し、何も言わない。

（この者、如何なる考えなのか？ 言霊師に私怨があるようにも感じられる）

彼はオモイの真意を探ろうとしていた。

「今ここで、お前を殺める^{あや}。イザ様の御心のままに」

オモイが何かを唱え始めた。ツクヨミにはその言葉がわからない。（オモイの発する言葉、正体が掴めぬ……。何をするつもりか？）

「アッ！」

それは叫びなのか言葉なのかわからなかった。しかし、オモイの口からその音が発せられた瞬間、ツクヨミの足下の小石が、まるで生を得たかのように動き出し、彼に襲いかかって来た。

「何と!？」

ツクヨミは素早く飛び退き、飛翔した。

「逃さぬぞ、ツクヨミ！」

オモイの呪文のような言葉は続く。小石は次々に寄せ集まり、巨大な岩のような大きさにまで膨れ上がり、やがて人の形となった。

「ぬっ？」

ツクヨミはその岩が人の形になり、右手に巨大な斧のようなものを振りかざすのを見た。

「物の怪か？」

岩の魔物は、ズシンと地面を揺らして歩き出し、ツクヨミを追いかける。

（あれは岩の塊。言霊は通じぬという事か？）

ツクヨミの背を汗が伝う。

「やはり、オモイは侮り難し。如何様にすれば良いのか……」

武彦達は、イツセの部隊と共にウガヤ王の陣に向かい始めていた。
「何だ、あれ？」

武彦が岩の魔物に気づいた。それほどオモイの操る魔物は巨大であつた。

「面妖な……。あのような者を操るは、オモイか？」

イツセが歯ぎしりした。アキツも魔物を見上げ、

「オモイは一体何者でしょう？」

と呟いた。

『武彦』

神剣アメノムラクモが語りかける。

「はい」

『ツクヨミが危うい。ウガヤ王はアキツ様とイツセ殿にお願いし、お前はクシナダと共にツクヨミを助けに行くのだ』

武彦は思わずクシナダを見た。クシナダは武彦に命を助けられた事を恩に感じているので、

「参りましょう、たけひこ様」

とすぐさま同意した。イツセは心細そうだったが、

「ツクヨミを失うは、我らにとって一大事。急がれよ、たけひこ様」

「はい」

武彦はアキツを見た。アキツがツクヨミに惹かれている事はわかっている。幼馴染みの都坂亜希みやこざかあきに瓜二つのアキツが、他の男に心惹かれているのは何とも複雑な思いの武彦だが、ツクヨミの危機を救わなくてはならないのは間違いない。

「ツクヨミ殿をお救い下さい、たけひこ様」

アキツは目を潤ませて武彦に懇願するように言った。

「はい、アキツさん」

武彦はクシナダと共に馬を駆り、ツクヨミの下へと向かった。

ヒノモトの国王ホアカリとその一行は、アマノヤス川を越え、城までもう一息のところまで来ていた。

「父上」

ホアカリの嫡男ウマシが小声でホアカリに話しかける。

「何じゃ？」

ホアカリは鬱陶しそうに応じる。

「父上は、タジカラをお信じになるのですか？」

「何を言いたいのだ、ウマシ？」

尚もヤマトの国の將軍であるタジカラとその妻ウズメを信じられないウマシに、ホアカリは呆れていた。

「伯父上の策ではありませぬか？ このまま城まで連れて行くは、危うき事ですぞ」

ウマシは、タジカラとウズメを信用できないというより、父ホアカリの弟であるヤマトの国の王ウガヤを信じられないのだ。

「ウマシよ、其方^{そなた}はあまりにも人を疑い過ぎるぞ。スサノと共に戦ってくれたタジカラとウズメをそこまで信じぬは、其方の度量の狭さよ」

「……」

ウマシは全く自分の意見を聞き入れてくれない父にムツとし、馬を離れさせた。

（父上は、あまりにお人が好過ぎるのだ）

ウマシはウマシなりに国を思っているのだ。しかし彼の考えは、あまりに狭苦しかった。

そしてそのウマシの疑いの対象であるウガヤは、アキツとイツセが同行しているのを斥候^{せっこう}に知らされ、激怒していた。

「イツセめ、アキツの色香に迷うたか」

そして斥候を睨み、

「オモイは如何したのだ？　まだわからぬのか？」

「ツクヨミと戦っております」

斥候の意外な報告に、ウガヤは目を見開いた。

「ツクヨミと？　それはまた如何なる事か？」

ウガヤにはその経緯が理解できなかった。

「軍師様は、秘術を使われ、ツクヨミを追いつめておるようです」

斥候の言葉に、ウガヤはニヤリとした。

「そうか。オモイは戦を考えるは得意であれど、戦そのものは不得手であると思っていたが、それは間違いであったか」

しかし、ウガヤの喜びも、然程時を待たずして、ガラガラと崩れるのである。

ヒノモトの城でひたすら夫ホアカリの帰りを待っていたトミヤは、ホアカリがアマノヤス川を越えたという知らせを受け、喜んでいた。

「陛下、よくぞご無事で」

まだ顔を合わせてもいないのに、トミヤは涙ぐんでいた。しかし彼女はまだ知らないのだ。実の兄ナガスネの死を。

「後は戦が早う終わる事です」

トミヤは涙を拭いながら、侍女達に言った。

そして他方ヤマトの国の城では、王女イスズと王妃タマヨリが玉座の間で深刻な顔で語り合っていた。

「兄様は父上をお諫めすると申されました。ですが、父上が兄様のお言葉をお聞きになるとは思えませぬ」

イスズ姫は涙を浮かべて母に訴えた。タマヨリはイスズを抱きしめて、

「イワレヒコの身体におられるたけひこ様を信じましょう、イスズ。異界の方が、必ずやこのオオヤシマを正しき道へと誘って下さるは

ずです」

「はい、母上」

イスズ姫はタマヨリの顔を見て頷いた。そして頬を染め、

「あの方なら、オオヤシマをお救い下さると信じております」

と応じた。

「そして……」

そして、あの方の御子を生みたい。イスズは心の底からそれを望んでいた。

ヨモツ。

オオヤシマの地下深く、そしてアマノイワトの奥深くに存在する闇の国。

その最深部にある女王イザの玉座。彼女はその漆黒の瞳で闇の彼方を睨んでいた。

「オモイ……。其方の心、見せてもらったぞ。これからも我のために励めよ」

彼女はそう呟くと立ち上がった。

「もう一息じゃ。あとはウガヤよ」

イザの顔が狡猾さを増す。彼女はウガヤに何をさせようとしているのか？

オオヤシマが更に揺れようとしていた。

四十三の章 ホアカリの懸念、ウガヤの野心

武彦達は、ツクヨミとオモイの戦いの場へと急いでいた。巨大な魔物が斧を振るう姿が見える。武彦は動揺していた。

（あんな怪獣みたいな奴、倒せるのか？）

するとその心を見透かすかのように神剣アメノムラクモが言う。

『案ずるな、武彦。我に斬れぬものはこの世になし』

「はい、御剣さん」

『その言いよう、やめよ。何やらこそばゆい』

「はい」

アメノムラクモが自分の感情を語ったのに武彦は苦笑した。

『クシナダよ、あの魔物は土塊つちくれ。其方そなたの水の技で倒してくれ』

アメノムラクモはクシナダに告げた。

「はは！」

クシナダは周囲からたくさん水を呼び寄せ、臨戦態勢に入る。

（改めてみると、クシナダさんて綺麗な人だよなあ）

この緊急時に不謹慎な武彦である。

オモイは、ツクヨミを追い込みながらも、武彦達の接近を察知していた。

「おのれ、邪魔はさせぬ！」

オモイは別の魔物を作り出し、武彦達に向かわせた。

「何と！」

ツクヨミはオモイの呪力の高さに目を見開いた。

（こやつ、やはり人にあらず……。何者なのだ？）

言霊が効かない相手に、ツクヨミは無力だった。

「くっ！」

魔物の斧を避け、自分の身を守るので精一杯なのだ。

（たけひこ様！）

それでも彼は、武彦の身を案じた。

「わわ！」

武彦は、もう一体現れた魔物に仰天していた。

「はあッ！」

クシナダの操る水が、魔物を次々に貫く。痛みなど感じない魔物は、全く動きを止めず、武彦達に近づいて来る。

『クシナダ、足を折れ！ 彼奴^{あやつ}を倒せば、勝機はある！』

アメノムラクモの指示でクシナダは水を動かす。魔物も足を攻撃されるのに気づいたのか、腕を下げ、防御する姿勢を取った。

『今だ、武彦！ 我を抜け！ 彼奴の腕を斬るのだ！』

「はい！」

武彦は剣を振りかざし、馬を走らせる。

『飛ぶのだ、武彦！』

「ええっ？」

戸惑う武彦だったが、やるしかないと思い、馬から飛んだ。すると不思議な事に、彼はまるで鳥のように空を舞った。

「たけひこ様！」

クシナダが驚いて彼を見上げる。

『斬れ、武彦！ 敵はまだおるのだ！』

「はい！」

武彦は急降下し、魔物の腕を斬り落とした。ズシーンと大きな音と土煙を伴って、魔物の腕は地面に落ち、元の小石に戻る。

「行けーッ！」

次に武彦は魔物の頭を斬った。魔物は頭から真っ二つになり、崩れ落ちた。

『ツクヨミを助けるぞ、武彦！』

「はい！」

武彦はそのまま飛翔し、ツクヨミの元に向かった。クシナダはあまりの展開に啞然としていたが、

「たけひこ様！」
と馬を走らせた。

「ぬ？」

オモイは、武彦達に放った魔物が倒されたのを知り、ギョツとした。

「あのイワレヒコ、一体……？」

彼はイワレヒコがイワレヒコでなくなっているのを知っているが、其の正体までは掴んでいない。

（もしや、異界の者か？）

オモイは潮時と感じた。

（異界の者の力が読めぬうちは、退くしかあるまい）

オモイは魔物をそのまま放置し、自分は逃げ出した。

「オモイ！」

それに気づいたツクヨミが彼を追おうとするが、魔物が立ち塞がる。

「ぬう！」

魔物の攻撃をかわし、ツクヨミは齒軋りした。

「ツクヨミさん！」

武彦の声が聞こえた。

「たけひこ様？」

ツクヨミも、武彦が飛翔しているのを見て驚いてしまった。

「やあ！」

かけ声と共に、ツクヨミに気を取られている魔物を一刀両断し、武彦は着地した。ドーンと地響きをさせて、魔物は倒れ、小石に戻った。

「ツクヨミさん、大丈夫ですか？」

武彦がツクヨミに駆け寄る。

「私は大事ありません、たけひこ様。それより、オモイが逃げました」

『オモイとウガヤ王を会わせてはならぬ。急ぐのだ、武彦、ツクヨミ!』

「はい」

そこへクシナダが追いついた。

「クシナダ様は、イツセ様を追って下さい。私達はオモイを追います」

ツクヨミはそう言うのと、武彦と共に空へと舞い上がり、飛び去った。

「はあ」

クシナダは、二人の力を目の当たりにし、自分の未熟さを思い知った。

「私など、まだまだだな」

そのウガヤ王は、進軍を再開していた。

「イツセがアキツに寝返り、オモイがツクヨミを追いつめている今、勝機である。アマノイワトを攻め、ヤマトの国こそがオオヤシマの正統なる後継である事を民に示すのだ」

ウガヤの檄に兵は高揚し、軍は力を増したように見えた。

そしてまた、ヒノモトの国では、スサノが軍を再編成し、謁見の間で軍議が開かれていた。

「しかし、イザの力はあるオオヒルメ様を上回ると聞く。大事なのか、スサノ?」

元々戦を好まないホアカリは不安だった。隣に座るトミヤも同様であったが、彼女は兄ナガスネの死を知り、抜け殻のようになっていた。

「ご安心召され、陛下。我らには、異界のたけひこ様と、神剣アメノムラクモ様がいらっしゃいます。必ずや、ヨモツに打ち勝てましょう」

スサノは跪いて答えた。

「そうか」

ホアカリはそれでも心配そうだった。

「はて、ウマシ様はどちらに？」

スサノはホアカリの嫡男ウマシの姿がない事に気づいた。

「先程までそこにおったはずだが……」

ホアカリも知らなかった。それを聞いていたタジカラとウズメは顔を見合わせた。

「あの愚か者、何やら良からぬ事を企んでおる様子であつた。ウズメ、探してくれ」

タジカラが小声で言う。ウズメは黙って頷き、謁見の間を退室した。

イツセはアキツと共に父ウガヤの元に向かつていたが、斥候せっこうの知らせに驚いていた。

「父上がこちらに向かつている？」

「はい。軍を進め、アマノイワトを攻め落とすと兵に命じておいででした」

斥候は跪いて報告した。

「イツセ殿、如何致します？」

アキツが尋ねる。イツセは思案顔で、

「このまま父上のところに行けば、私は勿論の事、アキツ様まで囚われましょう。如何したものか……」

彼は途方に暮れた。

「アキツ様、イツセ様！」

クシナダの馬が追いついた。

「クシナダ、ツクヨミ殿は？」

アキツが不安そうに尋ねる。クシナダは微笑んで、

「たけひこ様が御剣様と共に魔物を打ち倒して下さいました」

「そうですか」

アキツの顔は、愛しい人の無事を喜ぶ顔だ。スサノとの事を思い

出しながら、クシナダはアキツの恋の成就を祈った。

「いた！」

先行していた武彦が、走って逃げるオモイを視認した。

「待て！」

彼はオモイの前に着地した。

「ぐ……」

オモイは思わぬ人物の登場に面食らっていた。

（イワレヒコが？ ツクヨミよりも速く？ しかも、こやつ、今空から降りて来た……）

オモイの額に汗が流れ落ちた。

「貴方とウガヤさんを会わせる訳にはいかないんです！」

武彦はアメノムラクモを中段に構えて言った。

四十四の章 イスズ之力、イツセの願い

武彦は、目の前にいる男に妙な感覚を得ていた。

（何だ、この人？ 目の前にいるのに、そこにいる気がしない……）

『武彦、気を緩めるな。こやつ、手強いぞ』

神剣アメノムラクモが注意する。武彦はハッとして思索をやめる。
「ほう。その剣、噂のアメノムラクモですか。さすがイワレヒコ様。
その剣を使いこなすとは、お見事にございます」

オモイは跪いて頭を下げた。

「え？」

思ってもいない行動に、武彦は困惑する。

『オモイめ、何を企む！？』

アメノムラクモが怒鳴った。オモイは意外そうな顔で、

「何を仰せです、御劍様。みつのあやかし私はヤマトの軍師。ヤマトのために戦っております」

「戯言を！」ぎれいご

ツクヨミが追いつき、着地した。

「フッ、もう来たか」

思いはニヤリとしてツクヨミを見た。

「お前では私を倒せぬ。下がっておれ、ツクヨミ。今から、イワレヒコ様と一戦交える」

「何！？」

ツクヨミがギョツとした瞬間、オモイが何かを放った。

（何だ？）

ツクヨミは武彦を庇って前に出た。しかし、オモイが放ったものはツクヨミをかわし、武彦にぶち当たった。

「うわ！」

武彦は衝撃を受け、後ろに倒れた。

「たけひこ様！」

ツクヨミが慌てて武彦を抱き起こした。

「うう……」

武彦は頭を数度左右に振り、立ち上がった。

「あれ？」

オモイを見ると、そこにはオモイがいなかった。何故か、姉美鈴が立っていたのだ。

「えええ！？」

武彦は混乱した。

「ね、姉ちゃん？」

その言葉に、オモイはニヤリとした。

（術にかかったな。今こやつは、私を己^{おのれ}が一番恐れし者と間違えて
いるはず。勝てる。神剣を振りかざそうとも、勝てるわ！）

「覚悟！」

オモイが一気に武彦に近づく。

「うわああ！」

武彦は、鬼の形相の美鈴が迫って来るので、心底驚いて後退りした。

「たけひこ様！」

ツクヨミには武彦の異変の理由がわからない。

『武彦、如何^{いか}した？』

アメノムラクモにも、武彦が見ている美鈴の幻影まではわからなかった。

「何で姉ちゃんがいるんだよ？」

武彦は混乱を飛び越え、狂ってしまいそうだった。

（余程恐ろしい相手のようだな）

オモイは嬉々として武彦を追う。

「やめてよ、姉ちゃん！　こんなところまで追いかけて来ないで！」

ヤマトの国の玉座の間。イワレヒコの許婚にして姉であるイスズは、妙な声を聞いた。

「イワレヒコ？」

弟が自分と呼ぶ声。そう思った。

「違う。これは、たけひこ様……」

武彦が、助けを求めている。そう感じたイスズは、意識を飛ばした。

（たけひこ様、私がついております。ご案内召されますな）

イスズは癒しの術を心得ている。彼女の意識はその力と共に、武彦に向かった。

『武彦、落ち着くのだ！ 如何したのだ？』

アメノムラクモの声も届かないほど、武彦は混乱している。

「うおおお！」

オモイは更に武彦に追いすがる。

「たけひこ様！」

ツクヨミは無駄と思いながらも、オモイに言霊をぶつけた。

「無駄と申しておろう！」

オモイがツクヨミを睨み、再び土塊の魔物を繰り出す。

「くっ！」

ツクヨミは魔物の攻撃をかわすため、後ずさった。

「そおれ、もう一息よ！」

オモイは、このまま武彦を発狂させようと考えていた。その時である。

『たけひこ様』

武彦の目の前に、イスズの意識が具現化した。

「え？」

武彦はイスズから出る癒しの波動で一気に落ち着いた。

『たけひこ様、私がついております。大事ありませぬ』

イスズの微笑みは、武彦を完全復活させた。

「ありがとう、イスズさん。もう大丈夫です」

武彦はアメノムラクモを構え直し、オモイを見た。

「よくも姉ちゃんに化けたな！　許さないぞ！」

「何？」

オモイは、武彦が術を破ったのを知った。そして、彼の背後にイスズを見た。

（何故あの女が？）

イスズの姿は、オモイの理解を超えていたのだ。

「行けーッ！」

武彦が剣を振り上げて向かって来る。

「おのれエ！」

オモイは斬撃をかわし、武彦から離れた。

「何者だ、こやつ？」

オモイはイワレヒコの正体を掴めないまま、逃走し始めた。

（このままでは、やられる）

彼はイワレヒコの底知れぬ力を恐れたのだ。

「待て！」

武彦が追おうとすると、オモイはもう一体土塊の魔物を出した。

「うわ！」

武彦が魔物と戦っている隙に、オモイは姿をくらましてしまった。

「ツクヨミさん！」

オモイが逃げてしまうのに気づいていたが、武彦はツクヨミ救出を優先した。

「ええーい！」

アメノムラクモが魔物を両断した。

『たけひこ様』

イスズの意識が武彦に近づいた。

「イスズさん、ありがとうございます。もう少して、姉の幻に捕まるところでした」

『姉？』

イスズは、武彦の姉美鈴が、自分に瓜二つなのを聞いている。

『左様ですか』

イスズは合点がいった。だから、武彦の声が自分に聞こえたのだと。

『たけひこ様、私は離れていても、貴方のおそばにおりますから』
イスズは微笑んでそう言うと、光と共に消えた。

「……」

ツクヨミも、イスズがそのような力を持っている事を知らなかったので、啞然としていた。

「とにかく、あいつを追いましょう！」

「はい」

二人は再び飛翔し、オモイ追跡を再開した。

ウガヤ王の進軍を知り、アキツ達は立ち止まったままだった。

イツセは考え込んだまま。アキツも黙っている。クシナダだけが苛ついて馬を動かす。

「クシナダ、ホアカリ殿に使いに行ってくれぬか」

不意にアキツが告げた。クシナダは馬を停め、

「ホアカリ様に、ですか？」

「ええ。ウガヤ殿を説き伏せらるるは、ホアカリ殿しかおらぬと思う」

アキツの言葉に、イツセが顔を上げた。

「そのようです。父はもはや、我らの言葉に耳を貸すとは思えませぬ」

「しかし、戦をしている国の王であるお二人が、お話になるでしょうか？」

クシナダは不安だった。ホアカリは確かにウガヤの兄であるが、ウガヤはホアカリを軽んじている。

「クシナダの申したい事はわかります。ですが、今はホアカリ殿にすぎるしかないのです」

アキツはクシナダを見た。クシナダは目を伏せて、
「わかりました」

と言うと、無数の水を呼び寄せて大きな船を造り、馬ごと乗り込むと、地を滑るように走り去った。

「間に合いますか？」

イツセが不安を隠し切れずに呟く。

「間に合わせねばなりません」

アキツは力強く言った。

武彦とツクヨミは、オモイを見失っていた。

「どこだ？」

武彦は地上に降り立ち、付近を探ったが、オモイはいない。

「また、何やら秘術を使ったのか？」

ツクヨミは齒軋りして悔しがった。

『オモイが目指すはウガヤの軍のはず。そこへ向かうしかあるまい』

アメノムラクモが言った。ツクヨミは頷き、

「そうですね。参りましょう、たけひこ様」

「はい」

二人は飛翔し、ウガヤ軍を目指した。

四十五の章 ウガヤの変貌、ホアカリの意志

オオヤシマの地下深くにある闇の国ヨモツ。その最深部にある女王イザの玉座の間。

「オモイめ。しくじりおったか」

そう言いながらも、イザは笑っている。

「じゃが、ウガヤ王はすでに我が術中にあり。最後の扉を開ける時が来たようじゃ」

イザはその瞳なき漆黒の目を見開き、高笑いした。

「アキツ、うぬがどれ程足掻こうとも、オオヤシマは我のものよ！」
イザの笑い声は、ヨモツ中に轟いた。

ヤマトの国の王であるウガヤの軍は、すでにその視界にアキツ達を捉えていた。

「アキツめ。もはやこれまでと、覚悟を決めたか」

嫡男イツセと共に立ち止まったままのアキツを見て、ウガヤは狡猾に笑った。

「オモイ様、お戻りです」

伝令兵の報告に、ウガヤの顔が怒りに変わる。

「陛下、申し訳ありません」

オモイはウガヤの前に進み出て、跪いた。

「オモイ、何をしていたのだ!? ツクヨミは如何した!? イワレヒコは!?!」

ウガヤの怒りは増すばかりだ。オモイは馬上のウガヤを見上げ、
「ツクヨミとイワレヒコ様は、只今こちらに向かっています」

「何と!」

ウガヤは仰天した。ツクヨミの強さを間近で見て来た彼は、ツクヨミが敵に回った時の恐ろしさをよく知っている。

「オモイ、貴様、ツクヨミと戦^{たたか}うておったのではないのか!?!」

「はい。しかし、イワレヒコ様が神剣アメノムラクモをお持ちになつて……」

オモイの言葉に、ウガヤは気が変になりそうだった。

「勝てぬ。勝てぬ。勝てぬーッ！ ツクヨミばかりか、彼奴に操られしイワレヒコが、ワの国の神剣であるアメノムラクモを持っていたのでは、我らに勝てるはずもなし！ 引き上げるのだ、オモイ！」

ウガヤは狂乱状態に陥っていた。

（使えぬお人だ。仕方あるまい）

彼は切り札を使うことにした。

「いえ、まだ我らにも勝機がございます」

「何？」

ウガヤはさわぐのをやめ、オモイを見た。オモイはフツと笑い、「私は闇の力を使う事ができます。さすれば、ツクヨミであろうが、神剣であろうが、負けませぬ」

「闇の力、だと？」

ウガヤの眉間に皺が寄る。さすがの暴君でも、闇の力は使いたくないのだ。そんな事をすればどうなるのか、彼にもわかっている。

「しかしオモイ、そのような事をなさば、ヨモツが……」

ウガヤの反論は、オモイにとって想定内だった。

「ご案じなさいますな、陛下。ヨモツは我らの味方にございます」
「何？」

ウガヤの目が大きく見開かれる。

（あと一押しよ）

オモイはニヤリとした。

その頃、アキツの命でヒノモトに向かっているクシナダの前に、ホアカリの嫡男ウマシが軍勢を率いて現れた。

「ウマシ様！」

クシナダは、ウマシがウガヤを討つたために出陣したと思ったのだが、それは間違いだった。

「逆賊クシナダ！ 成敗致す！」

「逆賊？」

クシナダはウマシの暴言に呆れ返っていた。

（このお人は、どこまで愚かなのだ……）

「かかれ！」

ウマシの命令で、兵がクシナダに向かって来る。皆知った顔だ。皆、泣いている。

「お前達……」

クシナダは、ヤマトの舞踏師であるウズメが、ヨモツによって死人と化したヤマトの兵と戦っている様を思い出した。

「己^{おのれ}らは、このクシナダに弓引く気か！？ それ程の覚悟があるなら、かかって参れ！」

クシナダは大声で言い放った。まるでそれはツクヨミの言霊の如く、兵達を硬直させた。

「何をしている！？ 王位継承者であるこのウマシの命が聞けぬのか、貴様らは！？」

ウマシが怒鳴るが、兵は誰一人動こうとしない。

「ウマシ様、クシナダ様は、逆賊ではありませんぬ」

軍の参謀がウマシに諫言する。ウマシは兵全てが自分の味方ではない事を知り、

「勝手にするがいい！」

と言い放つと、馬を返し、城に向かって逃げて行った。

「情けなきお人よ」

クシナダはウマシの人望の薄さを哀れんだ。そして、

「今は火急の時！ 私は先に行くぞ」

クシナダは再び水の力で進んだ。兵達は顔を見合わせてから、城に向かい始めた。

武彦とツクヨミは、オモイがすでにウガヤと会い、軍を城に向かわせている事に気づいた。

「これは？」

ツクヨミはウガヤ軍が帰還して行くのを上空から見て、驚愕していた。

「どういう事でしょう？」

武彦も不思議に思った。

『ツクヨミ、ウガヤ王の心を探ってみよ。あの者、すでに……』

神剣アメノムラクモが言った。ツクヨミはウガヤ王に言霊を飛ばし、彼の胸の内を覗いた。

「何と！」

ツクヨミは恐ろしくなった。

「ウガヤ様は、オモイがヨモツの者とお知りになった今も、彼奴に

……」

「え？」

武彦はチンプンカンブンだ。

『もはやウガヤは、ヤマトの王にあらず。彼奴は、イザの僕よ』
アメノムラクモが、苦々しそうに言う。武彦は啞然としてしまった。

「じゃあ、イスズさん達が危ないって事ですよね？」

「そのようです」

武彦とツクヨミは目配せし、ヤマトの城を目指した。

「む？」

オモイは、ツクヨミとアメノムラクモの気がこちらに向かって来ないのに気づいた。

（ウガヤの心を読んだか、ツクヨミめ。しかし、手遅れよ）

オモイは、すでに意のままになっているウガヤを見た。

（そして、我らの狙いは城ではない。愚か者共め）

オモイは何を企むのか？

クシナダは城に到着し、謁見の間でホアカリに事情を説明した。

「そうか。わかった。ヤマトに行こう。ウガヤを説き伏せ、ヨモツに備える」

ホアカリは椅子から立ち上がった。そして、

「クシナダ、すまぬが、トミヤについていてくれぬか」

「はい」

ホアカリの妃トミヤは、兄ナガスネの戦死を知り、抜け殻のようになっってしまったっており、同行は無理だ。かと言って置いて行くのも危ない。

「トミヤ様は、私がお守り致します」

「頼む」

ホアカリは力なく微笑んだ。クシナダはそれに答えて頭を下げる。
(トミヤ様は、兄上ナガスネ様を喪い、お嘆きだ。よもやとは思
うしな
が……)

クシナダも、トミヤが発作的に自殺してしまうのではないかと案じているのだ。だから、ホアカリの頼みがなくても城に残ろうと思っていた。

「では、参ろう」

「はは」

クシナダの夫スサノ、ヤマトの將軍タジカラ、その妻ウズメがホアカリに従う。

「トミヤ様を頼んだぞ、クシナダ」

スサノが声をかけてくれた。

「はい、お館様^{やかたさま}」

クシナダはそれに力強く答えた。

ヤマトの城では、ウガヤの妃タマヨリと、その王女であるイスズが、ツクヨミとイワレヒコの帰還を知り、喜んでいた。

「イワレヒコ様！」

武彦達が玉座の間に入ると、いきなりイスズが武彦に抱きついて来た。

「わわ、イスズさん！」

姉美鈴に瓜二つのイスズにしがみつかれ、武彦はアタフタした。

「これ、イスズ、はしたない。お控えなさい」

そう窘めるタマヨリも母珠世に瓜二つだ。武彦は頭がクラクラした。

「そうだ！」

ふとデジタルカメラを持っている事を思い出す。

「皆さん、そこに並んで下さい」

「は？」

タマヨリとイスズはキョトンとしたが、ツクヨミは武彦の持つ箱が何なのか知っていたので、

「ささ、イワレヒコ様の仰せの通りに」

と二人を玉座に座らせ、自分もその脇に立つ。

「よし、ここで大丈夫」

武彦は近くにあった脚立のようなものにデジカメを立て、オートシャッターにする。そして、イスズの隣に立つ。

「さあ、皆さん、笑って下さい」

次の瞬間、ストロボが光り、タマヨリとイスズが叫んだ。

「大事ありませぬ、お二人共」

ツクヨミが騒ぐ二人を宥める。武彦はデジカメを持って来て、

「ほら、奇麗に撮れてますよ」

「おお」

タマヨリとイスズが驚きの声を上げる。

「これは如何なる術にございますか？」

イスズが尊敬の眼差しで武彦を見上げる。武彦は照れ臭くなって、
「いや、術なんかじゃなくてですぬ……」

その時、伝令兵が駆け込んで来た。

「何事ですか？」

タマヨリが尋ねた。伝令兵は跪いて、

「陛下の軍勢が、城の周りの村を焼き払っております！」

武彦は仰天し、ツクヨミと顔を見合わせた。

四十六の章 イスズの怒り、イツセの決意

ヤマトの国の王であるウガヤは、すでに身も心も軍師オモイに操られていた。

「陛下、斯様な行い、天が許しませぬぞ」

年配の兵が、命がけで諫言した。しかしウガヤは、

「五月蠅い！」

と一言言うと、馬から降り、老兵を一太刀の下に斬り殺してしまつた。

「陛下……」

老兵は目に涙を浮かべながら、そのまま地面に倒れ伏した。他の兵達は、それを固唾を吞んで見守っている。

「うぬらは、このウガヤの兵なのだ。逆らう事は許さぬ。ヤマトの国が永遠に栄えるために、この儀式は何としても為さねばならぬのだ！」

ウガヤの目は血走り、とても正気とは思えない様子だった。しかし、兵達は何も言わない。

ヤマト軍は、城の周辺の民の家に火を射かけ、焼き払っているのだ。多くの民が家から逃げ出したが、中には逃げ遅れる者もいた。

「助ける事は許さぬ。民はヨモツへの贄。より多くの命を捧げねば、ヨモツは我らの味方にならぬ」

ウガヤのその言葉に、オモイはニヤリとした。

（もはやオオヤシマは落としたも同然よ）

「何て事を！」

武彦は城を飛び出し、真っ赤に染まる城下を見た。

「人間のする事じゃないよ！」

彼は城の外へと走る。ツクヨミがそれを追った。

「たけひこ様、敵は近くにあります。お氣をつけ下さい」

「今はそんな事より、みんなの命だよ」

武彦は走りながら叫んだ。

「こんな時、クシナダさんか、ウズメさんがいてくれたら……」
彼は齒ぎしりした。

『我がおるぞ、武彦』

神剣アメノムラクモが言った。

「えっ？」

意外な言葉に、武彦はアメノムラクモを見た。

『我を天に向けよ、武彦。雨を呼び、火を消す』

「そんな事ができるんですか？」

武彦は仰天した。アメノムラクモは、

『我を何だと思っておるのだ』

とちよっぴり誇らしそうだ。

「その間を私が繋ぎ申す」

ツクヨミは城の周囲にある堀の水を言霊で吹き上げ、燃え盛る民の家に降り注がせた。

「こんな感じですか？」

武彦はアメノムラクモを空に向けた。

『それでよい。では、参るぞ』

アメノムラクモが輝き始める。

「わわっ！」

武彦はその輝きに驚いた。ツクヨミもそれに気づいたが、

「私は私で……」

と言霊で堀の水を飛ばし続けた。

「む？」

オモイは、アメノムラクモが放つ光に気づいた。

（何だ、あれは？ 火ではない。面妖な……）

「如何した、オモイ？」

馬に戻ったウガヤが尋ねる。オモイはウガヤを見て、

「先程、ヤマトの城の近くに面妖な光が見えました」

「光？ 何か？」

ウガヤは近くにいた兵を見る。

「斥候からはまだ何も……」

「役に立たぬ奴らよ」

ウガヤは吐き捨てるように言い、

「ならば進軍じゃ。城に怪しき者がおるのやも知れぬ」

「あるいは、ツクヨミかも知れませぬ」

オモイが言った。その時、天が急速に曇り始めた。

「何と！」

あまりに早い天候の変化に、オモイは狼狽えた。

（もしや、これは、神剣アメノムラクモの力か？）

アメノムラクモの名の由来。それは、「雨雲を呼び寄せる剣」だと言う。

（雨を降らせ、火を消すつもりか。そうはさせぬ）

「陛下、更に火矢を射かけましょう。ツクヨミ達が、火を消そうとしておるようです」

オモイの言葉にウガヤの目つきが険しくなる。

「おのれ、ツクヨミめ。このウガヤの邪魔を致すのか。許さぬぞ」

ウガヤは兵達を睨みつけ、

「早う矢を射かけよ」

兵達は動かない。ウガヤは苛立ち、

「早う射かけよ！ うぬらは王の命が聞けぬのか！」

と怒鳴った。兵達は顔を見合わせ、仕方なく火矢を放った。皆、泣いていた。

ツクヨミは、ウガヤ軍が更に火を射かけて来たのを知り、

「何という事を！」

と憤激した。

「御剣さん、まだですか？」

武彦も焦っていた。家を焼く火は、どんどん勢いを増している。ツクヨミが誘導している堀の水ではとても追いつかない。

『慌てるな、武彦。もうそこまで来ておる』

アメノムラクモが言った。次の瞬間、ドドーンと雷の音がして、凄まじい勢いで雨が降り注いで来た。

「おお！」

ツクヨミが歓喜の声を上げ、空を見上げる。

「やった！」

武彦も叫んだ。

『武彦よ、火が消えるまで我を掲げておれ。下ろしてはならぬぞ』

「ええっ？」

武彦はそれは過酷だと思った。

「ぬうう……」

ずぶ濡れになりながら進軍していたウガヤは、いくら射かけても消えてしまう火を見て、更に苛立ちを募らせた。

（おのれ、アメノムラクモめ。ここは退くしかないが、どこに退く？）

オモイは進退窮まったと思っていた。

ヒノモトの国の王であり、ウガヤの兄でもあるホアカリを中心に、ヤマトの国の將軍タジカラ、その妻ウズメ、そしてヒノモトの国の戦士スサノは、ヤマトの国に向かっていた。

「お館様、やかたさまヤマトの国で恐ろしき事が起こっております」

ウズメがタジカラに囁く。

「恐ろしき事？ 何じゃ？」

「ここでは……」

ウズメは悲しそうに答える。タジカラは頷き、

「わかった」

と答えると、前を向いた。

(やおよろず 八百万の神が、ヤマトの国の民の家が焼かれていると教えて下さった。ウガヤ様は、ご乱心遊ばされたのか?)

ウズメは悲しみのあまり、知らないうちに涙を零していた。

アキツは、ツクヨミからの言霊で、ヤマトの国の異変を知った。

「何という事を……。ウガヤ殿、血迷うたのか……」

あまりの出来事に、アキツは目眩がしそうだった。

「父上……」

いや、もはや父ではない。イツセはそう思う事にした。

「ウガヤ王は、闇に落ちました。もはや王でも我が父でもありません」
ぬ

イツセのその言葉に、アキツは悲しそうな目で彼を見た。

ヤマトの城では、イスズ姫が中心になり、焼け出された民の救護に当たっていた。

「怪我人はおるか？ おるならば、私のところに連れて参れ」

イスズは母タマヨリと共に大広間に出て、傷ついた民達を診て回っていた。

「父上、何という事を……」

悲しみより先に怒りが込み上げて来る。イスズは天を仰いだ。

「もう少し。もう少しじゃ、オモイ。もう少しで、我はオオヤシマに出られるぞ」

闇の国ヨモツの最深部の玉座の間で、女王イザが呟く。

「もはや我に隙はなし。ツクヨミも神剣も恐るるに足らぬ」
彼女は不敵に笑った。

四十七の章 タマヨリの気持ち、ウガヤの無念

ワの国の時期女王であったアキツは、アマノイワトに迫る妖気に気づいた。

「如何いかなさいましたか、アキツ様？」

ヤマトの国の王子イツセが、アキツの様子を見て尋ねた。

「何やら、ヨモツが蠢き出しました。クシナダと共にヒラサカを封じ直しましたが、これは……」

アキツは、ヤマトの王ウガヤが行っている虐殺が、ヨモツを勢いづかせている事を感じていた。

「私はアマノイワトに戻ります。イツセ殿は、ウガヤ殿を説き伏せて下さい」

「はい」

イツセはアキツに同行したかったが、自分がついて行って役に立てると思えず、同意した。

「は！」

アキツは馬を駆り、アマノイワトに戻って行った。

「我らも出立だ。ウガヤ王の愚行を止めるぞ」

「はっ！」

イツセは兵達と共に、再びヤマトに向かって進軍を始めた。

ヤマトの城の周辺の火は、神剣アメノムラクモが呼び寄せた雨により、完全に沈下し、ウガヤ軍が射かける火矢もすでに何の役にも立たないほど、辺りは濡れていた。

『武彦、もう良い。我を戻せ』

アメノムラクモが武彦に言った。

「はい」

武彦はホッとして神剣を鞘に納める。すると雨雲は急速に消えて行き、太陽が照りつけて来た。

「オモイもいるはず。彼奴を倒せば、陛下は助かるはずだ」

ツクヨミが囁いた。武彦は頷き、

「行きましょう、ツクヨミさん」

「はい」

二人は濡れた地面を馬で進む。

ウガヤは、火が消えてしまった事で、呆然としていた。

「陛下、ここは退くしかありません。ご決断を！」

オモイはウガヤの前に跪いて進言した。しかしウガヤは、ハッと我に返ると、

「ならぬ！ ツクヨミを討ち、イワレヒコを正氣に戻すのだ！ 退く事など許さぬ！」
と叫んだ。

（こやつ、狂ってしまったか？）

オモイはウガヤを見捨てる事にした。民の殺戮が中途半端になってしまった以上、女王イザの救援は望めない。このままでは、自分もイザに見捨てられてしまう。オモイはそう判断し、

「では、私はこれにて」と立ち去ろうとした。

「許さぬと申したはず！」

ウガヤが剣を抜き、オモイの背中に斬りつけた。

「愚かな……」

オモイは逃げもせず、それを受けた。彼の背中はバツサリと斬られたが、血は出なかった。

「何と！」

ウガヤはオモイが人ではないと気づいた。オモイはニヤリとして振り返り、

「使えぬお人よ」

と呟くと、次の瞬間、ウガヤの首を彼の剣を奪って跳ね飛ばしていた。周囲にいた兵達は、何が起こっているのか全くわからなかった。

ウガヤの首を失った胴体は、ドサツと地面に落ちた。馬は主を失い、一声嘶くと、走り去ってしまった。

「陛下はご乱心あそばされた。これより先は、私が指揮する。退くぞ」

オモイは軍の先頭に立ち、歩き出した。兵達はそれに魅入られたように続く。

（さて、どうしたものか……）

オモイは思案を巡らせた。

武彦とツクヨミが到着した時、ウガヤ軍はすでに撤退しており、そこにはウガヤの遺体が転がっているだけだった。

「陛下……」

暴君ではあったが、自分を仕えさせてくれたウガヤのあまりにも無残な最期に、ツクヨミは言葉を失った。

「酷い……」

武彦は震えた。彼は首無し死体など見た事がない。怖かったのだ。

『例え、愚かなる王であったとしても、哀れよ』

アメノムラクモも、ウガヤの死を悼んだ。

「オモイめ。許さぬ」

ツクヨミがそう呟くと、

『ツクヨミよ、それこそがヨモツの罫よ。敵を憎み、怒りを募らせては、闇を呼び込む』

アメノムラクモの言葉に、ツクヨミはビクツとした。そして彼は
跪き、

「その通りにございます。申し訳ありません、御剣様
と頭を下げた。」

『ウガヤの亡骸を城に運び、丁重に弔え。死人にさせぬためにな』

「はい」

ツクヨミはウガヤの首を探し出し、胴体の近くに置くと、それを一緒に言霊で浮き上がらせ、城に運んだ。

『武彦よ、お前はアミノイワトに行くのだ。アキツが待っている』

「は、はい！」

幼馴染の都坂垂希みやこさかあきに瓜二つのアキツが待っているとわれ、武彦は心が弾む。

『お前の幼馴染とアキツは別人ぞ』

彼の心を見透かすかのようにアメノムラクモが言う。武彦は赤くなって、

「わ、わかってますよ。アキツさんは、ツクヨミさんが好きなんですから」

『それも許されぬ事よ』

アメノムラクモがそう言ったのを、武彦は聞いていなかった。

ヒノモトの国の王ホアカリ達の一行は、ヤマトとの国境くにがきまで来ていた。

「ウズメ、先程の話だが」

ヤマトの將軍タジカラが、奥方であるウズメに囁く。彼はヤマトで何があったのか、どうしても知りたいようだ。ウズメは溜息を吐き、

「陛下がオモイの策で、民をお手につけられたのです」

「何？」

タジカラは仰天した。ウズメはタジカラを見て、

「その後、陛下のちはオモイに斬られ、お亡くなりになってしまいました」

「……」

あまりの事に、タジカラは言葉を失った。

「我らは、遅過ぎたのかも知れませぬ」

ウズメは悲しそうに呟いた。

ウガヤの妃であるタマヨリと、娘であるイスズは、ウガヤの変わり果てた姿に啞然としていた。

「私の力が至らず、申し訳ありません」

ツクヨミは二人の前で土下座をした。するとタマヨリが、

「其方そなたのせいではない、ツクヨミ。これも天命。陛下のご寿命です」
彼女はウガヤの横暴を憂えていたため、このような事になるのではと考えていたようだ。

「父上……」

イスズはそれだけ言うと、ウガヤの遺体にすがり、泣き出した。

「陛下が死人にならぬよう、丁重にお弔いせよと、御剣様が仰せです。私の力全てを注ぎ、執り行わせていただきます」

ツクヨミは顔を上げ、タマヨリを見た。タマヨリは涙を拭って、

「頼みますよ、ツクヨミ」

と言った。

「たけひこ様」

武彦がアマノイワトに着くと、アキツが笑顔で出迎えてくれた。

武彦はまた赤くなる。

『武彦』

アメノムラクモが釘を刺す。武彦はアメノムラクモを見て、

「わかってますよ」

「何か？」

アキツが不思議そうな顔で振り返る。

「あ、いえ、何でもありません」

武彦はそう言うと、アキツを急き立てるようにしてイワトの中に入って行った。

四十八の章 イスズの願い、イザの怒り

オオヤシマの地下深く存在する闇の国ヨモツ。その最深部の玉座の間に女王イザはいる。

「オモイめ。我を頼ろうとするは、浅はかよ。うぬは我の手駒に過ぎぬのだ」

イザの漆黒の目が細くなる。

「オオマガツ、ヤソマガツ」

「ははっ！」

イザの分身である黒い炎の化身であるオオマガツと雷を身に纏まとつたこれもまたイザの分身であるヤソマガツが、イザの前に現れた。「うぬらなら、オオヤシマに留まれよう。すでにそこまでは穢れておる。あと一息、穢れを増やして参れ」

「はい」

二体の魔物は跪いて答え、そのままオオヤシマへと向かった。

「アキツ、異界の者を呼び寄せたは、さすがよ。じゃが、このイザは先轍は踏まぬぞ」

彼女は、大昔、ヨモツがオオヤシマに攻め入った時、異界の者がそれを阻止した事を知っていた。

「そして、例え神剣アメノムラクモであっても、この我を斬る事は叶わぬ」

イザは高笑いをした。

「只、まだ時が足らぬ」

イザの言う「時が足らぬ」とはどういう意味なのか？

アキツと武彦は、ヨモツとの境であるヒラサカに来ていた。

「やはり、封じたはずが、すでに軋きしんでおります」

アキツが結界を調べて言った。

『アキツ、魔物がここに向かっておるぞ』

アメノムラクモが告げる。武彦はビクツとした。

（魔物？　もしかして、あの黒い火と雷かみなりの？）

武彦はあと一歩のところでの魔物に逃げられた事を思い出した。そしてその時、アメノムラクモが、

『いや、逃げてくれたのだ。あのまま留まれば、味方が幾人か死んでいた』

と言った事も思い出していた。

「大丈夫なんですか、御剣みつるぎさん？　今はアキツさんと僕しかいませんよ」

するとアメノムラクモは、

『何を言うておるか。アキツがおるのだぞ。タジカラ達にはすまぬが、アキツはこのオオヤシマで一番の強さよ』

「御剣様、そのような事を仰らないで下さい」

何故かアキツは顔を赤らめた。また彼女が、幼馴染の都坂亜希みやこざかあきと重なる。女性にとって、「この国で一番強い」は褒め言葉ではないかも知れない、と武彦は思った。

「来ました、たけひこ様」

アキツがヒラサカを睨んだ。その直後、バチンと大きな音がして、辺りが揺れた。

「突き破ろうとしているんですか？」

武彦が尋ねる。アキツは頷き、

「そのようです。ですが、私とクシナダで封じ直したのです。そのくらいで破れるものではありませんね」

「そうですか」

武彦はホッとして微笑んだ。しかしその後も魔物達の体当たり戦法は続き、アマノイワト全体が崩れるのではないかと思えるくらい、揺れた。

「たけひこ様、このままでは動かせぬ故、一度封を解きます。ヒラサカよりお離れ下さい」

アキツが厳しい表情で言った。

「は、はい」

武彦はどういう事なのか理解できなかったが、ヒラサカから離れた。

「は！」

アキツが気合と共にヒラサカの封印を解いた。

「ぬおおお！」

オオマガツとヤソマガツは、勢い余って飛び出して来た。

「祓いたまえ、清めたまえ！」

アキツが柏手を連続して打った。途端に辺りに清らかな気が満ち、魔物が悶絶した。

「グオオオオッ！」

彼女達は聖なる気の中では自分達の姿を留められない。

「祓いたまえ、清めたまえ！」

アキツが柏手を打ちながら魔物に近づく。

「うおおお……」

自分達があれほど苦戦した二体の魔物が、アキツの柏手にもがき苦しんでいるさまを見て、武彦は、

（確かにアキツさんは強い）

と思った。

「おのれえええ！」

オオマガツはヤソマガツを抱えるようにして、ヒラサカの向こうへと逃げて行った。

「追います、たけひこ様」

「ええ？」

ここで終わりかと思ったので、ホッとしていた武彦だったが、「わかりました！」

とアキツに続いてヒラサカを越えた。

「うわ」

そこは何とも形容しがたい禍々しいところだった。まさに「死の国」である。しかし、

「祓いたまえ、清めたまえ！」

とアキツが柏手を打つと、たちどころに辺りは清らかな気で満ちて行った。

「凄いですね、アキツさん。さすがです。尊敬しちゃいます」

武彦があまりに絶賛するので、アキツは照れたように微笑み、

「そのような事、ごさいませぬ。たけひこ様がいらっしゃるので、私も心置きなく力が使えるのです」

「そうなんですか」

武彦はキョトンとしてしまった。

「参りましょう」

アキツが歩を進める。

「はい」

武彦もそれを追った。

このアキツの「進撃」は、イザにも意外だったようだ。

「アキツめ、よもやこちらに攻め入って来ようとは……」

彼女は齒軋りした。

「何としても押し返すのだ。ヨモツにあの女の気を満たされては、国が保たぬ」

冷徹な女王が感情を露にしたのを見て、オオマガツとヤソマガツは恐れ戦いた。おの

ツクヨミは、自分のもてる力の全てを注ぎ込み、ヤマトの国王ウガヤを弔った。

「忝い、ツクヨミ。陛下もこれで天に行かれた事でしょう」かたじけな

妃のタマヨリが、涙を流して礼を言う。ツクヨミは跪いて、

「ありがとうございます」

と言ってから顔を上げ、

「これより、アマノイワトに向かいます。アキツ様とたけひこ様が、ヒラサカを越えてヨモツに向かいました」

「ええ？」

タマヨリと、イスズ姫は驚いて顔を見合わせた。

「たけひこ様が？」

イスズは心配そうな目でツクヨミを見ている。ツクヨミは微笑んで、

「お二人は私がお守り致します。この命に代えても」
するとイスズは、

「ならぬ。ツクヨミも必ず生きて帰りなさい。死ぬる事は許しませぬ」

と強い調子で言った。ツクヨミはその言葉に感動し、

「はい」

と頭を下げた。

ホアカリ達一行は、ヤマトの城が見えるところまで来ていた。その時だった。

「何奴だ、あれは？」

スサノが彼らの遙か左から駆けて来る騎馬隊を見つけて呟いた。

「あれは……」

ホアカリが、その軍旗に気づいた。それは彼の嫡男であるウマシのものだったのだ。

「ウマシが駆けつけてくれたか」

ホアカリは嬉しそうに言ったが、ウズメが、

「いえ、そうではありませぬ。ウマシ様から、妖気が感じられまする」

「何？」

スサノもタジカラムも、その言葉にギョツとした。

「ご覧下さい、ウマシ様に付き従っておる兵共を。死人しびとです」

「……」

ホアカリは言葉を失ってしまった。

「オモイの気が感じられます。彼奴あやつがウマシ様を取り込んだようで

す」

ウズメは悔しそうに言った。スサノが、

「おのれ、オモイめ！ ナガスネ様ばかりでなく、ウマシ様まで！」

彼はウマシを嫌ってはいたが、殺してしまおうとは思っていない。

彼は複雑な心境だった。

四十九の章 ウマシの穢れ、武彦の危機

ヒノモトの国の王ホアカリとその一行は、ホアカリの嫡男であるウマシ率いる死人軍団しびとに迫られていた。

「行くぞ、タジカラ！」

スサノが炎の剣を全開にし、馬を走らせる。

「おう！」

タジカラも剣を振り上げ、スサノに続いた。

「陛下」

ウズメがホアカリに目配せする。ホアカリは頷き、馬を進めた。

（オモイめ、ウマシ様まで取り込むとは……）

ウズメはヤマトの軍師オモイの狡猾さに腹が立った。

（しかも、己おのれは姿を見せぬ。誠に許し難き男）

しかし、そうではなかったのは、まさにその直後にわかった。

「ホアカリ王、お命頂戴いのちようだちかまつ仕る！」

不意に別の方向から、オモイが現れた。彼はウガヤの首を刎はねた剣、すなわち、ウガヤが持っていた剣を振り上げ、ホアカリに迫った。

「何！？」

死人達と剣を交えていたスサノとタジカラはハッとした。

「こちらは囧か！？」

スサノが歯軋りした。

「おのれえええ！」

タジカラが剣を振り回し、死人達を弾き飛ばす。

「スサノ、タジカラ、もはや我らは女王イザ様にすぎるしかないのだ。無駄に戦いくさを広げるな」

ウマシはすでにオモイによってヨモツの水を口にしており、死人にはなっていないが、味方ではなかった。

「ウマシ様！」

スサノがウマシを斬ろうとした。

「やめよ、スサノ！ 陛下の御前だ！」

タジカラが止める。スサノはウマシを睨みつけ、

「しかし、タジカラ……」

「今は堪えよ。それより、陛下を！」

タジカラは纏わりつこうとする死人達を振り切り、馬を走らせた。

「はあ！」

スサノはもう一度ウマシを睨みつけてから、タジカラを追った。

「うぬ！」

ウズメは八百万やおよろずの神の中の船戸の神を召喚し、ホアカリを守っていた。船戸の神は穢れけがを退ける神である。

「さすがウズメ様。しかし、私は貴女より遙かに上を行く者ですよ」

オモイはウズメを嘲笑うように言い放った。

（オモイめ、如何なる企みがあるのか？）

ウズメは軍師であったオモイの策謀を感じた。

「このようなもの、私には通じませぬ」

「何と！？」

オモイは、船戸の神が作った結界をもとめせず、ホアカリに近づいた。

「陛下、お逃げ下さい！」

ウズメが叫ぶ。ホアカリは迫るオモイに吞まれたかのように動けない。

「陛下！」

ウズメが天の鳥船の神を召喚し、ホアカリを移動させた。

「ぬ！」

オモイはホアカリを逃したのと、タジカラ達が追いついて来たのを知り、

「ここは退くか」

と呟くと、逃げてしまった。

「待て、オモイ！」

タジカラが追う。

「お館様、おやめ下され。今は、陛下の御身を守るが先にございます」

「ああ……」

タジカラは、先ほどオモイの罠に呆気なく引っかかった事を思い出し、馬を止めた。

「陛下」

スサノも追いついた。ホアカリは後方に見えるウマシ達の部隊を見て、

「ウマシはもはや、ヨモツに落ちたのか？」

「いえ、まだです。お救いする事ができます」

ウズメが答えた。

ヤマトの城では、王妃タマヨリと王女イスズが、再び民の手当てに動いていた。

「たけひこ様、ツクヨミ、オオヤシマを頼みます」

イスズはアマノイワトの方角を見て、祈った。

アキツと武彦は、ヨモツの中枢に向かっていった。

「祓いたまえ、清めたまえ！」

アキツの柏手の威力は凄まじく、ヨモツの穢れは嘘のように消滅する。

「はー！」

その時、アキツと武彦の間に、何十体ものヨモツの兵であるシコメ（身体の半分が腐った魔物）が固まって地面の下から現れ、壁を作って、二人を引き裂いてしまった。

「アキツさん！」

「たけひこ様！」

武彦はパニックになりそうだった。先ほどまでは、アキツの身体から出る清らかな気と、その力によって放たれる光で、何とか平静

を保てた。しかし、アキツと離れ離れになった今、周囲は漆黒の闇。そして、シコメ達の放つ妖気と臭気で息が詰まりそうだ。

「うわああ！」

混乱する武彦に追い討ちをかけるようにシコメ達が襲いかかる。

「ぐおおおお！」

シコメには性別はないが、その姿は、武彦の世界で言うところの「女のゾンビ」そのものである。

「た、助けて！」

思わず美鈴を思い浮かべる武彦。

『慌てるでない、武彦！』

神剣アメノムラクモが一喝した。

『退くがよい、ヨモツの魔物！ 我は神剣アメノムラクモ！ 我に触れる事は許さぬ！』

アメノムラクモは、鞘の中にありながらも、眩い光を放った。

「ぐおおおお！」

シコメ達はその光に驚き、武彦から離れた。

『さあ、我を抜くのだ、武彦！』

「は、はい！」

武彦はアメノムラクモを鞘から抜いた。途端に光が更に強くなり、シコメ達はその光によって消滅してしまった。

「御剣さん、ありがとうございます。これでもう、僕一人でも大丈夫ですね」

武彦が嬉しそうに言うと、

「いや、そうもいかぬ。本来であれば、我の力はイザに会うまで温存しておきたかったのだ。今使ってしまったのは、この先は危うき事となる」

「ええ？」

自分が情けないせいで、計算外の事が起こってしまったと感じた武彦は、蒼ざめた。

『それより、この目の前の壁を斬り裂くぞ、武彦』

「はい！」

武彦は目の前にできたシコメの壁を斬り裂き、アキツを探した。

「アキツさん、先に行ったみたいですね」

『お前が情けないからな』

アメノムラクモが手厳しい事を言う。

「ごめんなさい」

武彦はシュンとしてしまった。

『気に病んでいる暇はない。走れ、武彦。我が明かりとなる』

「はい、御剣さん！」

武彦は輝くアメノムラクモを掲げ、アキツを追った。

一方ツクヨミは、ヒラサカまで来ていた。

「おお」

彼はアキツの気がヨモツの穢れを押し返しているのを感じ、感嘆していた。

（さすがアキツ様。私など、まだまだだ）

それでも彼女の思いに答えたいと考え、ツクヨミは二人を追いかけた。

五十の章 ウズメの秘術、イツセの覚悟

ヒノモトの国の王ホアカリ達一行は、ヤマトの元軍師オモイの奇襲を退けた。しかしまだ、ホアカリの嫡男であるウマシと、それに従う死人の軍団がいた。

「ウズメ、何やら策があるようだな？」

タジカラが近づいて来るウマシ達を睨んだままで尋ねる。ウズメは頷き、

「ウマシ様は死人にはなっておりませぬ。恐らくは、ヨモツの水でオモイに操られているだけでしょう。その穢^{けが}れを祓わば、大事ありませぬ」

ホアカリはウズメの言葉にホツとしたようだ。

「頼む、ウズメ。愚かではあるが、我が子である。救ってやってくれまいか」

「はい、ホアカリ様」

ウズメは前に進み出て、馬を降りた。そして、舞を舞う。舞踏師^{ぶとうし}の術が始まる。

「ウズメ殿は、何をするつもりだ？」

スサノが小声でタジカラに訊く。タジカラはニヤリとして、

「ウズメに舞われて、落ちぬ男はいぬ。お前もそれは存じていよう？」

「む……」

スサノは顔を赤らめてムツとした。彼はウズメの舞を見て、彼女に惚れたのだ。そして、タジカラとウズメを争ったが、ウズメはタジカラを選んだ。嫌な事を思い出させおって、とスサノはタジカラを睨む。

「はい」

ウズメは気合を入れ、舞い始めた。その動きはしなやかで美しく、輝いていた。

「おお……。さすが、オオヤシマ一と謳^{うた}われた舞踏師よ。美しいな」
ホアカリが言った。タジカラは頭を下げ、

「お褒めに預かり、光栄に存じます」

ウズメは舞いながら、気を放っていた。その気が死人に触れる。
死人達の兇惡な顔が、笑顔に変わる。

「ほおお……」

死人達は次々に浄化され、天へと昇る。

「ぬ？」

ウマシはそれに気づき、進軍を止めた。しかし、ウズメは舞をやめない。彼女の気は次第にウマシ達を取り囲んで行き、死人は全員浄化された。

「おのれ！ そのような幻覚、私には通じぬぞ、ウズメ！」

ウマシはウズメを睨んだ。するとウズメは、ニコツと微笑み、スツと着物の襟を開く。

「え？」

タジカラがギクツとした。スサノもギョツとする。ホアカリは状況がわからないのか、ポカンとしてウズメを見ていた。

「それでもそのような強がりをおっしゃいますか、ウマシ様？」

ウズメの白い肌が露になる。彼女は妖艶な笑みを浮かべ、ウマシを誘惑するように見ていた。

「……」

ウマシはホアカリの嫡男とは言え、まだ子供である。ウズメの色気に動揺していた。

「さあ、ウマシ様、こちらにおいで下され」

ウズメは半分見えかけた胸をギュツと寄せ、ウマシを挑発する。
タジカラは奥方の暴走を止めようと思ったが、ウズメの術なのか、身体が動かない。

「ああ……」

ウマシの身体から、ヨモツの水が揮発するのが見えた。ウマシはガックリとして、馬の上に伏せてしまった。

「お館様」
やかたさま

ウズメは襟を正して、タジカラを見た。

「お、おう」

タジカラはハツとして馬を走らせ、ウマシに近づいた。

「氣を失っておられるだけだ」

彼はウマシをヒヨイと担ぎ上げ、ホアカリのそばへと戻る。

「ウズメ、大儀であつた。ウマシをよく救ってくれた」

ホアカリはウズメを見て嬉しそうに言った。ウズメは跪いて、

「ありがとうございます、陛下」

と応じた。

「今のは、如何なる術なのだ、ウズメ殿？」

スサノが顔を赤らめたままで尋ねた。するとウズメは、

「殿方は、女性の肌が好きですので、その欲が、ヨモツの水を追い出したのでございます」

「そ、そうなのか……」

要するに、ウマシはウズメの色香に欲情し、その心がヨモツの水の邪惡に勝つたという事らしい。

「怖い方だな、ウズメ殿は」

スサノが言った。ウズメはニコツとして、

「私と添わずに良かったとお思ひですか？」

「あ、いや……」

スサノは真つ赤になってウズメから離れる。ウズメはそれを見てクスツと笑った。

一方ヨモツの中を進む武彦は、ツクヨミからの言霊を受け取り、彼を待っていた。

『アキツ様にもお送り致しました故、程なくお会いできましょう』

『わかりました』

ツクヨミのおかげで、どうやらアキツと合流できそうなのがわかった武彦は、ホツとしていた。

『武彦』

神剣アメノムラクモが言う。

「はい？」

『くどいようだが、アキツはお前の幼馴染ではないぞ』

「わかってますよ！」

また自分の心を見透かされたのを思い知る武彦だった。

（アキツさんは、亜希ちゃんとそっくりだけど、違う人なんだ……）

そのアキツは、武彦よりしばらく奥の場所で、気持ちを高揚させていた。

（ツクヨミ殿……）

彼女はもう自分を偽る事をやめていた。

（私はツクヨミ殿の事をお慕いしている。それは真の心……）

「ツクヨミ殿……」

アキツは元来た道を見やり、そう呟いた。

そのアキツの心が、ヨモツの最深部である玉座の間にいる女王イザに伝わってしまった。

「そうか、そうか。アキツは、ツクヨミに心惹かれておるのか？」

ならば、ツクヨミを手始めに撈ろうかの」

イザはその漆黒の目を細め、ニヤリとした。

「オオマガツ、ヤソマガツ。アキツとイワレヒコは、お前達には倒せぬ。ツクヨミを屠れ。さすれば、奴らの絆が綻ぶ」

「はは！」

二体の魔物はイザに跪くと、すぐさまツクヨミの元へと向かった。

ホアカリ襲撃に失敗したオモイは、オオヤシマの中央にある高原の岩場に潜んでいた。

（この先、如何する？ イザ様の助けは当てにできぬ。もはやこれまでなのか？）

オモイは齒軋りした。そしてはたと思い至った。

「そうか。ヒノモトにはクシナダがおるが、ヤマトには誰もおらぬではないか……」

彼の顔が再び狡猾さを取り戻した。

「イツセなど、物の数ではない」

そのイツセは、ヤマトの城に帰還し、母タマヨリと妹イスズを助け、民達の手当てに奔走していた。

「アキツ様達はこうされたろう？」

自分の不甲斐なさが悔しいイツセだったが、そんな事を考えてみても仕方がないとも思った。

「今は、民達の命が大事だ」

彼は怪我人を励まして回った。

「兄様」

イスズが小声で話しかけて来た。

「如何した？」

イスズは更に声を低くして、

「何やら、面妖な者がこちらに近づいている気配が致します」

「何と！」

イツセはギクツとした。今ヤマトには自分しかない。

「わかった。兵と共に備えよう」

イツセは城の外へ向かう。イスズはそれを心配そうに見送った。

五十一の章 オモイの襲撃、ウズメの怒り

策士であり、野心家でもあるヤマトの国の元軍師オモイは、ヤマトの城に亡き国王ウガヤの嫡男イツセしかいない事を思い出し、ヒノモトの国王ホアカリを戴くタジカラ達が到着する前に攻めようと考えた。

「城の一つも落とさねば、我が主は私を見限る^{あるじ}」

オモイにとって、イザは絶対的な存在であるが、畏怖の対象でもあった。

一方、オモイに軽く見られたとは露ほども知らないイツセは、兵を揃えて城の周囲を警戒していた。

「民の多くが城にいるのだ。ヨモツの者にここを攻めさせる訳にはいかぬ」

イツセは、また痛み出した矢傷に顔をしかめながら、兵達を叱咤激励していた。

「イツセ様、あちらを！」

城の物見台に上っている兵が指差す。イツセはそちらに目を向けるが、まだ地上からは視認できない。

「オモイです！ オモイが、こちらに一人で向かっております！」
兵が大声で告げる。イツセはギョツとした。

（あの者は、面妖なる術を使う。私で太刀打ちできるのか？）
しかし、そんな弱気を振り払う。

「今は私しかおらぬのだ！ 何としても、ここは守る！」

ヤマトの国の舞踏師であるウズメは、先発させた八百万の神からの声を聞いていた。
^{やかたさま}

「お館様、オモイがヤマトの城に向かっております」
ウズメの夫タジカラはそれを聞いていきり立った。

「オモイめ！ 隙を突こうというのか！？ どこまでも卑劣な男よ」
彼はスサノを見て、

「行くぞ」

と行ったが、ウズメが、

「私が参ります。お館様とスサノ殿は、陛下と殿下をお守り下さい」
「わかった」

三人の中で、一番早く城に行けるのはウズメだ。タジカラは反論する事なく、奥方の言葉に従った。

（陛下はともかく、氣を失ったままのこの愚かな王子は、また利用されるかも知れぬ）

タジカラは、自分の前に乗せたヒノモトの王子ウマシを見た。

「頼んだぞ、ウズメ」

ホアカリが声をかけた。

「はい、陛下」

ウズメは、天の鳥船の神に乗り、空を飛んだ。

（一刻も早う……）

ウズメは遠くヤマトの方角を見た。

アマノイワトのヒラサカの奥へと足を踏み入れた言霊師ツクヨミは、強大な妖氣が接近して来るのを感じていた。

（あの二体か？）

ツクヨミは考えた。

（あの二体の魔物には、我が言霊は通じぬ。如何にすれば……？）
考えあぐねる彼を嘲笑うかのように、黒い炎を身に纏ったオオマガツ、雷を身の纏ったヤソマガツが、地面を割って現れた。

「くっ！」

ツクヨミは後ろに飛び、身構えた。オオマガツはニヤリとして、

「ツクヨミ。イザ様の命により、その命頂く。覚悟せよ」

「そのような事、応じられぬな！」

その時彼は、二体の魔物の背後に長い紐のようなものを見た。そ

れは二体が出て来た穴へと繋がっている。

（何だ、あれは？）

「何をしておるか、こやつ！」

二体のうちで血気盛んなヤソマガツが、ツクヨミの視線が自分達に向けられていない事に腹を立て、襲いかかる。

「ぬ！」

ツクヨミは軽い身のこなしでそれをかわした。

「逃げるだけか、言霊師。腑抜けが」

ヤソマガツが挑発する。しかしツクヨミはそれを無視した。

（何か、こやつらを攻むる手立ては……？）

アキツは、ツクヨミが襲撃された事を感じていた。

「ツクヨミ殿！」

アキツは道を戻り始めた。

（あの方を今、喪う訳には参らぬ……）

そしてまた、二人の中間にいた武彦も、ツクヨミの危機を感じていた。

「どうしましょう、御剣さん？ みつるぎ」

彼は神剣アメノムラクモに尋ねた。

『アキツがもうすぐここに来よう。それを待て。お前だけが戻っても、如何にもできぬ』

「はい」

武彦はアキツが戻って来るのを喜んだが、彼女はツクヨミのために戻って来るのだと気づき、ションボリした。

『何度も申すが、アキツはお前の幼馴染ではないぞ、武彦』

またアメノムラクモが釘を刺す。

「わかってますよ、御剣さん」

武彦は口を尖らせた。

オモイは、城の前に居並ぶ兵達と、その中心にいるイツセを見た。
(愚か者共が。うぬらは烏合の衆よ)

オモイはニヤリとし、走り出した。

「うぬらが主、ウガヤの剣で死ぬるがいい！」

彼は剣を抜き、下段に構えた。

イツセもまた、オモイを視認していた。

「オモイめ！ 我が父ウガヤの仇！」

イツセも剣を抜いた。兵達も剣や槍を手にした。

「あの者を城に決して入れるな！ かかれ！」

「おーっ！」

イツセの命令で、兵達は走り出した。

「邪魔だあ！」

オモイが雄叫びを上げながら兵達をいとも簡単に斬り捨てる。

「おのれ、オモイ！」

イツセは剣を振り上げた。肩の傷が痛む。しかし彼は歯を食いしばり、

「父上の仇！」

とオモイに突進した。オモイは兵の槍を跳ね上げ、イツセを睨んだ。

「大儀の前に、父とか言うでないわ！ うぬのような小者に、私は敗れぬ！」

火花を散らして、二人の剣が交差した。

「ぬうう！」

イツセが一気に押す。しかしオモイが押し返す。

「ふおおお！」

オモイはイツセを跳ね除け、一足飛びに彼の懐に入った。

「父上がお待ちです、イツセ様」

オモイはニヤリとして、イツセの心臓を剣で貫いた。

「グホオッ……」

イツセは血に噎せ返り、膝を着いた。オモイはスッと彼から離れ、
「おらああ！」

と叫ぶと、周囲にいた兵達を剣を振り回して追い払った。

「イツセ様アツ！」

兵達が絶叫した。オモイはそれを無視して、

「さあ、お逝き下され、イツセ様！」

と剣を振り上げる。

「させぬ！」

ウズメの声がして、オモイの剣が弾き飛ばされた。

「何！？」

彼は憎悪に満ちた目で、ウズメを見た。彼女は海神わたつみを召喚し、聖なる水でオモイの剣を弾いたのだ。

「オモイ！ 其方そなたの相手は私がする！」

ウズメはイツセを天の鳥船で城へと運びながら、オモイを睨んだ。
「うぬも私の敵ではない！」

オモイが何かを呟く。すると周囲の地面の小石が集まり、巨人になった。

「うぬの相手は、こやつがする」

オモイは高笑いをして、城へと歩き出す。

「待て、オモイ！」

追いかけるウズメの前に土塊つちくれの魔物が立ち塞がった。

「おのれ！」

ウズメは齒軋りした。

城の中では、瀕死の重傷の兄イツセを見てイスズが驚愕していた。
「兄様あにさま！」

彼女は自分の力の全てを注ぎ、兄の命を救おうとした。

「無駄ですぞ、イスズ様。今お助けしても、すぐにそれは無駄となりましょう」

イスズがギョツとして目を上げると、そこには狡猾な笑みを浮かべたオモイが立っていた。

五十二の章 オモイの無念、イザの進撃

ヤマトの国の王女であるイスズは、かつて軍師であったオモイの形相に驚愕していた。あの穏やかな表情は面影すらない。

「オモイ、如何いかにしました？」

イスズは悲しそうな顔で尋ねる。しかしオモイはニヤリとして、「私は変わりありませんよ、イスズ様。昔のままでございます」

「……」

オモイは初めから自分達を騙していたのかと気づき、イスズは啞然とした。

「く、イスズ、逃げよ……」

イスズの癒しの力で、死の淵から戻ったイツセが呟いた。

「兄様あに！」

イスズはイツセを見た。イツセは微かに笑い、

「私はもう逝かねばならぬ。其方そなたは逃げよ……」

「兄様、そのような事を仰せにならないで下さい」

イスズは泣いていた。たくさんの兄達が戦場で散り、兄はイツセのみ。そしてイツセを喪えば、弟イワレヒコしかいなくなってしまう。

「戯言あざわらひはおすみですか、姫？」

オモイが近づく。イスズは兄とオモイを交互に見た。

その頃、ヤマトの舞踏師ウズメは、土塊つちくれの魔物と戦っていた。

「ええい！」

海神わたつみの聖なる水の攻撃で、魔物の身体を砕く。しかし、すぐに再生してしまう。

「埒らちが開かぬ！」

ウズメはその美しい顔を陰しくして、魔物を見上げる。

（こうしておる間に、イツセ様達が……！）

彼女は焦っていた。

（やはり、オモイを倒すしかないのか……）

ウズメは魔物の足を攻撃して倒し、その隙に城へと走った。

「ぐおおお！」

魔物はすぐに再生し、ウズメを追いかけてくる。

武彦は、自分の姉美鈴に瓜二つのイスズが危機に瀕しているのを感じていた。

「イスズさんが危ない……。御剣さん、どうすれば……？」

彼は神剣アメノムラクモに尋ねた。

『イスズに伝えよ。其方の力で、オモイを倒せるとな』

「え？　どういう事ですか？」

武彦は意味がわからず、ポカンとした。アメノムラクモは、

『オモイは死人ではないが、ヨモツの者だ。イスズの癒しの力はヨモツの者に効く』

「え？」

こんな時に、武彦は自分の頭の悪さを痛感してしまう。

『早^{はよ}うイスズに伝えぬか！』

「は、はい！」

ウダウダ悩んでいる武彦をアメノムラクモが一喝した。

イスズは武彦の声を聞いた。

『御剣さんが教えてくれました。イスズさん、貴女の力でオモイを倒せるそうです。やってみて下さい』

イスズには武彦の言っている意味がすぐにわかった。

（オモイはヨモツの者。ならば……）

彼女はイツセへの治療を続けながら、オモイを睨んだ。

「どうされました、姫？」

オモイは相変わらず不敵な笑みを浮かべ、イスズを見ている。

「其方はヨモツの者。ならば、私にも戦^{すべ}う術がある！」

イスズは自分の力を解放した。オモイはギョツとして立ち止まる。
（何？ イスズめ、何をするつもりか？）

イスズの身体が輝き始める。

「はあ！」

彼女は気合と共に癒しの力をオモイに放った。

「ぬ！」

オモイは虚を突かれ、それをまともに食らってしまった。

「ぐううう！」

ツクヨミの言霊も効かなかったオモイが、その場に膝を着いてしまった。
こじだま

「こ、これは……」

オモイは自分の身体が溶けている事に気づいた。

「私の力は、癒し。それは生くる者には助け。しかし、ヨモツの者には痛み」

「……」

オモイは啞然とした。

（これは……？ 私はイザ様に忠誠を誓ったが、死人にはなっておらぬ。ヨモツの水も飲んでおらぬ。如何なる事なのだ？）

『わからぬのか、オモイ』

アメノムラクモの声が聞こえる。

「ぬ？」

オモイは武彦が来たのかと思い、辺りを見回した。しかし彼の姿はない。

『ヨモツに忠義を示さば、それは死人になったと同じ。うぬはその生まれついでる力をイザに利用されたのみ』

「……！」

オモイは、イザの嘲笑を聞いた気がした。彼は齒軋りした。

（この私も、ウカシと同じく捨て駒に過ぎぬのか！？）

「ふおおお！」

オモイはイスズの癒しの力で身体を溶かされ、ドロドロと崩れ落

ち、遂に消えてしまった。

「イザめーッ！」

それが彼の断末魔だった。

「……」

オモイが溶けてなくなってしまったのを見て、イスズはその場にしゃがみ込んだ。

「兄様！」

彼女は次第に生命力を取り戻して来ているイツセに、更に癒しを注ぎ込む。

「イスズ、代わりましょう」

そこへ二人の母タマヨリが現れた。イスズは母を見て、

「はい、母上」

と微笑んだ。

ウズメは、追いかけて来た土塊の魔物がいきなり倒壊したので、ビククリしていた。

（これは一体？）

彼女はすぐに我に返り、城の中へと駆け込んだ。

アキツが武彦のところまで戻って来た。

「たけひこ様」

アキツの微笑みに、武彦は照れる。

『武彦』

すかさずアメノムラクモが釘を刺す。

「わかってますよ、御剣さん」

武彦は苦笑いした。

「如何なさいましたか、たけひこ様？」

アキツが不思議そうに彼を見たので、

「い、いえ、何でもあります。急ぎましょう、アキツさん」

「はい」

二人はツクヨミの元へと走った。

ヨモツの女王イザは、アキツと武彦がツクヨミのところに向かっているのを知り、

「オオマガツ、ヤソマガツ、戻れ。アキツとイワレヒコがそちらに向かつておる。ツクヨミの始末は後だ^{のち}」

「はい」

ツクヨミは二体の魔物に追い詰められて瀕死の状態だった。

「また相手をしてやるよ」

オオマガツはそう言い捨てると、もと来た穴に飛び込む。

「あんた、結構いい男だねえ」

ヤソマガツが言って、穴に飛び込んだ。

（助かったのか……）

息をするのも苦しいツクヨミは、地面に崩れ落ちた。

「アキツ様……」

彼は気を失ってしまった。

イザはヨモツの最深部である玉座の間で狂喜していた。

「オモイよ、最後に大儀であったぞ。うぬの我に対する恨み、確かに受け取った。うぬは役に立ったぞ」

彼女は玉座を立ち上がり、

「さて、時は満ちた。オオヤシマをわが手に」

イザはそう言うと、大声で笑い続けた。

五十三の章 タマヨリの願い、アキツの戸惑い

武彦とアキツは、氣を失っているツクヨミを見つけていた。

「ツクヨミ殿！」

アキツが顔色を変えて彼にすがりつく。

『大事な、アキツよ。ツクヨミは氣を失っているだけ。ここは一度引き、ツクヨミを休ませるのだ』

神劍アメノムラクモが言った。

「はい、御劍様^{みつるぎ}」

アキツは涙を拭って応じた。武彦がツクヨミを背負い、歩き出す。アキツがそれに続く。

『イザが動いた。急がねばならぬ。走れ、武彦』

「はい、御劍さん！」

武彦は猛然と走り出した。

「たけひこ様！」

アキツが慌てて追いかける。

ヤマトの城では、母タマヨリと妹イスズの癒しの力で、イツセが回復していた。

「誠にありがとう存じます、母上。そして、イスズ」

イツセはタマヨリに対して頭を下げた。

「何を申すか、イツセ。私は其方^{そなた}の母であるぞ。其方が危うき時は、いつでも助ける。当たり前の事です」

タマヨリは息子の生還を喜び、涙ぐんでいた。

「はい」

イツセも母の優しさが身に沁み、涙を流した。

「皆様、ご無事でしたか」

そこへウズメが駆け込んで来た。

「ウズメ、其方こそ、無事で何よりです」

タマヨリが微笑んで応じる。ウズメはイツセの服が血で染まっているのを見て、

「イツセ様、それは……？」

と仰天した。イツセは苦笑いして、

「ヨモツの戸をくぐりかけたところを、助けてもらったのだ」

「そうなのですか」

ウズメは、血の量を見て、改めてイスズとタマヨリの癒しの力に驚愕した。

（クシナダ殿も、たけひこ様に助けられたと聞いた。ヤマトの王家ではなく、タマヨリ様のお血筋のお力なのか？）

ウズメはハツとして、

「オモイは逃げたのですか？」

するとイスズが、

「オモイは溶けてなくなりました。彼奴^{あやつ}は、やはりヨモツの者でした」

「溶けて？」

ウズメには意味がわからなかった。するとそれに気づいたイスズが、

「たけひこ様が教えて下さいました。オモイはヨモツの者であるから、私の癒しの力で倒せると」

「ああ」

ようやく合点がいくウズメである。

（癒しの力をヨモツの者に使うと、それは癒しとは違う力となるのか……）

イザに對抗できる手段が見つかったと思うウズメである。しかし、イザはその程度の存在ではない事を後^{のち}に知る事になる。

武彦とアキツは、ヒラサカを越えてアマノイワトに辿り着いた。

「気休めにしかありませんが……」

アキツはヒラサカを封じ直した。オオマガツとヤソマガツの二体

の魔物であれば、ヒラサカの封印も役に立とうが、イザにはそれすら通じない可能性があるのだ。

「ツクヨミ殿を寢所へ。お休みいただきます」

アキツはイワトの別棟に向かって歩き始める。

「あ、はい！」

武彦はハッとして彼女を追いかけた。

「こちらへ」

アキツが案内したのは、彼女の寢所らしかった。荘厳な気に満ちた部屋だ。武彦は入るのを躊躇したくらいだ。

「そちらにお寝かせ下さい」

アキツは自分が寝ているベッドのような場所を指し示した。

「はい」

武彦は慎重にツクヨミをそこに寝かせた。

『武彦、座を外せ』

アメノムラクモが言う。

「は？」

『部屋を出よ！』

「あ、はい！」

どうして怒られるのかわからなかったが、武彦は慌ててアキツの寢室を出た。

『覗くでないぞ、武彦』

アメノムラクモの言葉に、武彦はキョトンとした。

（覗くなってどういう事？）

武彦は首を傾げながら元来た道に戻った。

「ツクヨミ殿……」

アキツは愛おしそうにツクヨミを見た。

「ヨモツの穢^{けが}れ、私がお祓い致します故、どうぞ、お戻り下さい」

アキツはそう言うと、衣服を全て脱ぎ捨て、ツクヨミの隣に寝た。輝くばかりに美しい彼女の身体から、荘厳な光が放たれる。

「ツクヨミ……様……」

アキツの唇が、ツクヨミの唇に触れる。途端にツクヨミの身体も輝き出した。アキツの気がツクヨミの身体に入ったのだ。同時にツクヨミの身体中から、霧のようにヨモツの穢れが吹き出して来た。

「ツクヨミ様……」

アキツはツクヨミの服を脱がせて、直接彼の肌を手で撫でて行く。アキツに撫でられたところが、強く輝く。ヨモツの穢れは、消滅した。それでもアキツはツクヨミの唇を求めている。彼女は今、女としてツクヨミを愛し始めている。いつしか、ツクヨミも衣服を全て脱がされていた。アキツがツクヨミの上に覆いかぶさるようにして抱きついた。

「う……」

その時、ツクヨミが意識を回復した。

「ツクヨミ様」

アキツが潤んだ目でツクヨミを見下ろす。ツクヨミは状況を把握するのに時間がかかった。

「ああ！」

彼はアキツが一糸纏いっしまとわぬ姿なのに気づいた。そしてまた自分も。

「アキツ様、いけません、このような事を……」

ツクヨミは慌ててアキツを押しつけ、身を起こした。

「ツクヨミ様、私は……」

アキツの心はツクヨミは良くわかっている。しかし、彼はアキツの思いに答えられない。

「いけません。貴女はワの国の王家の方。私は一介の言霊師ことだまし。そのような事、許されませぬ」

ツクヨミはサッと自分の衣服を着ると、アキツの衣服を彼女にか
け、

「よくお考え下さい。失礼致します」

と寝所を出て行った。アキツはガックリと膝を着いた。

（私は何を……。ツクヨミ殿の穢れを祓うつもりが……）

アキツは声を上げずに泣いた。

「く……。あと一息であったが……」

ヨモツの最深部の玉座の間で、女王イザが呟いた。彼女はツクヨミの身体に纏わり憑いた穢れを通じて、アキツを操っていたのだ。しかしそれも、ツクヨミの岩のような意志によって打ち破られた。

「アキツが男を知れば、力を失ったものを……。まあ良い。余興は終わりじゃ」

イザはその漆黒の瞳を細め、ニヤリとした。

ヒノモトの国王であるホアカリと、それに従っていたタジカラ、スサノ、そして気を失ったままのホアカリの王子ウマシが、ヤマトの城に到着した。

「お久しゆございます、義兄上様」
あにうえ

タマヨリが頭を下げる。イスズもそれに倣った。ならホアカリは馬を降り、

「久しいな、二人共。元気そうで何よりだ」

「イツセは怪我のため、床に臥せております。お許し下さい」

タマヨリが告げた。ホアカリは微笑んで、

「いや、構わぬ。それより、イツセも無事で何よりであった」

ホアカリは玉座の間に通され、亡き弟ウガヤが座っていた椅子に腰を下ろした。

「弟の事、誠に残念だ」

「はい」

タマヨリとイスズは、ウガヤの死を思い出し、涙した。

「二人には迷惑をかけた。あれは我が儘であったから、苦勞したであらう？」

ホアカリがタマヨリとイスズをねぎらう。

「いえ」

タマヨリは涙を拭って微笑んだ。イスズも涙を拭った。

「そうか。とにかく、其方達とイツセが無事で何よりであった」

ホアカリ達はしばらく話し込んだ。

タジカラとスサノは、ウマシを客間の寢所に寝かせると、ウズメからイスズの話聞かされていた。

「なるほど。あのツクヨミでさえ敵わなかったオモイに、イスズ様が……」

タジカラは嬉しそうだ。光明が見えた気がしたのである。スサノも、

「ヨモツに対する手立てが見つかったのは、良かった」と頷きながら言った。

五十四の章 美鈴の気持ち、イスズ的心

武彦はアマノイワトの入口で外を見ていた。するとそこへツクヨミがやって来た。

「たけひこ様、ご迷惑をおかけ致しました」

ツクヨミは深々と頭を下げて詫びた。武彦はキョトンとして、

「え、別に僕は……」

ツクヨミは頭を上げて、

「イザは動かぬようです。ですが、ここは危うきところです。アキツ様と共に、ヤマトの城までお引き下さい」

「ヤマトの城まで？」

武彦が答えあぐねていると、神剣アメノムラクモが、

『アマノイワトの封は、イザには通じぬという事。ここにいるのは危ういのだ』

「でも、ここで守らないと、まずいんでしょう？」

事情がわからない武彦が言うと、

『ここに留まると、アキツがイザに操られる。そういう事であろう、ツクヨミ？』

アメノムラクモの指摘に、ツクヨミは顔を赤らめて、

「はい。御剣様の仰せみづるぎの通りです」

「そうなんですか」

武彦は相変わらずチンプンカンポンだ。

「それに、たけひこ様も、そろそろ時が参りましょう？」

ツクヨミが言った。武彦はアツと思い、

「そうか、ここで僕が戻ったら、ホントにまずいですよね」

「そうです」

ツクヨミは微笑んだ。そこへアキツが現れた。

「あ、アキツさん」

武彦が声をかけると、アキツは俯いたまま、

「ご迷惑をおかけしました」

と言った。同じ事を言われた、と武彦はツクヨミをチラッと見た。すると何故かツクヨミがギクツとして、

「たけひこ様、こちらへ」

と武彦を隅に連れて行き、

「私は、アキツ様とは、その、あのですね……」

『言うな、ツクヨミ。我が心得ておる。大事ない』

アメノムラクモが遮る。ツクヨミはホッとしたように、

「はい、御剣様」

とだけ言った。

『アキツよ、これからヤマトの城に向かう。ここは危うい。良いな？』

アメノムラクモが言った。アキツは俯いたままで、

「はい。仰せのままに」

（さっきから、アキツさんとツクヨミさん、全然目を合わせていないんだけど、喧嘩でもしたのかな？）

事情を知らない武彦は、暢気な事を思っていた。

ヤマトの城では、ヨモツに対するための軍議が開かれていた。

「ヨモツには、癒しの力が効くようだ。癒しの力を持つ者を国中から集い、部隊を編成したい」

タジカラが提案した。すると脇でそれを聞いていたイスズが、

「私も同行したいのですが、タジカラ？」

タジカラはギョツとしてイスズを見た。イスズはタジカラを見て、「私の力が役に立つのであれば、一緒に参りたいのです。いけませぬか？」

タジカラは困った顔をして奥方のウズメを見た。ウズメは頷いて、「イスズ様、ありがたきお話ですが、それはお受けできません。イワレヒコ様も、癒しのお力があります。ですから、イスズ様はこちらにおいで下さいませ」

「そうですか……」

イスズは寂しそうに応じた。

（ようやく、たけひこ様のお役に立てると思うたのに）
するとスサノが、

「ヒノモトにも、癒しの力を持つ者がおります。只今、クシナダと共にこちらに向かっております」

ウズメが八百万の神でクシナダに知らせたのだ。そして同時に、ホアカリの妃であるトミヤ達もヤマトに連れて来る事になった。皆が同じところにいた方が戦いやすいという戦略的配慮だ。

「民にはそれぞれ、アマノイワトから離るるよう知らせを出し申した。国の行く末を決める戦に民を巻き込む事はできませぬ故」

スサノが言った。ヒノモトの王ホアカリが頷く。そして彼は、
「皆に聞いて欲しい事がある」

一同はホアカリを見た。

「この戦が終わわり、安寧の世になりし時は、私は王位をアキツ様にお返ししたいと思う」

スサノが仰天した。いや、彼だけではなく、タジカラもウズメも、そしてタマヨリとイスズも。

「やはり、国が乱れ、ヨモツが蠢く元を作りしは、私とウガヤ。オヤシマを治むるは、ワの王家のお血筋の方。それが一番正しき道と思う」

ホアカリの言葉に、一同は深く頷き、感動していた。

武彦達は馬でヤマトの城を目指していた。

「あ」

武彦が呟いた。

『武彦、いま少し待て！』

アメノムラクモが叫んだが、それは無理な事だった。武彦の魂は、彼の住む世界へと戻ってしまった。

「たけひこ様！」

馬から転がり落ちそうになったイワレヒコの身体を、ツクヨミが
ことだま
言霊で支えた。

『融通の利かぬ身体よ』
アメノムラクモが言った。

「は！」

武彦は目を覚ました。そこは自分の部屋だった。朝になっていた。
「戻ったのか……」

手にしていたデジタルカメラに気づき、画像を確認した。

「写ってる。凄いや、これ！」

武彦は大喜びで部屋を飛び出し、朝食の支度をしている母珠世の
元へ行った。

「おはよう、母さん」

彼の姿を見ると、珠世はホッとした顔で涙ぐみ、

「おはよう、武彦。良かった、無事に戻ってくれて」

「うん。それとき、見て、母さん」

彼はイスズとタマヨリとツクヨミと一緒に写っている画像を珠世
に見せた。

「……」

珠世は啞然とした。そこには自分にそっくりな女性と娘の美鈴に
そっくりな女性が写っていたからだ。

「ね、本当でしょ、母さん」

「ええ、そうね。本当によく似ているわね、この二人」

二人が感動して話していると、

「武、朝から騒がしいぞ！」

と美鈴が眠そうな顔で現れた。彼女は昨夜遅かったのだ。武彦は今
日が土曜なのを思い出した。

「ほらほら、姉ちゃん、僕の言ってた事、嘘じゃないんだよ。見て
！」

武彦はデジカメを美鈴に渡した。

「何、これ？」

美鈴は鬱陶しそうにそれを受け取ったが、そこに写っている人の顔を見てギョツとした。

「え、母さんと私が、どうしてこんな格好してるの……？」

美鈴は武彦の話を全く信じていなかったから、珠世より衝撃を受けていた。

しばらくして、美鈴はようやく事情を飲み込めた。

「信じられないけど、これが現実なのか……」

彼女はもう一度画像に見入った。そして、武彦を見る。

「武」

姉の呼びかけにギクツとしてしまう武彦。悲しい条件反射だ。

「ごめんな、酷い事を言っ。姉ちゃんを許してくれるか？」

美鈴はバツが悪そうな顔で武彦を見た。武彦は微笑んで、

「許すも許さないもないよ、姉ちゃん。疑われて当然さ。でも、わかってもらえて嬉しいよ」

「ありがとう、武彦！」

美鈴は泣きながら弟に抱きついた。だが、その力は強過ぎた。

「姉ちゃん、痛いよ！」

「うるさい！」

美鈴は弟を信じてあげられなかった自分を恥じたのだ。でも、それをあっさり許してくれた武彦の言葉で救われた思いがした。

「でも、また行かなくちゃ」

「え？」

武彦の言葉に、母と姉がビクツとした。

「まだ終わっていないんだよ。一番強い奴が、まだいるんだ。そいつをやっつけない限り、オオヤシマは救われないんだ」

珠世と美鈴は顔を見合わせた。武彦は照れ臭そうに笑って、
「亜希ちゃんにそっくりなアキツさんが待ってるんだ。そろそろ行

くね」

彼はキッチンを出て行きながら、

「今度はアキツさんの画像も取って来て、亜希ちゃんに見せようかな」

と言った。

五十五の章 珠世の願い、ツクヨミの不安

異世界である「オオヤシマ」に呼び込まれ、図らずもその人々と共に戦う事になった高校生、いわがみたけひこ磐神武彦。

彼は母と姉に自分の置かれてる立場をようやく理解してもらえて、少しだけ気持ちが楽になった。

（アキツさんを助けに行かないと……）

武彦は自分の部屋に戻った。そして、またデジカメを抱え、ベッドに横になる。

「アキツさん……」

武彦はアキツと幼馴染の都坂亜希とを完全に重ねていた。

キッチンでは、母珠世と姉美鈴が深刻な顔で向き合っていた。

「そんなに危険なの、そこ？」

美鈴は母から「異世界」の話を聞いて目を見開いた。

「私もどんなところなのかよくわからないんだけど、戦争をしているらしいのよ。どう考えても、安全な世界ではないわ。それに相手はゾンビだって」

珠世はゾツとした顔で言った。美鈴は逆に首を傾げて、

「ゾンビ？ ゲームの話みたいだなあ。やっぱりあいつ、ウソついてるか、おかしいか……」

「でも、信じてあげたいのよ、母さんは。武彦があればほど熱い目をして私に話してくれた事、なかったから」

珠世は武彦支持派だ。しかし美鈴は、

「もちろん、私だって信じたいよ。それにあのバカがあそこまで話を作れるなんて考えられないしさ。でも、話があまりにも突飛過とつびぎて……」

「そうなんだけどね」

珠世はそう言って立ち上がると、食器棚の引き出しから一冊の大

学ノートを取り出した。

「でも、母さんさ、武彦の話を聞いて、思い出した事があって、父さんの残したノートを見直してみたの。そしたら、あったのよ」

「何が？」

問いかける美鈴に、珠世はノートを開いて、

「ほら、ここ」

と指差した。美鈴はそこに書かれた言葉を見て、ギョツとした。

「オオヤシマ……」

父の字で確かにそう書かれていた。珠世は美鈴を見て、

「私も父さんの影響で、日本の歴史に興味を持ったので、いろいろ勉強したから、『オオヤシマ』が日本の古代神話に出て来る地名なのは知っているわ。でもね、父さんの記している話は、日本の神話ではないのよ。父さんは、その当時見て来た事を書いているの。文章の中にも、『別の世界かも知れない』って書いているし」

「……」

美鈴は啞然としてノートを見た。珠世は苦笑いして、

「空想好きな人だとは思っていたけど、まさか本当に異世界に行った事があるなんて、思いもしなかったわ。だから、余計に運命を感じたの」

「運命？」

美鈴はノートから目を上げて母を見た。珠世は目に涙を浮かべて、
「父さんが、そして、私と父さんを引き合わせてくれた私のお祖父ちゃんじいちゃんが、武彦を異世界に行かせたんだって。そう思ったの」

「母さん……」

美鈴も父親の話には弱い。つい、もらい泣きしてしまう。

「確かに危険かも知れない。でも、きつとお祖父ちゃんと父さんが助けてくれる、守ってくれる。そう信じているの」

珠世は一筋涙を流した。美鈴も涙を拭って、

「うん、わかった。私も信じるよ」

「ありがとう、美鈴」

珠世は微笑んで美鈴を見た。

武彦はオオヤシマに行った。目を開けると、夜になっていた。

（あれ？　ここ、イワレヒコさんの部屋か？）

武彦はイワレヒコの部屋の寝所に横になっていた。部屋の隅に置かれた蝋燭の明かりが、周囲をボンヤリと照らしている。その時彼は人の気配と温もりを感じて、

「え？」

と右隣を見た。そこには、スヤスヤと眠るヤマトの王女イスズがいた。

「わ！」

武彦は驚いて大声を出して飛び起きた。

「たけひこ様？」

イスズが眠そうな目を擦りながら起き上がり、

「いかが如何なさいましたか？」

「え、あの、その、どうしてイスズさんがここに？」

武彦はすっかり慌てふためいていた。イスズが姉美鈴に瓜二つな上に、自分に寄り添って寝ていたのだ。混乱するのは仕方なかった。

「私達は許婚にいいなすけございます。寝食を共にするは、当たり前でございますよ」

イスズはそう言いながらも、どことなく恥ずかしそうだ。

「そ、そうかも知れませんが、僕はイワレヒコさんではないから……」

そこまで言いかけて、イスズが泣き出しそうな顔をしているのに気づき、武彦は更に慌てた。

「ご、ごめんなさい、すみません。この身体は、イワレヒコさんですもんね」

武彦はそう言って頭を下げた。するとイスズも頭を下げ、

「私の方こそ、たけひこ様のお気持ちも考えず、失礼致しました」

「あ、いえ、僕は別に……」

武彦は苦笑いをするしかない。するとイスズは、

「この戦が終わりましたら、晴れて私達は夫婦^{めと}になります」

「あ、そうですか」

武彦は只返事をするだけにした。話をややこしくしたくないのだ。しかし、

「私は早^{はよ}う貴方様の御子^{みこ}を生みとう存じます」

とイスズが言ったので、武彦は真っ赤になってしまった。

（また姉ちゃんと顔を合わせるの、怖いよ……）

その頃、城の周囲の警戒に当たっていたタジカラは交代のために城門をくぐり、スサノと顔を合わせていた。

「何も異変はなし、だ。イザならば、夜襲を仕掛けて来ると思うたのだが」

タジカラが眠そうな目で言うと、スサノはニヤリとして、
「とにかく休め、タジカラ。寝ている間に、私がイザを退治^{たいじ}しておく」
「抜かせ」

二人は笑い合って交代した。そこへタジカラの奥方であるウズメがやって来た。

「お疲れ様にごさいます、お館様^{やかた}」

「如何^{いか}した、ウズメ？」

タジカラはウズメが何かを感じたのかと思い、尋ねた。

「静か過ぎます。何やら起こりそうな気が致します」

「そうだな。私もこの静けさは気に入らぬ」

タジカラは周囲を見渡して言った。

ツクヨミは自分の部屋で調べ物をしていた。かつて闇の国ヨモツが蠢き、その時異界の者の力を借りてヨモツを封じたという話を詳しく知リたかったのである。しかし、ヤマトの城にある全ての書物を読んでみたが、その事が書かれているものはなかった。

（あれは言い伝えに過ぎぬのか？）

しかし、ワの女王であったオオヒルメが話してくれたのだ。彼女が単なる伝説を本当の事のように言うはずがない。

「やはり、オオヒルメ様がお持ちだった書物を調べるしかないか」

今となつては、アマノイワトに近づくのは非常に危険であつたが。

「ツクヨミ殿、よろしいですか？」

アキツの声で、ツクヨミはハッと我に返った。

「はい、アキツ様」

ツクヨミは顔を火照らせて答えた。すると、やはり顔を赤らめたアキツが入つて来た。

「このような時刻にお訪ねして申し訳ありません」

アキツはツクヨミに頭を下げた。ツクヨミは微笑んで、

「いえ。如何いかがなさいましたか？」

アキツは顔を上げて、

「イワトでの私の無礼、どうぞお許し下さい」

と今度は土下座した。ツクヨミはそれを見て仰天し、

「お止め下さい、アキツ様。御剣様のお話では、イザがアキツ様を操みづるっていたと」

「それはそうですが、そうだったのは、私にそのような邪よこしまな心があればこそです。本当にお恥はづかしい限りです」

顔を上げたアキツは涙を流していた。ツクヨミはその涙を拭い、

「それは邪な心ではありません、アキツ様」

その言葉にアキツは喜びの表情を見せたが、

「しかし、私は貴女様のお心にお答えする事はできません」

と言われ、また顔を曇らせた。ツクヨミは心が痛んだが、

「それより、外が静か過ぎる気がします。アキツ様はどう思われますか？」

アキツはツクヨミとの事は、今考えている場合ではないと気持ちを切り替えた。

「イザが仕掛ける前触れ。私はそう思います」

アキツはいつもの顔に戻った。ツクヨミは彼女の心が修復して行くのを感じ、ホッとした。

五十六の章 ツクヨミの覚悟、武彦の決心

オオヤシマの夜が明けた。

結局イザは夜襲をかけてくる事もなく、タジカラとスサノの不寝番は徒労に終わった。

「まさか、それが狙いではあるまいな？」

眠い目を擦りながら、スサノが奥方のクシナダに言う。クシナダは苦笑いをして、

「そのような事、考えられませぬ。お戯れはお止め下さい、お館様」

「そうか」

スサノは大欠伸おおあくびをしてから、

「ならば、しばし休むぞ」

「はい」

クシナダは夫について、タジカラ達が用意してくれた部屋に向かった。

「襲って来なかったか」

自分の部屋でタジカラが呟く。隣で寝ていたウズメが起き上がり、
「そのようです。イザは何を企んでおるのか、わからなくなりました」

「それはそうだ。彼奴はヨモツの女王。我らの思いも及ばぬ事を考えておるのだ。企みがわからぬは、致し方のない事よ」

タジカラはウズメを抱き寄せて言った。ウズメは顔を赤らめて、

「お館様、もうすでに二度、ご寵愛をいただきました故、これ以上は……」

するとタジカラは不満そうに、

「そうか」

と言うと、立ち上がった。ウズメはホッとした。身体が大きいタジカラと、比較的小柄なウズメでは、体力が違い過ぎるのだ。愛され

ているのは嬉しいのですが、これでは身が保ちませぬ。彼女はそう言いたかったが、それではタジカラを傷つけると思い、言い出せない。

「すまぬな、ウズメ。私は無骨者故、作法を知らぬ」

何故か顔を赤らめてタジカラは部屋を出て行った。ウズメは呆気に取られたが、

（私が、お館様のご寵愛を疎ましく思ったとお感じなのかしら？）
そんなタジカラを愛おしいと思うウズメである。

武彦は、身体を借りているイワレヒコの実の姉で許婚のイスズからようやく解放され、廊下を歩いていった。すると、アキツがツクヨミの部屋から出て来るのを見てしまった。

（わ、まずい！）

武彦は慌てて柱の陰に隠れた。幸いアキツは彼に気づいた様子はなく、そのまま廊下の向こうへ歩いて行った。

（アキツさんとツクヨミさん、何してたんだろう？）

武彦は顔を赤らめた。

『不躰であるぞ、武彦』

神剣アメノムラクモが窘めた。たしな武彦はハツとして、

「す、すみません、御剣さん」みつるぎ

するとそれに被さるようにツクヨミの言葉が届く。

『私とアキツ様は、そのような間柄ではありませぬ、たけひこ様』

ツクヨミが言霊師であるのを忘れていたと思う武彦である。ことだまし

「たけひこ様」

ツクヨミが部屋から出て来た。武彦は慌てて、

「ごめんなさい、ツクヨミさん。失礼な事を考えてしまっ……」
するとツクヨミは苦笑いして、

「いえ。自分の部屋に女の方をお通ししただけで、疑われても仕方がないのです。ですが、アキツ様と私は、そのような間柄ではございません」

「わかりました」

武彦は戸惑いながら言った。アメノムラクモが、
『武彦は、アキツが自分の幼馴染に似ておるので、嫉妬しておるのだ』

「なるほど」

ツクヨミが微笑んで武彦を見たので、

「あ、いや、その……」

と彼は口籠もってしまった。

（でも、確かにそうなのかも知れない。僕は、亜希ちゃんとアキツさんを重ねて見ている……）

そう思いながら、それもまたアメノムラクモとツクヨミには筒抜けなのだと思い出し、武彦は赤面した。

オオヤシマの地下深く存在する闇の国ヨモツ。その最深部の玉座の間にいる女王イザは、すぐにでも地上へと現れるかと思われていたが、まだ動いていなかった。

「オオマガツ、ヤソマガツ」

彼女は自分の分身である魔物を呼んだ。

「はは」

黒き炎を身に纏うオオマガツ。そして、雷を身に纏うヤソマガツ。

「アキツ達は、ヤマトの城まで退いた。まずはうぬらが先鞭をつけよ」

「ははっ！」

二人の魔物は嵐のように飛び去った。彼女達からは、ツクヨミと戦った時と同様に黒くて長い紐のようなものが続いていた。

「この手が、どこまで通じるかだが……」

イザはニヤリとして、只黒い目を細めた。

武彦達は朝食をすませ、イザの軍を迎え撃つ準備を始めた。
（何だか、変わった食事だったなあ）

武彦は何度かオオヤシマに来ているが、食事を摂ったのは初めてだったのだ。

「あの朝餉^{あさけ}はタマヨリ様とイスズ様の癒しの力が秘められしものです。これ以上なきものでした」

ツクヨミが教えてくれた。武彦は、

「ああ、そうなんですか。だから、凄く元気になった気がしたのか」

「そうです。そしてたけひこ様、貴方の魂を宿らせておりますイワレヒコ様も、癒しの力をお持ちです」

ツクヨミが更に教えてくれる。

「ああ、そうでしたね。凄いなあ、イスズさん達」

「そうです。王家の方々は、皆、尊^{とうと}きお力をお持ちなのです」

ツクヨミは何故か悲しそうに言う。武彦がそれに気づき、

「どうしたんですか、ツクヨミさん？」

「いえ、大事ありません」

ツクヨミはそれだけ言うと、サッと走り去ってしまった。

『武彦』

不意にアメノムラクモが言った。

「何ですか？」

『ツクヨミは死ぬるつもりよ。お前が何としても彼奴を守れ』
その言葉に武彦はギョツとしたが、

「はい、御剣さん」

と答えた。

タジカラとスサノは、大軍を率いて城の前に布陣した。

「イザが出張^{ては}れば、我らなど役に立たぬだろうがな」
珍しく弱気な発言のタジカラに、スサノが眉を吊り上げる。

「どうした、タジカラ？ お前らしからぬ言葉ぞ」

タジカラはスサノを見て、

「さもあるう。イザは魔物ぞ。如何^{いか}に我らが腕に覚えがあろうとも、それは人を相手の時。イザの分け身の魔物にも、我らは齒が立たな

かったのだぞ」

「そうだな」

スサノは遙か彼方にあるアマノイワトを見やった。

「むしろ、我らよりもウズメ殿や、クシナダ達の方が助けになるな」

「ああ。悔しいがな」

タジカラはフツと笑ってスサノを見た。スサノもフツと笑った。その時だった。

「覚悟はできたか、愚かなる者共！」

いきなり地中から、オオマガツとヤソマガツが飛び出して来た。

「うわああ！」

兵達は大混乱に陥った。

「来たか、魔物め！」

スサノは炎の剣を振り上げ、業火を出す。

「おのれ！」

タジカラも剣を抜き放ち、魔物達を睨んだ。

遂に、最終決戦が始まった。

五十七の章 ツクヨミの進撃、イザの真意

突然現れた二体の魔物に対し、タジカラとスサノは兵達を退かせた。

「おのれ、こやつらが先鋒か!？」

タジカラは齒軋りした。最初は小者が押し寄せて来ると踏んでいたのだ。

「イザめ、一気にここを攻め落とすつもりか？」

スサノが呟く。

「うぬらでは相手にならぬ。この城で一番強い者が来い！」

好戦的なヤソマガツが言い放つ。彼女は身体中から雷を放ちながら、タジカラとスサノを嘲るかのように笑った。オオマガツは、黒い炎を更に強力に熾し、

「我らは更に力をつけた。アキツ、出て来い！ うぬをこの黒き？
で焼き尽くしてくれるわ！」

と叫ぶ。二人共、アキツの柏手にやられているので、彼女に対する怨みが強い。

「お前達の相手は私がする」

ツクヨミが後方から現れた。

「ツクヨミ！」

タジカラとスサノは、ツクヨミの言霊が二体の魔物に通用しない事を知っている。現にアマノイワトでは、ツクヨミが瀕死の状態まで追い込まれたのだ。

「ほオ、まだ懲りていないか、言霊師よ。愚かな……」

オオマガツが笑う。ヤソマガツが、

「あんたはいい男だから、殺めたくはないが、イザ様に逆らう者は容赦しない」

ツクヨミはその言葉にキツとしてヤソマガツを睨んだ。

「我が一族が、何故王族の上に位していたのか、お前達は知らない」

ツクヨミは謎の言葉を言った。タジカラとスサノは顔を見合わせた。

「言霊は、一つところに留まらず。昨日の私は勝てぬとも、今日の私は勝てる」

ツクヨミはタジカラ達の前に進み出て、二体に言い返す。

「強気だねえ。そういうところも、いい男だ。だが、生かしておく事はできぬ」

ヤソマガツの顔つきが変わった。

「私が先に行くよ、オオ」

彼女はオオマガツにそう言うのと、ツクヨミに仕掛けた。

「祓いたまえ、清めたまえ！」

ツクヨミは柏手を打ち、叫んだ。

「そのような戯れ言、アキツでなくては恐れるものではない！」

ヤソマガツは構わずツクヨミに近づいた。その時だった。

「ぐわあああっ！」

彼女をツクヨミの放った言霊が押し包んだ。途端にヤソマガツは強烈な光に包まれ、悶絶した。

「ヤソ！」

オオマガツが仰天して叫んだ。

「ふおおおっ！」

ヤソマガツは空高く舞い上がり、錐揉みしながら地面に落下し、砂埃を舞い上げた。

「昨夜、アキツ様に頂いた力。言霊師の真髄は言の葉を操る事にある。その言の葉の力を得れば、私もアキツ様と同じ事ができる」

「ぬうう……」

オオマガツがジリジリと退く。

「おのれエッ！」

地面にめり込んでいたヤソマガツが復活し、再びツクヨミを襲撃する。

「やめよ、ヤソ！」

オオマガツが止めようとしたが、怒りに我を忘れているヤソマガツは、そのまま突っ込んだ。

「祓いたまえ、清めたまえ！」

ツクヨミが言霊を放つ。

「同じ手は通じぬ！」

ヤソマガツは言霊を避けるために自分の身体を雷にいかずち変えた。彼女は言霊をやり過ごした。

「何!？」

その様子を後ろで見ていたタジカラとスサノが叫んだ。

「死ぬるがいい、言霊師！」

雷となったヤソマガツがツクヨミに襲いかかる。

「うおおっ！」

元に戻ったヤソマガツが右手を槍のように尖らせ、そこに雷を纏まとわせて、ツクヨミに突き出す。

「ツクヨミ！」

タジカラとスサノが叫んだ。

「ぐううっ！」

しかし、苦悶の表情を浮かべていたのは、ヤソマガツの方だった。ツクヨミは自分の身体に言霊を纏わせていたのだ。

「ぬうっ！」

ヤソマガツはツクヨミに繰り出した右手を溶かされていた。彼女は歯軋りし、

「畏か……？ 始めから、待っていたのか？」

ツクヨミはそれには答えず、

「まだ戦うか、魔物共。お前達は、アキツ様と戦う事はできぬ。この私がいる限りな」

二体の魔物は憎らしそうにツクヨミを睨む。

「ならば、これをその言霊で防いでみせよ！」

オオマガツが動いた。彼女はツクヨミ、タジカラ、スサノを取り囲むように炎を動かす。

「くっ！」

一瞬にして黒い炎に囲まれてしまったタジカラとスサノは身動きがとれなくなった。

「おのれっ！」

スサノが炎の剣で黒い炎を薙ぎ払おうとするが、全く歯が立たない。

「我らは強くなったと言ったはず。そのような剣では役に立たぬ」
オオマガツが笑った。スサノはムツとして、

「おのれ……」

そこへ武彦が駆けつけた。

「皆さん、遅くなりました！」

武彦は神剣アメノムラクモを抜き、走り出した。

『武彦、黒き？に触れるな。死人にされる。我で黒き？を薙ぎ払うのだ』

アメノムラクモが言った。

「はい、御剣さん！」

ヤソマガツとオオマガツは武彦の到着に気づくと、バツと退いた。

「神剣アメノムラクモ……。あれは手強いぞ、ヤソ」

オオマガツが言う。ヤソマガツはニヤリとして、

「その方がいい」

と返す。

「ええーい！」

武彦はまずタジカラとスサノを取り囲む炎を薙ぎ払い、次にツクヨミの周りの炎を薙ぎ払った。

「次はどうしますか、御剣さん？」

武彦は二体の魔物を見ながら尋ねた。

『もちろん、彼奴ら^{あやつ}を倒す』

「はい！」

武彦はアメノムラクモを中段に構え、再び駆け出した。

その頃、アキツ達は玉座の間に集まっていた。そこにはヒノモトの王ホアカリ、その妃トミヤ、亡き王ウガヤの妃タマヨリ、王子イツセ、王女イスズ、舞踏師ウズメ、水使いクシナダもいた。

「外の様子はどうなのだ？」

玉座のホアカリが尋ねた。ウズメが跪き、

「只今、ヨモツの魔物と戦いくさをしております」

「そうか。勝てそうか？」

ホアカリは不安そうに尋ねる。するとクシナダが、

「勝てまする、陛下」

クシナダの力強い言葉にホアカリは微笑んだ。

「そうであるな」

彼は隣に座るアキツを見た。アキツも微笑み、ゆっくりと頷いた。

（ツクヨミ様……。生きて帰って下さいませ）

彼女のツクヨミに対する思いは、消えてはいなかった。

「ウマシはどうか？ まだ動けぬか？」

ホアカリは、ヨモツに取り込まれそうになった自分の嫡男である

ウマシの容態を心配していた。

「大事ありませぬ、陛下。ウマシ様は、お元気になりまする」

ウズメがニツコリとして答えた。ホアカリはトミヤと顔を見合わせ、ホッとした顔になった。

闇の国ヨモツの最深部、玉座の間。女王イザは目を閉じたまま椅子に座っていた。

「あと一息ぞ。オオマガツ、ヤソマガツ、頼むぞ」

彼女はフツと笑った。

五十八の章 ヤソマガツの悲しみ、オオマガツの焦り

神剣アメノムラクモを中段に構え、武彦はオオマガツ、ヤソマガツの二体の魔物を見た。

「異界人よ、邪魔すると死ぬる事になるぞ」

ヤソマガツが挑発紛いの事を言う。

『戯けた事を申すな！ うぬら如きが、この私の相手になろうとは笑止。たちどころに屠ほふってくれるわ！』

アメノムラクモはいつになく好戦的だった。それだけ二体の魔物が強くなっているのであらう。

「神剣など恐るるに足らず！ 我らはイザ様より力を頂きし者。粉微塵に打ち砕いてくれる！」

オオマガツが怒鳴った。彼女もアメノムラクモとは因縁がある。最初に相見あいまみえた時、彼女はアメノムラクモに恐怖を感じたのだ。それが許せないのである。

『なかなかに勇ましい事よ。しかし、うぬらでは我に勝てぬ。それでも争うか？』

アメノムラクモは更に挑発する。

（御剣さん、何言ってるんですかあ！？ そんなに相手を怒らせたら、まずいですよお）

武彦は内心ビクビクしていた。

「我らを愚弄しおって！ 許さぬ！」

気の短いヤソマガツが突進して来た。

「わわ！」

武彦は慌ててアメノムラクモを構え直す。

『武彦よ、案ずるな。私の力と、イワレヒコ本来の剣術、そしてツクヨミの言霊ことだまがついておる』

「は、はい、御剣さん！」

アメノムラクモの言葉通り、ツクヨミは武彦にアキツ直伝の言霊

を放ち、武彦を防護していた。

「ヤソ、不用意だぞ！」

オオマガツがそれに気づいた。しかしヤソマガツは止まらない。
「光がそれほど尊いのか!? 闇はそこまで穢けがれておるのかあ!?!」
ヤソマガツの言葉が武彦の胸に突き刺さった。

（何だ、この人? 心の中で泣いてる……）

『武彦、来るぞ!』

ボンヤリしている武彦をアメノムラクモが叱咤する。

「はい!」

武彦は襲いかかって来るヤソマガツを見た。

（御剣さん、この人を助ける事はできないのですか?）

武彦は心の中でアメノムラクモに尋ねた。

（それは如何いかなる事だ、武彦?）

（この人、心の中で泣いています。本当は悪い人ではないんです。
だから……）

武彦はヤソマガツの雷撃をアメノムラクモで弾き返しながら伝える。

（お前の思いはわかった。ならば、彼奴あやつの闇の元を斬るしかない）

（闇の元?）

武彦が苦戦しているように見えたツクヨミが声をかけて来た。

（どうなさいましたか、たけひこ様?）

彼はその瞬間、武彦の考えを知った。

（わかりました、たけひこ様。それがよろしいかと存じます）

ツクヨミも武彦に賛同した。

（では武彦、彼奴の闇の元を斬るぞ）

（はい）

ヤソマガツは、武彦が受けるばかりで反撃しないので、

「舐めるなあ!」

と雷撃をいっぺんに放って来た。

「く!」

武彦はそれを何とか防ぎながら後退した。

「何とも凄まじき戦いだ……」

「ああ……」

タジカラとスサノは、武彦とヤソマガツの戦いを驚嘆して見ていた。

『ぬ?』

「どうしたんですか、御剣さん?」

武彦が尋ねた。

『こやつ、闇の元がない。如何なる事か?』
するとツクヨミが、

「たけひこ様、そやつの後ろに出ている紐のようなものが闇の元です!」

と叫んだ。

『なるほど、そういうからくりか』

アメノムラクモは合点がいったようだ。

「先程から何を申しておるか!」

ヤソマガツがまた雷撃を放つ。

『武彦、踏み込め!』

「はい!」

武彦は雷撃を掻い潜り、ヤソマガツの背中から伸びている黒い紐のようなのに近づいた。

「ヤソ、退け! そやつら、我らのからくり気づいたぞ!」

後ろで見ていたオオマガツが叫ぶ。

「ぬう!」

ヤソマガツは武彦を飛び越えて下がった。

「ああ、逃げられた!」

武彦は立ち止まった。

アマノイワトの奥のヒラサカの更に向こうにある闇の国ヨモツ。その最深部の玉座の間で、女王イザは椅子に座り、武彦達の戦いを

二体の魔物を通じて見ていた。

「やはり、からくりに基づきおったか。しかし、それはほんの小手調べよ。気づかれてもどうという事はなし」

イザはニヤリとした。

「たけひこ様、加勢致します」

ツクヨミが進み出る。タジカラとスサノは顔を見合わせた。

「どうする、スサノ？」

「我らは足手まといぞ。近づかぬ方が良い」

スサノは炎の剣を鞘に戻した。タジカラも剣を戻し、

「そのようだな」

と呟いた。

「ここは退くぞ、ヤソ」

オオマガツが言った。ヤソマガツは悔しそうに、

「ああ」

と応じたが、

『退く事は許さぬ』

イザの声が二体の耳に届いた。

「イザ様？」

オオマガツは唾然とした。ヤソマガツはニヤリとした。

「ありがとうございます、イザ様。このまま退くなど、我にはできませんぬ！」

「ヤソ？」

オオマガツはイザの命令であれば否応なく従うが、ヤソマガツの行動は納得がいかない。

『オオヤシマの者を一人も討ち取らずに退く事は許さぬぞ、オオマガツ、ヤソマガツ』

イザの声が更に言った。

「はは！」

オオマガツとヤソマガツはそれに応じた。

『せめてツクヨミを討て。それまで退く事はさせぬ』

イザの口調は強かった。オオマガツとヤソマガツは、覚悟を決めたようだった。

「我が仇敵ツクヨミ、うぬだけは必ず仕留める！」

オオマガツが飛び出す。ヤソマガツも慌ててそれを追った。

「ツクヨミさん！」

武彦はツクヨミの方へと駆け出した。

「心配ご無用です、たけひこ様。私は負けませぬ」

ツクヨミは武彦に微笑んで言った。

『武彦、今ぞ！ あの黒き紐を斬るのだ！』

アメノムラクモが叫んだ。オオマガツとヤソマガツはツクヨミに突進する事に集中するあまり、武彦に背後を取られた。

「うお！」

オオマガツが先に気づき、向き直った。

「ええい！」

武彦はまだこちらを向いていないヤソマガツの紐を斬った。

「うおお！」

ヤソマガツが途端に苦しみ始めた。紐はヨモツからの闇の力を伝えるものだったのだ。

「おのれ！」

オオマガツが武彦に黒い炎を放つ。

「うわ！」

武彦はそれをかわしながら後退する。

『ツクヨミ、ヤソマガツを光で包むのだ。倒すのではなく、助けよ』

アメノムラクモの難しい注文にツクヨミは一瞬戸惑ったが、

「わかりました」

と応じ、言霊を放った。言霊は光となり、苦しみ悶えるヤソマガツを包んだ。

「くあああ！」

ヤソマガツは更に苦しんだ。

「うぬら、ヤソに何をしたあ!？」

オオマガツが怒り狂い、武彦とツクヨミに黒い炎を次々に飛ばした。

『武彦、オオマガツの紐を斬れ』

「はい!」

武彦は炎の攻撃をかわしながら、オオマガツの背後に回ろうとするが、彼女もヤソマガツの事を見ていたので、武彦に背後を取らせまいと動いた。

「く」

しかし、彼女は次の瞬間、紐を斬られていた。ツクヨミが言霊で剣を造り、斬ったのだ。

「ぐあああ!」

オオマガツも苦しみ始めた。ツクヨミはオオマガツも言霊で包んだ。

イザは、オオマガツとヤソマガツが共に倒された事を知っていた。「オオマガツ、ヤソマガツ、大儀であった。彼奴らの力、これで全て計れた。礼を言うぞ」

イザにとって、自分の分身である彼女達ですら、捨て駒であったのだろうか?

「いよいよ時は来たな」

イザはその漆黒の目を細め、低い声で笑った。

五十九の章 イザの力、アキツの決断

オオヤシマを揺るがす戦いは、いよいよ最終局面を迎えようとしていた。

ことだまし
言霊師ツクヨミの力で、光に包まれたオオマガツとヤソマガツの二体の魔物は、その闇の穢けがれを次第に失い、苦しんでいたのが嘘のように収まり始めた。

「これは？」

光の言霊で彼女達を包んだツクヨミは、その意外な展開に目を見開く。

「何と、彼奴あやつらは、人であつたか？」

後方で見えていたタジカラが呟いた。スサノは言葉もない。

「やった！」

武彦が喜びの声を上げた。オオマガツとヤソマガツは闇の穢れを全て取り払われ、人間の姿に戻った。

「うわあ……」

武彦は二人の女性の美しさに目を見張った。しかも高貴な気を放っている。

（アキツさんに似ている……）

そう思いながら、赤面する。

（亜希ちゃんにそっくりだ）

みやしひるかあき
美人は皆幼馴染の都坂亜希に見えてしまうのかと、自分を疑問に思ふ武彦である。

「貴女方は、ワの王家の方なのですか？」

ツクヨミが声をかけた。すると女性の一人が顔を上げて、

「はい。我が名はサクヤ。オオヒルメより二代前のワの国の女王です」

と答えた。ツクヨミはハッとして武彦を見た。彼もサクヤと名乗る

女性がアキツに似ている事に気づいたようだ。

「我が名はスセリ。オオヒルメの前のワの国の女王です」

もう一人の女性が名乗った。やはり彼女もアキツに似ている。

「我らは、我が祖であらせられるイザ様に魂魄を縛られ、闇の穢れを纏わされ、魔物にされたのです」

二人の話に武彦は驚いた。

「自分の子孫をそんな風に……。イザという人は、一体どういう人なんでしょう、御剣さん？」

彼はムツとして神剣アメノムラクモに尋ねた。

『我にもわからぬ。イザの目論みは誠に面妖だ』

アメノムラクモは淡々と語った。

「こうして、穢れを祓われ、我らは人の姿に戻れました。礼を言います」

二人は立ち上がり、深々と頭を下げた。

「これでようやく、天に昇れまする。忝い」かたじけな

サクヤとスセリは光に包まれ、天へと昇って行く。武彦達はそれを見送った。やがて二人の姿は光と共に消えた。

「後はイザのみ。それで全てが終わる」

ツクヨミが言った。するとアメノムラクモが、

『それならば良いのだがな』

と呟いたのを、武彦ですら聞き逃していた。

ヤマトの城の玉座の間では、二体の魔物が実は先代と先々代のワの国の女王だった事を知らされ、皆動揺していた。

「何と……」

ヒノモトの王ホアカリは、咄然としている。ワの国最後の女王となるはずであったアキツも、驚愕していた。亡きヤマトの王ウガヤの妃タマヨリとその娘であるイスズは、肩を寄せ合って泣いている。「もしや……」

ウガヤの嫡男であるイツセが眉をひそめる。彼はアキツを見た。

「大叔母様も、イザに……」

アキツはイツセの考えを読み、頷いた。

「まさか、オオヒルメ様も同じように？」

タジカラの奥方であるウズメが言った。スサノの奥方であるクシナダも驚いて、

「そのような事になれば……」

彼女達もアキツを見た。

「行きましょう、ウズメ、クシナダ。タジカラやスサノでは、この先の戦はできませぬ」

アキツが椅子から立ち上がる。

「はい、アキツ様」

ウズメとクシナダは声を揃えて応じた。

武彦達は、一旦城まで退いた。イザの出方を窺う事にしたのだ。

「アキツ様」

彼らが城門をくぐった時、ウズメとクシナダを従えたアキツが歩いて来るのが見えた。

「あの二人は、ワの国の女王であつたと聞きました」

アキツがツクヨミに言った。ツクヨミは跪いて、

「はい。イザに魂魄を縛られ、操られていたようです」

アキツの顔が悲しみに満ちて行くのを武彦は見た。

（アキツさん……）

ツクヨミは続けた。

「イザにそのような力があるのだとすると、我らも戦い方を考えねばなりません」

「そうですね」

アキツが武彦を見た。武彦はドキツとしてアキツを見る。

「これより先は、我ら三人と、たけひこ様、そしてツクヨミ殿で戦います」

「あ、いや、しかし……」

タジカラが異を唱えようとしたが、ウズメが彼を見て首を横に振る。

「イザは槍や剣では倒せませぬ。タジカラやスサノの力を借りたいのは山々なのですが……」

アキツは微かに微笑み、タジカラとスサノを見た。タジカラとスサノは慌てて跪いた。

「先程の戦を見るにつけ、もはや我らの力の及ぶものではないと知りました」

タジカラが言う。そしてスサノが引き継ぐように、

「我らはホアカリ様達、そして民を守るためにここに残ります」

「ありがとう、タジカラ、スサノ」

アキツが二人の肩にそっと手を置いた。二人は頭を深々と下げ、
「勿体ないお言葉にございます」と答えた。

「私も同道致したく存じます、アキツ様」

イスズが進み出て言った。武彦はびっくりして彼女を見た。姉に瓜二つの彼女が危険な場所に行くのは心配なのだ。

（でも、それを言ったら、ウズメさんもクシナダさんも、もちろんアキツさんも同じだ）

彼はアキツの返事を待った。

「わかりました。イスズ殿の力も要る事になりましょう。お願いします」

「はい、アキツ様」

イスズは嬉しそうに答えた。

こうして、対イザ部隊が結成された。アキツ、ツクヨミ、ウズメ、クシナダ、イスズ。恐らくオオヤシマ最強の布陣であろう。そしてそこに加わる武彦は、神剣アメノムラクモと一緒だ。

「参りましょう」

アキツの声に応じ、一同は馬を進めた。目指すは、アマノイワト

である。

（イザと対する前に、オオヒルメ様がお持ちだった書物を見たい）
ツクヨミはどうしても昔あったヨモツとの戦いの事が知りたかったのだ。

そして、闇の国ヨモツ。その最深部の玉座の間で、女王イザは一人
で悦に入っていた。

「来るか、アキツ。どれほどの者が集まろうとも、我が敵にあらず」
イザは只黒いだけの目を細め、ニヤリとした。

六十の章 ツクヨミの真意、アキツの本意

西に日が傾き始めていた。武彦達一行は、ゆつくりとアマノイワトに近づいていた。アキツを先頭にそのすぐ後ろをツクヨミが行く。そして更にその後ろを武彦とウズメとクシナダが続き、最後尾をイスズが受け持つ。

「アキツ様」

ツクヨミが馬を寄せてアキツに囁く。

「如何いかしましたか、ツクヨミ殿？」

愛する男に近づかれて、アキツの顔は紅潮する。しかしツクヨミはそれには気づかないでふりをして、

「私は、オオヒルメ様の書物を拝見したいのですが」

「大叔母様の？」

アキツはツクヨミの意外な申し出に目を見開く。ツクヨミは、

「はい。古いにしえに異界より来たりし方がヨモツを退け、ワの国の王がご自身のお命を懸けてヒラサカを封じたお話を確かめよう存じます」

「そうですか」

アキツは少しがっかりした様子だ。ツクヨミも彼女の気持ちに読めてしまうので心苦しかった。しかし、オオヒルメの遺した書物に驚くべき事が書かれているのをさすがのツクヨミも知らなかったのである。

「たけひこ様」

隣に馬を並べているウズメが呼びかけた。武彦はハツとして、

「は、はい」

その様子がおかしかったのか、ウズメはクスツと笑い、

「アキツ様とツクヨミ殿の事が気がりでございますか？」

「あ、いえ、その……」

武彦は心の中を見透かされたようでドキマギしていた。

「しかし、許されぬ事なのです。お二人共、それはご存知のはず」

反対側に並んでいるクシナダが悲しそうに言った。

「許されない？」

武彦はキョトンとした。すると神剣アメノムラクモが、
「如何にも。アキツは王家の者、ツクヨミは言霊師。古き世より、
言霊師は他の一族との交わりを禁じられている。そして、王家も他
族との交わりは許されぬのだ」

「そんな……。好きだったら、そんな事関係ないでしょ？」

武彦にはオオヤシマの恋愛のルールが理解できない。いや、理解
しなかった。

「それがこのオオヤシマの掟なのです、たけひこ様」

後ろからイスズが言った。武彦はイスズを見て、

「でもそれって、昔の人が決めた事でしょ？ だったら、今の人
がそれを変えればいいじゃないですか？ 歴史ってそうやって動く
んだって、世界史の先生が言ってましたよ」

と返した。どうしてそんなに熱くなっているのか、自分でもわから
ない武彦である。

「たけひこ様……」

イスズは悲しそうだ。武彦はハツとした。

（いけない……。今の言い方って、イスズさんに失礼だったかな？）
『このオオヤシマでは、男と女の思いよりも、血筋が大事なのだ、
武彦。だからこそ、ホアカリとウガヤは相争う事となった。だから
こそ、ナガスネは自分で王になろうとはせず、最後までホアカリを
立てたのだ』

アメノムラクモが語る。武彦は、

「それはわかります……。でも……」

何か反論したかったが、言葉が思いつかない。

「たけひこ様のお考え、私は正しいと思います。ですが、今はまだ
このオオヤシマにはそのお考えは早いのです。私はそう思います」

イスズは愁いを帯びた眼差して武彦を見た。武彦はその視線に堪
えられなくなり、俯いてしまった。

「そう……ですか」

闇の国ヨモツ。まだ多くの死人の軍団が控えていたが、何故か女王イザはそれを動かそうとしなかった。

「イザ様、今ならば、一気にオオヤシマを攻め落とせますぞ。何とぞ、ご命令を」

ヨモツの先兵であるシコメが、イザに進言した。しかしイザは、「その必要はなし。我^{われ}に考えがある。うぬらは控えていよ」

「はい」

シコメは仕方なく下がった。

（何故にオオマガツとヤソマガツを退かせなかったか、わかるか、アキツ？）

イザはニヤリとした。

武彦達は、アマノイワトの前まで来ていた。

「^{けが}穢^やれはないようですね」

八百万の神を使い、付近を偵察したウズメが言った。

「イザは何故イワトを落とさなかったのでしょうか？」

クシナダがアキツに尋ねた。アキツは首を傾げて、

「わかりませぬ。我らの事にも気づいているはずであるのに、何も仕掛けて来ないのも解せませぬ」

「何やら企んでおるのでしょうか？」

ツクヨミがイワトの中を見て言った。

「イワトに入りましょう。不意打ちを仕掛けて来る様子はありませぬ」

アキツが馬を降りる。ツクヨミも慌てて馬を降りた。彼女は足早に中に入っていく。

「ツクヨミ殿、先程のお話ですが」
アキツがツクヨミに囁く。

「はい」

今度はツクヨミがドキッとした。

「大叔母様の書物は、イワトの別棟にあります。こちらです」
アキツはツクヨミを先導した。

「他の方々は、広間でお待ちを」

彼女は後続の武彦達にそう言いおくと、ツクヨミと奥に消えた。

「何でしょうね、御剣さん？^{みつるぎ}」

武彦は、アキツとツクヨミが二人で奥に行ったのが気になっていた。

『男の嫉妬は見苦しいぞ、武彦』
アメノムラクモが窘める。^{たしな}

「あ、いや、嫉妬だなんて、そんな……」

武彦は真っ赤になって否定する。

ツクヨミは以前オオヒルメの遺体を清めた弔いの間の前に来ていた。

「こちらです」

荘厳な気を放ち続ける弔いの間を通り過ぎると、そこはまた広々とした場所になった。壁一面に書棚のようなものがあり、たくさんの書物が並べられている。

「ここはワの開闢^{かいびやく}以来の書物が全てあります。どうぞお調べ下さいませ」

アキツはそれだけ言うと、部屋を出て行こうとした。

「お待ち下さい、アキツ様」

ツクヨミが呼び止めた。アキツはビクッとして立ち止まった。

「アキツ様のお気持ち、このツクヨミ、身に余る程です。ですが、私は言霊師です。言霊師は他族との交わりを禁じられています」

アキツは思わず振り返った。それは言い訳でしようと言いたかったのだ。しかし、ツクヨミの顔を見たら、言えなくなってしまった。「何故なのか、ご存知ですか？」

ツクヨミの顔は悲しみに満ちていた。アキツはツクヨミの問いか

けに黙ったまま首を横に振った。

「言霊師は他族との間に子をもうけると、その子は魔となるのです。この世を滅ぼす者となるのです」

「……」

アキツは仰天した。ツクヨミは弱々しく微笑み、

「ですから、私はアキツ様のお気持ちには答えられませぬ。申し訳ございませぬ」

と土下座した。アキツはツクヨミに駆け寄り、

「詫びねばならぬのは私の方です、ツクヨミ様。お手をお上げ下さいませ」

「アキツ様……」

ツクヨミは泣いていた。それを見てアキツも泣いてしまった。

「私は、貴方のお子が生みたいのではありません。貴方と添い遂げたいだけです。それも叶いませぬか？」

アキツの言葉は、ツクヨミにとって衝撃的だった。

「アキツ様」

二人はしっかりと抱き合った。そして相手の本当の気持ちを知り、更に涙した。

六十一の章 イザの真実、ツクヨミの迷い

言霊師ツクヨミと、ワの国の次期女王であるはずのアキツ。二人の心が通い合ったのは、束の間の夢となるのだろうか？

ツクヨミは蠟燭の明かりの下で、ワの国の先人達が遺した書を読んでいた。その傍らにはアキツが座っている。

（ヨモツとは如何なるものなのか？ 随分書を読み進めてみたが、未だにわからぬ……）

彼は、亡き先代の女王オオヒルメが言っていた異界の者の話が書かれているのを確認したかったのだが、数十冊読んでもどこにもその記述はない。書は暦年で綴られており、年代はすでにオオヒルメの一代前のものだ。

「アキツ様」

ツクヨミはアキツを見た。アキツは微笑んで、

「アキツ様はお止め下され、ツクヨミ様。アキツで宜しゅうございます」

「あ、そうでございますか……」

ツクヨミは苦笑いした。

「書を読み進めて参りましたが、異界の者の話がありません。何かご存知ではないですか？」

ツクヨミの問いにアキツは首を傾げて、

「書はここにあるもので全てのはずです。他にあるという話は聞いた事がありません」

「そうですか……」

ツクヨミは溜息を吐いた。

（異界の者の話は、偽りなのであろうか？ しかし……）

その時彼はある事に思い当たった。

（イザの話がない。イザはオオヒルメ様の大伯母だと聞いた。だと

すれば、スセリ様が一代前、サクヤ様が二代前で、その前辺りのはず……)

書に記された系図によると、オオヒルメのすぐ上の姉がスセリで、一番上の姉がサクヤとなっている。その系図にも、イザの名はない。該当すると思われる欄には、名が記されていない。

(もしや、この名もなき王が、イザ?)

彼はもう一度アキツを見た。

「イザの名がありません。イザも女王だったはず……。何故ないのですか?」

しかし、アキツはイザが「我^{われ}はオオヒルメの大伯母」と言うまで、彼女が自分の先祖だと知らなかったのだ。わがろうはずがない。

「わかりませぬ。只、大叔母様の三代前の王の名が書かれておりませぬ故、それがイザではないかと……」

アキツはツクヨミの推測と同じ事を言った。恐らくそれが真実なのであろう。

(王は全て女性であるのか……。時折ご在位が短いものがあるのは、そのせいであろうか?)

「何故イザの名はないのでしょうか? 消されたのであれば、まだわかりますが、初めより書かれた様子がありません。誠に面妖です」

ツクヨミはまた深く溜息を吐く。

(もしや異界の者の話は口伝^{くでん}なのか? ワの王家以外に知られてはならぬ事であったのか?)

オオヒルメは、異界の者を呼ぶ術を「禁呪」と言い、決して使ってはならないとアキツに語っていた。

(何があったのだ、その時?)

ツクヨミは何としてもそれを知りたかった。

『どうしても知りたいか、ツクヨミ』

武彦が神剣アメノムラクモを抜刀したままで現れた。

「御剣様」

ツクヨミは立ち上がって武彦に近づいた。アキツもそれに続いた。

「はい。ご存知なら、お教え下され」

ツクヨミは跪いて頭を下げる。アキツも跪き、

「御剣様、何卒お教え下さい」

『承知した。武彦、我を鞘に納め、ツクヨミに渡せ』

アメノムラクモが命じた。武彦は慌てて、

「あ、はい」

とアメノムラクモを鞘に納め、ツクヨミに差し出した。

「どうぞ」

「はい」

ツクヨミは立ち上がって恭しく受け取った。その途端、ツクヨミにアメノムラクモの情報が流れ込んで来た。

「おおお！」

彼は驚愕していた。そして涙を流した。それを見て、アキツと武彦は顔を見合わせた。

『どうだ、わかったか？』

アメノムラクモが語りかける。ツクヨミは涙を拭い、

「はい、御剣様。そのような事があったとは……。何としても、諍いを収めねばなりません」

『そうであるな』

ツクヨミはアメノムラクモを武彦に返した。

「御剣さん、ツクヨミさんに何を教えたんですか？」

武彦が小声で尋ねる。しかし、アメノムラクモは、

『子供には知らぬ方が良い事よ』

「ええ！？」

武彦は思わず赤面した。するとアメノムラクモは、
『戯け！ そのような邪な事を考えるでない！』

「え、あ、はい！」

武彦は自分の思考の全てをアメノムラクモに覗かれている事を思い出し、更に赤面した。

「ツクヨミ様」

アキツがまだボンヤリしているツクヨミに声をかける。ツクヨミはハッとしてアキツを見て、

「はい」

「御剣様は何をお教え下さったのですか？」

アキツは探るような目でツクヨミを見上げている。ツクヨミは決まりが悪そうに彼女を見て、

「今はお答えできません。全て終わりし後、申し上げまする」

「そ、そうですか……」

アキツの悲しそうな顔を見て、ツクヨミは心が痛んだが、

（御剣様よりお教えいただいた事、まだお二人に話す事はできぬ。

あまりにも、悲しき事である故……）

と思い、何とか堪えた。

一方、ウズメとクシナダとイスズは、様子を見に行った武彦も戻って来ないので、気を揉んでいた。

「如何されたのでしょうか？」

とりわけイスズは不安だ。武彦がアキツに心を寄せているのに気づいているからである。しかも、武彦の世界にいる武彦と親しい女性、アキツと瓜二つだとも聞いているから尚更であった。

「もしや、イザがあちらに現れたのでは……」

クシナダが立ち上がる。ウズメもギクツとした。

「参りましょう、ウズメ殿」

クシナダはすでに戦闘態勢に入っていた。ウズメは八百万の神を召喚し、付近を探らせ、

「クシナダ殿、イザはおりませぬ。心配なさいますな」

「そうでございますか」

クシナダは自分の早合点に赤面し、腰を下ろした。

（たけひこ様……）

イスズの心配は尽きない。

そして、闇の国ヨモツ。イザは、アメノムラクモがツクヨミに語った事を全て把握していた。

「神剣め、愚かな事を……。ツクヨミに迷いが見える。この戦、^{いくさ}我の勝ちよ」

イザは漆黒の目をカッと見開き、高笑いした。その声は、ヨモツ中に鳴り響いた。

六十二の章 イスズの畏怖、イザの憤怒

アマノイワトの別棟から、アキツ、武彦、ツクヨミが戻って来た。「たけひこ様！」

イスズが嬉しそうに駆け寄って来たので、武彦は思わず後退りした。

「え？」

イスズは武彦の行動に驚き、悲しそうな顔になった。

「ああ、ごめんなさい、イスズさん！ ああ、気を悪くしないで下さい」

武彦は慌てていた。

（まずいよなあ。イスズさんと姉ちゃんを間違えるなんて、混乱してるな……）

武彦はイスズに近づき、肩に手をかけた。

「ごめんなさい。ボンヤリしてたので、イスズさんが姉に見えてしまっ……」

「はい？」

イスズには意味がわからない。武彦は苦笑いをして、

「僕の姉は、凄く怖いんです」

「そうでございましたか」

イスズはニコツとした。彼女は、以前武彦がヤマトの国の元軍師オモイの術で追い詰められていた時の事を思い出した。

（それで、あのようにお逃げになっていたのですね）

イスズがクスクス笑っているのを見て、

「どうしたんですか、イスズさん？」

と武彦が尋ねる。イスズは口を袖で隠して、

「いえ、お気になさいますな、たけひこ様」

「はあ」

イスズは嬉しそうな顔をして、また女性陣の輪に戻る。

「何かおわかりになりましたか？」

ウズメがアキツに尋ねた。アキツはチラッとツクヨミを見てから、
「イザの名が書にありませんでした。それが気になります」

ウズメはイスズやクシナダと顔を見合わせる。アキツの言った事がよくわからないのだ。

「イザが亡きオオヒルメ様の大伯母であるのが真まことであれば、イザもワの女王であつたはず。しかし、イザの名すら書には書かれておらず、名もなき王がお一人いらっしゃいました」

ツクヨミが答えた。ウズメがツクヨミを見て、

「では、その名もなき王が、イザでありましょうか？」

「それはわかりませぬ」

ツクヨミは首を横に振って言った。

「ですが、オオヒルメ様の三代前であるので、恐らくそれがイザかと」

ウズメ達はまた顔を見合わせる。

「書の全てを読みました、イザの事も、異界の事も、ヨモツの事もわかりませぬ」

ツクヨミは続けた。クシナダが、

「イザの名がないのは、ヨモツの女王となったためではありませぬか？」

と言うと、アキツが、

「イザの名は、初めから記されておりませぬ。ワの王家の書は、年毎に書き綴られしものであるから、イザの名が全く記されていないのは腑に落ちぬのです」

「そうでありますか」

クシナダはウズメを見た。ウズメが、

「もしやイザの書のみ、捨てられたとか？」

アキツはハツとしてツクヨミを見た。ツクヨミは、

「そうかも知れませぬ。王の系図は後の世に書かれしもの。ですから、系図に名を記さなかったのやも知れませぬ」

ツクヨミはそこまで話してあつとなつた。

「如何いかになさいましたか？」

その様子に気づいたアキツが尋ねた。ツクヨミは一同を見て、
「書に記されていない事が、全てイザの時の事だとすれば？」

アキツはギョツとした。ウズメとクシナダも思い当たつたらしい。
イスズはその力故ちからゆえ、すぐに気づいたようだ。

「異界の方の話も、ヨモツが蠢うごめきし話も、王が命を賭してヒラサカ
を封じた話も、全て同じ時だと……」

ツクヨミは、その仮説が神剣アメノムラクモから聞かされた話と
も合致するので、恐らく真実であろうと感じた。

「では、ヨモツを封じ、命を落としたという王が、イザ？」

クシナダが目を見開いて呟く。ウズメも驚いていた。イスズは息
を呑んで黙つたままだ。

「だとすれば、何故なにゆえ、後の王家の方々は、イザの事を隠そうとされ
たのでしょうか？」

ウズメが独り言のように疑問を投げかける。

『その先は我が話そう』

アメノムラクモが言った。武彦はハツとしてアメノムラクモを鞘
から抜いた。アメノムラクモは輝きを増して、

『ツクヨミの考えは当たつておる。イザは女王であつた』

ツクヨミは驚いてアメノムラクモを見た。

「御剣様みつるぎ、そのお話は……」

『もう良からう。もはや隠す意味もない』

アメノムラクモの言葉に、アキツが驚く。ツクヨミはアキツを見
て、

「申し訳ありません。お許し下さい」

を跪き、頭を下げた。アキツは微笑んで、

「いえ。お気遣い頂き、痛み入りまする」

「アキツ様」

ツクヨミは顔を上げてアキツを見た。

『イザの世に、ある者が異界と通じ、異界人（いかいびと）を呼び寄せてしまった』
アキツはギョツとした。ウズメとクシナダも息をひそめている。

イスズは武彦に近づき、袖を掴んだ。彼女は怖くなったのだ。

『異界と通じる術は、古より禁呪（いにしえ）とされておる。そのため、闇が蠢き、ヨモツがオオヤシマに現れてしまった』

アメノムラクモの話は、今の話と通じる。武彦にもイスズの恐れがわかった。

（今のこの国の混乱は、僕のせい？）

ツクヨミが武彦とイスズの様子に気づき、

「ご案内しますな、たけひこ様、イスズ様。イザの時（とき）と此度（こたび）では、違います」

「そ、そうなんですか？」

武彦は少しだけホツとしたが、イスズはまだ武彦の袖をギュツと握ったままだ。

『これより先は、ツクヨミにも全て話してはおらぬ。まさに此度の戦（いくさ）の大元（おおもと）よ』

アメノムラクモの言葉が、場に緊張感をもたらす。

『イザは己（おのれ）の命を投げ出し、ヨモツとの境（さかい）であるヒラサカを封じた。そのおかげでヨモツはオオヤシマから消え、安寧が訪れた』

それなら何も問題はないけど、と武彦は思った。アメノムラクモは続けた。

『だが、あろう事か、遺されたワの王家の者達は、イザがヨモツを呼び出したと言いだめた』

武彦はビククリしてツクヨミを見た。しかし、ツクヨミもそれは聞かされていなかったらしく、驚いていた。

『ワの王家は、すぐに次の王を立て、イザの事を記していた書を全て焼き捨ててしまった。そして、イザはワの王家から消されたのだ』

「どうしてそんな事に!？」

武彦が大声で叫んだ。皆、武彦の声に驚き、彼を見た。

『ワの王家は二つに分かれて争っておった。イザの血筋の者達は、

そうでない者達に追い落とされ、王位継承から外された。それ故、異界人を呼び寄せた者の罪は咎められる事もなく、そのままにされた」

アメノムラクモのあまりに凄絶な話にウズメやクシナダは泣いていた。イスズも震えている。

「その咎められずにすんだ人こそ、イザと対立していた者なのですね？」

アキツが涙を堪えながら言った。

『その通りだ、アキツ』

アキツはアメノムラクモを見て、

「では何故、イザがその咎を負わされたのでございますか？」

『イザは、異界人に惹かれてしまったのだ』

アメノムラクモの言葉は衝撃的だった。その時だった。

「アメノムラクモ、それより先は話す事を許さぬ！」

突然、イザの声が聞こえた。

「何と！？」

ツクヨミがイワトの奥に目を向けると、そこにイザがいた。

「は！」

一同は驚愕し、イザを見た。彼女はその只黒い目を怒りで吊り上げ、口からは妖気を吐き出している。

「皆、滅する！ 覚悟せよ！」

いきなり現れた最強の敵に、武彦は動転していた。

六十三の章 イザの切り札、武彦の混乱

闇の国ヨモツの女王イザがいきなりイワトに現れ、武彦達は混乱していた。

「そのような事……。ヒラサカの封がこうもあつさりと……」

アキツは顔色を変えて驚いていた。

「アキツ様！」

ウズメとクシナダが彼女を庇うように前に出る。ツクヨミはイザに近づき、

「それほどに聞かれたくない事なのか？」

イザはその怒りに燃えた目をツクヨミに向けると、

「うぬらは滅すると申したはず！」

と叫び、いきなり漆黒の剣を両手に出すと、一足飛びにツクヨミに斬りつける。

「く！」

ツクヨミは素早くこれをかわしたが、イザは更にツクヨミに仕掛けると見せかけて方向転換をし、ウズメとクシナダに迫った。

「うぬらからだ！」

イザは剣を振り上げ、ウズメとクシナダを同時に袈裟斬りにした。

「きゃああ！」

ウズメとクシナダは辛うじて深手は避けられたが、漆黒の剣で斬られたところが黒く膿み始めた。

「ぐうう……」

ウズメは右肩、クシナダは左肩を斬られており、そこから黒い膿が溢れ出て来る。

「数刻でうぬらは我の僕よ^{しもべ}」

イザが狡猾な笑みを浮かべてウズメとクシナダを見た。

「……」

ウズメとクシナダの顔色が悪い。アキツはそれを見て取り、

「祓いたまえ、清めたまえ！」

と柏手を四回打った。しかし、ウズメとクシナダの身体に変化はない。

「無駄よ。うぬ如きの力で清められるほど、その膿は脆くはない」
イザが嘲笑する。

『武彦』

神剣アメノムラクモが武彦に囁く。

「はい、御剣さん^{みつるぎ}」

『お前とイスズの癒しの力で、ウズメとクシナダの傷を治すのだ』
「わかりました」

武彦はイスズと目配せし合い、ウズメ達に近づこうとした。

「そうはさせぬ！」

イザが黒い剣を振るい、武彦へと飛ぶ。

『武彦、我を使え！』

「はい！」

武彦はアメノムラクモを構えた。

「そのような剣で我を討てると思うたか！？」

イザの踏み込みは早く、武彦は慌てて後ろへ飛んだ。

「たけひこ様！」

アキツとイスズ、そしてツクヨミが叫んだ。

「イスズさんは、ウズメさんとクシナダさんを！」

武彦は下がりながら叫ぶ。イスズはそれに頷き、ウズメとクシナダに近づいた。

「おのれ！」

イザが右手の剣をイスズに投げつけた。

「ああ！」

武彦はそれを見て慌てた。

「ぬう！」

しかし、ツクヨミが言霊で剣を出し、イザの剣を叩き落とした。
「祓いたまえ、清めたまえ！」

ツクヨミの言霊が剣を粉微塵に砕いた。

「おのれ！」

イザが武彦を睨み、

「全ては、うぬを屠^{ほふ}らば終わる！ 我はオオヤシマを統べるのだ！」
と剣を両手で持ち、上段に構えた。

「アキツ様、私が膿を抑えますので、お清めを」

イスズがウズメとクシナダに手をかざして言った。

「わかりました」

アキツは頷き、イスズの癒しを待つ。

「は！」

イスズの身体が輝き出し、膨れ上がっていたウズメとクシナダの膿の増殖を停止させた。

「今でございます、アキツ様！」

イスズが叫ぶ。

「祓いたまえ、清めたまえ！」

アキツの柏手がイワトの中を揺らすほどに響き、ウズメとクシナダの膿がシューシューと音を立てて消えて行った。

「ありがとうございます、アキツ様、イスズ様」

ウズメとクシナダは跪いて頭を下げた。

「気にしなくて良い、ウズメ、クシナダ。今はそれよりイザです」

イスズはそう言うのと武彦をイワトの端に追い詰めているイザを睨んだ。

「たけひこ様！」

援護に向かったツクヨミをイザはもう一振り出した漆黒の剣で迎撃した。

「何と！」

イザは武彦を追い詰めながら、ツクヨミの剣も確実に受け止めている。

「何という強さ……」

アキツは呆然とした。ウズメとクシナダも言葉が出ない。

「オオヤシマーと言われたイワレヒコ様を押しながら、そのイワレヒコ様すら寄せ付けなかったツクヨミを相手にして一步も退かぬとは……」

イスズは驚愕していた。

「ぬん！」

イザはツクヨミを剣で弾き飛ばし、武彦に向き直った。

「異界の者よ、聞くがよい。その昔このオオヤシマは異界人いかいびとが呼び込まれた事により、乱れた。その時、世の乱れを収め、オオヤシマを救ったのは、この我よ！」

「……」

武彦はイザに力でも心でも圧倒されそうだった。

「ところが、悪しき心を持った者共が我を陥れ、我はヨモツに落とされた。その怨み、うぬにわかるか!？」

『武彦、イザの言葉に惑わされるでない! 心を落ち着かせよ!』
アメノムラクモが武彦を叱咤激励するが、武彦はイザの言葉に吞まれ始めていた。

「たけひこ様！」

ツクヨミが走る。

「たけひこ様！」

アキツとイスズも駆け出した。ウズメとクシナダも目配せし、立ち上がり、走り出す。

「その悪しき心を持った者共の末裔がオオヒルメ、そしてアキツよ! さあ、異界人よ、我と彼奴らあやつのいずれが間違っておるのか、申してみよ!」

イザは剣で武彦を押しながら叫ぶ。武彦は混乱していた。

『武彦、イザに耳を貸すでない! 心を強く持つのだ!』

アメノムラクモの声は、武彦に届いていなかった。

(どっちが悪いの? どっちが間違っているの?)

武彦の頭は嵐のように乱れていた。

「邪魔するでない!」

イザは剣を幾本も出し、宙を舞わせた。

「何!？」

ツクヨミ達は仰天した。漆黒の剣は、まるで剣士の手にあるが如き動きで、ツクヨミ達に襲い掛かる。

「くっ!」

ツクヨミは言霊の剣でそれを受けた。イスズは癒しの力で剣を溶かす。ウズメとクシナダは水の剣を出し、対抗していた。

「祓いたまえ、清めたまえ!」

アキツは最後尾から強力な拍手を放つ。剣はそれによって全て消えた。

「たけひこ様!」

ツクヨミを先頭に、五人が同時に叫んだ。

しかし、武彦には彼女らの声は届かなかった。

『武彦!』

アメノムラクモは武彦の手から滑り落ちた。武彦が放してしまっただ。

「そうか。うぬは我が正しいと……。そうか」

イザはニヤリとして武彦を抱きしめた。

「たけひこ様ーッ!」

イスズは涙を流して絶叫した。

「……」

ツクヨミは啞然とした。武彦、すなわちイワレヒコの身体が、イザに吸い込まれて行くのだ。

「そんな……」

アキツはガックリと膝を着いてしまった。イワレヒコの巨体が、それより小柄なイザに完全に溶け込んでしまった。ウズメとクシナダは倒れそうになったアキツを支えた。

「さて、どうするか、アキツ? 異界人は我の味方ぞ?」

イザが鋭い目でアキツを見た。

六十四の章 イスズの秘技、クシナダとウズメの秘策

ヨモツの女王イザの突然の襲撃により、イワレヒコの身体を借りていた磐神武彦はイザの言葉に惑わされ、彼女に取り込まれてしまった。

「……」

アキツもツクヨミもなす術なく立ち尽くす。それはイスズ、ウズメ、クシナダも同様である。

「うぬらが頼りにしておった異界人は我の味方となりぬ。まだ抗うか、悪しき者共の末裔よ？」

イザが只黒き目でツクヨミ達を睨む。アキツはイザの言葉に憤っていた。

（悪しき者の末裔とは、聞き捨てならぬ……）

しかし、神剣アメノムラクモの話によれば、イザを陥れ、王位を奪ったのは紛れもなく自分の先祖なのだ。

「例え悪しき者の末裔だとしても、貴女のなさっている事は間違っておりません。私は抗います。最後の一人になろうとも！」

アキツはイザを睨み返して叫んだ。イザはその言葉を聞いてニヤリとし、

「さてもおかしき事をのたまうものよ。アキツ、うぬらのみで、この我に抗えると思うておるのか？」

「思うております！ ツクヨミ様！」

アキツはツクヨミに目配せし、走った。ツクヨミが慌てて彼女を追う。

「アキツ様！」

イスズとウズメ、クシナダは啞然としていたが、援護のために動き出した。

（御剣様を手になければ、まだ……）

アキツはツクヨミと祓いの連携攻撃を仕掛け、イザをアメノムラ

クモから遠ざけるつもりだった。

「祓いたまえ、清めたまえ！」

アキツとツクヨミが同時に祓いの祝詞を放つ。それがまるで渦を巻いてうねるような動きをして、イザに迫った。

「愚かな！」

イザは飛び退いてその攻撃をかわした。その隙を突いて、アキツがアメノムラクモを手を取った。

「よし！」

ツクヨミがニコツとした。

「御剣様」

アキツが呼びかけるが、アメノムラクモは応じない。

「これは……？」

アキツは蒼ざめた顔でツクヨミを見た。ツクヨミは首を横に振る。彼にもわからないのだ。

「愚か者が。アメノムラクモはあの異界人と共に我の内よ。そこにあるは、只の古びた剣よ」

イザは高笑いをした。するとツクヨミが、

「ならば新たな命を吹き込みましょうぞ」

と何かを唱え始めた。イザが眉をひそめる。

「何をするつもりぞ、言霊師よ」

イザはアキツすら恐れてはいないが、ツクヨミの底知れぬ力は警戒していた。

「アキツ様、御剣様をお渡し下さい」

「はい」

アキツは嬉しそうにツクヨミに駆け寄る。

「どうぞ」

ツクヨミはアキツから抜け殻の剣を受け取り、それに息を吹きかけた。

「言霊師一族の力を結集して、貴女に挑みます、女王イザ！」
ツクヨミが輝き出した剣を構える。

「うぬは生かしておこうと思うたが、もはやアキツと通じ合うてお
るようじゃな。ならば、死ぬるがいい！」

イザの顔が兇悪になる。彼女の両手に漆黒の剣が現れる。

「ウズメ、クシナダ、ツクヨミを助けます！」

イスズが動いた。するとイザは、

「うぬらとじゃれ合うつもりはない！」

と叫び、再び宙を舞う剣を繰り出す。

「またしても！」

ウズメが齒軋りする。するとイスズが、

「剣は私に任せ、二人はツクヨミを！」

「はい」

ウズメとクシナダは顔を見合わせたが、すぐにツクヨミの方へと
走った。

「はーっ！」

イスズは身体全体から癒しの力を放出し、飛び交う剣を全て溶か
してしまった。

「ぬ？」

イザはイスズの力を見てギョツとした。

（ヤマトの小娘め、やはりあの者、異界人と……？）

イスズは誰にも言っていないのだが、寝ている武彦の口から武彦
の気を吸ったのだ。武彦すら知らない事である。要するに武彦に「
キス」をしてしまったという事だ。身体はイワレヒコであるから、
正確には武彦とキスした訳ではないのだが。

（たけひこ様は私が必ずお救いします！ 異界の姉様^{あね}、ご安心を！）

イスズは、武彦の姉の美鈴と会ってみたいと思った。

「イスズ様……」

ウズメとクシナダもイスズの力に驚愕していた。

「お覚悟！」

ツクヨミが一気に踏み込み、イザに斬りつけた。

「く！」

イザはその斬撃を跳ね除け、逆にツクヨミに斬りかかる。

「ぬう！」

二つの剣がかち合い、火花が散る。

「さても恐ろしき男よ、ツクヨミ。あの刹那に^{せつな}それほどの剣を生み出すとはな。やはり、命を奪うは惜しい。我に服せ。さすれば……」

「お断り致します。私の仕えしお方はアキツ様です。貴女ではありませぬ！」

ツクヨミは後ろに飛んだ。イザはキツとツクヨミを睨み、

「そうか。ならば致し方なし」

アキツはツクヨミの言葉に涙を流していた。

「ツクヨミ様」

ウズメがクシナダに囁く。

「アキツ様が、ツクヨミ殿の事を『ツクヨミ様』とおっしゃっていますね」

「ええ。よろしいのではないですか？」

クシナダは嬉しそうだ。ウズメもクスツと笑って、

「オオヤシマに新しき世が訪れる前触れでしょうか？」

二人には打ち合わせていた事がある。クシナダの操る水を、ウズメが召喚した海神の^{わたつみ}聖なる力で加護し、イザを攻撃するというものだ。

「クシナダ殿！」

「ウズメ殿！」

二人は息を合わせて動く。イザはその動きを気にも留めない。ウズメとクシナダは数に入っていないのだ。

「ぬおお！」

ツクヨミとイザの戦いは続く。イザの剣撃はツクヨミを押し始めていた。ツクヨミは剣に自分の力を注ぎ込んだため、余力がない。

戦いが長引けば、彼は確実にイザの剣に斬られてしまう。

「ツクヨミ様！」

アキツは何もできない自分が恨めしかった。祓いも通じないイザ

は、アキツにとっては脅威である。

「はい！」

その時、ウズメが海神を召喚し、クシナダが放つ水の刃にその力を与えていた。

「行け！」

クシナダは切れ味の増した水の刃をイザに放った。

「おのれ！」

イザはその刃の力を感じ、剣で弾いた。すると剣の刃がこぼれた。

「ツクヨミ殿！」

ウズメとクシナダが声を合わせて叫ぶ。

「はい！」

ツクヨミは怯んだイザの隙を突き、彼女に左袈裟斬りを浴びせた。

「ぐおおっ！」

イザの斬られた左肩から黒い妖気が噴き出した。それは辺りの岩を黒く染めて行く。

「くっ！」

彼女はバツと飛び退き、ツクヨミと間合いを取った。そしてウズメとクシナダを睨む。

「小者風情が……」

彼女にしてみれば、ウズメやクシナダに傷を負わされたと感じるのはこの上もない屈辱であろう。

「やりましたね、ウズメ殿」

クシナダが嬉しそうにウズメを見る。

「はい」

ウズメも微笑み返した。イスズが二人に近づき、

「見事です、ウズメ、クシナダ」

と褒め称えた。

「おのれ……」

イザの標的が、ツクヨミからウズメとクシナダに変わった。

六十五の章 ツクヨミの恐れ、イザの心の内

ヨモツの女王イザは怒りの形相でウズメとクシナダを見た。

「うぬら如き小者にしてやられるとは口惜しい」

ウズメとクシナダも小者呼ばわりされた事に腹を立てた。

「ならばその小者の力、もう一度お見せしましょうぞ、女王陛下！」

クシナダが叫ぶ。ウズメが海神わたつみを召喚し、クシナダが水を操る。

「同じ手を通ずるものか」

イザはニヤリとした。そのイザの悪意を感じたツクヨミが、

「クシナダ様、お待ちを！」

と攻撃を止めた。クシナダは仰天して、

「何故です、ツクヨミ殿？」

ウズメも合点がいかない顔でツクヨミを見ている。

「足元を！」

ツクヨミの声に二人は地面を見た。するといつの間にか無数の黒い影うごめが蠢うごめいているのが見えた。

「言霊師め、余計な事を」

イザがツクヨミを睨みつける。

「おのれ！」

クシナダは水の刃でその影を切り裂いた。影はシューシューと音を立てて消滅した。

「……」

しかしツクヨミにはもつと気にかかることがある。

（イザは何故肩の傷を治さぬ？）

イザの左肩からは黒い妖気が噴き出したままだ。何故かイザはそれを放置し、止めようとしなない。不気味に思ったツクヨミは、イザと間合いを取った。

「ツクヨミ様」

アキツが駆け寄る。

「イザは何かを企んでおります。お気をつけ下され」
ツクヨミはイザを睨み据えたままでアキツに囁く。

「はい。なにやら、面妖な……」

アキツにもイザの妙な余裕を感じられたようだ。

（まだ何かあるというのか？ 何をするつもりなのだ、元女王？）

ツクヨミの額に汗が伝わる。

「如何したか、言霊師よ？ 我を恐るるか？」

イザが挑発する。ツクヨミは、

「やはりイザは何やら企んでおります」

「はい」

アキツがツクヨミの肩にすがる。

「ウズメ殿、もう一度！」

クシナダがウズメを見た。するとイスズが、

「ならぬ、クシナダ。イザはまだ何やら策を弄している様子」

「え？」

クシナダとウズメはギクツとしてイスズを見た。イスズは射るような目でイザを見ている。

（イワレヒコ様とたけひこ様は、何としてもお助けする。私の命に代えても！）

イスズの身体から癒しの力が湧き出て来る。それはまるで蜻蛉のように彼女の周囲を漂う。

「ぬ？」

イザはツクヨミから目を離し、イスズを見た。

「何をするつもりか、ヤマトの小娘よ？ うぬの力なぞ、我には通じぬぞ」

「そうでしょうか？」

イスズは不敵に笑い、その癒しの力を集約し始めた。それはやがて鞠のようになった。

「私は自分の力で他の者を癒し、治して来ました。そして只の一度も他の者を傷つけた事はありません」

イスズはイザを睨んだまま言う。

「ですが、愛しき人を助けるためならば、何も躊躇^{ためら}う事はありませんぬ」

イスズの手の中で集約された癒しの力がまるで小さな嵐のように渦巻いている。

「イスズ様」

ツクヨミはイスズの思いを感じ、驚愕していた。

（あの方がこれほどお怒りになるとは……。そして、それほどまでにたけひこ様をお救いしようという思いが強いとは……）

「うぬの力がどれ程のものか、試してみよ」

イザは尚も挑発した。

「言われるまでもありませんぬ！」

イスズはそう叫ぶとその鞠状の力を放った。それは宙を滑空し、イザに迫った。

（何を企むのだ！？）

ツクヨミはその挑発すらイザの策略に思えた。

「うおおお！」

イスズの力がイザに当たる。凄まじい勢いでイザの身体から妖気が噴き出す。

「アキツ様！」

妖気の噴き出し方が尋常ではなく、驚いたツクヨミはアキツを庇ってイザから更に離れた。

「イスズ様！」

クシナダとウズメも危険を感じ、イスズを伴ってアマノイワトを飛び出す。

「如何なる事なのか？」

イスズ自身でさえ、イザの様子に仰天していた。

「ふおおお！」

イザはまた叫び声を上げる。

「……」

様子を見に戻ったツクヨミが見たのは、妖気を放出し、枯れ枝のように細くなってしまったイザだった。

「何と！」

彼はあまりに意外な情景に動けなくなった。

「言霊師、礼を言うぞ……」

イザはツクヨミを見てニヤリとすると、そのまま倒れこんだ。それと同時に、イザからイワレヒコの身体が分離し、その隣に倒れた。

「たけひこ様！」

ツクヨミは警戒心も忘れて駆け寄った。その様子に気づいたアキツ達もイワトの中に戻った。

「たけひこ様！」

アキツよりも早く、イスズが駆け寄る。

「たけひこ様！」

気を失って動かないイワレヒコの身体をイスズが癒しの力で包む。

「う……」

武彦の意識が回復した。

「あ、ツクヨミさん、イスズさん」

「たけひこ様！」

イスズが起き上がった武彦に抱きつく。

「ご無事で何よりです……」

イスズは泣いていた。それを見てアキツもクシナダもウズメも涙した。

「ご心配おかけしました」

武彦は立ち上がった。何より、イスズの抱擁から離れたかったのだ。

（また姉ちゃんと顔合わせ辛くなった）

彼がそう思った時だった。

「ツクヨミ様！」

アキツが絶叫した。

「！」

ツクヨミもハツとした。枯れ枝のようになって倒れたイザの身体が、輝き始めたのだ。

「お離れ下さい！」

ツクヨミはイスズと武彦を庇いながら、イザから離れた。

「さてもありがたい事よ。我の願い、ようやく叶えり」

イザの声がした。

「何？」

ツクヨミはイザが立ち上がるのを見た。

「我の思いがこうまで叶うとは、恐ろしき事よな」

ツクヨミ達は啞然とした。イザは妖気を漂わせてはいない。それどころか、神々しいまでの光を身に纏まとっているのだ。

「……」

ウズメとクシナダが、アキツとイスズが顔を見合わせる。武彦は啞然としたままだ。

「我こそは、オオヤシマーの術者、イサなり」

その顔は美しかった。目は瞳が戻り、服も白く輝いている。只、長い黒髪はそのままだ。

「アキツさんに似ている……」

武彦が呟いた。その言葉にアキツがビクツとした。

「イサ……。それが貴女の本当のお名なのですね？」

ツクヨミが尋ねる。イサはフツと笑ってツクヨミを見た。

「如何にも。我の名はイサ。オオヤシマを統べる者なり」

イサからは、あの不気味さが失せ、今は本当に女王の威厳と美しさを放っていた。

「これは一体……」

ツクヨミは何が起こっているのか懸命に考えたが、わからなかった。

六十六の章 イサの怒り、アメノムラクモの決意

オオヤシマが更に混乱しようとしていた。

ヨモツの女王イザはその妖気を放出し、一度は倒れたのであるが、何故か光を身に纏い、甦ったのだ。しかも「我はオオヤシマ一の術者イサ」と名乗った。

「お下がり下され」

ツクヨミは皆に叫ぶ。彼は武彦とイスズを庇いながらイサから更に離れた。アキツもクシナダとウズメに守られながら、アマノイワトから出た。

「はああ！」

イサの身体から出る光がその強さを増し、アマノイワトを照らす。彼女はゆっくりと歩き出した。

「長き年月、我は穢れの中に落とされ、光を奪われた。今こそその怨み、全て晴らそうぞ」

イサは目を吊り上げ、イワトの外へと繰り出す。

「あの光は……？」

アキツはイサの放つ光に懐かしさを感じていた。

「まさか？」

ツクヨミもそれに気づいている。その時、彼の手にあった神剣アメノムラクモが武彦の手に戻った。

『あれは歴代女王の力よ。皆、退くのだ！』

アメノムラクモが叫ぶ。

「え？」

武彦はキョトンとしてしまった。

「たけひこ様！」

ボンヤリしている武彦をイスズが引き、イワトから遠ざかる。

「如何なる事ですか、御劍様？」

ツクヨミが尋ねた。するとアメノムラクモは、
『彼奴をよう見よ』

ツクヨミは言われるがままにイサを凝視した。

「うぬら悪しき者共の力、全て我の物になれり」

イサがニヤリとする。彼女の髪が風を受けたように舞う。イサは
ゆっくりと背を向けた。

「何と！」

すると先代女王オオヒルメと先々代女王スセリ、更にその前の女王であるサクヤの顔がイサの後頭部にあった。皆目と口を封じの糸で縛られている。

「我の力がどれ程のものか、これでわかるう？」

イサは正面を向き、ツクヨミを睨んだ。

「く……」

ツクヨミには返す言葉が思いつかない。

（イザの力だけであれほど苦しみ戦^{いくさ}であったというのに……）

もはや勝てる可能性は消えたと彼は思った。

「何という事を！」

アキツは激怒していた。スセリとサクヤは天に帰ったのだ。それなのに身体の一部がイサに取り込まれている。アキツにとって、イサのなした事は許しがたい事だった。そして何より、敬愛していたオオヒルメの首までも封じ、自分の力にしているのが我慢ならない。

「貴女は！」

アキツが怒鳴った。しかしイサは彼女を嘲笑うように見て、

「悔しいかえ？」

と言ってから、

「我はうぬらより遙かに悔しかった！ このオオヤシマを救うために命を懸けてヒラサカを封じたというに、闇に落とされたのだ！」

イサのその言葉は、アキツを沈黙させるに十分だった。

（私のご先祖様は、やはり悪しき者であるのか？）

彼女は身じろいだ。

「どれ程辛かったか、うぬらにわかるか？ いや、決してわかりはせぬ。私の怒り、私の怨み、誰にもわからぬ！」

イサの身体が更に輝きを増す。

「滅びよ、オオヤシマ！」

彼女が叫ぶと、いくつもの光の玉が身体から放たれ、ツクヨミ達を襲う。そればかりでなく、光の玉はオオヤシマ中に飛んだ。

「くっ！」

ツクヨミや武彦達はそれをかわしたり叩き落したりした。

「城が！」

ウズメが空の彼方に飛んで行く光の玉を見て叫ぶ。

「お館様！」
やかたさま

クシナダも叫ぶ。

その頃、ヤマトの城の門前で待機していたタジカラとスサノは、イワトの方角から光の玉が飛んで来るのに気づいた。

「何物だ、あれは？」

タジカラが剣を抜く。スサノも炎の剣を抜き、

「面妖な！ イザの仕業か！？」

そこへ伝令兵が駆けつけた。

「申し上げます！ ヤマト、ヒノモト区別なく、光の玉が降り注いでおります！」

「何！？」

タジカラとスサノは馬に飛び乗ると、接近して来る光の玉に向かった。

オオヤシマはあちこちで地獄絵図となっていた。イサの放った光の玉が島中に降り、街や村を破壊した。その光に触れると人は溶け、家は燃えてしまった。

アキツは悲しそうな顔でイサを見る。イサはニヤリとし、

「憤懣やる方なしか、アキツ？」

アキツはゆっくりと跪き、更に頭を下げる。ツクヨミも武彦も、そしてウズメとクシナダも驚いた。

「どうか、お怒りをお鎮め下さい。お願い致します」

アキツは泣いていた。

「アキツさん……」

武彦がその涙に思わずもらい泣きしそうになる。

「うぬが頭を下げる程度で冷める程、我の怒りと怨みは浅くはない」
イサはアキツを睨む。するとアキツは、

「この命と引き換えにお鎮まり下さい。どうかお願い致します」
と地面に頭を擦り付けた。ツクヨミが驚愕した。

「アキツ様、そのような事……」

なりませぬ、と言いたいツクヨミだったが、ではどうすればよいのだ、と別の自分が言う。

「そうか、うぬの命と引き換えか……」

イサは楽しそうに笑う。アキツは希望があるかと顔を上げた。

「ならぬ。我の怒りは、このオオヤシマが滅びるまで冷めぬ！」

イサはまた怒りの形相になり、叫んだ。

「はああ！」

彼女は更に光の玉を放つ。

「アキツ様！」

ツクヨミが言霊で剣を作り、アキツを守る。こゝろだま

「どうすればいいんですか、御剣さん？」

武彦は考えあぐね、アメノムラクモに尋ねた。

『よもやイサがあれ程までの力を蓄えておろうとは、我にも見抜け
なんだ』

いつも強気な発言が多いアメノムラクモとは思えぬ後ろ向きな言葉に、武彦はショックを受けた。

一方光の玉の襲撃をなんとか凌いだタジカラとスサノは、第二弾が迫っているのを知った。

「おのれ、イザめ！ オオヤシマを滅ぼすつもりか！？」

タジカラが叫んだ。スサノは、

「そのような事、させぬ！」

と炎を最大にし、向かって来る光の玉に突進する。

ヤマトの城内では、イツセが戦支度をしていた。

「イツセ、無理です。其方そなたの傷は……」

母タマヨリが止めようとするが、イツセは、

「ここでこうしていても、只死ぬるを待つのみであれば、戦に向くのが嫡男の務めにございます、母上」

と笑顔で言うと、城を出た。

「イツセ……」

タマヨリは古の神々いにしえに祈った。

『武彦』

不意にアメノムラクモが言った。

「何ですか、御剣さん？」

武彦はイサの光の玉を叩き落としながら尋ねる。

『我は今より我の力全てを解き放つ。お前は我を振るい、イサを倒すのだ』

「え？」

アメノムラクモの言い方に不安を感じた武彦は、

「どういう意味ですか？」

『何も訊くな！ 只我を振るえば良いのだ！』

反問は許さぬ。アメノムラクモの覚悟を感じた武彦は、

「わかりました」

とだけ答えた。

六十七の章 武彦の戦い、イサの戸惑い

「ぬ？」

イサは光の玉の攻撃をやめ、武彦を睨んだ。いや、神剣アメノムラクモを睨んだという方が正確であろう。

「何をするつもりぞ、アメノムラクモ？」

イサの問いかけにアメノムラクモは、

『知れた事。うぬを滅ぼし、我も消ゆる』

その言葉に武彦はギョツとした。

「戯れ言を。うぬが我を滅ぼすと？ たかが剣の分際で、そのような事をよくも申したものだ」

イサはアメノムラクモを嘲笑った。

『強がり申すな、イサ。我の真の力、知らぬ訳ではあるまい？』

アメノムラクモが言い返す。イサは笑いながら、

「知っておる。確かにうぬの力は侮り難し。じゃが、それは昔の話。今の我にはうぬの力なぞ恐るるものではない」

アメノムラクモはそれには答えず、

『武彦。イサを仕留める。あの者を哀れなどとは思ふな。このオオヤシマを滅ぼそうと思つておる憎しみの権化ぞ』

「は、はい……」

武彦はアメノムラクモの言葉に怯えた。

（御剣さん、様子みづるぎが変だ。どうしたんだろう？）

武彦にはアメノムラクモの真の意図がわかっていない。アメノムラクモは自分の身を犠牲にしてイサを葬るつもりなのだ。しかし、それも完璧な方法とは思えない。アメノムラクモにも、それはわかつていた。

（御剣様……）

こころだまし言霊師であるツクヨミには、アメノムラクモの考えがわかっていた。

（もはや御剣様に頼るしかないのか……）

ツクヨミはそれが齒痒かった。

「御剣様……」

アキツもまた、アメノムラクモの決意を感じていた。

（御剣様は、ワの国の代々の術者の力と王の力を注ぎ込んで鍛えしもの……。イサの力を上回るためには、御剣様ご自身を形作っている全てを使わねば、勝てぬという事ですか？）

アキツの美しい顔を涙が止めどなく流れる。

（ワの王家の全てを賭けて、戦わねば勝てぬ……。イサ……。何故にそこまでオオヤシマを憎むのです？）

イスズもワの王家の流れを汲む者である。彼女もアメノムラクモの思いを感じていた。

「やはり、そこまでしなければ……」

彼女はアメノムラクモの事も心配だったが、それ以上に弟イワレヒコの身体、そしてその身体を借りて戦っている磐神武彦いわがみたけひこの事が心配であった。

（何があっても、たけひこ様は私がお守りする）

イスズの悲しいまでの思いである。

「クシナダ殿……」

「ウズメ殿……」

ウズメとクシナダの二人は、立ち入れない戦いが始まろうとしているのを感じていた。

ヤマトの城を襲った光の玉は、タジカラとスサノの活躍で防ぎ切った。

「イツセ様」

二人は馬に乗って城門から出て来たイツセを見て目を見開いた。

「傷は宜しいのですか？」

タジカラが尋ねる。イツセは苦笑いして、

「嫡男が城で震えていて良いはずがなからう。弟と妹ばかりに任せ

てはおけまい？」

「はっ」

タジカラは頭を下げて応じた。

「我らは微力。しかし、見届けねばならぬ。オオヤシマの行く末をな」

イツセはそう言うと、馬を走らせる。

「イツセ様！」

タジカラとスサノは驚いてイツセを追う。

アメノムラクモは輝きを増して行く。武彦はその光の強さに目を細めた。

「如何なる事をなさうとも、うぬが我に勝る事なし。愚かなり、神劍よ」

イサは全く動じていない。余裕の笑みすら浮かべている。

『いつまで笑っていられるかな、イサよ』

アメノムラクモがそう言うと、刀身が大きくなった。

「うわっ！」

武彦は今までの倍程の大きさになったアメノムラクモに驚いてしまった。

『行くのだ、武彦。イサを斬れ！』

アメノムラクモが叫ぶ。

「はい！」

武彦はその声に応じてアメノムラクモを中段に構え、イサに接近した。

「来るか？」

イサは笑みを浮かべたままで構えもとらない。

「何が始まるのだ？」

ツクヨミにもその戦いの行方が読めない。

「うおおっ！」

武彦がイワレヒコの剣技を得て、イサに袈裟斬りを浴びせる。

「戯けが！」

イサはまた光の玉を放つ。武彦は素早くそれに反応し、叩き落とす。続けざまにイサは光の玉を武彦に放った。すでにウズメやクシナダには武彦の太刀筋すら見えていない程の戦いである。

「はあっ！」

光の玉を弾き切った武彦が踏み込み、イサに斬りかかる。

「無駄よ」

イサはそれをかわしも防ぎもしない。

「何だ？」

武彦の一撃は何かに止められた。

「まさか？」

アキツが驚愕して呟く。イサの背中から腕が伸び、それが剣を受け止めていたのだ。

「あれは……？」

ツクヨミはそれ以上言葉を発する事ができない。

『武彦、退くのだ！』

アメノムラクモが叫ぶ。武彦はハツとして後ろに飛ぶ。その直後、イサの背中から剣を持った腕が伸び、武彦を斬りつけた。

「くっ！」

辛うじてかわした武彦であったが、切っ先がわずかに掠めたのか、顔から鮮血が迸った。ほとばし

「わかっておらぬようだな？ 我には三人みたりの味方がおるのだぞ」

イサが愉快そうに言う。やがて彼女の背中から、全部で六本の腕が現れた。

「サクヤ様とスセリ様と、大叔母様……」

アキツはその腕の元の持ち主の名を呟いた。

「ええ？」

武彦は自分自身の癒しの力で傷を治しながら、イサの変異に仰天していた。

「もはや、我らの及ぶものではないのか……」

ツクヨミが言った。

「御剣さん……」

武彦は弱音を吐きそうだった。すると、
『諦めるな、武彦。お前には私達がついているぞ』
と声が聞こえた。

「えっ？」

武彦はハッとした。

（今の声は御剣さんじゃない。誰？）

よく思い出せないのだが、懐かしい感じがする。

『こんな形でまた会えるとは思わなかったよ。大きくなったな。そして、遅くなった』

その声に武彦はようやくそれが誰なのかわかった。涙が自然に溢れて来る。

「父さん……」

ほとんど記憶がない。しかし、声は微かに覚えていた。武彦が三歳の時に交通事故で他界した父。その声が聞こえているのだ。何が起こっているのかはわからない。でも心強かった。

「ぬうつ!？」

そして、あれ程高圧的で自身に満ち溢れていたイサが驚いていた。武彦がふと自分の背後を見ると、そこには亡き父の姿に並び、老人の姿があった。

「もしかして、ひいお祖父ちゃん？」

武彦が尋ねる。するとその老人は優しく微笑み、

「ああ、そうだよ。お前に会えて嬉しいよ、武彦」

武彦の身体の中に温かいものが流れ込んで来る。彼はゆっくりとイサを見た。

「さあ、終わりにしよう、イサ」

武彦は微笑んで言った。

六十八の章 尊の思い、イサの願い

オオヤシマを揺るがす戦いは、いよいよ最終局面を迎えようとしていた。

「うぬ……」

イサが驚いている。武彦はそれを感じていた。しかし、彼女が何故驚いているのか、武彦にはわからない。

「誰も巻き込まず、終わりにしようか、イサよ」

武彦の父が囁くように言うと、そこはイサと武彦と武彦の父、そして武彦の曾祖父だけがいる空間になった。

「こ、これは？」

イサは周囲の異変に驚愕したようだ。そして憎しみに満ちた目で武彦達を睨んだ。

「今更何をしに参った？ うぬの顔を見るだけで、我は怒りに震えるわ、たける！」

イサが言い放つ。

（たけるって、父さんの名前だ……。どういう事？）

「すまない。しかし、私には妻となる女性がいた。貴女の気持ちに答える事はできなかったのだ」

武彦の父、尊^{たける}が応じた。

「えっ？」

武彦はその時気づいた。自分がイワレヒコの身体ではなく、自身^{自身}の身体になっている事に。

（どういう事だ？）

ますます混乱が強くなる。

「綺麗事を申すな！ うぬは自分の命が惜しかっただけ……。我の事など……」

口調は強かったが、イサは泣いていた。イサも姿が違^まう。女王当時の服であろうか、きらびやかな装飾が施された物を身に纏^{まと}っている。

た。

「ここは精神世界だよ、武彦。だから、お前もイサも、元の姿にな
っている」

曾祖父が教えてくれた。

(そういう事か……)

それでも武彦にはまだよく理解できていない。

ツクヨミ達は、突然武彦とイサが消えたので驚いていた。

「如何なる術なのか？」

彼は自分の力の全てを駆使して武彦達の居場所を探ったが、全く
わからなかった。

「たけひこ様……」

ツクヨミは、武彦達が消える寸前、微かではあったが、別の異界
人の気配を感じていた。武彦が見た父と曾祖父の姿は、ツクヨミ達
には見えていなかったのである。

「ツクヨミ様」

アキツがツクヨミの様子に気づき、心配して声をかける。ツクヨ
ミは微笑んで、

「大事ありませぬ、アキツ様。たけひこ様もご無事でありましょう」
するとイスズが、

「そうです。たけひこ様はご無事です。オオヤシマは救われます。
異界の方がいらしたのです。イサを知る異界の方が……」

と謎めいたことを言った。アキツとツクヨミは顔を見合わせた。

「……」

ウズメとクシナダは只呆然としてイスズを見ている。

「アキツ様アツ！」

そこへ馬を駆ってタジカラとスサノがやって来た。

「お館様」
やかたさま

ウズメとクシナダはハッと我に返り、自分の夫を見上げた。

「たけひこ様のお姿がありませぬが？」

タジカラが怪訝そうな顔で尋ねる。アキツがタジカラを見上げて、
「たけひこ様は、今、イサと戦うておられる」

タジカラは意味が分からず、スサノと顔を見合わせた。

尊とイサのやり取りは続いている。

「貴女にはいくら詫びても詫び切れない事をしてしまったと思っている。だからこそ、こうして今になっておめおめと貴女の前に姿を見せたのだ」

イサの顔が再び憤怒の形相になる。

「戯れ言を。そのような事、我が信ずると思うたのか!？」

彼女は目を血走らせ、大声で言い放つ。

「嘘ではない。本当の事だ。貴女の思いが報われている事を知らせるために、我が子武彦を通じてこちらに來たのだ」

「我が子？」

イサが驚いた顔を武彦に向けた。

「えっ？」

武彦もそのイサの顔に幼馴染みの都坂亜希みやざかあきを重ねていた。

(どうして亜希ちゃんが?)

何故イサと亜希が重なるのか、武彦にはわからない。

「確かめてくれ、イサ。貴女の思いがどう通じたのかを」

「……」

イサは惚けたように動かない。すると尊が、

「さア、武彦、イサにお前の事を伝えるんだ」

「えっ? どういう事？」

武彦は父を見た。尊は微笑んで、

「愛しい人にそうするように、彼女を抱きしめてあげなさい」

「ええっ？」

武彦は思ってもいない事を言われ、大声を上げてしまった。

「それでオオヤシマは救われる」

そして、尊のその言葉にハッとする。

「わかったよ、父さん」

何故そんな事をしなければならなかったのかわからなかったが、そうするしかないという感覚があった。

「何をするつもりじゃ？」

武彦が近づいて来たのに気づき、イサは身構えた。

「お前は……」

彼女は気づいた。武彦とは大いなる縁えにしがある事に。

「あ……」

武彦も気づいた。イサの中にある自分にとって掛け替えのない存在に。

（そういう事だったのか……。たがら僕は这个世界に呼ばれた。だから僕は这个世界を救いたいと思ったんだ……）

武彦は微笑んだ。そして身じろぎもしないで自分を見上げているイサを優しく抱きしめた。

「ああ！」

その時、イサの中に武彦の記憶が流れ込む。同時に武彦の中にイサの記憶が流れ込む。

「おおお……」

イサは武彦の中で大きな存在となっている亜希がまさしく自分自身である事に気づいた。彼女の両の目から止めどなく涙が溢れ出る。

「……」

武彦も、イサがどれほど尊の事を慕い、どれほど添い遂げたかったのかを知り、涙した。異界人との叶わぬ恋に身をやつし、そのせいでヨモツ鳴動の咎とがを背負わされ、幾百年もの長きに渡り闇の中で耐え忍ぶ事となったイサを心の底から哀れんだ。

「ごめんなさい。今は貴女は僕らの世界で僕が一番大切な人になっています。だから、僕の父さんを許して下さい」

武彦は涙で滲む目をイサに向けた。イサも武彦を見上げている。

「異界人よ……」

イサは武彦の言葉に偽りのない事を感じ、更に涙する。

「許すも許さぬもない。うぬの父は、我らオオヤシマの者に呼び込まれただけ……。そして我が勝手にうぬの父を慕っただけ……。うぬが謝る事はない。皆、我の責めぞ……」

イサの顔がますます亜希に似て来ているのを武彦は感じていた。

「イサさん」

武彦はイサを強く抱きしめた。イサもそれに応えるかのように武彦の背に手を回し、彼を抱きしめた。

かたじけな「忝い、異界人よ。ようやく我も眠りにつく事が叶う」

イサは力なく微笑んで、スツと武彦から離れた。

「イサさん？」

武彦はイサが何をしようとしているのか、わからなかった。

「あの時、我は確かに言われなき咎を背負い、闇に落ちた。しかし、今はまさに我は途方もなき咎を背負うておる」

武彦はイサが言っている意味を悟った。

「イサさん……」

武彦は泣いていた。あれほど凌ぎを削って戦った相手であるイサのこれからを知って。

「泣いてくれるか？ うぬは優しいな……」

イサは微かに笑った。

「イサ……」

尊が声をかける。イサは尊を見て、

「終いにうぬに会えて良かった……。愛しき人よ……」
と言うと、背を向けて歩き出す。

「イサさん！」

武彦は思わず追いかけてしようとした。それを尊と曾祖父が止めた。

「イサは、確かに不幸な身の上。助きたい気持ちはわかるが、彼女はそれ以上に余りに多くの人の命を奪ってしまった」

尊が呟くように言う。武彦はその場に座り込んだ。

「あの人だって、父さんと同じで、本当に悪い奴は別にいるじゃないか！」

武彦の叫びに尊と曾祖父は顔を見合わせる。

「確かにな。お前の言う通りだ」

武彦は父を見上げた。

「だったら……」

「そいつらも皆、イサと同じだ。闇に落ちている。ヨモツよりもつと深い闇にね」

尊の悲しそうな顔を見て、武彦は、

（イサさんの事を悲しんでいるのは、父さんも同じなんだ……）
と感じ、それ以上駄々をこねるのを止めた。

「戻ろうか、武彦」

「はい」

ふと見ると、尊と曾祖父が透けて来ていた。

「我々はそろそろいるべき場所に戻らなければならない。母さんと美鈴によりしく言ってくれ」

「父さん！」

曾祖父が頷き、

「珠世に伝えてくれ。儂はお前の夫と仲良く探検三昧だとな」

「……」

武彦の目に涙が溢れる。尊が笑い、

「泣くな、武彦。男はそう簡単に泣くもんじゃない。特に悲しい時はな」

まだ幼い頃、父に言われたような気がする言葉。武彦がそれを懐かしんでいるうちに、父と曾祖父は消えてしまった。

「父さん、ひいおじいちゃん！」

武彦がそう叫んだ時、彼は再び元の地に戻っていた。

こうして、オオヤシマを揺るがした戦いは終結した。

終の章 武彦の帰還、アキツの誓い（前書き）

どうにか最終章です。

終の章 武彦の帰還、アキツの誓い

オオヤシマを混乱に陥れた争いは終結した。

武彦は自分の前で倒れているイサを見た。彼女は息を引き取っていた。

（死んでしまったというより、帰って行ったという事なのか？）

イサの死に顔は安らかだった。

神剣アメノムラクモが武彦に話しかける。

「磐神武彦、助かった。お前達異界人の力がなければ、我は消えていた」

「何を言ってるんですか、御剣さん。みつるぎ貴方はこれからオオヤシマを守って行かなければならないんですから、消えている場合ではないですよ」

「そうか」

武彦はアメノムラクモが苦笑いしたように感じた。

「大叔母様」

アキツは大叔母オオヒルメと邂逅していた。

「アキツ、ようやってくれた。ようやってくれました」

オオヒルメは泣いていた。アキツもそれを見て涙する。

「大叔母様、今は……」

「案ずるな、アキツ。イサ様はお戻りになった。私も、スセリ様もサクヤ様も行くべき場所に行く」

「……」

アキツは黙って頷いた。オオヒルメは慈愛に満ちた目でアキツを見ると、

「オオヤシマの事、頼んだぞ、アキツ」

「はい、大叔母様」

アキツは光に包まれて消えて行くオオヒルメを見送りながら答え

た。

「父上」

イツセとイスズは父ウガヤと邂逅している。

「我が子達よ。私の過ちを繰り返す事なく、オオヤシマを守ってくれ。頼んだぞ」

そのウガヤは妃のタマヨリとも邂逅していた。

「タマヨリ。悪い王の妃にしてしまい、すまぬ。これからはアキツ様に力を貸し、オオヤシマを盛り立ててくれ」

「はい、陛下」

タマヨリは涙を流しながら呟いた。

更にツクヨミは亡くなった両親と邂逅していた。

「ツクヨミよ、言霊師ことだまし一族の業は既がない。アキツ様と添い、このオオヤシマを守りなさい」

父が言う。ツクヨミは驚いて、

「しかし、言霊師が王家と交われば、魔が生まれると……」

「それは言霊師の血を守るために遠き祖が作り出した偽りです。大事ありませぬ」

母が微笑んで応じる。ツクヨミは啞然とした。

「そして何より、言霊師はお前一人。言霊師以外と契る以外にあるまい？」

父が言い添えた。

「生きよ、ツクヨミ」

父母の姿はやがて霧の向こうに消えるように見えなくなった。

「父上、母上……」

ツクヨミは泣いていた。

タジカラとスサノは、ナガスネと邂逅している。

「タジカラ、スサノ、これからのオオヤシマを頼むぞ」

「ナガスネ」

タジカラは目を潤ませて呟く。

「ナガスネ様」

スサノは号泣していた。彼は自分の力が足りなかったためにナガスネを死なせてしまったと思っているのだ。

「過ぎた事を悔やんでも、国はまとまらぬ。タジカラと力を合わせて、アキツ様、ホアカリ様をお助けしてくれ」

タジカラとスサノは黙って頷く。

同時にナガスネは、ホアカリとトミヤとも邂逅していた。

「陛下、不甲斐なきこの私をどうぞお許し下さい」

「ナガスネ……」

ホアカリは涙を目に溜めていた。

「トミヤよ、不器用な兄を許してくれるか？」

トミヤは涙を流して、

「何を言われますか……。兄上は最後までご立派でした」

「ありがとう、トミヤ」

ナガスネは光に包まれ、皆の前から消えた。

ウズメとクシナダは、涙を吞んでその手にかけて兵達と邂逅していた。

「お泣き下さいますな、お二方。我らは皆、お二人のお心、十分に感じております故」

兵達は皆目頭を熱くしてウズメとクシナダに語りかけている。

「皆の者……」

ウズメとクシナダも泣いていた。

やがて多くの光が一つにまとまり、天へと昇って行き、消えた。

そして、武彦がオオヤシマを去る時が来た。

武彦はアメノムラクモと別れを惜しんでから、アメノムラクモをアキツに渡した。

アキツとツクヨミが武彦の魂をイワレヒコから解き放ち、イワレヒコの眠りを解いた。武彦はその時初めてイワレヒコと対面した。

「今までありがとうございました」

大きなイワレヒコを見上げて、武彦は頭を下げた。イワレヒコは

苦笑いをして、

「異界の方、貴方様のご活躍、このイワレヒコも眠りながら皆見させていだいておりました。礼を言うのは私の方です」

と跪いて武彦を見た。武彦はその視線に照れ臭くなり、笑った。イワレヒコは姉イスズを見て、

「姉上、今までの無礼の数々、お許し下され。この後は真の夫婦^{めと}となるべく改めます故」

と頭を下げた。イスズは微笑んで、

「イワレヒコ様、お止め下され。貴方様は私の許婚^{いいなずけ}でございますよ、ずっと前から」

「姉上……」

イワレヒコの目に涙が浮かぶ。イスズは武彦を見て、

「たけひこ様、ありがとうございます。貴方様のお陰で私とイワレヒコ様は昔の二人に戻れました」

「そ、そうですか。良かったですね」

何となくホッとしている自分を嫌悪する武彦である。

（良かった。ついて来るとか言われたらどうしようかと思った）

「では、参りましょう、たけひこ様」

アキツが声をかけた。武彦は彼女を見て黙って頷いた。

光に包まれる。そして、霧の中に出る。オオヤシマに初めて訪れた時と同じ光景が目の前に広がる。

「さ、たけひこ様」

アキツが先導する。

「あ、はい」

武彦はそれについて歩き出した。

「アキツさん」

歩きながら武彦は声をかける。

「はい、たけひこ様」

アキツは立ち止まって武彦を見た。武彦はスウェットのポケットからデジカメを取り出した。

「一枚、撮らせて下さい、記念に」

「はい？」

アキツは武彦が取り出した奇妙な箱を見て目を見開いた。

「アキツさんは僕の幼馴染みの子にそっくりなんです。見せてあげたいのでお願いします」

「はい」

アキツは戸惑いながらも応じた。

「いいですか、撮りますよ」

「は、はい」

これから何が起こるのかわからないアキツは緊張している。そこへいきなりカメラのストロボが光った。

「きゃっ！」

アキツは驚いて悲鳴を上げた。

「ごめんなさい、アキツさん。もう終わりましたよ。ほら、見て下さい」

武彦は画像をアキツに見せた。

「まあ」

アキツは目を見開いている。

「これが私……」

彼女は何故か顔を赤らめた。

「それから、ほら」

次にツクヨミ達が写っている画像も見せる。

「……」

アキツは驚きのあまり声が出ない。

「それと」

武彦はとっておきの画像をアキツに見せた。それは、彼が密かに写した都坂亜希みやこさかあきの満面の笑顔の写真だ。彼女が陸上の大会で一位になった時の写真である。

「この子が、アキツさんにそっくりな子です。そして、僕の一番好きな子」

「そうなのですか」

アキツは微笑んで武彦を見た。

「では、お別れです、武彦様。お元気で」

アキツの目が潤む。武彦はついそれを見てドキツとした。

（やっぱり、アキツさんはイサの血を引いている。イサとアキツさんはそっくりだ。そして、亜希ちゃんとも……）

「お別れは言いません。また会えるかも知れないから。それまでお元気で、アキツさん。ツクヨミさんとお幸せに」

「……」

アキツは真っ赤になっていた。やがて互いは霧に包まれ、見えなくなった。

「あっ！」

武彦が目を開けると、そこは自分の部屋だった。朝である。彼はベッドから起き上がり、部屋を飛び出した。キッチンからいい匂いがして来る。母珠世が朝食の用意をしているのだ。武彦はキッチンに駆け込んだ。

「おはよう、母さん」

珠世は武彦の姿を見て、涙を流した。

「武彦！」

彼女はオタマを放り出して武彦を抱きしめた。

「よく、よく無事で……」

母が顔をクシャクシャにして泣いているのを見て、武彦はジンとしてしまった。

「このバカ、戻ったのならそう言え！」

いきなり頭を殴られた。姉美鈴がキッチンに飛び込んで来たのだ。

「只今、姉ちゃん」

武彦は頭を撫でながら言った。

武彦はそれまでの事を二人に話した。珠世も美鈴も、尊と曾祖父に出会った話のところで仰天した。

「父さんと曾お祖父ちゃんに？」

珠世はまた涙ぐんでいる。美鈴は硬直してしまったかのように動かない。

「うん。二人が助けてくれたんだ。だからオオヤシマも救われたし、僕も戻って来られた」

「そうなの。やっぱりね」

珠世はそう言いながら、尊が書いていたノートを武彦に見せた。
「……」

それを読んで、武彦は全てに合点がいった。

「そうだったんだね。だから僕はアキツさんの声が聞こえた。そして、オオヤシマを救いたいと感じた。そういう事だったんだね」

「ええ、そうよ」

珠世は笑いながら泣いていた。すると美鈴が涙を拭いながら、
「私も会いたかったな、父さんに……」

としんみりとして言う。武彦は申し訳なくなり、

「ごめん、姉ちゃん」

「何であんたが謝るのよ、武」

美鈴はそう言ったが、

「優しいんだね、武。ありがと」

と言い添えた。武彦はホッとして微笑み返した。

そして登校時間。武彦はいつもより早く起きたので、遅刻はしない。亜希の家まで彼女を迎えに行った。

「お、おはよう、武君」

亜希は驚いた顔で玄関から出て来た。

「さ、行こう、亜希ちゃん」

「うん」

もうすぐ校門前というところで、武彦が、

「亜希ちゃん」

と呼び止めた。

「何、武君？ 早くしないと遅刻しちゃうよ」

亜希は怪訝そうな顔で言った。武彦は大きく深呼吸して、

「僕と付き合って下さい。ずっと好きでした」

と告白した。亜希は目を見開き、涙をこぼした。

「武君……」

「ダメ、かな？」

武彦は上目遣いに亜希を見た。すると亜希は、

「ダメな訳ないわ。ずっと、ずっと待ってたんだから！」

と言うと、武彦に抱きついて来た。周囲に誰もいなかったので武彦はホッとしたが、

「亜希ちゃん」

と優しく抱きしめ返した。

「OKしてもらえたから、いろいろ話したい事があるんだけど」

「え？ 何？」

亜希はギクツとした。

「それは放課後にするよ」

「えーっ、何よ。気になるじゃない？ 焦らさないでよ」

二人はそのまま校門に入り、校舎を目指す。

「長くなるから、放課後で」

「わかった」

亜希は本当に嬉しそうだ。武彦はそれを見て心が和んだ。

（そうさ。亜希ちゃんにも話さないと。彼女は聞く権利があるんだから……）

武彦は空を見上げた。

終の章 武彦の帰還、アキツの誓い（後書き）

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181i/>

オオヤシマ記 イワレヒコ伝

2011年10月5日02時39分発行